

浜松市民文芸

56



浜 松 市

平成23年 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

● 講座

講座名	講師	開催時	受講料円
文学講座〈春〉	松 平 和 久	5/18,25,6/1,8,15,22(全6回) 9:30～11:30	3000
俳句入門講座 (前期)	九 鬼 あ き ち	5/7,21,6/11,18 13:30～15:30 5/14(全5回) 9:30～11:30	2500
短歌入門講座	野 島 光 世	6/3,10,24,7/1,8(全5回) 10:00～12:00	2500
詩を書こう	鈴 木 和 子	6/18,7/2,16,30(全4回) 9:30～11:30	2000
声であらわす 文学作品	堤 腰 和 余	7/14,8/11,9/8,10/13,11/10,12/8(全6回) 10:00～12:00	3000
うら打ち入門 講座	近 藤 敏 夫	①7/23,24 ②8/20,21 13:00～15:00	各1000 (材料費込)
夏休み絵本づくり	浜松絵本クラブ	7/30 13:30～15:30	500
夏休み工作	書 絵 堂	8/3 13:00～15:00	500
文学散歩	和久田雅之	①9/22 事前講義 14:00～15:30 ②9/29 実地めぐり 9:00～16:00	セットで 4000
文学講座〈秋〉	松 平 和 久	9/2,9,16,10/7,14,21(全6回) 9:30～11:30	3000
文学と歴史講座	折 金 紀 男	9/4,11,18,25,10/2(全5回) 13:30～15:30	2500
絵本づくり講座	浜松絵本クラブ	9/6,13,27,10/25,11/8,22(全6回) 10:00～12:00	3000
宮沢賢治童話 講座	村 上 節 子	9/21,28,10/5(全3回) 13:30～15:30	1500
俳句入門講座 (後期)	笹 瀬 節 子	10/8,15,22,29,11/5(全5回) 9:30～11:30	2500
自由律俳句 入門講座	鶴 田 育 久	11/2,9,16(全3回) 9:30～11:30	1500

● 収蔵展 企画展

収蔵展 浜松の文芸人

3月18日(金)～9月30日(金)

その後は未定。お問い合わせください。

● 講演会

自分史を書くヒント「球心いまだ握めず」	太田 誠	5月29日(日)13:30～15:30	無料
(仮)「詩のことは歌のことは」	村木道彦	8月28日(日)13:30～15:30	300円
哲学入門シリーズ④	中山康雄	10月23日(日)13:30～15:30	300円

● 朗読会

堤腰和余 10月1日(土)14:00～15:00 500円

● 村上春樹研究会

齊藤 卓 お問い合わせください。 500円

浜松市民文芸

第 56 集



(相生垣瓜人俳画)

浜 松 市

選者

小説	竹腰幸夫
児童文学	柳本宗春
評論	那須田稔
随筆	中西美沙子
詩	たかはたけいこ
短歌	埋田昇二
定型俳句	村木道彦
自由律俳句	九鬼あきゑ
川柳	鶴田育久
	今田久帆

☆ 表紙絵

糸井 隆

平成22年度浜松市芸術祭「第58回市展」にて
芸術祭大賞受賞作品

題「流れの大文字草」

十月初旬、奥三河で大文字草と川の上に動く
白い泡、落ち葉、木もれ陽をスローシャッター
で撮った写真です。何回撮っても同じ写真は
撮れないし、目では見えないものが撮れるの
は、写真の魅力の一つなのかもしれません。

「浜松市民文芸」第56集 市民文芸賞受賞者

部門	受賞者
<p>小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌</p>	<p>赤谷真理子 海原悠 矢ノ下マリ子 宮島ひでこ 中谷節三 石橋朝子 吉岡良子 松野タダエ 竹内としみ 高柳龍夫 柴田修 新田昌子 柳光子 小林和子 赤堀進</p>
部門	受賞者
<p>定型俳句 自由律俳句 川柳</p>	<p>鶴見佳子 石橋朝子 稲津とし子 佐藤政晴 山本峰子 神谷冬生 田中美保子 大田勝子 伊藤サト江 伊藤久子 中津川久子 ちばつゆこ 内山春代 長谷川絹代 米田隆 竹山恵一郎 中村雅俊</p>

目次

小説

市民文芸賞

鈴の音	赤谷真理子	10
犀ヶ崖	海原 悠	28
水滴	矢ノ下マリ子	42

入選

故郷(ふるさと)	安部 敏広	55
「きつかけ」	神楽 時子	71
涙ボロン	鈴木 文孝	78
母・娘	のぶ 恵	94
懲役十五年	長谷川 稔	109
選考評	竹腰 幸夫	113
選後評	柳本 宗春	114

児童文学

市民文芸賞

「ずっといつしよ」	宮島ひでこ	115
-----------	-------	-----

入選

空を飛んだニョロ	生崎 美雪	121
正太杉	江川 俊夫	130
ライオンの成人式	恩田 恭子	135
選評	那須田 稔	140

評論

市民文芸賞

大正歌人群(浜松詩歌事始―後篇)	中谷 節三	141
戦後処理と叫ばないで	杉山 大	155
選評	中西美沙子	163

随筆

市民文芸賞

根深皮むき機	石橋 朝子	164
寒節句	吉岡 良子	166
入選		
黄色いキヤラメルの箱	山田 知明	167
笑顔と混乱の都マニラ駐在記	畑中 一郎	169
寿命	井上 清	171
焼けん前ねえ	宮野 和子	173
やんぞうこんぞう	鈴木 富美	175
〓勝手読みはわが性分か	幸田健太郎	177
講評	たかはたけいこ	180

詩

市民文芸賞

戦跡に眠る	松野タゲエ	182
-------	-------	-----

浮かぶ窓
空から突然
竹内としみ
高柳 龍夫

入選

贈り物
ありがとう
二人の教師
おまじない
別れの曲
彼岸花
鳴く
葱の気持ち
命日
一本の薔薇
松
三本足の犬
水仙の花
赤く染まったドレス
廃屋のショットバー

選評

勝田 洋子
北野 幸子
桑原 みよ
小池 祥元
柴田 修
新村 健一
田村 国昭
中津川久子
長浜フミ子
中村 弘枝
長谷川 稔
林 龍男
ヒメ巴勢里
水川亜輝羅
A
O
I
185
187
187
189
190
191
192
193
194
194
195
196
198
198
200
202

短歌
市民文芸賞

柴田 修
小林 和子
新田 昌子
赤堀 進
柳 光子

入選

太田 静子
伊ヶ崎智世枝
石黒 實
宮本 恵司
寺澤 博子
内藤 雅子
飯田 裕子
長浜フミ子
竹山 秀子
安藤 圭子
出原 久子
岡田よう子
今駒 隆次
遠山 長春
杉山 佳子
飯尾八重子
松島きみ子
野田よし子
江間 治子
水嶋 洋子
河合 秀雄
倉見 藤子
望月 昭子
内山 智康

渡橋 鶴
新田えいみ
古谷聰一郎
水川 彰
仲村 正男
野沢 久子
近藤 榮子
岡本 蓉子
恩田 恭子
川上 とよ
縣 益司郎
松浦ふみ子
高橋 正栄
鈴木 壽子
村木 幸子
江川 冬子
中山 和
大石みつ江
新谷三江子
曾布川くり子
小池みちよ
山口 久代
畔柳 晴康
井上 利一

久米 玉絵
大橋 康夫
藤田 淑子
前田 徳勇
鴫多 健
袴田 ひさ
小笠原靖子
北野 幸子
井浪マリエ
森脇 幸子
松江佐千子
松野タダエ
堀内 榮子
手塚 みよ
荒木 治子
木下芙美子
寺田 陽子
石原新一郎
坂東 茂子
塩入しず子
織田 恵子
鈴木 利安
金取ミチ子
大庭 拓郎

定型俳句

市民文芸賞

鶴見 佳子	石橋 朝子	浅井 裕子	稲津とし子
佐藤 政晴	山本 峰子	神谷 冬生	伊藤サト江
田中美保子	大田 勝子	伊藤サト江	
伊藤 久子			

入選

石橋 朝子	浅井 裕子	池田千鶴子
稲津とし子	岩城 悦子	梅原 栄子
大田 勝子	大橋 康夫	加藤 和子
	加藤 和子	齊藤三重子

選評

中村 弘枝	鈴木 芳子	竹内オリエ
乃 歩	白井 忠宏	高橋 幸
澤田あい子	滝本 保代	鈴木 銀
森 安次	伊藤 美代	井口 真紀
石川 きく	北島 はな	山下 文子
田中 健二	宮澤 秀子	原 哲
岡本 久榮	半田 恒子	寒風澤 毅
山崎 敏子	井口 信子	鳥井美代子
太田あき子	松本 いふ	

村木 道彦：217

坂田 松枝	佐原智洲子	澤木 幸子
鈴木 章子	鈴木 千寿	鈴木 秀子
鈴木 浩子	鈴木美代子	田中ハツエ
田中美保子	為永 義郎	手塚 みよ
鶴見 佳子	戸田 幸良	永田 恵子
中原 まさ	中村 心誠	錦織 祥山
西村 充雄	二橋 記久	野中美美子
長谷川絹代	華 世	日置 文代
人見 重紀	平野 道子	藤田 節子
藤本 幸子	牧沢 純江	宮澤 秀子
松江佐千子	宮本 みつ	森 明子
山口 久江	山口 英男	山崎 暁子
山本 峰子	山本 兵子	横原光草子
赤堀 進	安藤すゑ	飯尾八重子
飯田 裕子	池田 保彦	池谷 静子
石川 染	伊藤しずゑ	伊藤 久子
伊藤 齊	井浪マリエ	井上 利一
今駒 隆次	岩崎 芳子	岩崎 良一
岩渕 泰三	大久保朝夫	大城 まき
太田沙知子	太田千代子	大場 瑞穂
岡本 久榮	岡山 小夜	小川 恵子
小野 一子	影山 ふみ	加藤 新恵
加藤ゆう子	金取ミチ子	金田 千ヨ
加茂 隆司	河口 康子	川島 泰子
川瀬 慶子	北野 幸子	北村 友秀

八木 若代	村松 綾子	水谷 まさ	松本 美都	松島ひろ子	星宮伸みつ	袴田 吉一	野田 俊枝	野嶋 薫子	中山 志げ	中野はつゑ	豊田由美子	黒葛原千恵子	竹内オリエ	高橋 順子	関 和子	鈴木 寿子	鈴木きぬ代	新村ふみ子	清水よ志江	沢田 清美	佐藤 永典	斉藤 てる	栗田よし江	切畠 正子
山内 久子	村松津也子	南 裕次郎	松山 洋子	松野タダエ	堀口 英子	林田 昭子	野田 正次	野島やすゑ	西尾 わさ	中村 貞子	中嶋 せつ	徳田 五男	竹下 勝子	高橋ひさ子	平 幸子	鈴木 富美	鈴木 ちよ	新村八千代	白井 宜子	柴田 修	佐藤 政晴	坂下まつ江	畔柳 晴康	金原はるゑ
山崎 勝	森下 昌彦	宮本 恵司	水川 放鮎	松本 賢藏	前田 徳勇	深津 弘	野又 恵子	野末 法子	野沢 久子	中村 勢津	中津川久子	戸田田鶴子	田中 安夫	田川由紀子	高橋 絃一	鈴木 与一	鈴木 智子	杉山 佳子	新村あや子	柴田ミドリ	佐野 朋旦	佐藤 千恵	齊藤あい子	倉見 藤子

選評

和久田孝山	山田 知明	山田 緑	松本 賢藏	深田千代子	のぶ 女	野末 初江	中村 弘枝	中嶋 保男	鳥井美代子	寺田 久子	高山 紀恵	新村 幸	白井 忠宏	寒風澤 毅	川瀬 雅女	小楠惠津子	太田しげり	内山 あき	あ ひ る	和久田りつ子	吉田 梅子	山田美代子
山本晏規子	山下 静子	藤原 咲子	山崎百十三	藤田 淑子	浜 美乃里	野田ますゑ	中村 雅俊	永田 キク	内藤 雅子	鶴茅 健	千 弥 預	鈴木 健一	新井 健一	塩入しげ子	北野谷清香	勝田 洋子	太田 静子	海原 悠	池野 春子	渡辺きぬ代	吉田 高德	八木 裕子
吉野 民子	吉野 民子	藤原 咲子	山下 静子	藤田 淑子	乃 歩	野田ますゑ	野沢 建代	長浜フミ子	永井 眞澄	富永さか江	辻村 榮一	高橋あゝ子	新井 康	柴田 ふさ	小池 祥元	川合 泰子	岡本 蓉子	大石 睦治	伊藤あつ子	あべこうき	和久田志津	横田 照

自由律俳句

市民文芸賞

入選
中津川久子

ちばつゆこ

内山 春代

鈴木まり子

藤本ち江子

縣 敏子

泉沢 英子

伊藤千代子

内山 春代

大軒 妙子

木俣 史朗

木俣とき子

柴田 修

鈴木 憲

鈴木 好

竹内オリエ

富田 彌生

外山喜代子

中村 友乙

宮本 卓郎

飯田 裕子

池谷 俊枝

大庭 拓郎

倉見 藤子

鈴木 章子

鈴木 孝子

鈴木 英伸

ちばつゆこ

戸田鶴子

内藤 雅子

長浜フミ子

錦織 祥山

ヒメ巴勢里

福田美津子

松本 いふ

水川 彰

宮司 もと

宮地 政子

森田 浩子

天野 悠子

太田 静子

川上 とよ

畔柳 晴康

小池みちよ

鈴木 愛子

ダリア

手塚 全代

寺澤 純

鴫多 健

富永さか江

中津川久子

西川多恵子

原川 泰弘

山崎みち子

選評
……………

鶴田 育久：259

川柳

市民文芸賞

入選
長谷川絹代
中村 雅俊

米田 隆

竹山恵一郎

仙石 弘子

山口 英男

米田 隆

浅井 常義

小島 保行

島 友造

鈴木 澄子

鈴木千代見

滝田 玲子

竹山恵一郎

中村 雅俊

長谷川絹代

水川 彰

南 裕次郎

石田 珠柳

市川 正子

猪原 萱風

大庭 拓郎

木村 民江

久保 静子

畔柳 晴康

齊藤三重子

柴田 良治

鈴木すみ子

高橋 博

為永 義郎

戸田 幸良

中田 俊次

中津川久子

長浜フミ子

堀内まさ江

松風 梢

松本 錦是

馬淵よし子

山崎 靖子

赤堀 進

荒木いつか

飯田 裕子

伊藤 信吾

伊藤 美雪

岩城 悦子

太田 静子

太田 初恵

小笠原靖子

小野 和

金取ミチ子

カワヤナギ

倉見 藤子

小池みちよ

後藤 静江

寒風澤 毅

塩入しず子

柴田 修

白井 忠宏

水友

杉山 佳子

鈴木 均

高橋 紘一

高柳 龍夫

高山 功

竹内オリエ	手塚 美誉	寺田 久子
鴫多 健	戸田田鶴子	とつか忠道
富永さか江	内藤 雅子	仲川 昌一
中村 禎次	中村 弘枝	野嶋 君代
華 世	宮地 政子	夢 貳
森上かつ子	山下 文子	山田とく子
山本 恒子	Y . Y	
選 評	Y	今田 久帆
		271

「浜松市民文芸」第57集作品募集要項 272

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作品は選考順または五十音順としました。

第56集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一五	短歌	五六八
児童文学	五	定型俳句	一、一九九
評論	五	自由律俳句	二四七
随筆	三四	川柳	三九一
計	三四		二、四九八

小説

「市民文芸賞」

「鈴の音」

赤谷真理子

僕が彼女をあの場合で見かけたのは、イノッチの家に漫画を借りに行った帰りだった。

五月下旬の夜はまだ少し寒かった。僕はイノッチの家から少し出たところで、八時から始まる歌番組の録画をし忘れたことに気付いた。いつもはお宮の前をなんとなく通りたくなくて、遠回りしていた。けれどその日は恐怖よりも歌番組を見たい気持ち先行していた。幸いお宮では何かやっているらしく、笛の音や人の声が聞こえた。僕は、お宮で何をやっていっているかに興味を持つことなく、前だけをしっかりと見据えて自転車をこいでいた。すると、暗闇の中、お宮の石壁の上は何やらうつつすらと白い影が浮かんでいた。ちよつと、薄気味悪くて、自転車を車道の方によけながらそのまま通り過ぎた。女の人だった。どこかで覚えのある感じだと思つた。そして、家に着く頃に僕はそれが誰だか分かつた。

彼女と僕は、同じ中学だった。でも、話したことはほとんどなかった。

高校に入學し、ゴールデンウィークが終わり、席替えをした時、僕の席は彼女の隣になった。そして、彼女が学校をたまたま休んでいることに気付いた。僕は、ここ二、三日、彼女に会っていないかつた。その彼女が夜のお宮の石壁に一人座っていた。

次の日、月曜日、僕は彼女が学校に来るか気に掛けていた。しかし、彼女は学校に来なかつた。

僕はイノッチにそれとなく彼女のことを聞いてみた。

「岩村つてさあ、同じ中学だったじゃん。なんで学校来ないのかねえ」

「知らん。あいつんちつて、定食屋だら」

「そうなの」

「僕んちの近くの信号機のところにあるら」

「ああ、あれ、そうなの」

「そうだよ。中学ん時もたまに休んでたで、高校もたまに休むだら」

イノツチはさして気にする様子ではなかった。

僕は今日も岩村がお宮にいるような気がして、夕食の後、行ってみることにした。

「猛、こんな時間にどっか行くの」

母が茶碗を洗いながら話し掛けてきた。

「うん。ちょっと。ジュース買いにさんかい食品まで行ってくるわ」

「ジュースなら今日、買つといたに」

「うん。でも、他にも買うもんがある。シャープの芯がなく
なつたし。宿題ができん」

「あつ、そう。気をつけて行ってきなね」

「うん」

僕は、さんかい食品を通り過ぎてお宮へと向かった。僕は
お宮に続く一本道に入ったところで、昨日、岩村が座つてい
たところに目を凝らした。でも誰もいなかった。

次の日、岩村は学校に来た。僕は岩村にお宮にいたことを
聞いてみようかとも思った。しかし、僕は岩村とあまり話し
たこともないし、あれが岩村だったかどうか定かでない。だ
から、聞くのはやめておいた。お宮の件はそれで終わって
いた。

でも、土曜になつて、またイノツチの家の帰りにお宮を通
つたとき、やつぱりいた。石壁に白い人影が見える。僕は、
自転車をやつくりこぎ、その人影を一回通り越した。僕はそ
れが岩村だと確信した。僕は岩村を通り越した後、一回ペダ
ルを踏んだところでブレーキをかけた。僕は後ろを振り向い
て言った。

「何、もしかして、岩村じゃん」

岩村はゆつくりと顔をあげて、こちらの様子を伺っていた。

「俺、俺。隣の席の原田だよ」

「原田・君」

彼女はゆつくりと僕の名前を呼んだ。

「そうそう。原田だよ。こんなところで何やつてるよ。偶然
だね」

普段僕は女子に気軽に話し掛けるほうではないから、女子
と仲のいい友達を思い出して、精一杯明るくさりげなさを真
似した。

「うん」

彼女はうつむいた。僕は自転車にまたがったまま、足を道
路に左右点点とついてバックした。

「よく、ここに来るのけ」

僕はこの前も見ただことは言わなかった。

「まあ」

彼女は曖昧に答えた。

「一人でこんなところ怖くない」

「んー、別に」

話が続かなかった。

「すごいね」

僕は無意味な反応をしてしまった。お宮から太鼓の音が鳴り響いていた。

「別に」

「お、お宮でさあ、なんかやってるのかねえ」

「念仏の練習」

「念仏」

「そう」

「何それ」

「んー、念仏」

彼女は説明しにくそうだった。だから僕は

「念仏かあ」

と同調だけをしておいた。

「ここで、誰か待ってるの」

「別に」

「一人」

「そう。一人」

「家、近いの」

「うん。すぐそこだから」

太鼓の音が止んだ。今度は人の声が聞こえてきた。彼女は足を振り、手で石壁を押し、勢いよく立ち上がった。

「帰るの」

僕は聞いた。

「うん。念仏の練習終わったから」

「そうか。これ聞いてたの」

「別に。うん。まあ」

彼女が怒っているためにこういう反応なのか、はにかんでいるためなのか僕には判別できなかった。

「送っていいこうか」

と言いたかったが、今までにこんな経験はなかったため、言いそびれた。

「じゃあ」

彼女はうつむいたまま歩いて行った。僕はどうしようもなく、突っ立ったまま彼女が見えなくなるまで彼女の後姿を見送っていた。

家に帰り、僕は、母さんに念仏について聞いてみた。

「母さん、念仏って何」

「はっ、念仏。突然何」

「いや、別に。ちよつと」

「そりゃ、あれじゃない。お盆時にその年に亡くなった方を弔うために太鼓とか笛とか鉦とかならして歌いながら踊るやつよ」

「ふーん」

「あんた、昔、おばあちゃんが亡くなった時、念仏の人たちに来てもらったの覚えてない」

僕は、過去の記憶を辿った。僕の祖母は僕が小学校二年生

の時に亡くなった。その年の夏は暑かった。暑かったから、スイカがおいしく感じられた。冷やしてあるスイカを食べようとして、母さんに「そのスイカは今日のお客さんの人あげるから、駄目」と言われた。その日の夜、水色の法被を着て足袋を履いた人たちが笛を吹いたり踊ったりして、お祭りの練りのような騒ぎの後、僕が食べたかったスイカをおいしそうに食べた。その後、父さんと、母さんと、兄ちゃんと四人で残ったスイカを食べた。あの時、僕がもっとスイカ食べたいって言ったら、父さんが自分のをくれた。

あれが、念仏か。僕の記憶と念仏がリンクした。

しかし、岩村はなぜあんなところにいたのか。本当にあの念仏の歌や太鼓の音を聞いていたんだろうか。僕は、お風呂の中で一人考えた。

月曜日、岩村は学校に来了。六月に入り、岩村は白の夏服に変わっていた。岩村の冬服姿をあまり見なかったし、覚えていない。でも、夏服がとても新鮮で爽やかに見えた。

「おはよう」

僕は、隣の席になってはじめて岩村にあいさつをした。

「おはよう」

岩村はそれだけを言って、時間割の黒板を見た。そして机の中から置きっぱなしの教科書を出し始めた。昨日のことはなんとなく話しづらかった。学校の友達と学校以外で会うのは全く違う世界だった。特に、女子とはそうだった。その日、一日、岩村とは何も話さなかった。帰りの会が終わわり、皆が

教室を出て、周りに人がほとんどいなくなったのを見計らって、僕は

「今日も、あそこ行くの」

とそっと聞いてみた。岩村は

「念仏の練習は土日だけ」

と呟いた。そうか。僕はもっと話を続けたかったが、イノツチが僕の机のところに来たから、バックを持って教室を出た。

「イノツチごめん。俺、ちょっとトイレ」

僕は教室に戻ろうとしたけど、イノツチが

「じゃあ、俺も行っとく」

と言ったから、教室に戻れなかった。

僕はトイレの帰りに、岩村がまだいるかさりげなく教室を覗いてみた。岩村は、いた。どういうわけか岩村は窓際の俺の椅子をハンカチで拭いていた。

「何やってるの。僕の椅子、なんかついてた」

「あつ、これ。窓を閉めたときに、椅子に乗ったから。一応、

上靴脱いだんだけど、ハンカチで拭いておこうかな、なんて

思ってた」

岩村は薄いピンクのハンカチを見せた。

「そんなの、いいのに」

と言いつつ、僕は嬉しかった。

男兄弟の僕は、家では感じられない女子の気遣いに感激した。

僕は土曜日が待ち遠しかった。その日は、七時に家を出た。

「ちよつとイノツチのところに行つてくる」

「あんた、ご飯は」

「帰つたら食べるで、置いといて」

「猪野さんの家も迷惑でしょ」

「宿題一緒にやるから、いいら」

「ふーん」

母さんはそれ以上、何も言わなかつた。僕はそそくさと家を出て、自転車にまたがった。

さんかい食品を通りお宮に向かう一本道に入ると、まずチンチンというトライアングルのような高くて軽快な鉦の音が聞こえた。今日は、風の向きの加減で音がよく聞こえる。お宮に近づくにつれて笛や太鼓の音もよく聞こえた。いつもの所に、岩村が座っているのが見えた。岩村が僕の方を見ているのが分かる。今日は、岩村の目の前できちんとブレーキをかけた。

「イノツチの家に行く途中なんだけど」

岩村目当てで来たとは言えない。

「うん」

彼女は下を向いた。僕は、自転車を降りて、止めた。そして、何となく、彼女と距離をおいて、石壁に彼女と並んで座つた。

「アラセイイ。オオサアセイ」

念仏の音が聞こえる。何の音か知らないけど、たまに除夜の鐘のような低音の深い響きがあたりをしんみりとさせてい

る。あとで知つたが双盤という楽器らしい。しばらく二人とも無言でじつと、念仏に耳を傾けていた。

「これ、なんか、聞いてると、落ち着くね」

「うん」

「毎年、聞きに来るの」

「うん。昔、お母さんと近所に来た念仏見に行つてね。暗い中で、提灯の光がぼわーんときれいでさ。お祭りみたいなんだけど、メロデーが落ち着いてね」

「僕の家にもきたことあるよ」

「へー、そうなの」

彼女が少し高い声で頷いてこちらを向いた。

「うん。小二の時。ばあちゃんが亡くなった時にさ」

「そっか」

彼女は、また、下を向いた。さつきまで、薄明るかつたのに、暗くなつてきた。

「あんまり夜遅いと、家の人、心配しない」

僕は、思い切つて、話を突っ込んでみた。

「うーん。どうかな。うち、定食屋だから、おとうさん、店に出てるから私がいけないこと気付いてないかも。おかあさんも、いないし」

「えっ、おかあさん、どうかしたの」

「ああ、あの、親戚のおばさんの家で仕事の手伝いしてて、

「夜、居ないときあるんだ」

「私も、家にあんまり居たくないし」

僕は彼女が聞こえないような小さな声で言ったことを聞き逃さなかった。

次の日も、日曜日、イノッチの家に行くという名目で家を出て、お宮の前を通り、イノッチの家に行かず、岩村と話をしていた。しばらく話していると、念仏の人だろうか、太ったおじさんがお宮から出てきて、僕らに近づいてきた。

「お前ら、高校生だろ。こんなところで、デートか。遅くまでこんなところにいるな」

おじさんは半分茶化して言った。

「あ、あ、違います」

僕は力のない声で誤解を解いた。

「それとも、念仏やってみるか」

「いや、いいです」

僕は腰をあげた。岩村も同じように腰をあげた。

「送ってくよ」

僕は、今日はまだ岩村と話し足りなくて、いつも言い出せなかった言葉が自然と出てきた。岩村も、今日はここにはもういれないと思ったのか

「うん」

と言ってくれた。

「ああいう、おじさん、困るよな」

僕は岩村がデートしていると気にし過ぎないように、話をした。

「うん」

「酔っ払ってるのかな」

「うーん。でも」

岩村はいつも、自分から話をする方ではないから、僕は、

「でも」の後の言葉に集中した。

「ちよっと、念仏、やってみたかったかも」

「え」

教室でも大人しい岩村が、人前で踊ったり、歌ったりする念仏をやってみたいということが意外だった。

「そうなの」

「うん。昔、お母さんに念仏見に連れてってもらったこと言ったじゃん。そんなときさ、女の人もやってて。かっこいいなーなんて思ってた」

「へー、女の人もやれるんだ」

「うん」

僕は、岩村の言葉が忘れられなかった。

次の日、岩村は学校に来なかった。次の日も、次の日も、現れなかった。この前、おじさんに言われたことを気にしているのかもしれない。

ついに、僕は、定食を食べに行くふりをして、岩村の家に行った。一人だと怪しまれるから、イノッチも誘った。店にまわったが、開店しなかった。だから玄関のチャイムを押しした。何回かチャイムを押ししたあと、岩村がドアを半開きにして顔を出した。僕はこんなときのためにノートをコピーし

ておいた。

「岩村、最近、どうしたの。これ授業のノートのコピー」

「ありがとう」

岩村はコピーを手を取った。その後、三人は黙ったままだった。

「最近、どうかしたの」

僕は重々しい沈黙を破りたかつた。岩村は困った顔をして「ちよっと、今ね。ちよっと、忙しいから。ごめん」と言った。そして僕らはドアを閉められてしまった。

三日して、イノッチが浮かない顔をして数日前の新聞の切り抜きを持ってきた。

「ちよっと、猛君、これ」

僕は、新聞を覗いた。それは、岩村のおじさんについての記事だった。岩村のおじさんは、定食屋の前で傷害事件を起こしたらしく、逮捕された。僕は新聞をゆっくりと机の上に置いて、イノッチを見た。イノッチは何も言わなかった。岩村だつて、新聞くらい取っているだろうから、おじさんのことが新聞に出ていることくらいは分かっているだろう。皆に白い目でみられるのが怖くて学校にも来れないのかもしれない。僕は岩村と話がしなかった。でも、どうやって。

その日は学校から直接イノッチの家へ行つた。田んぼのあちらこちらから、かえるの鳴き声がした。イノッチの部屋で漫画を読んでも、今一、夢中になれなかった。

「あのさあー」

僕は、壁によさりかかつて漫画を読んでいるイノッチに声をかけた。

「はあー」

イノッチは漫画に目をやったまま、曖昧な返事をした。

「念仏って知ってる」

「ふん。どうして」

イノッチはページをめくりながら答えた。

「別に」

「念仏、俺、子供の頃やってた」

「まじで。子供でもできるの」

「うん。俺んちの親父が念仏やっててさ、連れてつてもらつて、やらせてもらっただよ。結構、子供来てたに」

「へえー。誰でもやれるの」

「たぶん。僕は、寺南だけど、猛君、寺北だら。寺北とか山王とか若草とかの人もやってるで、たぶん、この辺の衆はみんないらいら。そう言えば岩村も見学してたときがあったような。親戚かなあ、もう一人女の子と」

「へえー」

「中学生は、念仏に参加すると図書カードももらえるだよ。高校生は本番も参加すれば、お金も、もらえるみたいだぞ」

「まじ」

「その代わり、大人と同じようにやらんといかんもんで、大変だに」

イノッチはジュースを一口飲んで、また漫画に目を戻した。

次の日も、岩村は学校に来なかった。用事がないのに、あんまり家に行くのも変だ。僕は岩村と連絡をとる口実が欲しかった。

学校が終わり、僕は、いつものようにイノッチと自転車を並べて、イノッチの家へ向かっていた。

「イノッチさ、念仏、一緒にやらん」

「えー。まじで。何で、また」

「いや、別に。ちよっと、興味があるだよ」

「ほんとに。疲れるに」

イノッチは驚いていた。

イノッチと僕は中学は漫画クラブ、高校は将棋同好会だ。

中学のときは和太鼓クラブがあつたのにもかかわらず入らなかつた。高校では野球部やサッカー部のやつらを横目で見ながらさつさと帰宅していた。音楽や集団スポーツに何の関心も示してこなかつた僕が突然こんなことを言い出してイノッチが驚くのも無理はない。

「漫画、読めんくなるに」

「うん」

僕はすぐさま返事をした。

僕が冗談で言っているわけではないのが分かって、イノッチは考えていた。

「じゃあ、親に聞いてみるわ」

「親」

「そう。確かね、高校生は親の許可が必要だったような。ち

なみに小中学生は親同伴だった」

「そうなの」

今度は僕が驚いた。親に説明するのは厄介だった。

家に帰り、僕は、母さんに話を切り出すタイミングをうかがった。

「あのさー」

「何」

母さんは工場の作業着を畳みながら答えた。

「念仏つてあるじゃん。あれつて、高校生でもやれるだつて。やってみようかなつて思うんだけど」

「あんたどうせ続かんじゃん。気まぐれで入つて、皆に迷惑かけるに」

「本気でやろうと思うだよ」

小学校の時から、そろばんもスイミングも長続きしなかつた僕の言うことは説得力に欠ける。

「お金もらせるらしいだよ。バイト代わりに」

「何、お小遣い足りないの。そんなに何に使つてるよ」

母さんは洗濯物を畳むのに夢中で真剣に取り合つてくれな

い。

「別に。そういうんじゃないよ。もういいよ」

僕は作戦を立て直すために自分の部屋に戻った。

次の日、休み時間に僕がトイレで用を済ませていると、イノッチがズボンのチャックを下げて横に並んで話し始めた。「あれさあ」

僕は、念仏のことだとすぐに分かった。

「うん」

「親は良いって言った」

「ほんと」

「うん。もともと、親父がやってただで、別に反対することないら」

「うん。おじさん、今はやってないの」

「うん。やりたいらしいんだけどさ、なかなか時間が合わなくて行けんらしいだよ」

「ふーん。親つてさ、何か、承諾証明書みたいの書くの」

「いやっ、たぶん、念仏の人が家に来て、『お宅のお子さん、念仏に参加したいっていつてますけど、いいですかね』って聞くだけだと思うだよ。家は、親父がもう知ってるから、電話すればいいだと思うだけだよ」

「ふーん」

昨日の母さんの様子だと、念仏の人に家に来てもらっても困る。でも、とにかくなんとか、僕は念仏に参加しなければならぬ。

「とりあえずさ、今週、二人で見学行くか」

僕は念仏強行参加の方向で話を進めた。

僕たちは、土曜日、七時になる少し前にイノッチの家を出て、お宮に向かった。僕は、岩村がいつもの場所に座っているかなと遠くから石壁を見たけど、居なかった。お宮にはもう人が来ていて、太鼓を並べて準備をしていた。

「おー、よく来たな」

この前、岩村と喋っていたときにデートかとか言ってきたおじさんがイノッチに話しかけてきた。あの時は暗くてよく分からなかったが、たぶん、声や体つきから、この前のおじさんだ。僕はうつむいて顔を隠した。おじさんのほうも暗くて僕のことをよく分からなかったのか、僕にはお構いなしでイノッチに

「おとうさん、元氣か」

と話している。イノッチのおじさんが電話をしておいてくれたのか、このおじさんは僕たちが見学に来ることを知っていた。親の承諾のことをいつ聞かれるか、はらはらしていたけど、親のことは聞かれなまま、練習が始まった。

太鼓が鳴り、笛がなり、鉦がなり、踊りが始まった。休憩時間になり、さっきのおじさんが近づいて来た。

「いいか、おんしゃら。これは、亡くなった人のお甲いだで、真剣にやらにゃーいかん」

おじさんは、一つ咳払いをしたあと続けた。

「まあ、そもそもは、昔、戦国時代に、三方原の合戦っていう戦いがあったけど、そのときに徳川側が武田側の兵士を崖ヶ崖で待ち伏せして、あっ、崖ヶ崖っていうのは、浜松の中心部にある深い崖だ。行ったことあるか」

イノッチと僕は首を横に振った。

「まあ、その深い崖に徳川側が白い布を張って落とし穴みたいのをつくった。子供の頃落とし穴はつくったことある

だろ」

僕は、子供の頃、兄ちゃんが作った落とし穴にまんまとはまったことがある。草むらに穴を掘ってそこに細い棒をはり、枯草を置いて、相手の目をくらます。僕は、兄ちゃんと追いかけてっこをして、そこにはまった。

僕はそのことを思い出して、おじさんの質問に首を立ててに振った。おじさんは続けた。

「まあ、とにかく大きな落とし穴だ。暗闇の中、その崖に掛けられた白い布を橋と勘違いして渡ろうとした武田側の兵士が犀ヶ崖に落ちて、たくさんの人が亡くなった。そして、徳川側がそれを弔うことになったのが、遠州の大念仏の始まりだ。この辺はお盆が早くて七月だもんで、七月のお盆が本番で、後の地域は八月が本番。ああ、ちなみに犀ヶ崖の近くの布橋って地名はそれが由来で」

おじさんは歴史の先生のようにとどめなく歴史について話した。

「そろそろ始めるぞー」

練習再開の合図が聞こえた。

おじさんは、まだ、話したりないという感じで、名残おしそうに練習に戻った。

僕は、練習に目をやった。太鼓は足を上げたり、飛び跳ねたりして動きが大きく、体力が必要そう。僕がついていけるか、少し心配になった。太鼓の横をみると音楽準備室に置いてあるドラのような楽器が二つ並んでいた。この前岩村と聞

いた双盤だ。布を巻きつけた棒で二人が向かい合って一緒に叩くと音が共鳴して余韻のある響きがでる。お寺の鐘みたいで、お弔いらしい、幽玄的な雰囲気が一気に増す。

練習が終わり、皆は、片付けに入った。おじさんが、また近づいてきて

「また、来いよ」と言った。

「はい」

帰りに、僕は話し始めた。

「徳川側はさあ、武田側が犀ヶ崖に落ちれば、死ぬって分かって、犀ヶ崖で待ち伏せしたなら。死んでから、お弔いって言われてもお前らが仕組んだことだろって思わんかね」

僕は、兄ちゃんにはめられた落とし穴で怪我したことを思い出して言った。

「うーん。僕もよく知らんけど、落とし穴を仕掛けて人が死んで、その後、よくないことがあったもんで、その魂を鎮めるために始めたらしいに。だもんで、よくないことがおきなければ念仏はやらないままだら。落とし穴を作ったときは戦いに勝つことに専念してるもんで先のことまで考えてないら」

「そうか」

僕は、イノッチがこんなことを知っているのが意外だった。

七月に入った。僕は、太鼓をやらせてもらっていた。初めはみよみまねで歌ったり、踊ったりした。練習の後は汗だくになっていた。僕は練習後いつも通りにイノッチとお宮を

出た。岩村が座っていた石壁を見るのも諦めかけていた。でも、その日、岩村が現れた。僕とイノッチは自転車を止めた。

「岩村」

僕は声をかけた。岩村はこちらを向いた。

「久しぶり。えっと」

僕は相変わらず、気の利いた言葉を見つけられなかった。

「俺、ちよつと、さんかい食品に行く予定あるもんで、先、行くわ」

イノッチがそう言つて、自転車のペダルに足をかけた。二人きりで話ができる機会がやってきた。

「わ、私も。お母さんに買い物頼まれて」

岩村が言い出した。

「じゃあ、俺もさんかい、どうせ通るし、三人で行こつか」

僕はすかさず提案した。

「うん」

岩村は返事をした。イノッチと僕は自転車にまたぎ、自転車を蛇行させながら、岩村のスピードに合わせた。僕は自転車の後ろに岩村を乗せるという提案をしたかったが、出来なかった。

「念仏さ、昔、岩村、見に来てたじゃん」

「うん」

「一緒にいた女の子、あれ、親戚の子」

「そう」

イノッチと岩村は、近所で共通点があるらしく、自然な話

の流れをしていた。いつしか、イノッチと岩村が横に並び、僕は二人の後についていき、二人の後ろ姿を見ながら、さんかい食品までの道のりを行くこととなつてしまった。たまに、イノッチが後ろを振り向いて、僕に「そうだよね」とか「猛君は」とか話に参加させようとしてくれたが、僕はよく聞こえなかった。ここで、ちんぷりかくのも大人気なかったから、適当に「うん」と答えていた。さんかい食品で買い物を終えて、僕は家の方向に向かい、二人はまたお宮の方向へ帰つていった。帰り道、二人きりになったとき、二人はどんな話をしているのか気になつた。

次の日、僕はさりげなくイノッチに昨日のことを聞いてみた。

「昨日、どうだった」

「どうだったって、別に」

「岩村、何か、言つてた」

「んー、あつ、そうそう、学校に来れないのは、お母さんの看病のせいだつて」

「お母さん」

「そう。なんかさ、あの事件あつたじゃんね」

「ああ、あの、おじさんの」

「そうそう。そのときに、店の前で、おじさんがおばさんを蹴つただか物をおつけたかで、どこかしらんけど、骨が折れたらしいだよ。だもんで、おばさんが寝てたりするもんで、ご飯運んだりしてるらしい」

「まじで」

僕は、その話を聞いてぞっとした。それと同時にイノッチが岩村の近所であることがうらやましかった。岩村からそんな話も聞ける。

次の土曜日、イノッチと僕と岩村は、またお宮で会い、話をした。岩村は

「私も、念仏やってみようかな」

とぼつりと言った。僕は胸が高鳴った。

「うん。やってみなよ」

僕は勧めた。岩村はイノッチの方を向いていた。

「うん。俺らもいるしさ」

イノッチも岩村を誘った。岩村は大きく頷いた。

次の日、岩村は笛を持って、お宮に現れた。しかしその日、イノッチはお宮に現れなかった。僕が家を出る寸前に電話がかかって来た。

「ごめん、猛君。親父が会社の荷物を車まで運ぶのを手伝ってたら、足ひねって捻挫しただよ」とのことだった。

僕はイノッチには悪いが、イノッチが捻挫したことを幸運だと思った。帰り道、僕は二人で話せることに心が浮きたった。月が綺麗だった。岩村は、僕の横に並んでくれた。

「イノッチ、大丈夫かな」

僕はイノッチのことを話のきっかけにした。

「うーん」

岩村は下を向いて、返事をした。

「イノッチと岩村って、割と仲いいよね」

「うん。家、近いし。昔、家族で定食食べに来てくれたりしたから」

「ふーん。家中で仲いいの」

「うーん。猪野君のお母さん、ボランティアでブラジルとか外国の人に日本語教えてて」

「そうなの」

何で、うちのかあさんは日本語のボランティアをやってないのか、僕は少し、かあさんを恨んだ。

「うん。うちのおかあさん、韓国人だから、小学校とか中学校とかの時、おたよりたまに読んでもらったりしてさ」

「そうだったの。韓国人って知らなかった。おじさんは日本人」

「うん」

「おじさんに読んでもらわなかった」

岩村はうつむいた。僕は、しまったと思った。たぶん、おじさんとおばさんはそのときはもう、話をしない状態だったのかもしれない。うちがそうだった。仲が悪くて、家の中にいても、父さんと母さんは話をしなかった。

「あ、あれ、子供としてはちよっと、辛いんだよね。うちもさ、父さんと母さん、離婚してさ。離婚前とか相当つらい。子供を通して話をするとかさ」

「そうそう」

岩村が顔をあげて僕に頷いた。

「子供って、親に振り回されて損だよな」

「うん。でも、うちのお母さんは大人でもお父さんに振り回されてる」

「あ、ああ。まあ。おばさんの様子はどう」

「だんだん、良くなってきた」

岩村は僕がおばさんのことをなぜ知っているのかとか探りを入れるわけでもなくすんなりと答えてくれた。

「そうか。良かったよ」

僕は極力、ゆっくり歩いていった。話が途切れて次の話題を探した。

「岩村は念仏の笛、初めてなのに上手いよね」

「そうかな」

岩村は照れて下を向いた。

「私なんか、全然。猪野君は子供の頃から太鼓すごいやれる」

「あいつはさ、親父さんもやってたんだから当然だよ」

猪野が誉められて、僕は面白くなかった。イノッチと僕は中学校の頃から友達だ。僕も自分のことは大して冴えた男とは思っていない。しかし、イノッチだってそんなに女子にもてたとも思わない。そんなイノッチに僕は安心を感じていった。僕は、いま、はじめてイノッチに対して焦りを感じた。そうこうしているうちに岩村の家に着いてしまった。

「あっ、じゃあ、ここで。ありがとう」

岩村は家の中に入って行った。僕は家に帰るまで、岩村と

の話を心の中で反復しながら、もっと、違う話をすればよかったかな、などと反省していた。

日曜日の朝、僕は、遅くまで寝ていた。昨日の練習で、岩村の前で張り切りすぎて体を動かしたから、筋肉痛で、腿や腕が痛い。そろそろお腹もすいたし、起きようとしたら、母さんが勢いよくドアを開けて部屋に飛び込んできた。

「猛」

母さんは真顔だった。僕は、何が起きたのかと思った。僕は、だまったまま母さんを見ていた。胸の鼓動が耳に響いた。

「あなた」

「な、なに」

「毎週、毎週、猪野君の家に行くって言って、どこ行つたの」

「ばれた。僕の心拍数はさらに上がった。」

「さっき、さんかい食品に買い物に行つたら、鈴木さんに会つて、『そちらに行こうと思つてたんです』って。母さんなんのことかさっぱり分からなくて。『見学も終わつて、太鼓も触っているから、そろそろそちらに承諾の確認にお伺いしなくていけないと思いつつ』のびのびになつてしまつていてすみません。でも、まあ、ここで承諾してもらえれば、そんなにかしまつたことでもないのよ」なんて言われてさ。あんた、母さんにうそついてこそこそやつて」

母さんは高揚して大きな声で、一気に話した。僕は母さんの顔をじつと見た。母さんの顔は真っ赤だった。

「それで、母さんは承諾するって言ってくれた」

「窮地の中、よくこの言葉が出てきたと、僕は後で思った。

「そんなこと言うわけないでしょ。突然で、何も分かってないのに」

「じゃあ、なんて言ったの」

「お世話になってます。今のところ、よく考えておりますのでって言っておいたわよ」

「母さん、俺、念仏やりたいんだよ。っていうかやるから」

「何言ってるの。テストだって近いのに」

「勉強はやってる」

「うそつけ。宿題やって言ってる猪野君の家に行ってるかと思えば、行ってないし」

「イノッチだって、一緒に念仏やってるんだよ」

「そりゃ、猪野君の家はいいって言ったんじゃないの」

「バイト代がいるから、三ヶ月間は小遣いいらん」

母さんの気持ちが少し揺らいだのを僕は見逃さなかった。

「俺がやめたら、イノッチにだって迷惑がかかるし、猪野が一人で念仏に行かなくちゃいけないくなるじゃん」

「そうだけど」

「念仏は、武田が徳川を犀ヶ崖で落とし穴をしてその魂を弔う地域の伝統行事なんだよ。高校生が引き継がなきゃ」

この前のおじさんの言ったことをつなぎ合わせた。母さんは黙った。僕は上手く行ったと思った。

「あんだ、今まで、廃品回収とか地域の行事にそんなに積極

的じゃなかったじゃん」

「それと、これとは別」

「とにかく、勉強しなさい。テスト近いんだから。ちなみに武田が徳川を弔うんじゃないくて、徳川側が武田側を弔ったの」

母さんは、部屋から出て行った。

夕方になって、僕は、念仏に行こうかどうか、迷った。でも、体が勝手に出かける準備を始めた。

「猛、まだ、分かってないの」

母さんは大声を上げた。

「あーあ、父さんが居たら、賛成してくれたかも知れないのに。やっぱ、男のことは男にしか分からん」

僕は、これを言ったら、母さんが辛い思いをするのが分かっていた。だから、母さんと父さんが離婚してから、一回も口にすることはなかった。僕は今、その言葉を吐いてしまった。僕は自転車をこぎながら後ろを振り向いた。母さんは力なく、僕を見ていた。

お宮に着くまで、母さんの顔が僕の胸の中でこだましていた。でも、岩村に会い、念仏の練習が始まると、情熱と汗で一杯になり、僕の中にいた母さんの顔はどこかへ行った。

「はい、じゃあ、連絡事項」

この前のおじさん、袴田さんというらしい、その人が集合をかけた。

「来週の七月十三、十四、十五は本番です。それに当たって」

袴田さんは本番に向けての注意事項を説明し始めた。僕た

ちはまだ覚えきれてないから、本番は出れそうもない。説明が終わり、解散した。

僕たちが帰ろうとすると、袴田さんが声を掛けてきた。岩村と僕は立ち止まった。

「今回の本番には出れんけど、このまま続けていけば、来月八月のお盆には出てもらうかもしれんで」

僕は嬉しかった。

「はい。よろしくお願いします」

僕は勢いよく頭を下げた。

僕は当たり前のように岩村を送っていた。

「今回は無理でも、八月には出させてもらえそうだね。あそこの、太鼓を持ったままターンするとこあるじゃんね。あそこがうまくいかないんだよな」

僕は自転車を押しながら、足を上げて、念仏のときの格好をしてみた。

岩村はさつきから、浮かない顔をしていた。僕はちよつと、調子づきすぎたかなと思ひ、テンションを下げた。しばらく沈黙が続いた。

「実はさ、私」

岩村が何か言いかけた。僕は言いにくいことであることを察知し、次に出てくる言葉が怖かった。

「実はさ、私、韓国に帰るかもしれないんだ」

「え」

僕は思いがけない岩村の話に動揺した。

「ん。原田君も知ってると思うけど。家のお父さんとお母さん、店の前で喧嘩したときあったじゃん」

「うん」

「前々から、もう、仲は悪かったんだけど。あの時も、ささいな事で喧嘩になって。お母さん、あの時、韓国に帰るって言い出したんだ。そしたらさ、お父さんが激怒して。手がつけられなくなつて。それでああいうことになつちゃつて」

「そうか」

「私、学校休みすぎて、単位も取れてないから。お母さんが、どうせだったら、もう、韓国に帰ろうつて。まだ、決まつてないけど。二学期は高校に行けるか分からない」

「そっか」

「せっかく、横の席になつたのにね、ごめんね。でも、あと、ノートとかありがとう」

「うん」

僕は岩村の言葉が胸に染み込んだ。

家に帰ると、いつも付いている電気は付いていなかった。台所には僕の夕食が用意してあった。母さんは自分の部屋にゐるみたいだった。

そうだった。母さんと喧嘩していた。僕はこの日、ダブルの衝撃を受けた。

それから一週間、僕はほとんど母さんと口を利かなかった。どうやって謝つたらいいかも分からなかったし、そもそも、目を合わせる勇気がなかった。それでも、僕はいつもど

おり、土曜日には念仏に行った。イノッチは八月の本番には出れるということだが、まだ、来れそうもないということだった。意外なことに岩村はしっかりと練習には来ていた。近所の鈴木さんが僕に声を掛けて来た。

「原田君」

「はい」

「そうそう、二、三日前にお母さんから電話があったよ」

「えっ」

僕は承諾してないから帰れと言われると思い、どぎまぎした。

「迷惑かけるかもしれませんが、よろしく願います」
つて、言われたよ。迷惑かけられても困るから、八月の本番はしっかりとやってくれよ」

鈴木さんは僕の肩に手を置いて言った。

「はい」

母さんは鈴木さんに連絡しておいてくれたんだ。僕は母さんに無性に会いたくなった。そして謝りたかった。でも、それから、なんと切り出していいかわからないまま母さんと口を利くことなく、夏休みに入ってしまった。

八月十三日、夜八時。あたりは、暗かった。念仏の衆が初盆の家の近くの道路に集合した。

列は、初盆の家の人との交渉をする頭先、燈籠を持つ頭、幟を持つ幟、除夜の鐘のような双盤、笛、トライアングルのような音のすい鉦、太鼓、供回りの順番で続く。

頭先が持つている提灯から紅い光がもれて、暗闇をほんのりと照らしている。笛の岩村は太鼓の法被とは装いが違う。岩村の着ている白地に紺で描かれた遠州の波の浴衣は暗闇の中に美しく浮かんで栄えた。水色の小手につけた二つの小さな鈴は動くたびに小さな音を奏で、あちらこちらで聞こえる。号令がかかり、僕たちは初盆の家の一つ手前の四つ辻のところに行列を作った。念仏の演奏はこの四つ辻から始まると、大体決まっているらしい。

僕は葦と竹で作られた笠が隣の人に当たらないように気を付けて列を作った。

僕は緊張して上を向いた。星がきらめいていた。灯籠につけられた赤と白の細長いおびが風に揺らめいている。遠州大念仏と書かれた幟が高々と揚げられ、誇らしげだ。

念仏の演奏開始の合図である笛のソロが始まった。このソロが終わると皆で道囃子を始める。僕は気を静めて、心した。僕は左肩に太鼓を掛け、右手のバチで太鼓を叩き始めた。

すい鉦の一定の繰り返し音が歩くりズムを整えている。

初盆の家の人が引手となってくれ、家まで案内してくれる。庭に入ると、左回りで庭の中を歩く。庭には花輪が所狭しと並んでいた。盆義理に来ている人々が絶え間なく家の中を出入りしている。僕たち念仏が庭に入っていくと一同は手をとめ、僕たちの方に注目した。

来客者の中に母さんを見つけた。家を出てくる前に僕は母さんに一言言った。「有玉でやる念仏を見に来て欲しい。八

時からだから」

母さんはきつと鈴木さんの家で有玉のどこの場所でやるかを聞いて自転車でも来てくれたんだ。僕は小学校の運動会でも中学校の授業参観でも見せなかつた真剣さを念仏にぶつけた。

来客者の半そで、空に浮かぶ星、夏休みの子供の笑い声、この全てに夏の匂いがした。

太鼓が最前列に並び、合図で道囃子を辞めた。僕は太鼓を地面に置き、笠を脱いだ。

お座敷にある祭壇は金色や銀色の籠盛りで囲まれ、盆飾りがざらびやかにされている。水色の下地に花の絵が描かれた提灯がぐるぐると回り、幻想的な世界を作り出していた。

「ヨー、ナムアマミダー、オホホエー」

念仏申すが始まつた。僕は右、左と大振にバチを上げ、腰を落とし、足を曲げ、勢いよく太鼓を切つた。太鼓十五人が揃つて切つた太鼓の音は大きく、その場の雰囲気を制した。

途中、休憩が入つた。みんな初盆の家から振る舞われたスイカや寿司をほおばっている。僕とイノツチと岩村は輪になつた。岩村は汗だくで生き生きとしていて、眩しかった。岩村がイノツチと僕のためにジュースを注いでくれた。僕は一気にそれを飲み干した。明日岩村は韓国に旅立つてしまう。

また、号令がかかつた。僕たちはこの振る舞いのお礼と供養のため、出囃子を踊る。ここからが見せ場だ。

太鼓を小刻みに叩いて太鼓十五人で輪を作り、噴火寸前の

火山のようにエネルギーをためて、合図を待つ。

合図だ。

僕は太鼓を顔の上のあたりまで振り上げ、一気に降ろしながら同時に足を曲げ、太鼓を切つた。頭を回し、笠が激しく回転する。太鼓や笛が速く強いテンポで高揚する。

そのうち桃色の扇子をもつたお亀が出てきて、僕たち太鼓の更に前で踊つた。その後を魚籠を腰につけたひよつとこが泥鰌掬いの格好で現れる。これは、観客の笑いや拍手を誘つた。初盆の親類なのか、中にはひよつとこやおかめにおひねりをあげている人もいる。僕は太鼓を切りながらさらに激しく体を回転させたり、足を上げたりした。

これが岩村と踊れる最後かもしれない。何だか、汗と涙が一緒になつた。僕は力の限り踊つた。母さんのためにも、死者のためにも。そして岩村と僕の思い出のためにも。僕は足を振り上げ、歌に合わせて片足で飛び跳ねて回り、声を出した。かれた声はほとんど出なかつた。でも、出した。気付くと、観客から拍手が湧いていた。リズムが道囃子に戻り頭先が家を出て行く。僕らはそれに続いた。来たときと反対の方向の四辻までお囃子を続けながら歩いた。全ては終わった。

次の日、僕は六時に目を覚ました。そして、昨日の興奮が冷めやらぬまま自転車をこいで岩村の家に向かつた。韓国に帰ることは寸前までおじさんには言わないと岩村は言っていた。僕は木の陰から岩村を待った。おばさんと岩村がスーツケースを持って家から出て来た。

「岩村」

僕は木の陰から岩村に聞こえる限界の小さな声で岩村を呼んだ。

「原田君」

岩村は目を丸くした。朝のすがすがしい日差しが岩村の顔を照らした。おぼさんは、少し離れたところに止まっているタクシーにそそくさと乗り込んでいる。

「岩村、来年も、一緒にやろう。日本に必ず帰ってこいよ」

岩村は大きくうなずいた。

「ありがとう。私、子供のころから念仏やってみたかったの。日本にいる思い出にやれてよかった。ありがとう」

「ユリ」

おぼさんがタクシーの中から岩村を呼んでいる。

「ごめん。行くね。来てくれてありがとう」

「必ず、戻ってこいよ」

「うん」

岩村は、手を出した。僕は握手をした。僕は、手の中にかがあるのに気付いた。小手につける小さな鈴だった。

「来年、私が戻ってくるまで大切にしておいてね。ひとつは私が持つてるから」

「うん」

僕は我慢していた涙がこぼれそうで、返事につまった。

岩村はタクシーに乗り込んだ。岩村はタクシーの中から僕

に手を振った。僕もタクシーが見えなくなるまで手を振り続けた。僕は岩村の前では見せることの出来なかつた涙を拭い、片割れの小さな鈴をそっと胸のポケットにしまった。胸の奥で鈴がチリンと鳴った。

(北区)

〔市民文芸賞〕

犀ヶ崖

0

犀ヶ崖は、浜松城の北約一kmにある。浜松城の北側で、もとは軽便鉄道が敷かれていたという道路を歩いて、国道二五七号線の下に穿かれていたと亀山トンネルを抜けて行く、犀ヶ崖に至る。いま歩いている道は「軽便の小径」といい、そこから上の通りまでの高さは六〇七メートルはある。また、歩いている道の一段と低い所にも民家がある。地形が三段か四段になっていて複雑に入りこんでいる。ここは遠い昔、河川が入りこみ浸食作用によってできた河川段丘で、徳川家康が城を築いた頃は、沼が広がり葦や灌木が生えていたと思われる。いまも鹿谷、下池川などの地名が残っている。崖は深く切れ込んで深い谷になっていた。そのひとつに犀ヶ崖がある。当時は東西二kmに渡り、深さ四十mの絶壁で、

海原 悠

幅約五十m余もあったとされている。家康は築城に当たり、三方ヶ原の台地の末端で、北側は自然の要害になっているこの地を選び、東にむかって梯郭式の平山城を築いた。現在、浜松城の東側を走る国道一五二号線の脇にある東照宮がもとは飯尾氏の引間城で、この城を攻め落とした後に、それを拡張する形で浜松城が築かれている。

今日七月十五日は、毎年「三方ヶ原の合戦」の死者の霊を慰めるために、遠州大念仏が古戦場犀ヶ崖資料館前の広場で行われることになっている。家康は三方ヶ原の戦いの死者の霊を弔うために三河より僧侶了傳りょうでんをまねいて鉦かねと太鼓を鳴らし供養した。これが遠州大念仏の起源で、いまは無形民俗文化財に指定されている。資料館は、宗円堂といわれたお堂の跡に立てられていて遠州大念仏や三方ヶ原の戦いの資料が展示されている。この犀ヶ崖で徳川軍の夜襲により多くの武田

の兵士や馬が崖から転落して命を落としたりと伝えられている。
周りは薄暗くなり、太鼓や鉦の音が遠くで聞こえてきた。

1

武田信玄は、元龜三年十月三日（一五七二）、二万五千の大軍を率いて古府中（甲府）躑躅ヶ崎の館を発した。イロハモミジの紅葉がしたたるように美しい日だった。

信玄は馬上から振り返って館を見た。館は秋の日に照り映えていた。「今度はいつここに返ることになるのであろう」と思った。そう思いながら、ふと、戦に出陣するときに館などこれまで振り返ったことのないのに気づいた。振り返りながら「何故今日はこのように館が美しく見えるのだろうか」と信玄は思った。このとき、信玄、五十二歳の晩秋であった。

信玄、満を持しての西方上洛の決断だった。上洛など若き日の信玄には遙かな夢であったが、いま、織田信長の討伐を願う將軍足利義昭の要請があり、反信長同盟の諸大名も信玄の上洛を願っていた。それほど、信玄には信望があり、しかも最強で、上洛を果たして天下に号令をかける実力を擁していた。

信玄は、抜かりなく四方八方に手を打っている。
北条氏政と甲相同盟を復活させた。本願寺頭如に越中で一

向一揆を起こさせて、宿敵上杉謙信の動きを封じた。またこのとき、織田信長は北近江の浅井長政、越前の朝倉義景と戦っていて、東の守りは手薄になっているはずであった。やがて雪の季節になり、これ以上遅ければ山国の進軍は難しくなる。読みに読み込んだ末の行動であった。

輝かしいほどの出陣ではあったが、信玄の腹の内は少しだけ複雑であった。己の齡、それにもう一つ、身体の異変を私かに感じていた。この機を逸すれば、西方に軍を進める機会二度と訪れないかもしれない。信玄は胸中わずかに焦りながらも、周りにはその気配すら見せず、用心深く、多くの物見、忍び間者を行く先々に放って、着実に兵を進めた。上洛までは出来ずとも、上洛の道筋はつけておきたかった。それだけはこの出陣で必ず果たしたかった。眼光鋭く、言葉少なく的確に指示を出し、信玄は出陣した。

徳川家康は、信玄の本隊が青崩峠を越えたことを、服部半蔵の手の者、物見によって次々と知らされていた。来るべきときが来た、と家康は胴震いし、眼をかつと開いた。

このとき徳川家康は三十一歳、男盛りである。
北から巨人が大股で降りて来ようと、その脛、かつ斬つてやる。戦う気力が横溢して、じっとしていられた。負ける気がしなかった。信玄は、一度はまともに戦わなければならぬ相手だった。

こうなることは、今川が減び、家康が信長と同盟を結んで

三河から遠江（遠州）に進出して今川の出城の支城を手に入れ、同じく信玄も甲斐から駿河に進出してきて、両雄、大井川の川一筋を隔てて接していた、そのときから予測してきたことであつた。

掛川城、高天神城を備え、二俣城を備えた。徳川の武将は戦意高く、城の内は戦う熱気が漲っていた。

信玄は、青崩峠を越えるとき、信長の桶狭間における奇襲が胸をよぎった。長蛇の大軍の腹を突かれると、被害は大きい。忍び間者を近隣の村まで四方に放つて、安全を確認しつつ、大蛇の如くすると峠を越えてきた。信玄は水窪を経て大居城に入った。城主天野景貫は恭順の意を示すため途中まで出迎えて出ている。三国の接点にいる景貫は、今川に仕えていたが見切りをつけて遠江に入った家康に服し、いままた信玄と関係を持って、さわどく生きている。これも戦国の生きる術である。

信玄はここで一旦情報を整理し、本体を分けて、馬場信春の指揮する三千の兵で只来砦を攻め、直接二俣城攻撃に向かわせた。信玄は主力を率いて信州街道を南下した。途中の城砦はすでもぬけの殻であつた。久野城久野宗能は貝の如く蓋を閉じて籠城の構えを見せたので、黙殺した。信玄は掛川城、高天神城を睨み殺しにしつつ、浜松城と二分して、後方の守りを固めると、見付より天竜川の東を北上した。二俣城へ急ぎたかつた。

徳川家康は戦うために生まれてきた男である。その行動は直線的で明確であつた。戦う術を習い、戦いの中に躍りこみ、戦い勝つてきた。わが領地に人馬の音を響かせて素通りされ、黙つておれようか。家康は鼻血が噴出すのを押さえられなかつた。諫める酒井忠次、石川数正の意見を聞かず、本多忠勝、内藤信成、ほか兵三千を率いて浜松城を出た。戦場で風にあたり、鬨の声を聞き、馬の嘶き、蹄の音を聞かなければ迎え撃つ敵が見えてこなかつた。木原に陣を張る武田を攻めたが、武田軍は強く、結果は、一言坂まで追われるような惨敗だつた。

この戦いは敵の兵力、威力、士気を探る言わば威力偵察ではあつたが、武田軍の巨大な圧力と風圧を目の当たりにし、それを全身で受けとめた家康は天竜川の浅瀬を渡り浜松城へもどつた。ただならぬ覚悟をしなければならなかつた。

信玄は、一気に浜松城攻撃を主張する勝頼らを抑えて、北上して合代島に本陣をおいた。これより北西二里のところ、二俣城があつた。始めから二俣城を攻略することがこの戦の急所だと位置づけていた。赤石山脈から連なる台地がここでおわり、ここから平野になつている。扇状地の平野が広がり、東から高天神城、掛川城、天竜川をはさんで浜松城がある。ここを制すれば遠江を制することができる。二俣城は、西に天竜川、東と南が二俣川に囲まれた崖の上にあつた。武田

勝頼に攻撃を命じた。二万五千の大蛇は二俣城を一呑にせんと大口を開けて迫った。が、城将中根正照はよく戦った。城はなかなか落ちなかった。信玄は、消耗戦を避けて城の水を取り、やがて、人質の交換をして二俣城を無血開城した。約二ヶ月を要した。ここまで梶子摺るとは、信玄も思わなかった。

家康は、信長に援軍を何度も要請した。二俣城を落とされでは覚悟を決めなければならぬ。武田軍は天竜川を渡って浜松城を包囲するだろう。籠城は覚悟した。

数日後、信玄は合代島の本陣を動き出し天竜川を渡り、秋葉街道を南下してきたが、なぜか浜松城まで五kに迫ったところで西に転進した。ならば、追尾して攻撃せねばならない。家康はこの地に来て日はまだ浅い、近隣の土豪、地侍は家康の動きをじっと見ている。戦国の世は強いものにつくのが習いである。富国強兵の基礎が土豪を中心とした農村にあることを家康は知っている、これを味方にしなければこれからの統治が難しくなる。家康は、何としても信玄に一矢報いたかった。

信玄は浜松城を落とす自信はあったが、先を急ぎたかつた。三河を攻略すれば家康は孤立する。無駄に兵を損ないたくなかつた。それに、信玄は合代島の本陣で軽い啖血をした。それは、二、三の重臣にしか知らせていなかった。できるな

ら家康を三方ヶ原へおびき出して一気に叩き、決着をつけたかった。

家康は、三方ヶ原で武田二万五千の兵と徳川八千、それに信長の援軍三千、計一万一千とともに戦っては不利であることは初めからわかつていた。軍議を開いたが主戦論と慎重論に分かれて紛糾した。が、信長の援軍も含めて籠城戦を主張する武将が多かつた。家康は黙って爪を噛んで聞いてはいたものの、初めから腹は決まっていた。

武士が打って出ねばどうする。打って出ねば負けたと同じだ。

信玄は、家康はかならず城から出てくると思った。出てくる手を打った。

両雄互いに、虚々実々の駆け引き、戦略を練ってはいたが、思いは一点で交わっていた。

祝田の坂

三方ヶ原の台地から下る坂がある。長蛇の大軍がそこを下り始めたときが家康にとって唯一の好機である。祝田の坂で武田軍を追尾し、隊を分断し、一太刀あびせて三河武士の意地を見せる。あわよくば勢いで坂の下に追い落とす。

信玄も同じことを考えていた。ここを下り始めると血気にはやった家康がかならず出て来る。それを待つて一気に撃つ。

申刻（午後四時）、祝田の坂を武田軍が下りだしたという情報が入部半蔵の手の人によって家康に伝えられる。すぐさま家康が城を出る。家康が城から出陣した、という情報が武田の物見と狼煙のろしと銃声によってさまざま信玄に知らされる。武田の騎馬隊は素早く向きを変えて、三方ヶ原に上がり、布陣を整える。

徳川軍が三方ヶ原に上がったとき、武田軍は魚鱗の陣を敷いて待機していた。家康は内心しまった、と思った。信玄奴そうだったのか、わが軍の攻撃を読んでおったか。思ったとおり、戦場はここになった。しかし、家康はさらにしたたかである、天の利、地の利を読んで頭の中で組み立てていた。決戦の日、元龜三年十二月二十二日（新曆二月四日）は日没が早い。日没は五時である。しかもその日は雲が厚く覆って、いまにも雪の降りだしそうな空模様だった。三対一では勝つのは難しいが、退却すればいつきに総崩れになる。家康は悠々と鶴翼の陣を敷きながら、ひそかに退却も視野に入れて戦いを模索した。一刻もすれば暗くなる。それまでは獅子の如く戦う、出来うれば、先方の小山田信茂よまだのぶしげを包囲してたたく、やがて暗くなる、暗くなれば地の利はこちらにある。勝ちはなくとも負けもないのではないか。戦場には風が吹き

小雪が降ってきた。

初戦は徳川軍がよく戦ったが、多勢に無勢である。しだいに武田軍に呑み込まれるような乱戦になり、徳川軍は崩れた。やがて暗くなる、家康は撤退を命じた。

2

家康は退却した。執拗に追いつがる武田の騎馬隊をかわしながら、数騎の近習に四方を囲まれて全力で疾走した。薄明の三方ヶ原の原野は黒々と広がっていた。芒と小笹があるばかりである。追跡する武田の騎馬とそれを防ぐ徳川の騎馬が激しくぶつかりあう。馬と馬が激しくぶつかり合い、突き立つ馬の嘶いななきとともにもんどりうって甲冑の武将が落馬する。それを縫いうように奔った。家康は、このまま城に逃げ込むことに我慢いならなかった。馬の轡うまわを翻ひしてもう一度戦場に戻りたかった。惨めであった。このように腸の引き裂かれるような惨めでむなしい思いをしたことはこれまでになかった。家中の者どもを戦場に残し逃げるなど考えもしなかった。我が命に代えて、本多忠真ほんだただよねはじめ歴戦の兵を討死にさせることになつてしまった。家康は泣きながら疾走した、怒りが抑えられなかった。家康は怒りながら泣いた。目の前が真っ暗だった。暗くなりつつある台地を南に走った。時折、野兎が行く手の道を横切っていた。

家康は武田の騎馬隊の追跡を逃れて全速力で走りながら、しかし、いまはともかくも生きるのだ、と思った。敵の中に勇猛果敢に斬りこんで身代わりになった本多忠真のためにも、生きるのだ、生きなければならぬと思った。

忠真は、武田軍に切り込んで行こうとする家康を制した。そして一刻も早く退却なされ、と進言した。

「殿、死んではなりませんぞ、お生きなされ、ここはなんとしても三河の者のために生きるんですぞ」

というと、家康の馬首をむりやりに後方にむけ、槍の柄で馬の尻をたたき奔らせた。そして自らは刀を高々とかかぎ、我こそ遠江の徳川家康である、と叫ぶや武田軍の真只中に馬を乗り込んでいった。家康が振り返ると、忠真は真一文字に突っ込む寸前に振り返って、笑った。それはすがすがしい笑いだった。それが別離を意味するものなのか、我も三河武士なり、という矜持の笑いだったのか、それが最後だった。

家康は馬の背にゆられながら、本多忠真の笑顔が浮かんだ。忠真の声が耳の底にのこっていた。

「殿、何としても三河の者の為に生きるんですぞ」
家康は、涙と汗と泥水にまみれて暗い道を走った。

家康は北の玄黙口から城になだれ込んだ。馬を飛び降りると本丸に駆け上がり、大股で城の中に入っていた。小姓が飛び出してきた。家康は異臭を放っていた。

「湯を浴びる」

と、一言言うと、甲冑を無造作にはずし、籠手、脛当を歩きながらほどこいた。着物を脱ぎ捨てると、屋敷の中を走り、禪をとると湯殿に入った。

襦を脱いだ小姓が飛んできて、椅子を用意し、湯桶で湯を汲んだ。家康が椅子に座ると髪を束ねた元結を取り、湯を頭から浴びせた。家康は櫛の椅子にどっしりと座り、両腕を開き、両脚を開いた。二人の小姓が手拭で垢を擦り落としていく。

「いそげ」

と、家康は、一言言ったときりあとは何も言わなかった。みるみる顔が真っ赤になった。五尺二寸（一五五〜一五九センチ）の身体は筋肉が盛り上がりよく引き締まっている。顔は赤銅色に焼けていたが体は白かった。股を開き、寧丸のつけ根から、尻の穴まで無言で洗わせると、いきなり湯船に飛び込んだ。一瞬、頭まで潜り、すぐさま飛沫を上げて飛び出してきた。禪、着物をつけるやいなや、本丸の庭先に出て床几に腰掛けた。侍女に湯漬けを持ってこさせて一息に流し込み、空のお椀をつきだしもう一杯催促した。

城の中はざわめいていて、荒々しく叫ぶ声や、騎馬の走りこむ音が聞こえてきた。あたりは暗くなり、ところどころで篝火が焚かれている。徳川軍はどうやら総崩れになったようである、城には続々と兵士達が痛々しくもどってきていた。

このとき、浜松城は本丸、二の丸、三の丸と広く縄張りされてはいたものの、野面積みの石垣で囲まれたものは本丸し

かなく、重臣の住む二の丸や侍屋敷の三の丸は土塁や木柵でかこまれていた。本丸、二の丸、三の丸の間は空掘りが掘られ、掘りあげた土をかきあげて土塁とし、土橋で行き来するようになっている。城内には広場があった。天守閣はまだなく、本丸のうえに物見櫓が高々と組まれていた。物見櫓から三方ヶ原の方向を見ると、すっかり暗くなった大地は何も見えず、風に乗って馬の嘶きや兵士の声が聞こえてくる。武田の騎馬武者の持った松明だろうか、幾筋もの火が暗い荒野を流れているのが見えた。

家康は、「篝火をもっと焚け」と命じた。「玄黙口は開けておけ」と言い、逃げ帰った兵士をすべて城の中に入れるのだと言った。武田の攻撃に備えて玄黙口の両脇には鉄砲隊を配置させた。

「騒ぐな、粛々とおこなえ」と、言うてから、側にいる酒井忠次に櫓の上で太鼓を叩けと言った。

「いいか、ゆつたりと、叩くのだ」

この時、家康は、今川家の人質時代に学問を受けた今川義元の軍師太原雪斎の講話が頭をよぎっていた。雪斎から漢詩の他に、「孟子」「貞観政要」などの政治哲学書や「六韜」「三略」などの兵学を学んだという。

家康が思い出していたのは、蜀の諸葛孔明の話である。諸葛孔明は魏の大軍に取り囲まれたとき、城を掃き清めて開

き、楼上で琴を弾いたという。

その間にも、伝令が次々あらわれて、報告がなされた。

「中根正照様、討死」「普濟寺炎上」

「成瀬正義殿、討死」

「夏目吉信殿、討死」

「平手汎秀殿、稲葉山にて討死」

家康は眼を大きくみひらき、呻いた。肺腑をえぐられるようであった。稲葉山は浜松城の南にある。ここまで武田の騎馬隊は迫っているのか。それにしても恐るべき疾風の如き騎馬隊である。

夏目吉信も家康の身代わりになって討死したと伝えられている。夏目吉信は三河の一向一揆で家康に敵対したが救われ、その恩義を忘れず、ここぞとばかり身をなげうって家康のために戦った。犀ヶ崖資料館の側に本多忠真、夏目吉信の顕彰碑がある。

武田軍の馬場信春は浜松城に迫っていたが、篝火に浮かび上がった城を見て、手綱を手元に引き寄せて馬を停めた。周りは暗く静かであり、小雪が降り始めていた。城は篝火で浮かび上がり、静かに重々しく太鼓の音が響いてきた。予断を許さないただならぬ気配を感じて、踏み込むことが出来なかつた。昼間ならば援軍を待って一気に突っ込んで落とすことこ

ろであるが、少数の騎馬隊ではためらわれた。

「家康に時の利、地の利が味方していた。」

夜も更けて、周りが静かになった。物見櫓から三方ヶ原の方向を見ると、ざわめきはしだいにおさまっていた。三方ヶ原の方向には松明や篝火が闇の中に見えた。武田軍が浜松城の近くに陣を敷いた様子は見られなかった。家康は服部半蔵に命じて、武田軍の動きを逐一報告させた。小競り合いは各所で起こっているものの、すでに戦いは終わっていた。夥しい徳川軍の兵士が斃れ、徳川軍は大敗した。

武田軍は三方ヶ原で野営をするようである。夜があけたらどんな戦いになるのか想像できなかったが、城の中の持久戦なら戦い抜く自信はまだあった。備えもあつたし、信長の援護の後詰めが駆けつければ、挟み撃ちも可能になる。

「家康の下に服部半蔵が現れて、片膝ついた。」

「敵の小隊が犀ヶ崖の子の方（北）に野営をするようでございます。」

そのとき、家康の視線と半蔵の視線が空中でぶつかって火花が散った。半蔵の目がきらりと光った。半蔵のいわんとしている意味が家康には分かった。家康は、ううっ、と押し殺したように呻いた。それから、

「半蔵、抜かるな」と短く言葉を吐いた。

「承知」

半蔵は軽やかに身を翻した。

家康は、おおくぼただよ 大久保忠世とあまののすかけ 天野康景を呼びつけた。

二人とも家康の胸中を百も承知していた。

「殿、われら、服部殿と——」

「そうか」

「ぬかりなく、戦いまする」

「鉄砲も使え、一兵たりとも失うでない」

「はあ」

武田軍の小隊は焚き火をして暖を取りうずくまっていた。鍋のお湯でそれぞれ手持ちの食料を溶かして飲んで温まる者や餅を焼いて食べる者、薬に包まれている者もいる。そこにいつの間にか半蔵が武田の甲冑をつけ紛れ込んでいた。半蔵の手の者が同じように各所に潜入しているはずであった。

家康の指示の後、服部半蔵は手のもの十数名を連れてすぐに城を出た。三名一組になって獣のように音もなく武田の兵に近づくと、口をふさぎ引き倒して絶命させた。身包み脱がせて武田の兵になりすましていたのだ。半蔵にとって雑作もないことであった

大久保忠世と天野康景の鉄砲部隊は半蔵より一刻おくれで、さくさくわ 作左曲輪の西側を大きく回り、犀ヶ崖の北に廻って合図があるまで身を潜めていることになっていた。

「冷えるのう」半蔵は竹筒の濁酒を一口飲んで、隣の男に渡した。

「徳川の夜襲がないといいんじやが」

「あれだけ叩いたら、立ち上がれんわさ」

「そうよな、万一、夜襲があつても、この方向に走ればたやすく逃げられるそうじや」

半蔵は犀ヶ崖の方向を指差した。

「冷えるのう、ひと眠りはせんと、もたん」

半蔵は火の側で首をうなだれて肩をすぼめて寝るふりをしたが、その姿はいつの間にか消えていた。

離れた所に男がまた影の如く現れていた。

「冷えるのう」、濁酒を隣の男に渡した。

「酒でも飲まん寝れんわな。夜襲がないといいんじやが」

服部半蔵だった。

半蔵の仲間によつて撤かれた流言がいつのまにか夜襲があるかもしれない、という恐怖と、生き延びるためには犀ヶ崖の方向に逃げれば助かる、という確かな情報になつていった。星はなく黒い雲が流れていた。周りは芒と小笹におおわれ、犀ヶ崖の方向には灌木もあつた。静かであつた。

突然、闇の中で銃声が響いた。それが合図の銃声だった。

「敵の夜襲だ」

あちこちで焚き火の鍋がひっくり返り、湯気があがり、煙が舞い上がった。

「こつちだ、こつちへ退却するのだ」

武田の甲冑を着けて馬にまたがった者が数名現れて、退却の進路を示した。

「いそげ、あやまるでないぞ、こつちだ」

徳川の鉄砲隊が動いて、鉄砲を一齐に放つた。銃声は、武田軍をまるで羊の群れをまとめて犀ヶ崖の方向に追うように放たれた。馬が先頭を走り出した。雪崩れるように野営していた小隊は後に続いた。後ろから鉄砲隊の激しい銃声がひびいた。灌木をぬけ、芒を掻き分けて馬も兵士も走つた。

「逃げるっ」先導していた馬の上の黒い武士は何度も手を振り上げて、方向を示して、また駆けた。犀ヶ崖の直前まで来ると、馬に強く鞭を入れてまっすぐに走らせた。

黒い武士の姿は馬上から消えていた。馬はそのまままっすぐに走つて闇の中に消えた。黒い影の数人が、西へ東へ、芒に隠れて地を這うように走り、闇の中に消えた。半蔵もいつのまにか西側へ駆け抜けていた。

馬の消えた後に武田の騎馬も兵士も、鉄砲に追われ、前を行く馬に追従つて、吸い込まれるように次々と闇の中に消えていった。

翌朝、武田軍は攻めてこなかった。武田軍は勝鬨かちどきを上げると、祝田の坂を降り、都田川の川沿いの道を刑部にむかった。

何故、信玄は一気に攻めてこなかったのか、西上を急いでいたのか、信長との戦いに備えたのか、家康は腕組をして黙考した。

信玄は重く病んでいた、昨夜の寒さで、熱が出て夥しく喀

血した。

信玄は野田城を落としたあと、西上作戦を断念して、帰国の途についたが、四月頃信州路において没している。

信玄は自分の死を三年間秘するように遺言したが、家康は半蔵のもたらした情報により、すぐさまそれを知ることができていた。

3

家康は、三方ヶ原での戦いの死者を弔い、負傷者の手当てを手厚く行い、城の備えを整えた。やがて山桜が咲いた。

家康は酒井忠次を呼んで尋ねた。

「上手い絵師はおらぬか」

「絵師でございますか。さて」

「いるか」

「風流でございませぬ、屏風の絵でも」

「いや、わしの絵を描いてもらう」

「そうでございましたか、それはよろしゅうござる。早々に参上させましよう」

酒井忠次は大久保忠世とおおきほただよと相談して、城に出入している絵師

の中から、鹿野玉山を参上させた。家康は忠次に「玉山の思

うままに描かせたいので、しばらく皆下がっておるように」と命じた。

そして、玉山と向かい合った。玉山はひれ伏したままだった。

「玉山か、遠慮はいらぬ近こうよつてくれ、この家康を描いてもらいたいのだ」

玉山は近くで家康を見るのは初めてであった。赤銅色に焼けた顔は引き締まり、濃い眉毛、澄んだ大きな目と太い鼻、福耳という大きな耳をもっている。

「どのような絵をお望みでございましょうか」

「わしのな、泣きつ面を描いてもらいたいのだが」

玉山は、「え」と眉をひそめ、目を見開いたまま家康を見た。聞き違えたかと思った。

「そう、眉を寄せるな。わしの醜い顔だ。そのような絵が、描けるか」

「絵師なれば、どのような絵も描いてご覧に入れますが、徳川様の醜い顔の絵でございますか。なぜでございます」

「そうよ、醜い顔だ」

「徳川様はますます大きくなられるお方、武者姿でもお望みかと参上いたしましたでございます」

「うむ、そうではない。哀れで恐怖におののいた醜い顔の絵だ」

玉山はなおも合点がいかない様子であった。

家康は、なぜそのような絵を描いてもらいたいのかを率直に話をした。

三方ヶ原の戦で大敗した。多くの部下をなくしてしまっ

た。わしは奢っていたのかも知れない。負けることを考えなかった。思慮が浅く愚かであった。城に逃げ帰っておろおろするばかりで、何もすることが出来なかった。そしてわしの身代わりに多くの家臣を亡くしてしまった。

家康はいつになく饒舌であった。普段は寡黙な家康だが家中の重臣でない絵師であることがそうさせたかもしれない。胸に詰まっていたものを噴出すようにしゃべった。それにもとも感情の量も多いだけに、澄んだ大きな目から大粒の涙がぼたぼたと落ちた。家康はそのまま話を続けた。

こんなにも大きい涙を玉山は初めて見た。武将とはこんなにも大きなまるで玉のような涙を流すものなのか。きれいな大粒の涙だった。「このくやしさを忘れとうはない」と、家康はげしく言った。

家康が人前でこんなにも感情をあらわにして話し、涙するのは、初めてであったかもしれない。

玉山も涙があふれていた。涙を拭わなかった。流れる涙のままにしていた。いつか玉山は、家康に呑み込まれてしまっていた。

「わかりましてございます。お望みのもの、描いてご覧に入れます。玉山、一生一度の大仕事にございますれば」

玉山は羽織を脱ぎ、白の襷をした。そして、道具を広げた。

玉山は筆をとり、筆を一、二本、口にくわえると、しばらく家康を凝視した。

その鋭い眼光は殺気すら感じられた。

玉山は、家康を椅子に座らせ、様々な姿勢を依頼した。遠慮はなかった。

「右手で頬杖を、いや左手がよろしいか、それから左足を右ひざに持ち上げ右手で押さえてくださいませぬか。肩は少し落としてください」

「こうか」

「はい、顔が重要にございます。くやしさと驚きを同時になさったときの顔を思い出してくださいませんか。目は恐ろしきものを見たように見開き、眉はあげずにそのまますほめて、口はだらしなく」

「これでよいか」

家康は奥歯を噛みしめながら内心おかしかった。

「殿、笑っているような場合ではござりませぬ。もつと口をだらりと落とされよ。目は恐怖に慄いでいるのでござる。手は震えているかもしれませぬぞ」

玉山は手厳しい。

家康は、玉山に言われるままに素直に応じた。形が決まると、玉山は一気に筆を走らせた。玉山は家康の顔を射抜くように見ては、筆を走らせた。

数日後、鹿野玉山は完成した家康の肖像画を持って登城した。

肖像画は家康の憔悴しょうすいした顔が誇張されて描かれていた。急

に老けた顔はやつれ、眉細く、鼻は大きく、怯えた目がなかなかよく、髭、手つきも力なく描かれていた。家康は引立烏帽子を冠り、鎧を脱いで、片籠手になった鎧直垂の姿だった。これは中世以来の具足着用形式で、片籠手は弓を持つ手へのみ籠手したという源平時代の様式で描かれている。全体として敗北に打ちひしがれて怯えてはいるものの、軽妙で、やや滑稽に描かれている。

家康はそれを見ると愉快そうに高らかに笑った。

「見事じゃ、玉山」

玉山は額を畳につけて低頭した。

「絵師とはすごいものよのう。わしの心のひだまで描いておる。気に入ったぞ」

玉山はやつと安堵し頭を下げた。

玉山に何度も礼をいってから、酒井忠次と大久保忠世を呼んで絵を披露した。

絵を見た忠次と忠世は顔を見合わせた。

「玉山に腕を振るうてもろうた。わしの思うとおり、いやそれ以上のもを描いてもろうたわ。よう描けておる、褒美を取らせよ」

意外な絵を見せられて、二人は家康の心のうちがすぐにはわからなかった。

「この絵をどうなさるおつもりで」酒井忠次がおそるおそる尋ねた。

「わしの寝所に飾っておく、わしは、朝、晩、この絵を見る

であろう。わしは、二度とこのような顔をしとらないのだ。わしの戒めとするつもりよ」

その言葉を聞いて、二人は一瞬凍りついてしまった。涙が出そうになった。殿は先の戦いのことを言われている。あれはわれわれがいたらなかったのだ。酒井忠次も大久保忠世も、三方ヶ原の家康の無念を心底から理解していた。二人とも塑像のように硬直して動けなかった。

家康は明るく笑い

「これはわしの戒めじゃ。そう固くなるな」と言った。

この絵が徳川家康三方ヶ原戦役画像「顰（しかみ）像」である。

徳川美術館に所蔵されている。レプリカが浜松城の展示室にある。

現在この絵の作者は不明である。それは、鹿野玉山が、「この絵は外に出す絵ではなく、家康公ただ一人の為の絵ですから作者はお忘れください」と願い出て、家康が微笑してそれを諒とした為である。

酒井忠次と大久保忠世は鹿野玉山と家康の居間を離れた。玉山に礼をいって別れて二人になった。二人は顔をあわせてうなずき合いにんまりと笑った。それから、忠世が思い出したように、懐の紙入れから、折りたたんだ長いものを出した。「ほう、それは、青大将の」

にも水難よけにもなるとされていた。中国に由来する薬物の書「本草」（植物動物鉱物）に犀がしるされている。

豺も、犀も、妖獣らしい雰囲気がある。

犀、というまだ見ぬ異国の妖獣（巨獣）の話はどこかで小耳に挟んだ近隣の古老が、さいがここにいたそうじゃ、と、おどろおどろしく話し始めたのではないかと想像してみた。

また、日本全国にあるカマイタチ伝説から、カマイタチが棲んでいたということも伝えられている。崖から下を覗いていると突風が吹き上げてきて、人の背中を爪で引き裂く、というのはいそいそである。

祭りはまだ続いていたが、帰り際にもう一度、犀ヶ崖を覗いてみた。ざわざわと風がなり、樹木を渡りいきなりつむじ風となつて体にまつわりついてきた。

カマイタチ、か。瞬間、腰を落とし、大刀を横に大きく一闪する仕種を取った。つむじ風はいつのまにか消えていた。大念仏の太鼓の音を聞きながら、いつか戦国の世に迷い込んでいた。

(西區)

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

〔市民文芸賞〕

水滴

矢ノ下マリ子

草刈り機のエンジン音が大きくなったので、そのままめいっばい刃を回転させて左右に腕を振ると、丈の長い草がバタバタと倒れた。よかった、やってみて……と晴子は思った。

晴子は家に戻ってから、朝露に濡れた草の種をいっばいつけた地下足袋を脱いで、汗の染みた作業着も洗濯機に投げ入れた。すると腕も足もすうっと軽くなった。シャワーを浴びて鏡の前に立つと、まばらに生えている白髪や頬の染みが目立ったが……草刈り機の使い方を覚えたから、何だかってやればやれると解ったから、そちらの喜びの方が勝って、顔を火照らせていた。

晴子は、今日、磐田に住む孫の優太と娘のとも子と三人で竜ヶ岩洞へ行く予定を立てていた。しかし朝早くから行動する晴子と違って、とも子は昼ごろでないと活動ができない娘だった。それが解っているのです、ごろりと寝転がって待つこ

とにした。横になると、身体を動かしている時は出てこない内気な心が（出かけても暑くて疲れるかもしれないなあ、熱中症で倒れることもあるよう）などと、抵抗を始める。それで悩むうちに疲れが出てうとうととした。

ぼちゃんと、携帯から音が聞こえた、晴子が目を開けて覗くと、差出人は娘のとも子だが、本文はひらがなだ。覚えたばかりの文字を小さな指でぼちぼちと打ったのだろう。ぐっすり眠っているとも子と、メールを打っている優太とが脳裏に浮かんで面白かった。

（ばあちゃんおはよう！ きょういっしょにあそぼうねゆうたより）

見る間に晴子の顔が緩んできた。時計は九時半だった。（うんはやくおいではなこより）

またぼちゃんと水滴の音がした。鼓膜に残る音の響きを楽し

しみながら、着信音を水滴に設定して良かったなど、晴子は思った。

(わかったいくからまっつててねゆうたより)

返事が早かったので、ひよっとして天才かも、と晴子はまた嬉しがった。天才などと、いつも劣等意識を貼り付けた洋服を着て暮らしている晴子には縁のないことばだが、孫ならばそういうこともあり得た。生活が苦しく世間並みでない、という感覚は開拓育ちの晴子に染みついているものだったから、たまに身内が人並み以上の才能を発揮することなどあれば、そのことで貧しい暮らしにも光が差すような晴れやかな気分になる。けれど彼女の価値観が能力主義であるという訳ではなかった。むしろ反対で、彼女は昔、父が兄の成績優秀なのを笑顔で話すのを嫌っていた。

晴子の父は終戦後三方原に來た開拓者で、入植したのも早い方だった。その前は八百屋だったそうだが、戦地へも行ってゐる。小学校出だつたから日記などはカタカナ書きだった。

幼かった晴子は、父から、戦闘訓練で一番だったとか歩兵ではなく馬に乗っていたとか言う話を聞いて育つた。父の、筆筒から勲章を出して髭の生えた口を動かし始めたときの顔は、とても生き生きして嬉しそうだった。

反対に、筆筒にあった紙幣や株券を(使えなくなつた)と書いて畳に投げたとき、人に物を訊ねられても答えられずに鎌を握つたまま俯いているとき、(俺らが笹原を農地に変えたおかげで食べられるんじゃないか)と吐き捨てるように呟

いたとき……その時々顔は赤らんだり歪んだりしていた。晴子は意味が解らないままただ父の顔を見て、そして、泣きそうになつた。

自分が孫のちよつとした優秀さに喜んでしまつたから、晴子は、今頃になつて、父が可哀そうだったと気がついた。父は兄に学才のあるのが嬉しかつただけなのだ、自惚れ屋でも何でもなかつた。

晴子は収入を得るために人材派遣会社に登録をした。夫が亡くなつたあと、一人娘が嫁いで家を出たからだ。そして小学校の用務員になつた。だから終日せつせと三角巾とエプロン姿でモップを動かしていた。

学校にはいろいろな人がいる、(時給はいくらなの？ 一日中掃除しているの？ 他に何にもできないの？) などを話しかけられることもある。晴子は、暗い穴蔵に突き落とされたような感覚になりながら、無遠慮な視線を小さな瞳で受けた。そしてしだいに軽蔑のことばを相手の瞳から読み取るのが巧くなつた。(このばあちゃんか)とか(生意気に)とか、実にあからさまに侮蔑がはつきりと伝わってきた。それは自分が質の落ちた公務員か、もしくは偽物の教育者であるかのどちらかだと言われていると同じだった。浜松市は用務員職を民間に委託して十一億の削減に成功したと新聞に載っていたけれど、晴子は教育の現場に資格をもたない人間がいて良いものだろうかと考える。考える度に、胸が疼くのだった。仕事は派遣なので交代で日数も制限されていた。それをワー

クシエアリングと言うらしい。中途半端な気がするが、還暦を過ぎてからの就業にはちょうど良いのかもしれない。学校は週に三日なので、行かない日は畑の管理をするのだが、今年梅雨が明けた頃から異常な暑さだったので、ぐったりして動けないでいる間に雑草が収穫前の稲のように穂を实らせて、ゆらゆらと立ち上がってしまった。仕方なく物置から草刈り機を出したが、初めてのことだったから、農機具屋さんに教わったメモを見ながらやった。教わるときに悔しかったことがある。(あんたは何も知らないんだから、俺の言うことをよく聞きなさい)と言われたことだ。素人というなら何もかもがそうだった。夫が亡くなる前の経験は何一つ役に立たない。暮らし方も働き方も一から覚えることばかりだ。それでも覚えて実行する以外に生きる方法がないのだから、屈辱にも耐えなければと思う。

ぽちゃんと音がした。

ふっと時計を見ると、すでに昼に近い朝である。携帯が点滅していた。

(おばあちゃんもうじきいくよ)

優太の顔が晴子の脳裏に浮かんだ。

チャイムの音で玄関に向かうと、もう小さな影がドンドン戸を叩いている。開けたとたんにおい猫が戻ったように走りこんできた。靴を脱ぎ散らかして駆け上がり、晴子のベット

まできてぱったり仰向けに寝転んで、日焼けしたのか、真っ黒い両手足をばたつかせて笑っている。

「早く行こうよ」

外からとも子の声が出た。

「待っててね、今支度するから」

晴子は冷蔵庫から冷えた麦茶を出して保冷バッグに詰め込み持っていく、戻って日傘を持ってまた戻って帽子を持って、家の中と玄関を行ったり来たりした。

「もう、早く行こうよ」

待ちかねたとも子の、白い手足が外から入ってきた。細い腕にブレスレッドが光っている。フリルのワンピースにサンダル履き、久しぶりの顔はふっくらと、ふわふわカールした髪に包まれて愛らしい。晴子はとっさに自分と見比べた。若々しく装った積りだが、Tシャツにパンツ、髪を後ろにシユシユで小さくまとめているだけでは華やかさがなかった。

晴子は自分の近ごろの日常を思った。体調が悪くて遅れ遅れになっていく庭や畑の整備を考えたら、今日一日遊ぶのがいけないことのように思われる。とも子の着飾った姿を観察すると、都会人とはこういうものかと羨ましい。自分が今朝早く草刈りをしたことなど知らずに寝ていたのだと思うと、それもまた腹立たしい。すると数日前に下痢の苦しみと恐怖をメールで知らせたことをも、思い出すのだった。(遊びの時はこちらで来るのに、病気の時はなぜ来ないの)と詰問したくもなってきた、また(そんなことを言っていない)

と相反する意識に小突かれる、そのたび心がふらふらと揺れた。晴子は生温い水を飲んだような顔になった。まるで認知症の母が失禁したのとそっくり同じ体験を思い出したのだ。

それは猛烈に暑い午後だった、急に下腹が痛くなつて粘つた便が出た。トイレに行く前に、下着の中にそっくり出てしまった。驚いて便の始末をし、下半身を洗っていると、二回目の便が出た。またトイレまで間に合わなかった。動転した晴子はすぐとも子にメールをした。しかし、返信には、肛門の筋肉を鍛える運動をしたらいいよ、とあつただけである。とも子は冷静だった。

腹の痛みが和らいで楽になつたら、晴子はお粥が食べたいと思つた。しかし作る元気がなく困つた。またとも子にメールしたが、(大事にしてよ)と返信があつただけで、来てはくれない。彼女も来てよとは言いにくかつた。しかしこれからも同じことがあるのかもしれないと思うと心細くて、また、独りで暗い穴に落ち込むような感覚がしたのだつた。

晴子の意識を呼び戻すようにドタタツと足音がして、小さな塊が戻ってきた。そしてとも子にぶらさがつた。

「かあちゃんはね、じゅうたいしたのでいらいらしているの」
そう晴子に言った。とも子はふさふさした髪を揺らして「そ
うなのよ」と頷いた。そうして照れながら優太の坊主頭をさ
すっている。晴子は三十年前の記憶をよみがえらせた。昔、

とも子が優太と同じ一年生のときに晴子が手を引いて竜ヶ岩洞へ連れて行ったことがある。そのときはまだ元気な母が一緒に行った。しかし今は他界している。記憶はそこまでだった。

「渋滞？ かささぎ大橋？ 国道？」

「うん、ついそこまで、ずつとずつとだよ。あんなにのろろしたの初めてだったよ」

とも子は車を発進させながら、

「お母さん竜ヶ岩洞ってどう行くんだっけ」
と晴子に聞いた。

「二五七号線を下つてコンビニの角を左へ曲がるんだよ」

晴子はお母さんと呼ばれるその声の響きが懐かしかつた。長い丁寧なメールはあつたが、生の電話は一年以上もなかつたような気がする。

「お母さん、インターネットで見たの？」

「うん」

晴子はパソコンを買つたのだつた。それを使うために急ぎよインターネット契約をしたのが四月のことだつた。そうしてすぐ一番に地図を調べることを覚えた。そのおかげで夕べのうちに竜ヶ岩洞の場所を調べられた。そうでなければ近ごろの記憶力ではとても道案内はできなかつた。

「そうかあ、お母さんもう地図検索はばっちりだね」

「うん、あんな便利なものはないね。魔法みたいだね」

「そうでしょ、インターネットやつてよかつたでしょ」

「うん、優太も携帯使えるようになったんだね。メールが来たんでびっくりしちゃった。わたしも頑張らなくっちゃね」

晴子はまだ地図を調べることしか知らないが、これからはパソコンに何でも教えてもらう積りになっていた。家でパソコンに聞くのなら馬鹿にされることはない。見下した視線と対峙することもない。だからこれまでのように辛いことはない。理解するのに時間がかかっても笑われることもないのだ。本当はとも子や優太が家にいて、（おばあちゃんこれはこうやるんだよ）と教えてくれるのが良いのだが、この際パソコンでも良い。電話もメールに代わって声のない通信になっっているのだからと、彼女は自分に言い聞かせた。それにしては自分の子どもの頃と比べたら何と違うだろうと、彼女は瞬間息を止めて、目まぐるしく辿ってきた半生を振り返った。

彼女は戦後の三方原開拓地で生まれた。兄は父の開拓作業を手伝ったが、彼女は六歳までを里子に出された。戻ってからも食べるものがなかったし、体力のない女は要らないような環境だった。開拓が軌道に乗っても暮らしは大変で、兄は農業高校の定時制に通うのがやっとだった。それも「成績が良かったから」と、担任の教師が家に来て父を説得してのことだから、彼女の口からはとても自分の希望を言うどころではない。ただ早く家を出て働いて自立することだけが目標だった。

戦後の復旧と同時に晴子は成長した。目標を達成して自分の家庭を持つことができたのも、日本が高度経済成長期だったからだ。そして経済も文化も盛り上がった飽食の時代に娘のとも子を育てたことになる。晴子が親の戦争体験を知らないように、とも子は晴子の開拓暮らしを知らない。優太は今、もっとも進んだ文化経済の恩恵を受けて育ちつつあるのだから、そのどちらも知るわけがない。

晴子が優太の顔をちらと見ると、優太は右手でピースサインを作って応えて見せた。ご飯を炊くのに薪を割り谷川から水を運ぶ暮らしを経験した祖父から見たら、さしずめ現在は魔法の国だろう。この子は魔法の国の王子様みたいだな、と思うのが晴子の感想だった。しかし晴子が不憫だと思うのは、優太が一人っ子ということだった。普段は、学校の休み時間と学童保育所で過ごす以外は遊び相手がいらない。遊び相手がいらないということは、たまに会う晴子でも十分に遊び相手になるということだった。

引佐町田畑の竜ヶ石山に竜ヶ岩洞が発掘され公開されたのが三十年ほど前だ。当時は、総延長千メートル、石灰岩の結晶が洞窟内に不思議な世界を作り上げているとの大々的な評判だった。晴子が公開された当初行った記憶では非常に混んでいたのだが……今日は水曜日ということもあって混雑はななく物足りないぐらいの人数だ。入口は三十度を越している

が、洞内は十八度と聞いてなるほどと納得する涼やかさである。地球の命は数億年かかってまだまだ尽きない。これからも続く、その命の秘密がどこかに隠されていて見つかるのではないか、晴子の冷えて透明になった頭からはそんな子どものような探究心が生まれ、心も弾むのだった。先頭は優太が、そのあとを晴子が進んだ。晴子は足元が転びそうで不安だった。それで（怖い）を連発していた。

「もう、おかあちゃんまだこない」

晴子と違って元氣いっぱいなのは優太は、後ろを振り返っては細長く狭い洞窟の中とも子をトコトコと呼びに行く。とも子は学者になりきって、説明書きと氷柱石とを丁寧に見ていた。優太が滑って怪我をするのではないかと、おろおろする晴子の腰のあたりを、可愛いポニーテールがすり抜けて行ったり来たりした。優太の坊主頭が通過するとまたポニーテールが戻ってくる。それが度重なる内に「ふふふ」と忍び声が出したり、「わはは」と愉快そうな笑いが響くようになった。

優太が同じ年頃の女の子と遊びだしたと解ってからは、晴子の、「洞窟の中は狭く暗く怖い」という重苦しい観念が消えた。それと同時に一人っ子を不憫に思う心も湧いてきた、そして今度は（静かにしなさい）と、とも子が優太を叱るような気がして心配になってきた。二人を静めようと腰をかかめると、洞窟の出口方向からこちらに戻ってくる女の子と目があった。

「あーっ」

女の子と晴子とが同時に声を上げたので、脇をすり抜けようとした優太の動きがピタッと止まった。びっくりしている優太を残して、晴子は女の子と手をつないで外へ出た。そこにも子と同じくらいの年齢の女性が待っていた。ポニーテールが走り寄ると両手で抱きかかえて、（何してたの、遅かったね）と言っている。そこへ優太も、とも子の手を引いて促しながら出てきた。

「用務の先生よう」

女の子が振り仰いで叫ぶので、「まあ」と声が漏れて女性の眼が大きくなった。長い髪が肩のあたりで揺れている。ふっくらしたとも子と対照的にスリムである。どこかの会社の受付嬢のような印象で、母親らしくなかった。

近寄った晴子はしゃがんで女の子と頬ずりをするほどの距離になった、が、会えて嬉しいだけでただ笑っていた。女の子は身体をよじって優太の顔を見た。優太が歩み寄って、「僕のおばあちゃんだよ」と言う。ようやく晴子も、口を動かした。

「美香ちゃんのお母さん？」

聞かれた女の子の口も動いた。

「うん」

晴子は学校で一時間ほど美香の手をつないで昇降口に座っていたことがあったのだ。一年生の美香は、無口で心を閉ざしがちな、友達と帰ることができない児童だった。それで毎日お婆ちゃんが迎えに来る。その日はお婆ちゃんがなか

なか来ないので、晴子が付き添いをした。晴子が家に帰っても独りと聞いた美香は晴子の顔を見つめて、（みかのおばあちゃんといっしょね）と言い、（みかのおばあちゃんもひとりであるの、おかあさんがかえるまでみかかといってくれるけど、よるはかえってしまふの）と話してくれた。彼女も一人っ子であった。

「美香の母です。この子がいつも学校でお世話になっております」

女性は晴子に頭を下げて、それからとも子に顔を向けた。そしてまたお辞儀をした。とも子は背筋を伸ばし、すぐに両手を揃えて丁寧にお辞儀を返した。

「いえいえ、母の方こそ働かせてもらって有り難く思っております。これからもよろしくお願いします」

性格の大人しい晴子は三人以上になると聞き役になってしまう。優太と美香の肩や頭をなでながら、孫はたくさんいた方が良かったのになどと余分な考えに浸っていた。二人の保護者はつかの間打ち解けて会話を続けただけれど、小声なので耳の遠い晴子には聞こえにくくなった。子どもは無償の愛が……、それでおばあちゃんに懐く……など、とぎれとぎれに耳に入るだけで話し仲間には入れなかった。晴子は寂しさを感じながら、話の終わりを待っていた。

優太は喜ぶのも怒るのも悲しむのも身体全体であるから疲れるのだろう、車に乗った途端にもう寝ていた。この自然な

振る舞いが晴子は好きだった。大人は疲れても顔に出さない、どんなに厭でも親しげに笑って見せる。若い時には気づかず騙されていた彼女も近ごろになってようやくそのことに気付いた。きっかけは恥をかいて蔑まれたからだ、その、恥をかいた時の記憶を辿ってみた。

風邪をひいて眠れない夜が三日も続いていた。堪らなくけだるくて、ティッシュの溢れているゴミ箱を見ても、埃の浮きあがった畳を見ても、動きなくなかった。咳や痰が出るたび彼女は不安になった。彼女の場合、咳が胸を引く掻いたり震わせたりするようなら抗生物質がなくては治らない。そうなる前にと決心して病院に行った。病院の待合室でふとこちらに注がれている若い看護師の瞳に嫌らしいものを感じた。ちらと見返すとさっと視線をかわす、それからも受付の女性とひそひそ話が続く、といった具合で気になって困った。それとなく待合室の鏡に身なりを点検したが、理由は解らなかつた。気づいたのは、家に戻ってからだ。寝起きのまま髪を梳かさずにいたので後ろ髪がみつともなかつた。普段でも眼鏡をかけて目を凝らさないと顔の汚れが見えにくいのに、その日はふらふらしたまま鍵と財布を持って病院に行ったのである。看護師は「どうなさいましたか」と言い、「おかけになってお待ちください」と言い、「お大事に」とやさしく言った。しかしその笑顔も声も大嘘だった、本心は厭がっていた。

晴子はそれから、笑顔を向けられても、必ずそれが本物かどうか疑ってみる。大概相手の瞳の中にはことばとは反対の感情が湧いて見えるのだ。比べて優太の瞳は澄み切っていて、真実そのものだった。優太を見ていると晴子の気持ちは青空のように軽くなった。

「おかあさんの下痢はストレスだよ。また独りでよくよく考えたりしていたんでしょ。気にしないでいれば治るわよ」

とも子のことばが一筋の光芒となって届き、晴子の暗い追憶を消してくれた。それで晴子は現実に戻った。気がつくると立派に母親となったとも子が車を運転していた。晴子はその車に乗せて貰っていた。

晴子は一瞬、涙が出たところをとも子に見られたような、甘い錯覚を起こした。常のとも子は優太の母親だが、優太が眠ったのでつかの間晴子の娘になった。娘の判断は正しいかもしれないなかった。しかし晴子はそれ以上話を進めたくなかった。ので黙っていた。大腸がんの可能性もある。認知症の初期ということも考えられるが、それは病院に行かなければ解らないことだったし、行く時は一人で行く決めていた。おそらくとも子に頼んでも断られる、そしたらまた落ち込むだろうという確信があったのだ。

「せっかくなのだからどこか寄って行くか？ 都田の方に滝があったねえ」
「うん、いいねえ」

東に戻ってフルーツパーク駅からどんだん山に向かうと鷺沢風穴の看板がある、晴子たちが、「ああこれ、いいねえ」と話しているところへ優太が目を開けた。

優太は満足そうな大きな欠伸をしてから、

「はやくはるこばあちゃんちへ行ってあそぼうよ」

そう言っただけだ。優太の頭の中には（母ちゃんはばあちゃんの家へいくと眠るから、そのあいだにはあちゃんと遊ぶ）というイメージがしっかりと組み込まれていた。

職場結婚の延長で、とも子は優太を保育園に預けながらフルタイムで働き続けてきた。だから疲れがたまってくると年に一度ぐらひは晴子の所にやってくる、生まれ育った家に帰ると安心するのだろう、あがりこんだとたんに寝転がって眠ってしまう。晴子はこの時間を優太がさみしく思わないように、むしろ楽しく過ごすようにと気遣ってきた。常には眠りこんだ母親の傍らで積み木をいじっている優太も、晴子がいれば楽しい遊びができた。遊びは二歳三歳、四歳五歳と成長するにつれ、じゃんけんやかくれんぼから野球になったりゲームになったりした。

「ゆうちゃん、もうじき鷺沢風穴につくよ。竜ヶ岩洞より面白いかもよ」

とも子がやさしく言った。

「えーっ いやいや、はるこばあちゃんのうちへ行ってあそびたい」

「まだ時間がいっぱいあるもん、せつかくここまで来たからね、行こうよ」

「あーん」

喋っているうちに着いてしまつて、車を下りると山木立の中に小ぢんまりとした土産物店があり、その奥に洞窟の入り口が見えた。周りは閑静である。客は若いカッブルがもう一組いるだけだった。晴子が聞いた。

「来たことあるの？」

「うん、職場の人に連れてきてもらつて覚えた。ここに昔人が住んでいたんだつてよ」

晴子は説明するとも子を頼もしく思い、感心もした。洞窟を覗くと天井が低く平らで本堂に人が住んでいたと思われる。名前は知っていたが実際に来たことがなかったので、連れてきてもらつて幸せだという感情が湧きあがった。顔を緩ませた晴子は、売店の女性に渡されたヘルメットを冠つてとも子たちの後に続いた。探検気分も高まつている、気持ちには若者になつていた。

「すごいねえ、こんなところがあつたんだねえ。でも竜ヶ岩洞ほど観光化されてないんだねえ」

「だからいいのよ。人が大勢おしかけたらこの良さが消えちゃうわよ」

晴子とも子に対する敬愛の念を抱き始めていた。成長した娘に保護されている安心感と、子がいて孫がいることの誇らしさもあつた。家族がいれば蔑みの視線にも遭わない。つ

い昨日まで独り暮らしの恐怖にとらわれていたことが、嘘だつたかのようだった。(もしも一人で来たとしたら？ 売店の女性が冷笑するだろうか？ いやいや、独りで来られる訳がない、そんなことはあり得ない) 彼女は首を振つて想念を振り払つた。現実にあるかどうかでなく好きか嫌いかで決めたかつたのだ。独りは厭だから厭な方を有り得ないとした、それで良かった。

「おばあちゃん、こわくない？」

竜ヶ岩洞で(怖い)を連発した晴子を優太が心配してくれる。しかし晴子の足取りはしつかりしていた。竜ヶ岩洞で歩いたわずかの体験が晴子に自信を取り戻させていた。しかし独りならきつと怖々歩いていたことだろうと、晴子は慎重になつた。晴子は、「怖いよお」と答えた。

「滑つたら怪我するよ。優太滑るなよ」

晴子は優太が愛おしかつた。元気だと言つて安心させて事故を起こしてはいけない。魔法の国のこの小さな王子様を大切に守らなければいけない。とも子達夫婦だけではない、磐田の祖父母と自分とをも、この子が大きくなつてからたつた一人で看るのだと、優太の未来を思い描いた。同時に亡くなつた父と母と兄とを、とくに彼らの無念さを思った。父は果たせない夢を兄に託し、病気で死んだ兄は晴子に母を託し、長生きした母は認知症に苦しんで逝つた。それぞれの無念さは晴子を通して一人の孫に引き継がれていく。

「えー、もうおわりい。つまんなーい」

小さな王子様がにわかに探検家となつて駄々をこねるので、とも子が手を引いてもう一度洞窟の方へ逆戻りした。晴子は若いカップルに出口を譲つて、その位置で立ち止まつて待った。元気が出たと言っても彼女は洞窟の中へ戻る気はしなかつた、やはり臆病が身についていた。

「優太あ、おばあちゃん独りで怖いよー、早くおいでよー」

晴子の声が洞内に反響して、冷たい滴がぽちゅんと落ちた。

「おばあちゃん、いまいくよー」

また滴が落ちた。

とも子が車を近くの都田川キャンプ場に移動した。川遊びの家族連れが三組いた。少し歩くと上流に滝があつた。

「ゆうちゃん、見てごらん。あそこの水の色、青くて色が濃くなつていますよ。あの下は深くなつているから、あそこへは近づいてはだめだよ」

とも子が滝つぼを指さして教えている。晴子は滝を見たときに、夫が沈んだ佐久間町の竜王淵を思い出した。すぐに想いは過去に向かつて急降下した。

晴子の夫は沢登りに凝つていた。梅雨入り前に丁寧な草を取り、梅雨が明けたあとも耕運機で均したので、畑は土色が美しく惚れ惚れするほどだった。そんな畑をにんまり眺めたあとで夫は、お決まりの（さあ、働いた御褒美に遊んで来るか）ということばを口にした。常には服に隠れて窮屈がつてゐる太い骨と固い肉を開放するために、ひたすら高い山に登

りつめるか絶壁に張り付くかして体力を使い果たす、それが夫の言う遊びだった。その日も晴子が見た中で一番良い顔とと思うほどの生き生きとした笑顔で家を出た。沢登り用のロープやザックは前日に車に積んであつたから晴子の握つたむすびと熱いお茶の入つた水筒だけを抱えて……。そして夜遅くに遺体となつて戻つてきた、滝つぼに落ちたのだ。

晴子は音を立てて落ちる水を凝視した。魂が吸い込まれそうに綺麗だった。大地の地下から染みでる水も、河を流れる水も、目の前の滝つぼに渦巻く水も……。どうしてこんなに美しいのかと思う。

晴子は子どもの頃よく池に潜る夢を見た。深い水の中を息を止めて下降し、池の底を潜つて反対側の出口からぽかんと浮かび上がるのだ。それでいて泳げるわけではなかつた。なぜそんな夢を見るのか不思議だつたが、父親が井戸掘りをしたのを見たからかも知れない。井戸が完成した日は雪の降る日で、一日がかりだった。大勢の手伝いの人が長く太く撚り合わせた綱を、掛け声をかけながら引いては地中から運ばれた土と石とを庭に積み上げて、そして最後に父を地上に引き上げた。その日から、開拓の家に命の水が出たのだつた。

それからもしかして用水池に落ちたからかも知れない。遊んでいてドボンと落ちて、浮き上がったとき夢中で淵につきまらひ這い上がったが、一瞬の差で死ぬところであつた。だから一生懸命水には近寄らないで生きてきたのに、何だつて泳

ぎや素潜りの得意な夫が水の事故で死ぬことになったのか、水は命を救うものではなかったのかと、晴子は恨みがましく思ったりした。

息苦しい追憶に浸っていた晴子だが、

「少し遊んで行く？ ゆうちゃん」

「わーい」

その会話ではっと気を取り直した。

「じゃあ、おばあちゃんも」

晴子は努めて明るい声を出し、にこにこしながら河原に降りた。優太と晴子は靴下をぬいで川の水に足を入れた。優太の身体が滑って流されてはいけないので晴子は手を掴んで離さなかった。優太は冷たい感触を嬉しがって、もう一歩、もう一歩と足を出す。だんだんと夢中になった二人は、川岸から離れて行く。それを岸辺のとも子が気付いた。

「もう終わり、帰っておいで」

「やだもん、もうすこしあそぶもん」

優太がぐるりととも子に背を向けたので、その反動で手をつないでいた晴子は転びそうになった。

「だめえ、帰るのっ」

とも子はフリルのワンピースなので川には入れなかったが、代わりに優太がびくくつとするような怖い声を出して、その迫力で優太を呼び戻してしまった。

川に沿って下るとフルーツパークがあり、天浜線の踏切を

渡るときに可愛い三角屋根の駅舎があった。

「ゆうちゃん、見て。あれがフルーツパーク駅だよ」

優太は車の天井を睨んだまま返事をしなかった。先ほどと違って静かな調子の声を出したとも子だが、優太をちらと見て諦めて、さらに坂を降りると都田駅の南側に来た。土地が低く平らで一面が田んぼになっている、その真ん中の道を進んだ時に、突然「ワオー」と叫んでブレーキを踏んだ。

「トトロの世界だあ」

トトロと聞いて優太が窓から首を出した。一面緑色のその中央に車は止まっていた。ぐるりと首を回すと山藪に取り囲まれている。そこから地平が薄青くなり空に変わっていく。空を仰ぐと連日太陽が威張って青一色だったところに、今日は白い雲が浮かんでいる。雲が丸く、小さく、楽しそうに戯れている。また視線を落とすと稲の葉がさわさわと揺れている。この辺りだけが低いので、田の水が蒸発して風が起っているのだろうか。風につれて緑の波がうねり、陽光がきらめく、そこに妖精たちが踊りを踊る……とも子が車を降りた。携帯を構えてぱちりぱちりと撮りだした。続いて優太も晴子も飛び降りて、手を大きく広げ空気をうんと吸い込んで、とも子の真似をして「ワオー」と叫んだ。

「さあ着いた、入って、入って」

晴子は玄関のカギを開けると二人を促して、すぐに冷房を入れた。優太のズボンが川で濡れてしまったのでそれを履き

替えさせて、それから麦茶をコップに注いだりした。

一段落してみると、とも子がいない。

「あ、おかあちゃんもうねてる」

「あらまあ」

とも子は出かける前に晴子が寝転んでいたお昼寝用の莫蔭を使つて目をつむっていた。車の中で眠そうにしていた優太が先を越されたといった顔になった。

「ようし」

状況を見定めた優太は、勢いよく晴子のベットに走つた。

目敏く抱き枕を見つけて（おばあちゃん二つもあるよこれどうするのよ）と言う。晴子はつい、寂しいからよと言いつつうすうすうすうと寝るんだよ、右を向いても左を向いても抱きついて寝られるからね

「わはは、どうしてだきつくのお」

「優太だつてお父ちゃんとお母ちゃんの両方に抱きついて寝るじゃん」

「うふ、わかつたあ」

言いながら枕をかかえて晴子に体当たりしてきた、晴子はもう一つのを持つて優太の上に振り下ろした。当たつてもぜんぜん痛くないのとやわらかくて気持ち良いのとで優太が（わははあ）と大声を上げる。優太が野球のバットのように構えて晴子に反撃する。晴子が倒れて殴られてやると馬乗りになつてきた。（きやーっ）と晴子が叫ぶと優太が一段と高

い声で（わははあ）と笑う。優太がもう一度枕のバットを構えたとき、

「うるさい、帰る」

と声が出た。半身を持ちあげたとも子が白い顔を赤くして、晴子たちを睨んでいた。

「忘れ物はないかな、夏休み退屈したらまた遊ぼうね」

晴子が優太に言うのと、

「うん、今年は旅行に行く計画があるからね、退屈しないよ」

とも子が代わりに応えた。

「おばあちゃんもいこうよ」

優太が即座に言った。そのあと一瞬の間があつた。しかし

すぐに（ゆうちゃん、急には無理だよ）とも子が応え、晴子も（また今度ね）と言うしかなかった。とも子たちが旅行することは晴子も聞いて知っていたが、とも子の連れ合いとその両親とが計画したことである。とも子が（そうだね、おかあさんもいくといいよ）と言わなかつたので、晴子はまた暗い穴に落ち込んでいく感覚を味わつた。しかしその感覚も度重なつたことなので慣れきつていた。鷲沢風穴にも人が住んでいた、どんな所にもどんな環境にも適応して生きる力が、人にはあるはずだった。それなら穴の中で生きてやる、と、晴子は落ちながら考えていた。

優太の乗つた車が見えなくなつてから、すぐに晴子は玄関

の戸締りをして、流しに立って水を勢いよく流しながらコップを洗った。洗い終わって温かいお茶を飲んで目をやると、写真立ての中に優太がいる。それは去年ここの台所で一緒に肉じゃがを食べたときに、とも子が撮ってくれたものだった。晴子はふつと涙ぐみそうになり、また目を細めて頭を振り、今日の優太をその中に閉じ込めた。優太は一回り大きくなって何でもできるやさしい子になって、中の優太と同化した。(この子は余所の子だ)、そう気持ちを切り替えて晴子はゆっくりと目をつむった。

ぽちゃんと音がした。

目を開けて携帯を覗いてみたが点滅はない。晴子は瞳をパチパチさせた。意識がそろそろと歩き出して自分のいる位置を確認できる状態になると、心は今朝と同じ状態に戻っていた。

明日の朝は除草剤を撒くのだった、なぎ倒した草の香りが鼻の奥にまだかすかに感じられる。何ごとにも成せばなるものだ、そう信じて草を片づけていけば春には土が見えてくる。去年もそうだったからと思いつながら、晴子はまた眼をつむった。そうして肩の力を抜いて、今度は本当に一眠りするつもりになった。(学校の休みはあと一日だから、明日は何が何でも除草剤を撒かねばいかん。それで明後日は学校だ)

その内、背中に動力噴霧器を背負った格好とエプロンをしてモップを動かしている姿とがシミュレーションとなつて、晴子の脳裏に動き出した。晴子はいつもそうしてやるべき予

定を想定しながら眠るのだった。ときに作業着をも枕元に揃えておく。すると起きた時の気力が二倍にも三倍にもなる。

何もしなければ気力が萎えて一日寝てしまうこともあるからそうしている。これは亡くなった父から教わった習慣だった。晴子は小さいころよく、ゲートルを巻き付けて開墾鋤を担いで家を出る父の姿を見た。父の枕元には、ゲートルが起き上るとすぐ巻けるように、几帳面に畳んであった。父は物を片付けるときに反対方向には運ぶなど晴子に教えた。歩く時は何か持って歩け、そうしているうちに家の中が綺麗になると教えた。それを覚えていて晴子が実行していることも、女は役に立たないと言われたにもかかわらずこうして畑を守っていることも、(知らせたかったな)と思いつながら……晴子は深く眠った。眠った意識の中で携帯にメールの届く音が聞こえた。とてもきれいな心地の良い響きの音だ。

ぽちゃんと台所に音がする。

流しの蛇口から水が滴っていた。

(北区)

故郷（ふるさと）

安部 敏広

私は福岡県の炭鉱で栄えた筑豊の町で生まれた。十五歳で故郷を離れ、大阪、東京で暮らし、東京出身の女房と結婚した。ここ浜松に三十歳から住んで、早故郷で暮らした倍の年月を経、還暦を迎えた今三人の子供は浜松生まれで、最早故郷は浜松になってしまった。

この地は住みやすい気候で人柄も温かく、この街を終えの棲家にする事に何の依存もない。

ただここ数年、日を置かず故郷の山河、人、出来事が夢に出て来るのはどうした事か。未来よりも過去の年月が遥かに長くなった今、未来の事を思うより過去を想うのは当然か。

年齢のある時までは母親も存命で、「故郷に錦を飾る」という前時代的な意識を持ち続けていたが、生活、仕事、夫婦での子育てに追われ、案内をもらいながら一度の同窓会に出る事もなかった。「私のふるさと」と言おうものなら、「あなたは何故郷を捨てたんじゃなか？」などと言われそうである。故郷へ帰る想いは、時を重ねるに連れて故郷を自分自身

でより遠くへ押しやってしまった。しかしその反動からか、六十歳を過ぎ会社から自由の身になった今、望郷の念忘れ難しで今や帰る住み家もない故郷だが、その思いが日を追う事に強くなっていた。

そしてある日、故郷からの一通の郵便物が、私を逸る心で日本の左端の自分の生まれ故郷へと向かわせる事になった。

私が生まれたこの町は、戦前、戦後炭坑で栄え、古くは五木寛之の小説「青春の門」やその他映画やドラマの舞台となった所で、「青春の門」の冒頭で語られるセメントを採る山、香春岳の頂上が水平に削られているのを、私の家から眼前に見る事ができる。標高千mを越す山もあり、自然の山々に囲まれた盆地の町だが、家のまん前の川向こうにそびえる標高およそ百mの直角三角形をそのままドンと置いたような形をした朝夕眺める人工の黒いボタ山が、私にとって一番の存在感を誇示していた。しかし私達子供が毎日見上げるこのボタ山のボタを拾って小遣い稼ぎにしなければならぬ世の中の変化が来るとは、当然この昭和三十年代初め繁栄を極めていたこの町からは想像出来る事ではなかった。わずか人口一万二千の小さな町に大きな映画館が二軒、遊郭が五軒もあり、東京から遥か離れた日本の西端のこの町に本格的な江戸前の寿司屋が六軒もあるほど栄えていたが、その繁栄を示す軒数は町の人口比とのバランスを欠く奇妙な町でもあった。

当時町民の最大の娯楽は映画で、何百人と入れるこの映画

館に家族で弁当や酒を持って行き、柵席に座ってまるで芝居見物でも行くような賑わいを見せていた。

当時の映画館は外の壁面にショーウィンドーを設え張り巡らして、上映中、近日公開などとブースを分け、その中にスチール写真が十枚前後貼られていて、どういう内容の映画なのかという紹介をしている。

中には相当賢い子がいて、そのスチール写真の流れに沿って想像で皆を前にしてあらすじを話す。その子を取り囲んで話を聞いた皆は、もう映画を見た気分になって、「映画をタダで見れて良かったばい」などと感想を漏らすほど話がうまかった。ある時私はこの小さな活弁士の封切り前の映画の講釈を聞いた後実際にその映画を見たが、彼の話したあらすじが実際とはそんなに大きく違わなかった事に驚いた事がある。果たしてある意味天才のこの子は大人になってこの能力を生かせただろうか。

小遣い一日五円の私達は、いくら好きでもそうしょっちゅう映画を見る事は出来ない。

そこで私ら悪ガキ三人は、こういう事を考え実行に移した。それは映画館の入り口を入ると右側に風呂屋の番台のようなカウンターにお姉さんが座ってお金を払うようになっていたが、その番台の高さが一mちよつとあつてそこをお姉さんから見えないうちにしゃがんで通ろうというのである。これを練習なしの本番で実行に移した。幸いな事にお姉さんは雑誌か何かに夢中で、私達が息を殺し裸足になって右

上を見上げながら神経を集中して通り抜けるのに気付かず、ガキ共は二階への階段を駆け上がり逃げることが出来た。この稚拙なタダ見行為も成功したかに見えた三人は「やったばい！」とお互い称えあつたが、私は心臓のドキドキが止まらない。これが犯罪である事の理解は、もう少しこの子らに成長の時を与えなければならぬ。この時上映されていた映画は、小学校一年生には刺激のあり過ぎる映画で、それでも三人は座ってスクリーンの方を見ようとすると、後ろで鋭い声が飛んだ。「おい！ お前ら！」三人が振り向くと、怖い顔をしたおじさんが「下までちよつと来い！」とあごをしゃくつた。私はこの時、なぜか小学校の担任の先生の顔が頭に浮かんだ。階下の支配人室に連れていかれ長椅子に三人並び座らされうなだれていると、支配人であるおじさんは「お前達は何でこげん事をした。言うちみい、その一年十二組のやべしゅんすけ！」（注…この時代は小、中学校問わず一日中名札を付けさせられていた）

「はい、映画が見たかったからです」「ばかこけ！ 今やちよるとが子供が見るような映画かこのバカタレが」から始まり、とうとうと説諭された。しかしおまわりさんの所へも家へも連れて行かれず、三人は釈放される。それは番台のお姉さんが「うちがボーとしとつたのが悪か、こん子らはそげん悪い子やなか、俊ちゃんのお母さんはよう知つとるけん」と取り成してくれたのである。私は支配人を説得するこの救世主の横顔を見ながら、今上映されている映画の主役の「千

原しのぶ」に「そっくりだなあ、きれいだなあ」と思って眺めていた。

成功に見えたこの悪事は何の事はない、子供らはしゃがんで通る時お姉さんの座る右上ばかりを見て、左にまったく注意が行ってない。その左側にはドアの開かれた支配人室があり、その奥から二つの目玉が滑稽なこの悪事をじっと見ていたのを、この悪ガキ三人組は気付かなかった。支配人に説論されたこの悪ガキはその後二度と悪い事はしなかつた。となれば美談で終わるが、そうはならない。「千原しのぶ」の恩を仇で返すような事をやってのけた。それは、説論と恩の効果がこの悪ガキにまだ効いているはずの数日後、この映画館の裏手の板塀を乗り越え、トイレにあたる板壁の一枚が釘が腐食して少しずれているのをこじ開け、中に入って堂々と映画を見ていたのである。

『三百年の歴史を持つ田植え祭り』

映画が娯楽の一番でありテレビもゲームも無かつたこの時代の子供達は、学校が休みの日には朝ごはんを済ますと家の中に居てもやる事がないから、もう外で遊ぶしかない。母親も「いつまで家の中にいると。はよ外に行かんねー」と追いつす。この頃一番子供達が熱中していたのはビー玉遊びだ。

遊びと言っても勝ち負けの勝負で、私は父親のDNAを引き継いだのか手先が器用な事もあり、この遊びでビー玉を沢山稼いでいた。

この稼ぎ集めたビー玉を水できれいに洗い、近所の駄菓子屋のおばさんに売るのである。

おばさんも業者から仕入れるより私から買う方がはるかに安いので、「俊ちゃん、これは内緒ばい」と言って、新品に混ぜて売っていた。

これ子供等が買ってまた私に巻き上げられるという、したたかな駄菓子屋経済が出来上がっていた。

めんこも人気で、これも勝負を伴うがこのめんこはビー玉と違い紙製なので傷むから再販は出来ず、そうそう駄菓子屋のおばちゃんの思うツボにはならない。

この町の子らは賭博性の強い遊びを好んだが、それは大人のせいである。炭鉱から切り出された石炭は集積地に集められ、そこから遠賀川を下り、北九州の芦屋港から全国へと運ばれていた。

この石炭を船で運んでいた頃の名残で人夫も気性が激しく博打好きで、「川筋気質」と呼んでいた。子供らはその大人の背中を見て育ち、「喧嘩して泣いて帰って来るな、負けたらもう一度行け」と教育されていたので、自然に気性の荒さと負けん気が培われていった。

この事が、この県の柔道、剣道王国を造っていった事と無関係でないように思われる。

この町の子供達が正月に匹敵するほど楽しみなのが、三月十五日に行われる「田植え祭り」である。町外れの神社で行われる田植え前の五穀豊穰を祈願する歴史ある神事で、戦争

中も中断されなかつた由緒あるこの祭りが近づくと、子供達の心は穏やかでない。それは、決してお利口な信仰心が強いのではなく、大人達の神事になぜこうまで子供等の心中が騒ぐかという、この祭りで行われる行事にこれまた賭け事も関係して、子供心をときめかす二つのイベントが楽しみだつたからである。

一つは「大相撲」。相撲と言つても土俵で相撲を取るのではない。一般的な屋台に交じつて、子供達が五重六重の輪を作つて取り囲んでいる屋台がある。その輪の中心に白い布がかげられ、土俵が手描きされたテーブルに包装された粟おこしがピラミッドのように積み上げられていて、正面に行司、すなわちこの屋台の商売主がさすがそこまで費用が回らないのか行司の装束ではなく普段着でなぜか巨人軍マークの野球帽をかぶつて、一応手には私にはまだ読めなかつた「天下泰平」と書かれた軍配を片手に、口上をのたまうのである。

「さてさて本日は大相撲ご当地場所の一番。破竹の連勝を重ねる西の巨漢正横綱朝潮、迎え撃つはこれまた無類の相撲巧者東の横綱栃錦！……」などと活動写真の弁士よろしくこの独特の節回しとファンとの相撲取りの名前が連呼され、子供等はいつの間にか催眠がかつたように砂かぶりに居る雰囲気にさせられてしまう。更に行司は流暢な口上を続けながら蒲鉾板に書かれた相撲取りの四股名を読み上げ、「このご当地出身の吉井山、先場所は九勝六敗と勝ち越し今場所こそ幕内入りのかかる大一番！……」などと言うが、十両下位の

力士が幕内で戦うという、大人に言わせれば「おいおい」とクレームのつきそうな平気な口上も子供の前だからまかり通る。

そして次々と口上と共に四股名が読み上げられ、二十枚ほどの蒲鉾板が裏返しに置かれてシャッフルされる。そこでこの四股名が伏せられた木札に、今日はお祭りでいつもより懐か暖かい子供等は、一日の小遣い大枚五円を惜しげもなく賭けるのである。

ここでお金の授受だけが行われれば立派な賭博行為であるから、頭の良い行司は「これは物を売つてるんですよ」と言う事をちゃんと考えて、粟おこしのピラミッドを作っている。

木札にもれなく張られたくすんだ金色に輝く五円玉に行司はニンマリ笑つて、いよいよ口上も口角泡を飛ばし低い声が頭のとっぺんから出るハイトーンに変わり、子供等を更に仮想の世界へと引きずりこむ。「待ちに待つた大相撲ご当地場所、両横綱の優勝か、はたまた幕内の伏兵の巻き返しがあるか、いやいや吉井山の目もあるぞ。(十両力士の幕内優勝は絶対ない) さあ、さあ、さあ！ 優勝を占う本日の大事な一番、ハツケヨイ残つた、両者正面からガツンとぶつかった、お互い喧嘩四つ、押す押すあつ後が無い！ 土俵際粘る粘る、あつと豪快な上手投げ、もんどりうつて土俵に転がったのは……」とまで言つた瞬間、しゃべる行司は一枚の木札をサツとめくり、出た四股名を「大内山あー」と、力士の名を読み上げる。

そこで、この木札大内山に賭けた者は負けである。そして行司は五円と引き換えになぜか口上の流れと違う覚めた言い方で、「はいおにいちゃん。おおきにね今度はがんばろうね」と言つて、山のように積み上げられた粟おこしから一個を渡す。これが行司の考えるおこしの販売で、賭けではないのである。この札めぐりが繰り返し行われ、最後に残った二枚が優勝の行方を決める大一番となる。まだめくられてない残った二枚に賭けた子は心中穏やかでなく、もう目の色が変わっている。

最後に残った二枚はもう行司には名前が分かっているの
で、「こなた房錦、こなた明歩谷。本日優勝のかかったこの
一番……」と更にもつたいをつけて、本当の大相撲では今だ
かつて優勝のした事のない力士同士で、後ろからおこしを買
う気のない見ているだけの大人は、「まさか」などと水を差
すような事を言う。

それを無視した行司により大口上の末片方の札がサツとめ
くられ、最後に残った札の勝ち名乗りを聞いた少年は「ウワ
ー！」と声を出して喜びを露わにしているのだが、子供心
に小遣いを散財した友への気づかいもあり、うれしさを内に
閉じ込め、当時まだガッツポーズはなかつたので両こぶしを
握り締めて上半身を打ち震わせている。そしてこの勝ち残つ
た少年に巨人軍の帽子の行司はうやうやしく「房錦いー」と
言つて、軍配に乗せた両手に余る二十個入りの粟おこしを手
渡し、運良く勝った少年も房錦が優勝するか？ という戸惑

いもありながら、「ごつつあんです」と言つて手刀を切つて
受け取るのであった。

ところがこの粟おこしが紛い物で、ひえとか粟とか言われ
るその粟で牛のえさの原料にもなる物で、おいしくとも何と
もない。もう腹が減つて他に食べる物がなくなつて死なな
いためにしようがないと言つて手を出すような代物で、一個
を食べ切るにはそれなりの勇気がいった。二十個ももらった
少年はこれをどうするのだろう。まさか牛に食べさせる訳で
はないと思うが。

悪い事にこの行司の娘が私と同じ年齢で、祭りが終わった
後一週間位は、負けた腹いせに子供達は「あの粟おこしは食
べればい」などと責任のない娘を学校でいじめていたの
を、優勝した少年がかばっていた悲しいドラマをこの行司は
知っていただろうか。

もう一つ楽しみがあるこの祭りは、午後三時ぐらいになる
とクライマックスを迎える。

ぐらいたつと言うのがみそで、時にはそれが四時になる時もあ
る。私達は子供心に遊び飽きて早くやらないかなとやきもき
させるが、これは子供の苛立ちを斟酌しない主催者側の気を
持たせる立派な演出で、それは何の前触れなしにやつて来
る。突如としてその時が来る。

参道の入り口の鳥居の下に一頭の大きな角を持った真つ黒
な牛が現れたかと思うと、猪突猛進とはこの事で参道脇の屋
台を次々となぎ倒し、この補償はどうなるのかと心配される

ほどで、あわれ熱戦を繰り広げた白い布のかかった土俵もバリバリと踏み砕かれ、私達は參道脇の小高い丘の上なら安全だろうと避難しているが、何とこの牛は屋台を壊すだけでは物足らず、この小高い丘まで四足なのにまるで人間の動きのように駆け登って来るのである。

もう子供等は悲鳴を通り越して声にならぬ声を絞り出し逃げ惑い、運悪く丘の途中から転げ落ちる子もいる。向こう見ずな勇敢な若者は、この荒れ狂う牛に飛び乗ろうとするも、横動きもする牛に簡単に振り落とされてしまう。

牛には尻尾があるはずなのに、なぜかつかまれないようにするため尻尾をつけていない。執拗な大人の追尾を振り切り暴れまくった牛は神社の本堂の階段を駆け上り、「ハァーハァー」と息咳き切らして開かれた扉の中に逃げ込み、なぜか自分の前足で扉をバタンと閉めてしまう。そしてこの後、この牛は、娘によるお堂前の広場での華やかな奉納の舞を、格子の扉に前足を掛けて真剣に見ている。

この神事は千七百年に始まったと言われ、田植えの土起こしは牛に頼っていて、その牛の労をねぎらい、この日一日は牛の勝手をさせたと言う言い伝えがある。しかし、この牛の勝手はあまりにも危険という事と、牛が出番前に酔いつぶれて出動できなかったと言う珍事もあって、現在ではおとなしく大人二人に引かれて堂へ向かう。この姿を見て当時の勇猛な事情を知る人は、「これは何ね？」と言って滑稽ささえ覚える。

『国の有形民俗文化財を取り損なった町の祇園山笠』

地元の人は炭坑で成功して財を築いた人を「成金」と呼んでいた。一般的には成金という言葉は「成金趣味」とか「成金のくせに」などと否定的な意味で使われる事が多いが、この地域では「成金」は世間一般の意味とはニュアンスが違い、肯定的に使われていた。筑豊の人なら知らない人はいない地元の銘菓「成金饅頭」なる物が人気を博し、今で言う「うなぎパイ」と同様で県外の人の帰省土産として定番になっていた。

逆に成金の人達の多くは尊敬をされていた。尊敬されると共にこの人達は偉かった。

蓄財を私利私欲に使うだけでなく色々な少年野球の支援や寄付をし、私はチームの優勝商品の熨斗紙に炭坑会社社長の名前が書かれていたのをうつつすら記憶している。

中でも町の毎年五月十五、十六日に行われている伝統行事「祇園祭り」は、この人達の財力に支えられていた。

山笠を飾ったり引いたりとは日本各地にあるが、太い檜柱二本の上に設えた高さ10mほどもあり二トンを超す重い山笠を大人四十人で「おんぎゃあやっさー」の掛け声と共に担ぎ上げ、街中を練り歩く豪壮な姿は半端な迫力ではない。町がこの自慢の祭りを国の無形民俗文化財に指定申請したが、残念ながら隣接の市で類似行事があつて独創ではないとの事で、明治初めの、情報など持ち得ない町民は、町の誇りのこの祇

園祭りが指定を受けられなかった事に町が耽むほど落胆した、自慢で誇りの祭りだった。

私は小一の時、誕生日が五月十四日生まれで祭りの前夜祭に当たるので「めでたい」との事で、新一年生のへのお祝いも兼ねたのか、栄えるこの山笠の一台の乗り手になるという白羽の矢が立った。

この事が決まってから、お囃子の鉦担当との事だったので、私は何ヶ月も前からお囃子の鉦の練習をしていて、御飯時に茶碗と箸で「チンチキチン」とやるもんだから、いつも明治生まれのおばあさんに「うるさか！」と怒られていた。

祭りが近づくとお囃子の名人のお兄ちゃんの特訓も受け、そして迎えた祭りの初日、この山笠の一つ一番山に私は乗り込んだ。

生まれて初めての荣誉に胸が打ち震えた。初めて乗る山の内部はまるで太い木の組み合わさったジャングルで、重さを支えるため、骨組みは立派な一軒の家と同じほどである。

三層になっており、一層は太鼓、二層が私の居場所の鉦、三層は高さがあるため山の進行の邪魔になる電線や高い木の枝などを押し上げる人が乗る。中は階段などしゃれた物はないので、小さな私は一人で登れない。大人に「うんこらしよ」と人形みたいに持ち上げられ、所定の場所に置かれた。私が座った目の前に、この日のために磨き上げられた黒光りする直径二十cmほどの練習用とは違う本物の歴史を刻んだ鉦が四十五度の角度でしっかりと固定されている。

昨晩は遠足に行く前の日のように興奮で眠れず長い夜を過ごしたが、今日の前にあるこの鉦を早く叩きたくて、私は腰に差した二本のバチをやおら取出し空打ちしたつもりがバチが鉦に当たり、「チン！」と大きな音を出してしまった。と同時に、「バカタレが！」と監督さんの怒声が後ろで飛んだ。

町の中心地に置かれた山笠は、大勢の人が見、囲む中で、台座に据えられたままでまず聴かせ囃子を始める。太鼓と鉦で「チンチキチキチンドンドン……」とメロディアスなお囃子を際限なく繰り返す。

このお囃子の中を、観客の拍手と共に担ぎ手が所定の場所につく。真っ白なパンツにきつくふんどしを巻き白足袋を履き上半身裸の右肩の上には、重量に耐えるための、恋人、奥さん、どちらも居ない人はお母さんのその人への思いと安全の願いが込められた手作りの厚い綿の入った三角巾が、乗せられている。

その色と柄で三人の誰が作ったのかすぐ分かる。ピンクの花柄は恋人、黒単色はお母さん、それ以外は奥さんという風に。

担ぎ手の若者の中には命知らずの中年のおじさんも交じって、周りの喧騒にも負けない大きな音の太鼓の「ドンドンドン！」を合図に、全員一斉に山から突き出た前後二本の太い樫棒の下に潜り込み、肩ごと三角巾をその樫棒に押し当て、中腰になって、持ち上げるだけの短い時を息を止めてじっと待っている。

更にお囃子は強さと速さを増し、ついに親方の「それ！」と天をも分かつ大声と共に振られた軍扇の一振りに、数十人の担ぎ手は見事なくらい声を揃えて、腹の底の底から絞り出す「うおーりゃー」という気合の掛け声に、「この二トンの山が浮くのか」と思われるほどの大山が静かに浮いたかに見えるが、二層で鉦を打つ私は力の限り「茶碗が割れよ」とばかり力一杯のバチさばきで一心不乱に鉦と格闘していて、浮いた事など感知するゆとりもない。

しかし、次の出来事はいくらか我を忘れる状態でも何かが起きた事に気付いた。

それは、私の体がゆつくりと大きく右に傾き始めると同時に、後ろで「早鉦早鉦！」と叫ぶ監督さんの声が耳の鼓膜を突き破った。

どういう事態に早鉦を叩くか教えられていた私は瞬時に何が起きたかを悟り、「チキチキチキチキ」と狂ったように斜めになった体で力の限り鉦を連打した。

そのほんのわずかな一瞬の時間が私には長く感じられたが、体がまさに真横になろうとした瞬間、「グワアシャシャシャ」という物凄い音と共に山の外からの歓声とも悲鳴とも取れる群集の叫び声を聞くと同時に、何が起ったのかを私は悟った。山が横倒しになったのである。

体が完全に真横になり、私は鉦どころではないと打つのを止め起き上がろうとあがいたが、山の二層の大人は横になっただまの体で、太鼓を助けを呼ぶような音色で尚も「ドコド

コドコ」と静かに叩き続けている。

私から見て山の左の担ぎ手が一瞬立つのが早く、山はバランスを崩して右手へもんどり打って引っくり返ってしまった。しかしこの山笠はうまく出来ていて、山の外側の人形や沢山の飾りがクツシヨンになって、けたたましい音の割には私は体に衝撃をそんなに感じなかった。怪我人は誰一人居ず、重傷を負ったのは人形一体で、弁慶の首が道端に一つコロんと転がっていた。

観客も悲鳴の割には冷静で、「あーあ」とか壊れた飾りを「もったいなか」などと言って、中の人はどうなったのかなどとは気にもかけない。担ぎ手は担ぎ手で大した動揺もなく、「気が合ってなかったばい」などと、自分らの失敗の反省もそこに笑顔さえ浮かべている。一番迷惑したのは中に乗っていた人間で、特に二層、三層の人間は倒れる落差と衝撃に打撲一つなかったのは山の神のお陰だと、周りの冷静さとは裏腹に肝を凍らせた。山笠の右側半分がグシヤグシヤになり返って迫力を増した一番山笠は、片付けもそこに今度は気合の入り過ぎた最初とは違い掛け声もトーンを落として、「おんやさっさ」と気持ちを含ませ今度は静かに持ち上げた。「チンチキンチンドンコドン」「おんぎゃあやっさ」とお囃子、掛け声と共に山の担ぎ手が左右の足を踏み動かす度に、それに揺さぶられて土台のギシギシという音と人形などの飾り物が「グワシヤグワシヤ」と、まるで担ぎ手が「重いですよー」と叫んでいるように鳴り響く。

先ほどの転倒の失態が「何か？」と思われるように、何事もなかったようにまさに名前の通り山が動いて行くようにそこどけ、そこどけと、町民であふれる目抜き通りを四十人の、「おんぎやあやつさ」の掛け声を周りの家壁にこだませ、ゆつさゆつさと進んで行った。

三日三晩に渡り興奮のるつぽと化したこの町にも、静けさが訪れた。最終日の打ち上げの前に、この山笠の飾りが人形を除いて、関係者、町民に配られる。この飾りを家の中に飾っていると一年間無病息災で居られるという縁起で、小さなほんほんでも町民は欲しがるが、優先順位は祭りに寄付した有力者、担ぎ手が先で、残りが町民に配られる。中にはどうやって家の中に入れるんだと言うほどの、ベニヤで出来た城の石垣を持ち帰る人もいる。

私は父親に「牛若丸の差してる刀が欲しか」とせがむと、「よし、よし」と父親は安請け合いをし、この日の父親の帰りはいつになるか分からない最後の夜に、私は三日間の疲れがどっと出て早い床につく。

私が次の朝、ガバツと起き上がり牛若丸のあの刀が置かれているはずの枕元を見る。床につく前にここに置かれる刀を夢見て眠りに入ったが、そこに刀はなく、刀とはほど遠い弁慶が履いていたと思われる私の顔ほどの大きさの藁草履が、片方ぽつんと置かれていた。

賢い小学一年生は、この時自分の父親のこの町での位置、力関係を悟った。

『その時が足音もなく忍び寄る』

この勇壮な祭りを支えていたのが炭坑と関連産業の財力だったが、これほど賑わいを見せたこの町に、雨の予兆を知らせる雨雲がモクモクと空を覆うように静かに、「その日」がだんだん近づいていた。町中では子供の間でさえ「ヤマの首切りて何ね？ そりや首切られたら痛かろも」と炭坑の人員整理の意味も分からず、町がこの事で騒がしくなっている事が子供の間でも話題になっていた。

丁度この頃の事である。私が小学校の教室で授業を受けていた時、教室の前のガラス戸が突然ガラガラと乱暴に開けられ、男の先生が大声で「○○ちゃん！ すぐ帰り！ 父ちゃんが父ちゃんが……」と叫んだ。

呼ばれた女の子は何事が起きたのかと不安顔で立ち上がった、教科書をランドセルに詰めようとしていたら、その先生は「そんなもんはどうでもよか！」と言ってどかどかと教室に入ってきて、その子の手を引っ手繰るようにして掴み教室を足早に出て行った。担任の若い女の先生も生徒のみなさん口をただぽかんと開けて、嵐が過ぎ去っていったような開けられたままのガラス戸をじっと見つめていた。落盤事故である。幸いにもその子の父親は一命は取りとめたものの半身不随で、しばらくその子の席は空席になっていた。

大牟田の三井三池炭坑の炭塵爆発で四五八人の死者を出したのは、この時から少し後の事である。

この町が落ちるように暗くなつて行く前兆はあつた。昭和三十一年、中堅の一炭坑がまず閉山になつた。この時町民は良くある出来事のように鉱脈が尽きたものと思ひ、それは一炭坑の問題だと暢気に考へていたがそうではなく、それは日本政府のエネルギー政策、石炭から石油へなどの日本の経済を揺るがす戦後経済の地殻変動が起つてゐる事の前触れである事を、町民は知る由もなかつた。もうこの頃は大手の炭鉱も数キロに及ぶ坑道を町の地底深くあちこちに掘つており、ガスが出れば大惨事になる危険な状況と切削のコスト高で、会社は閉山か縮小の厳しい選択を迫られていた。

そしてその日がついにやつて来る。私が小六になつた昭和三十六年春、あれだけ隆盛を誇りこの町を支えた大手の炭坑がついに閉山され、それに続き次々とドミノ倒しのように残りの中小炭坑も閉山され、六十あつた炭坑が数年を経ずして一つ残らずこの町から消えた。

全国どこか朝鮮半島からも集められた坑夫達が、まず被害者となつた。しかし成金達は尚も偉かつた。

本来なら炭坑夫も自宅である炭住を出て行かなければならないが、会社はこの三千人が住む炭住を炭坑夫達に無償で払い下げた。

しかし住むところがあつても働く所がない。炭住に住む地元人は知り合い親戚を頼り、何とか職探しのチャンスもあつたが、朝鮮人、他所から来た人達はツテもなく悲惨で路頭に迷ひ、この時国の支援策で、ブラジル、まだ炭坑が元氣だつ

た福島常磐炭坑、北海道の夕張への移住が国策で提唱されたが、もう炭坑はごめんだという人の方が多かつた。私の通う小学校の教室の隣の席で昨日まで一緒に勉強していた友達が、櫛の歯が抜けるように一人また一人と居なくなり、中には「ブラジルへ行くとはい」と旅行にでも行くような軽い口振りで言う女の子もいて、ニコニコしていたがそれは永遠の別れへの精一杯のやせ我慢で、眼には今にもこぼれ落ちそうな涙を一杯ためていて、その辛さが痛いほど誰にも突き刺さつて来た。事情を良く知る担任の若い女の先生はなおさらで、目を真っ赤にしてその娘をじつと見つめ、かける言葉を一生涯懸念探していた。

しかし、この町で長く炭坑に依存して生活して来た地元の人以外に住む人達は、簡単には親代々の故郷を捨てて来ないどこかへ行くという事も出来ず、夢を与えてくれたここ故郷に留まるしかない。

繁栄を誇つたこの町で天国を経験した多くの町民もこんな日が来ると誰も想像し得ず、地獄への坂道を下るような町の衰退に町民はただオロオロするしか他なかつた。

今まで、仏様、神様の力を借りずにやつて来た町民は、経済的な不安だけでなく炭鉱と言う精神の拠り所を失ひ、気持ちも不安定になつて行く。この頃からである、陽が落ちてあたりが暗くなると、遠くから「ドンツクドンドン」と言う太鼓の音が聞こえ、時には私の家の前を白装束の山伏風の男衆人が大勢の町民を従え皆それぞれが太鼓を「ドンツクドンドン

ドン」と打ち鳴らし、お経を唱えて通る。慟哭するような大唱和と祇園祭りの時の太鼓とはまったく違う、暗い胸を刺すような太鼓の音色に、何かただならぬ事が起きているという、幼心までも奈落の底に落とされるような不安を感じた。このように今まで見向きもしなかった新興宗教に、多くの町民、特に母親達が心の拠り所を求めていった。

『ある英雄のほいと』

血を売って生計を立てる人が出るほど困窮した町に、今で言うホームレスがいつに出現する。それは「ほいと」と呼ばれ、大人達が「ついにほいとが出たばい」と噂し合うのを聞いて、この町には無縁だったその単語を聞いても私達子供には最初何の事か分らなかつた。

いつの頃からか私の家の前の川に架かる橋の向こう岸の欄干の下に、私から見て年の頃のまったく分からないその男がそこで生活するようになった。

この町では炭坑の景気で町営住宅も充実してて今まで住む家がないという人は居ず、この素性の分からないほいとと存在は町民の一万二千分の一で、町民の眼には住む家が無いという事は奇異に映る。

出稼ぎの多くの地元民以外の人達は見切りをつけてこの町を出て行ったが、このほいとは何らかの理由があつたのだから。この希望のない町に残つた。

好奇心旺盛な子供心に皆でほいとの自宅のその場所に彼が

居ない時にその生活空間を覗くと、古い蓋の無いやかんや釜が散在しかまどまで造つてあり、何か煮炊きをしたのか流木の焼け残りが焦っている。

誰かが、「キャンプみたいで良かね」と言つたが、賢い誰かが「テントがないから違う」とも言う。親達も初めて見る光景に、「あそこに近づいたらいかんばい」「人間、あげになつたらいかんばい」と蔑まれていたが、中にはこの男が町内を物乞いで廻っていると、この人の出現は社会のせいと同情し施しをする、世の中の仕組みを知っている優しい人もいる。

しかし、物乞いに来られるとピシャリと戸を閉めてしまう家の方が多く、道で行き会ふと避けて足早に通り過ぎる人達も少なくなかつた。そして事件が起きる。

それは台風一過の夏の日で、このほいとが暮らす欄干下の橋桁の場所の前を流れる川の水嵩も増し、コーヒー色の川の流れもいつもより速く、濁流となつて所々渦巻いていた。

そして、親の注意をよそに向こう見ずにこの川に架かる橋の濁桁を渡る危険な遊びをしていた子供の一人が足を滑らし、濁流の中に落ちてしまった。この町の子はかなづちの子はいない。町の外れに豊富な湧き水の出る所があり、円形のまるでローマ風呂のように設え周りを石柱で囲み真中には石灯籠を置いた、夏には親子連れで賑わう遊泳場があり、皆そこで泳ぎを覚える。また、三月の学校の春休みに、夏が待ちきれなくてため池で唇を紫色にして震えながら泳ぐ子達もいる。

この水泳環境で育つた子は皆泳ぎが達者で川に落ちたこの子も例外ではなく、通常であれば逆にラッキーと思つて暑さしのぎに悠々と泳ぎを楽しむのであるが、この日はまったく違ふ。水嵩が増し上流から押し寄せ来るこのコーヒー色の濁流の中を必死にもがき流されまいと手足をバタバタさせていたが、如何せんいつもの水泳場にもなる川ではない。その子が落ちた時の子供らの悲鳴を聞いたそのほいとは、脱兎のごとく欄干下の住居を飛び出し、まさに力尽きて流されそうになるその子を見るや否や、着のみ着のままそのまま飛び込んで行つた。これがいけなかつた。

長く伸びた髪と髭面から覗く鬼気迫る形相で濁流と戦い、その子を背中から抱きかかえ、速い流れに押し流されながらも必死の川の怒りに抗い人間業を遙かに越えた神の力を借りたと思へない泳ぎで岸近くまで来るが、水を吸つた衣服は彼の自由を奪つていた。力尽きそうになりながらも、ポイントと残る力の限りその子を岸へと押しやつた。このお陰で何とかその子は自力で岸に泳ぎ着いたが、押しやつた反動で力尽きた男は大きく後退し本流の濁流に吞まれてしまつた。一度顔を上げたがそれはもう二十mも三十mも下流でその後二度と顔を出す事はなく、子供達が泣き叫び必死に見据えるその視界から男は消えて行つた。

子供らの泣き叫ぶ声に、橋の上からの通行人の子供らへの問いかけで異常事態を知つたその人は、消防団へと走り急を告げ、捜索隊がすぐさま下流へと走つたが、捜索の甲斐空し

く、数時間後遙か下流の堰で打ち上げられているその男の、静かに眠っているように横たわっている体が発見される。

もし、彼に服を脱ぐ時間が与えられ裸であつたら、助かつていたかもしれない。夏とは言え男はポロポロの長ズボンで穿き長袖の上着まで着ていた。これでは穏やかな川でも泳ぐ事さえ難しい。この自分の命をも顧みない勇敢な男の行動を翌日の地元紙が大きく取り上げ、地方欄の社会面のトップで称えたが素性は知れなかつた。この出来事を知つた、この男の訪問に戸をピシヤリと閉めた町内の人達は、切なくなるほど心を締め付けられた。

さしものこの小さな町の人達はこの話題で持ちきりで、中には「うちに物乞いに来た時眼が違つていて、ただのほいとはなれないと思つた」とか「元は炭坑の幹部の人だつた」とかある事ない事噂して、この男をまるで手の平を返したように崇めていった。

二、三日もするとその男が暮らした場所にはもう古鍋も蓋のないやかんもなくきれいに掃き清められ線香の煙がたなびき、その代わりに沢山の白い野菊とお菓子の包みと酒の一瓶が供えられている。

荼毘に付された無縁仏のお骨は、この町の寺に手厚く葬られた。

一ヶ月が過ぎた頃、その男が暮らしたその場所に、誰の手に抱えるものなのかいつの間にか小さな御影石の石碑も建てられている。

表にはただ「英雄の碑」とだけ刻まれ、裏には小学生でも読めるように「ここにひとりのえいゆうがいました。じぶんのいのちのかわりにひとりのこどもをたすけてくれたゆうかなひとです」と全部ひらがなで書かれていて、末尾に「昭和三十四年八月十八日没」と刻まれ、町の人は長く毎年この日には、その人が生きている時は施しをしなかった人までが、供え物をしていた。

この小さな碑が建った直後に男の素性が知れた。無縁仏として寺に手厚く葬られている小さな祭壇に手を合わせに来る人は少なくない。ある時隣の町から噂を聞き訪れた弔問客は祭壇に置かれた名刺大の油紙に包まれたものを指差して、住職に尋ねた。

「あれは何ね?」「仏の遺留品の袋から出てきた写真のごとある。女の人が写つとるばい」「良かったらちよつと見せてくれんね」とその弔問客は丁寧に油紙を開き、さりげなくその写真を手に取って急に目を見開いて、喉の奥から搾り出すような声で小さく叫んだ。

「青木さんの奥さんじゃなかね!」。

この弔問客によりこの英雄の素性が知れた。

この弔問客の話によると、この英雄は隣の町で炭坑夫をしていて弔問客と同じ炭住の棟に住んでいたとの事。体の弱い床に伏せがちな奥さんを抱え近所でも評判の働き者で、奥さんをおぶって病院に通う姿を見て、炭住の奥様方は「うちの父ちゃんも青木さんの半分でもいいから奥さん思いがあった

らしいとにねー」

などと、誰もがこのおしどり夫婦を温かく見守っていた。

しかし、炭鉱の閉山と共にこの隣の町の炭住も私の町と同じように不幸のどん底に落とされる。元気な人たちはすぐにも動けるが、病床の奥さんを抱えた青木さんはそうもいかず猶予しているその内に、葉代さえ事欠くようになった。入院をさせたいがお金がない。そうこうしている内に奥さんの病状は悪化し、とうとう帰らぬ人となってしまった。

この奥さんの葬式の日青木さんは参列者への弔辞で、「女房は俺が殺した!」と、何度も繰り返し号泣したと言う。

そして初七日の終わった頃、この青木さんはワイとその町から居なくなつてしまったと、この弔問客は写真を片手に「この写真は青木さんが結婚したばかりで奥さんが元気な時の写真ですばい。奥さんはそれは若くてきれいで誰にも好かれて、皆がうらやむ仲の良い夫婦でしたばい。そうそうこの奥さんはこの町の生まれですばい、青木さんは奥さんの故郷に帰つて来てたですばい」と、問はず語りに述べ懐するこの弔問客は、ポタポタと落ちる涙を拭おうともせず何かを想い出すようにじつと写真を見続けていた。その写真の裏にはいつの時期書かれたのかは分からないが、やつと判読出来る薄れた文字で、「愛する恭子へ」と記されている。

青木泰男 享年三十二歳。妻恭子 享年二十七歳。

『変わりゆく町』

廃虚となった広大な炭鉱は、人の住まぬ家にべんべん草が生えるように木造の建物はあつと言う間に塗料が剥げ落ち風化され、ガラスの窓と言う窓はほとんど投石で子供のいたずらだけでは済まない高い窓も割られている。

この沢山の割られたガラスの形状は、見ようによつては大人達の慟哭する口の形にさえ見える。

木造の建物は、風呂の焚き木になると言つて板という板が剥ぎ取られ壊されていったが、さすがコンクリートで出来た建物は町民の使い道がなく、選炭場、石炭搬出の蒸気機関車の引き込み場などの施設はそのまま残り、子供達にとつては格好の遊び場となった。

また炭坑稼働中は絶対入れなかつた地下へと続く坑道内も、入ろうと思えば入る事は出来た。但し、入口から覗く者はあつても入る者は誰もいない。それは炭塵爆発、落盤と言う忌まわしい記憶が私達にあるのは当然だが、それ以上に入れない理由があつた。それは「宝映画」のせいである。

東宝の特撮映画の「ゴジラ」が人気になる前に、昭和三十一年に封切られた「空の大怪獣ラドン」と言う映画があつた。私達はそれまで炭坑の坑内がどうなっているのか知らなかつたが、この映画が詳しく教えてくれた。

この映画は、坑内の冒頭のシーンで、真っ黒な岩場が延々と続き天井からポタポタと水が直垂れ落ちていてどこからお化けが出てもおかしくない雰囲気で、おまけに坑道の突き当

たりの切羽でこの大怪獣ラドンの大人の何倍ほどもある大きな卵が発見されているのを、怪獣映画と言うより恐怖映画としてリアルに伝えた。皆して坑道の入口から五、六m入った所で地底へと続く暗闇を見透かしていると、後ろで誰かが「ラドンだ！」と叫べば「ウワー！」と言つて取つて返したくらい、この映画の効果は絶大だった。しかし、私が中学校に上がった頃にはこの炭鉱跡が危険だとの事で坑道の入口も塞がれ、遊び場としての機能を失つていく。だんだんとこの町に炭鉱があつたと言う証が少なくなつて行きつつある中で、炭鉱があつたという後遺症だけが残つた。それは、ある日突然炭鉱から近い民家が傾き始めたのである。町中の地下に張りめぐされた坑道が崩れ始め、町のあちこちで民家に、戸が閉まらな、玄関先に段差が出来るなどの地盤沈下が起き、大騒ぎになつた。

この異常事態に炭鉱の親会社動き出し、国と町も「鉱害復旧」の支援に動き出した。当然私の家もいつ家が傾くかもしれないという不安に親が町に保証を要求したが、炭鉱側は「川の周辺は、水漏れと落盤の危険性から掘っていない」との証言で保証を受けられず川沿いの住民は歯ぎしりをした。

父親は炭坑夫ではなかつたが、この町の多くの人が炭鉱依存の商いをしていて、私の父親もご多分に漏れず仕事が無くなり県外に出稼ぎに行かざるを得ず、母親は夜なべをして裁縫の内職をしていた。

私の中三になつた頃でも町の復興は遠く我が家の家計も貧

しく、高校に行きたかったがいつ寝るのか分からないほど遅くまで裸電球の下で背中を丸め着物を縫っている母親の姿を見ると、「高校に……」などととても言える事ではなかった。行政の温かい支援で多くの町民が飢えずに済んだが、私は病院に掛かった時、窓口に支援を示す白でない黄色い保険証を出す事が、心苦しく恥ずかしい事に思えた。心の中で力強く「よし早く就職してお金を稼ぎオフクロを楽にさせてやるぞ」と、その黄色い保険証は私を貧乏から這い上がる決心をさせてくれた。

当時中卒は金の卵と持てはやされ、大阪、東京から集団就職の案内が沢山来ていて、高校進学は学年のわずか三割で私を含む七割は当然この小さな町には働く所もなく、多くが集団就職で都会へと散らばって行つた。中には「修学旅行のごとあっていいばい」と言う仲間もいたが、小学校四年の頃から新聞配達や早朝の豆腐売りを経験していた私は、「修学旅行はすぐに帰って来れるけど、就職は正月に帰れるかどうかも分らんばい」と仲間に思わず言いそうになったが固く口を結んだ。

私は集団就職の臨時列車で遠く大阪を目指し、製パン会社に就職した。朝早くから三交代で毎日毎日パン作りに励んだ。給料が安く仕送りどころではなく、時間に追われて辞めて行く仲間も多かった。私は本好きだったので、時間があると思さばるように本を読み、本を通して世の中を知って行き「このままではだめだ」と思うようになり、高校に行きたか

ったあの頃の思いが強くなった。東京で新聞配達をしながら大学に通う先輩のツテを頼って、製パン会社を辞め東京に出て住み込みで新聞配達をし、定時制の高校に通った。その先輩が「これからは高校だけじゃだめだ、大学に行け」と言う言葉を神のご託宣を聴くように大学を目指し、何とか現役で希望する大学に行けた。親孝行も先延ばしになっているが、「あと四年待つて下さい」とオフクロへの手紙の中にしたためた事もある。

東京で中堅の商社に就職する事が出来た。それこそ日本が高度成長に突入していく中で「モーレッツ社員」とマスコミに騒がれる中の一人になり、お盆一日の休みの次が一月一日元旦が休みという年もあった。

脇目も振らずがむしろに働き故郷に帰る暇などなく、それでも「孝行したい時に親は居ず」の教えを生かし早めに母親に東京見物をさせて、もう一人になっていたオフクロを東京に呼び寄せようとしたが、「この歳で東京の生活は無理ばい」の一言に無理強いは出来ず、遅れた親孝行の分を仕送りを欠かさない事で穴埋めさせてもらった。

オフクロが亡くなり仏壇に置かれた小さくなった壺の中のオフクロと位牌に手を合わせ「親孝行は充分だったか」と自問したが、一緒に住んでやれなかった心の疼く後悔だけは大きく残った。

今やもう帰る家のなくなったふるさとはほんとに遠いものになってしまい、ずっと心の底にふるさとを捨てた後ろめた

さがついてまわったが、その事をはっきり思い知らされたのはやつの思いでもらったオフクロの葬式のための二日の休暇で帰省した時である。同級生の親友だった一人が「俊ちゃんには好きなように生きて幸せばい。炭鉱閉山の後の町から出て行きたくても出て行けん人間が大勢おったばい。皆で辛抱して耐えて力を合わせてどうにか山笠も復活し、この町も復興したばい」と町役場の幹部になっていた彼はこう言った。悪意はなくニコニコしながら優しい物言いだったが、私には「あんたは故郷を捨てた人間ばい」と聞こえた。

それから五年、私が定年を迎えた三月のある日。故郷の町役場からA4封筒の郵便物が届いた。中を開けると私の故郷の分厚い広報誌が出て来た。今年五月に行われる祇園祭の特集で、地区地区の山笠の写真がカラーで全ページに載っている。同封された便箋には、「俊ちゃん今年定年やろ、サラリーマンじゃなくなるから、五月の第二土日は帰って来れるやろ」などと、時候の挨拶と共に書かれていた。

私は一気にまだ私を迎え入れてくれる故郷の友に感謝し、自由になった我が身で女房を連れ添い、十五歳の時に辿った道とは逆の西へ西へと、「急行霧島」に代わり「のぞみ」で向かった。

小倉からはあえて、他の速い交通機関もあつたが十五歳の時にただ何も分からず不安な気持ち一杯の修学旅行ではない緊張に包まれたローカル線で、十五の春とは逆の道を辿った。車内で四十五年前の記憶が鮮やかに蘇り、今は女房と二

人で迎え入れてくれる故郷への思いを胸いっぱい詰めて、食い入るように車窓の外を眺めた。母親の葬式の時は夜着きの夜立ちで何も見えなかったが、今見る故郷の景色は何もかもが変わって、生まれた町が近づくにつれあの香春岳も麓まで削られ、町のあちこちにそびえたボタ山は見る影も無く、ナタでスパッと削られたように整地され住宅団地になってしまっている。

そして、ついに何度も夢に出て来た祇園祭の日を迎えた。昨晩は、遠足の前の日の子供のようになかなか寝つけなかった。いよいよ目の当たりに写真ではない生で見る見上げるような山笠に対面し、胸が打ち震えた。その時私の肩を後ろからポンと叩く者がいた。振り返ると広報を送ってくれた親友で、「よー帰って来たね、お帰りなさい」その一言に私はもういけなかった。今にも目から涙があふれそうになるのを親友の手前必死でこらえた。山笠を見て、「おや？」と思った。それは子供の頃見た山はとてつもなく大きく見えたが、大人の今から見ればそんなに大きくは感じないだろうと思つたのに子供の頃の記憶と同じように大きく見える。山が大きく変わったのか子供の頃はもともと大きく見えていたのか、それは分からないが。祭りの盛大さ賑やかさは、昔の比ではない。大勢の見物人に囲まれ、私には小一のあの日が完全に蘇っている。雛子が始まる前に、私の頭の中の日と同じように「チンチキチン」と、正確に記憶している調子でもう鉦を叩いている。

今まさに四十人余が「うおーりゃあ！」と力の限り声を合
わせこの大山が宙に浮いた瞬間あの日の早鉦が私の頭の中を
連打したが、今この大山は横倒しになる事なく洗練された「チ
ンチキンチンドンドン」の囃子にのせられ大山が「お
んぎゃやっさ」と動き始め、更に鉦、太鼓、掛け声の大きさを
増しあたりを席卷していくと、必死に我慢し熱くなつてい
た私の目頭から堰を切ったように涙があふれ、それはぬぐつ
てもぬぐつても後から後からあふれ頬を伝っていった。横に
いて目を合わせた親友の眼にもキラリと涙が光ったが、その
一筋の涙を見て「私は故郷を捨てた人間」と言うのが思い過
ごしのように思えた。

(了)
(中区)

「入選」

「きっかけ」

神楽時子

本を読むのは好きなのに、どうしてだろう国語の授業は非
常に退屈だ。教室の引き戸が開いて

「やあ諸君、文学の時間へようこそ」我らがI—Aの担任カ
ンちゃんこと、吉田寛一郎よしだかんいちろうが声を張り上げた。Tシャツの上
に「I—LOVE文学」の印刷が入った黒い羽織を着て、ち
よび髭を生やしている。「夏目漱石が好きな自称大正マニ
ア！」と入学式の挨拶で語ってたっけな。惜しいのは、編み
上げブーツまで履いていて、袴じゃないってこと。その昔、
一度だけ袴姿で出勤したらしい。車から降りたところで守衛
さんに捕獲されたんだってさ。そりゃそーだ、学校はコスプ
レの場じゃないんだから。

中原中也 作「サーカス」バシントンと黒板を叩き

「諸君、今日は詩の表現を共に学んでいこうではないか」カ
ンちゃんは嬉々として、朗読に入った。

「ゆああ〜ん ゆよお〜ん ゆやゆよおん」

ついに頭までおかしくなったか！ 危うく嘔き出しそうに

なった俺は、ゲツラゲラ笑いたいのを堪え、身体をブルブルと震わせる。一通り朗読を終えたカンちゃん、詩を黒板に書き写し、ピンクや黄色のチョークで線を引きながら、意味を解説し始めた。さっきのあれは、どうやらブランコの揺れる擬音語だったらしい。頭のネジが吹っ飛んでなくてなによりだ。「せっかくだから、諸君にも詩を書いてもらおうと思つてな」酷い！ 鬼！ 悪魔！ 手裏剣しゅりけんのようにとんでくる悪態をかわしながら、カンちゃんは紙を配る。

「提出してもらった中から、出来の良い作品を来週の授業で読み上げようと思う」冗談じゃねえ！ 俺は創作つてもんが一番苦手なんだよ。バカヤロー！

「別に詩に限らなくてもいい。要は表現だ。ハッハッハッ！ 思う存分悩んでくれたまえ。期待しているぞ、諸君」心の叫びが通じるはずもなく、授業終了の合図とともに

「さらば！」 奴は羽織を翻して逃げていった。

何十回目の呼び出しだろう。職員室のパイプ椅子はアタシの自由を束縛する。

「何度言つたらわかるんだ！」生活指導の田中たなかは口角泡をペツペツと吐き散らす。汚いつたらありやしない。説教する前に、アンタこそエチケツつてもんを学んだらどーよ？ 脂ぎった顔からは獣臭けものしゅうがするし、もうたままないね。消臭剤でもかけてやれば、少しはマシになるかなー、なんて考えていたら、毛むくじやらの太い指に髪を引っ掴まれた。やめてよ、痛いんだから。お望みなら P T A に訴えてやるわ。

「制服を着ると言つとるだろう！」ほつといてよ。あんなヒラヒラで頼りないもの、絶対にはくもんか。視線をナイフに変えられるなら、田中たなかの顔をスタスタに切り刻んでやりたい。「この髪の色はなんだ？」

「地毛です」すまして答えると、田中たなかは額に青筋を浮かべた。

「青い地毛があるかッこのクソガキ！」わかっているなら聞かないでよ、しつこいわね。職員室の引き戸が開いて、女子生徒数人が、こつちを見るなり、顔を寄せ合つた。

「ヤクザの娘だつて」

「この間、ヤンキーとたむろしてるの見ちゃつた。超こわい」

「キャバ嬢やつてるつて噂もあるよ。ヤバくないあの女」ヒソヒソ話に見せかけて、聞こえよがしなあの態度。よくもまあ、ペラペラとでたらめばっかり出てくるもんだ。アタシがヤクザの娘だつて言うなら、あんた達のその口、二度と開かないように鉄線でギッチギチに縫つてあげようじゃないの。長い長い拘束の末にやつと解放されたアタシは、購買で缶コーヒーをぐいぐい飲む。床に叩きつけた空き缶を、足でべっちゃんこに踏み潰したぐらいじゃたらなくて、ゴミ箱にクリーンヒットするアタシの怒り。衝撃でグラグラしているそれを無視して図書館に向かった。

放課後の図書館。それは、学校生活で言葉の暴力を浴びせられているアタシが、唯一気持ちを解くことができるお気に入りの場所。クサクサした気分ですりぬけ、さびつい

たドアノブをひねった。埃っぽい匂いと、独特の黴臭さがアタシの傷だらけになった心の鎮痛剤。

「よお」と声がして、学習机の方を見ると、同じクラスの杉原^{すぎはら}が座っていた。

「アタシね、帰国子女なの」気軽に声をかけられたから、考えるよりも先に口走っていた。

「知ってるよ。入学式の時、自己紹介で聞いた」

「アメリカの学校ではね、服も髪も、メイクも自由だったの！」

「うん。それで？」アタシの言葉を静かに受けとめて、真っ直ぐ見つめ返してくれる黒フレームの奥。

「髪の色も青が好きだから。ジャージだつて制服のスカートが嫌いだから。ただ正直なだけよ？ それだけの理由なのに、どうして……」不良だなんて言われなきゃいけないの？

と続けようとしてのみこんだ。結局は見てくれで判断されることを、入学式以来散々思い知らされてきたから。それに、アタシだつてレットテルを盾に、他人と向き合うことから逃げ

てきたんだもの。しょうがないじゃない。でも、やっぱり悔しいのツ……。葛藤しているアタシに杉原^{すぎはら}が言った。

「俺は、藤沢^{かじよあ}の青い髪好きだよ。それに、一人だけジャージつて変わってるなあつて思ってたけど、それだつて個性だろ。

いいんじゃないの、それで」それはアタシの中にストーンと入ってきて、胸のあたりにすっぽりとおさまった。何、今の。

認めてもらえたつてこと？ 入学以来、アタシがずっとずっと

と求め続けてきて、手に入れることが叶わなかったもの。なのにこの人は、たった一瞬のうちにアタシの望みをくみとつて、投げ返してくれた。それなのに、心の中の天の邪鬼が顔を出す。

「個性だなんて誰も……。皆アタシのこと不良だつて言うわ。杉原^{すぎはら}はアタシのこと、そう思ったことないの？ 一度くらいあるでしょ」わざと優しさをひっくり返すようなことをして、酷いなんて思う。醜いことしてるなつて、わかっている。

でも、ずっと否定され続けてきたんだよ。傷つけられてきたの。だから逆に、欲しかった言葉がこんなにあつさりと手に入ったことが、少し怖くもあつて。だから、どんなにおろか

でも、杉原^{すぎはら}の気持ちを試してみたくなつたんだ。でも、そういうズルさつて自分に跳ね返ってくるものなんだね。何も言

わない杉原^{すぎはら}の沈黙に

「ほらね、答えられないじゃない。そう思ったことあるんだよ？」動揺して責めてしまう。なんてみつともないんだろ

う。

「俺は変わつてゐるつて、思つてただけ。でも人と違うからつて不良には結びつかないだろ」気持ちがちやぐちやに絡ま

つてるアタシと違って、杉原^{すぎはら}は羨ましいくらい真っ直ぐだ。

「そもそもな、藤沢^{かじよあ}とこんなふうじゃべつたの、俺初めてだし。藤沢^{かじよあ}のこと、ほとんど知らねえんだよ。なのにどうしたら不良つて決めつけられるわけ？ そんなの知つたかぶり

だろ。俺、そんなに器用じゃねえし」黒フレームの奥で少し

もブレない瞳。そこから目を逸らしたアタシ。これじゃ、完璧な八つ当たりだ。

「それに俺は、大切な個性を偏見で塗りつぶすほど、バカじゃねえからな」そうしてカラリと笑う杉原。白い歯がまぶしくて、つられてしまう。「ごめんね。それと、ありがとう」素直に口にはできないから、胸の中で静かに呟いた。

薄暗い図書室の中でも、受付は一番日当たりがいい。今は司書の先生もいないし。アタシは受付の椅子に座ると、鞆から四隅に四葉が描かれた、小さなメモ帳とボールペンをとります。今日はなんて書こうかな。国語の宿題をやりきたという杉原は、飽きたのかなにやら本を読んでいる。そうだし「今日のアタシの心 曇りのち晴れ」友達のいないアタシのささやかな暇つぶし。それを、そつと本の間に挟みこんで、

また棚に戻す。

「藤沢はさー、放課後いつもここにくるの？」唐突な杉原の問いに、心臓が大きくジャンプした。

「う、うん。まあね」

「じゃあさ、これ知ってる？」手招きしながら、杉原はブレザーの内ポケットに手をつまむ。一体なんだろう？ 見慣れた生徒手帳の中から出てきた五枚の紙切れ。覗き込んでアタシは息をのんだ。

「時々、本の中に挟まってさ。俺集めてるんだよね。今日一枚見つけたから、やるよ」

ねえ、アタシその悪戯知ってるよ。とても寂しがりやで、

なのに素直になれない不器用な誰かの気持ち。ねえ、教えてあげようか……。

「藤沢？」アタシを呼んで、フツと笑う杉原。そうね、やっぱり秘密。知りたければ、気づいて。

さあ、ついにこの日が来たぞ。国語の教科書に挟んでいた宿題を引つ張り出して、俺は紙の右下に「匿名希望」と書き足した。さあ来い大正マニア！ いつでもきやがれ。こっちは準備万端だぜ！ 俺の叫びに呼応して、五時限目のチャイムが鳴り、きっかりその十秒後に奴は姿を現した。

「諸君！ 課題はやつてきたかね？」教壇に立つなり、カンちゃんはクルッとターンを決めて、ビシッと宙を指差す。いらねえよ、そんなポーズ！

「へい！ かもおくん。ほおむうわあく。えびばでい！」（さあ諸君。課題を提出してくれたまええ！）その格好で言うなッ気持ちわりい！ 丸めた紙を投げつけてやりたい。教砂の沈黙が落ちて後、教室中に失笑の波紋が広がった。

ところで、「匿名」と書いたのにはわけがある。俺は至極真つ当に、宿題をやり遂げようとしたんだ。だから、その日のうちに終わらせるべく、放課後図書館に直行した。偉いだろ？ 司書の先生も不在で、利用者もゼロだった。静かな室内に俺一人。超恵まれた環境にガッツポーズして、早速シャープペンを構えた。だのに、五分経っても十五分経っても、書けねえ。一行も、いや一文字も浮かんでこなくて焦った。それでその後……俺は斜め前に座る藤沢の横顔を見る。いやい

や、なんでもない。で、その状況に若干苛々しながらも、しばらく学習テーブルにかじりついて、書きたいけど書けないというジレンマと闘い続けたんだ。どうだこの忍耐強さ！

それで詩は出来たのかって？ そんなわけねえだろ！ 結局真っ白いまま。俺はついに宿題を放棄して、適当に選んだ本を読み始めた。そしたら見つけちゃったんだよ、小さなメモに書かれたメッセージを。テーブルにへばりついておいて、宿題の紙が白紙のままっていうのも情けねえだろ。だから、悪いと思いつつメモの内容を、そっくりそのまま写しちまった。つまり、盗作。やましい気持ちから、堂々と名前が書けるはずもなく、よって「匿名」ってなわけだ。

「えー、それでは発表しよう。諸君、心の準備はいいかね？」
ちよび髭を撫でつけながら、カンちゃんはなめるように俺達の顔を見る。ちよつと待て待て、ちよつと待て！ まずい緊張してきた。後ろめたい気持ち俺の心で暴れる。どうしよう、どうしよう。読まれたらどうしよう？ なんか嫌な予感。

「匿名希望 作」ガン最悪。

「しましまロード メロンはOKいちごはNO 肩車の上子供が言う いちごがメロンになったよOK 肩車の君が笑った」斜めに座る藤沢の青い髪が揺れて、微かに俺の方を見つめたような気がした。

「誰の作品かわからないから、皆に問う。この詩の解釈がわかる者、いたら挙手したまえ」まさかそこまで聞かれるとは

想定外で、俺は内心ドキドキしていた。「匿名」なんだから、名指しされてるわけじゃないのに、やましさと緊張で身体が縮こまる。と、その時

「信号機だと思えます」カタンと椅子をひいて、凜とした声が室内に響いた。藤沢？ 視界で艶やかな青が踊る。トクンと一際高い音をたてる鼓動。

「しましまロードっていうのは、横断歩道のことじゃないですか？」好奇の視線にさらされる中、藤沢は「多分」と付け足した。もしかして……？

「いちごは信号の赤で、メロンは青。多分」言い切ってから、尾ひれのようにくつつく二文字。もしもそうなら、なんて偶然だろう。

「だから、いちごがメロンに変身してOKというのは、信号が青になったから渡ってもいいよという意味じゃないでしょうか」やっぱり一拍おいてくつつく「多分」

なあ、あの図書館の悪戯は？ 俺が書き写したメッセージの作者は……居心地悪そうに表情を固くして、席についた君。

「ふむ。見事な解釈だった。この『匿名希望』というのは？」

「私じゃありません。今のは私なりの推測で、この作品は私のもんではありません」迷わずきっぱりと言った君。でも本当は藤沢、君なんだろう。多分。

チャイムが鳴って、教室が小波のようにざわつきだした。

『時々、本の中に挟まってさ。俺集めてるんだよね。今日も一枚見つけたから、やるよ』アタシは四隅に四葉がある、

小さなメモの裏に「ありがとう」と書いて、斜め後ろの杉原すぎはらの机に置いた。だけど、意味なんてわかるわけないわよね。ほら、眉をよせて首を傾げてる。そうして何か問いたげに、アタシの表情を窺つてるの。教えてあげてもいいけど、どこか二人きりになれるとこ行かない？ アタシはニツと口端を吊り上げて、教室をとびだした。続けてガタンツと椅子の悲鳴。ほらきた！ さあ、どこに行こうか。超高速で廊下を駆け抜けながら考える。掲示板のプリントが風ではためいた。お気に入りの図書館にしようか。でも、今の気持ちもっと開放的な場所を求めてる。そうだ！ アタシは急カーブをきつて、突き当たりの階段を上り始めた。ダラダラとおしゃべりしている女子が両脇によけて、どんどん上を目指すの。三階にさしかかったあたりで、息が切れはじめた。手摺りを掴みながらちよつと後ろを振り返れば、ワックスでツンツンに逆立てた頭。少しズレた黒フレームの奥から、アタシを捕らえようとする強い瞳。でもまだ捕まってやらないわ！ 肩で大きく息をしながら、前かがみになって、重たくなつた足を引っ張り上げた。あともうちよつと。熱を帯びた指先に、鉄製のドアノブがひんやり。力いっぱい扉を開けると、上空に広がるパステルブルー。しみるような世界に目を瞬いでいたら「おい、藤沢ふじさわツ」と肩に触れた杉原すぎはらの手。その手から逃れるように、身体をひねったアタシの足下よろめいて。いっそのまま……重力に身を任せて、屋上のコンクリートをゴロゴロと転がった。あまりの爽快感に、アタシはコーラの泡が弾

けるように笑う。

フェンスから校庭を眺めると、ポプラの葉っぱがカラフルな衣替えを始めていて。隣でメモのしわを伸ばしていた杉原すぎはらが

「この、『ありがとう』ってどういう意味？」と聞いた。何から話せばいいのか？ 毛先を指に巻きつけながら、言葉を探す。

「アタシね、いつも一人だから。友達と騒いでる皆が羨ましくてしょうがないの。それで、そういうの見てると無性に腹立たしくなつて、悲しくなつて。たった一人、地球に取り残されたような感覚に陥るの。そんな時、ワンワン泣きたくなる。人目を憚らずに、赤ちゃんみたいに泣いたらなあつて、本気で悔しくなるの」宙を睨んで、唇をかんだ。

「でもね、泣いたら悪口を言う奴らに屈服するようで、それも嫌なんだよね。ワーツと爆発したいのに、したくない」矛盾だらけの言い訳を、嘲るように笑った。

「我慢すぎなんだよ。程々にしねえと、心が折れちまうぞ」軽く流してくれればいいのに、どうしてこの人は、こんなにかちゃんと向き合ってくれるんだらう。

「大丈夫。だってアタシには、図書館っていう逃げ場所があるから。だから……」おどけて「平気」と言おうとしたのに、喉の奥で言葉がキュウツと締めつけられた。

「本当に？」杉原すぎはらはアタシの心の裏を透かし見るような、真剣な目をしていて。代わりに涙が少しだけ滲む。

「大丈夫じゃないよ。本当は辛くて苦しいの。どこまでも、どこまでも暗くて、浮かんでこれないくらい気持ちが悪んじやうと、もうどうしようもなくて……本当はこんな嫌ツ、こんな自分が嫌！」

杉原は黙ったまま、アタシの背中を叩いてくれた。そのリズムが大丈夫って言ってるみたいで、きつとどんな慰めの言葉よりも優しい。重苦しいため息が、細かくふるえて、校庭に積もっていく。吐き出した分だけ、空気を吸い込んだら、糸みたいに細い金木犀の香りがした。見上げたブルーのキャンパスでは白い小魚の群れが泳いでいる。胸のざわめきがちよつとずつ和らいでいくのを感じた。

アタシは杉原の手からメモをとりあげて、愛しむように撫でる。

「これはね、アタシの暗い孤独から生まれた分身」
「嘘の裏に浮かぶ、生徒手帳の中。」

「杉原はアタシが落とした分身達を拾い集めて、大切に持っていてくれたでしょ」

「いや、俺は別に。興味があっただけで、そんな大袈裟にとられても」
照れたように首筋を掻いている杉原が、なんだか急にいとおしくなってきた。

「理由なんてどうでもいい。杉原の手帳に、アタシの欠片が挟まっていた。それを見た時、胸がほんわか温かくなって、すぐくうれしかったの」
だからね、メモの裏に書いた『ありがとう』の気持ち受けとってよ。アタシは杉原の掌に、押しつ

けるように握らせた。

「これからも、ずっと大切に持っていて。そうしてくれたら、アタシそれだけできつと、幸せだから」

風がポプラの葉を揺らして、アタシの髪を梳いてゆく。六時限目の鐘が鳴り、音の尻尾を掴んだ風が、遠くに走っていた。このまま教室に戻ったら、この距離は少し遠くなるね。ただのクラスメート。それ以上でもないし、以下でもない。

「普通」
今この距離は嘘でもいい、「友達」
「みたいだったって信じてもいいかな？」
開けっ放しになったままの扉。そのひんやりとしたノブを掴んだ時、「藤沢」
低くて、少し急いだような杉原の声が背中にぶつかって、心臓がドキンと揺れる。

「俺は欲張りだからさ、『気持ち』
「だけじゃ満足できねえんだよな」
振り向いたアタシに杉原はメモをヒラヒラとさせて続けた。

「気持ちってえのは、実体の中にあるもんだろ。俺は全部丸ごと手に入れたんだよ。なのに、これだけ押しつけて、藤沢が離れていっちゃったら意味ねえじゃん」
だから戻ってこいよ。と言わんばかりに手招きする。

改めて杉原と向かい合ったアタシの胸、鼓動がうるさいほど鳴いている。ねえ、教えて。ただのクラスメートから、距離を縮めたい時、どうすればいいの？
何て言えばいいの？
慣れないシチュエーションに、戸惑っているアタシの手をとって「捕獲成功」と笑う杉原。そうして、なんでもないことのように

うにサラリと口にした。

「友達初記念ってことで、一緒に授業サボろうぜ」寝転がった杉原すぎはらに引つ張られて、一緒に倒れこむ。柔らかい青の中で泳ぐ小魚の群れは、どんどん遠くに離れていつてしまっただれど、もう大丈夫。居心地のいい場所を見つけることができたから。アタシは温もりを確かめる子供みたいに、杉原すぎはらの手を何度も何度も握り返した。

(中区)

「入選」

涙ボロン

鈴木文孝

洋蔵ひょうざいはふと農機具小屋から眩しい光の中に出る時、その小屋の庇ひさしの陰に隠れるようにして造られた泥と藁の燕の巣を見上げて、その皺しわが増えた毗まをを少し暗くした。もう既に果樹園は初夏の草いきれの中にあつたのに、一昨年初めてこの農家を訪れた若い燕は未だに旅から戻っていないのだ。

彼が例年になくその燕の番つがいの帰郷を待ち受けるには理由があつた。燕が巣を造る家は運が向くと誰かに言われていたので、たとえ前回は試みが失敗したとはいえ、ああオレの家は良い家に違いないと少し喜ばしい気持ちに成つていた。

昨年、あの若いと思われる燕の番つがいが長い旅路の果てに帰つてきた。再びその場所で巢作りねづくりに挑戦し始めた事を知つて、その時は大層喜んだものである。

そして今年。洋蔵ひょうざいの期待をまるで叶えようとするかのよう
に彼らは帰つてきた。

若い燕はママゴト遊びの幼児茶碗のような少し小振りの未

熟な形をした巣を完成させた。それから数日、親が巣に籠もるようになり、やがて卵を抱き始めた。

ある日、雛が鳴いた。洋蔵は大層嬉しがって、雛が何匹孵ったであろうかと脚立で覗き見たいような期待感にワクワクして成長を待つ。それは毎日のささやかな楽しみとなった。けれどある朝、軒下のコンクリのたたきの上に小さな生き物の姿があって、それはもう既に動いてはいなかったのだ。

巢から落ちていたのは二羽でそれが全てだった。巢が浅すぎたせいなのだろうか？ 洋蔵は親燕の若さを思った。

二日ほど、親燕は巢の廻りでフォークダンスの相手が見つからない小学生のようにキョロキョロした惑乱の中にいたが、その翌日からぱったりとその姿を見せなくなった。

洋蔵は時々小屋に立ち寄るたびに、かつて翼を休めていた電線に親鳥の姿を捜してはボンヤリと物思いに耽った。あんな野生の生き物からして若い者は子育てを失敗する事もあるのだから、人間の場合は推して知るべしか。育児に臆病になるのももつともだとも思いながらも、若さは罪造りな物だと彼は思った。

「近頃の若い燕は巣も満足に作れねえ」と愚痴を言った。それは彼の気持ちの何処かで、僅か一年ほどの結婚生活の後に赤ん坊とその母を残してこの街を去っていった、若い男の事が脳裏によぎって、少し腹立ち紛れについ口から漏れた言葉だった。

慎一は車窓に広がる三河湾の群青の海原を見つめていた。それはいつも病床で想い描いていた海よりも遙かに広く遠くまで広がって見えた。随分と良いお天気で、遠く伊良湖岬に続く対岸の小高い稜線に風力発電の風車がゆったりと力強く廻っている。あの辺りは昔理紗とドライブをした蔵王山かなと見当を付けた辺りに、白い三角波が光って見えた。

免許取り立ての彼に車を貸した理恵が、山の中腹の長い下り坂で「こんな時はエンジンブレーキを利用するんだ」と言っていて、アヒルを踏みつけたようなタイヤの悲鳴にハラハラしている、彼女の不安な顔を思い出した。

慎一は片手をいつものまにか腹部に当てて、無意識に胃を庇うようにしながら波の煌めきを見ていた。二度と再びこの電車に乗るまいと決心していた自分がこれ程僅かな時間の隔たりの後、その決意を翻すような事態が起ころうとは思ってもいなかった。そして、今、彼の見ている景色はかつて見えた風景とはこうまでも印象が違うものかと思える程陰鬱で、煌びやかで、哀しく美しかった。

右手の掌で腹部を庇うようにさすりながら、朝食が無事にこなれているか不安になる。彼の胃は既にその容積を半分にしていた。半分の胃で充分な消化を行うためには、ゆっくと食事を取らなければならない。そう思うと、出掛けの慌ただしい朝食を後悔する。

会社の健康診断で要再検査と言われていたが、多忙を理由に一日延ばしにしていた事が取り返しの付かない結果を招い

たと、慎一は自分に対して深い謝罪の気持ちを感じていた。

いよいよ不調を感じて人間ドックを受けた。半年遅れての事だった。体操選手のように中空ドックを受ける。半年遅れてのルームの造影検査を済ませればそれで終わるはずであった。ところが検査結果が送られてくると書面には即精密検査の朱書きがされていた。

胃カメラを飲んだその日の午後、そのまま総合病院の内科に入院となった。医師は胃潰瘍だと言った。薬で完治は難しい、手術を至急行わなければ胃を全部摘出する事に成りかねないと脅した。慎一は手術を受けた。それが三ヶ月前の事だった。

手術直後は胃がごとごとく反乱を起こして、ヨーグルトのような流動食しか受け付けようとしな。薬の副作用も加わって吐き気が屢々彼を襲って腹痛と共に彼を苦しめた。

ようやく集中治療室を出てほっと安堵の大部屋に移った頃、あれ程付きつきりに看病してくれていた新しい女が来なくなつた。見舞いに来た郷里の両親と病室で会って両者にどんな会話があつたのかは想像するばかりであつたが、女は長い闘病生活に付き合う熱意を、早急に冷え込ませていたのだらう。それともたびたび見舞いに来る両親に会う事を避けていたのか？ ともなく、彼女は携帯に掛けてもばつたりと出なくなつた。アパートの部屋に着替えを取りに母親が行った時、彼女の私生活を覗かれたのが嫌だったのかもしれない。居酒屋で知り合つた彼女は、まだ年の若いわりには少し生

活に疲れた倦怠感とその仕草に潜ませていた。

彼女がいなくなつての味気ない生活から、大部屋でその空を埋めるように馴染みとなつたのが七十過ぎの老人である。やがてその人は胃癌で旅立つたけれど、良寛さんの好きな人であつた。枕元に和紙の巻物を備えていて、それは本人が写し書きをした良寛さんの歌が書かれて

欲なければ 一切足り

求むるあれば 万事に窮す

「私はいつまでも欲が尽きなくてね。自分は碌な働きもしないで、親の残した僅かな財産を兄弟と奪ひ合つてね、自分の家族の為だからなぞとさも理に適つているように欲を張る。自分たちはすでに老人になつていたがそれでも欲すれば窮すでね。あなたは大学を出ているから知つていていでしょうが、私は長いこと『きゅうす』は休むの休の字だと思つていた。だから何もかも八方塞がりて両手を挙げてこう、バンザイつてね。休むわけ。アハハ」

「還暦を過ぎて良寛さんに初めて教えられた」

「こんな言葉もあるんだ」と老人はベット脇の引き出しから別の巻物を取り出して慎一に見せた。

誰か問わん 迷悟の跡

何ぞ知らん 名利の塵

わしのように、名譽にも金にも縁のなかつた落ちこぼれも、今こうして白いシートの上で伸び伸びと両方の足を投げ出して心地良さは、まさに良寛さんのこの歌の最後の

夜雨草庵の裡
雙脚等閑に伸ばす

「この気持ち良さと同じなのは嬉しいねえ」と言つて笑つていた。

「スルメのように噛めば噛むほど良寛さんは味わい深い」と微笑んだ。

老人の症状や呑む薬を見て、慎一はまたまた不安になつた。医師は「胃潰瘍の手術が成功した」と言つていた。けれど、自分はその老人と同じ胃癌ではないのか？ そんな不安が絶えずその頃付いて廻つた。老人の癌はその進行も遅い感じがあつた。けれど、慎一の若さであれば癌も若い。彼はその不安を医者に話してみた。しかし、主治医は首を横に振つて薬師如来に化けたそぶりで彼を安心させようとしてくれた。けれども体調はなかなか以前の状態に戻らず、体力は日毎に衰えていくような気がしている。そんな慎一は長い入院生活の嫌悪さから映画『パピヨン』の虜囚のようにむやみに屋外へ脱出したくなった。鎖で繋がれているようなこの境遇から抜け出したいと熱望すると共になぜか娘に会いたい 생각이強くなった。

逢うことを禁じられている娘である。慎一は自分が親である事も告げず、この病院の中で朽ち果てていく事が大層無念に思われ出した。そこで、ある晴れた朝、是非一度遠くからでも我が子を見てみたいと、沸き上がってくるものにつかれて駅に向かったのだ。

列車はいつのまにか海を離れ、湖西連峰を左手になぞりながら走つていた。慎一は胃の不快感を紛らわすようにバッグの中から一冊の五線譜のノートを取り出すと、作曲したばかりの楽譜に思い浮かんだ歌詞を書き込んでみた。

涙、ボロンとにじんできり
残した子供に会いたくて汽車に乗る。

自分の歌を聞かせたくてギターケースを担いでゆく姿がぼんやりと浮かんだ。

幼い君に会いたくて
心、ボロンと揺れている

気が付くと電車の窓から湖が見えてきた。思わずメロディが浮かんで口ずさむ。

旅は遙か空の果て 故郷への帰り道
もうすぐ君を抱き上げる

旅は遙か山の果て 故郷までの戻り道
君の笑顔が待っている

新居の鉄橋に揺られて、ボールペンが指先を滑り、足元に転がった。

病棟の白亜の建物を過ぎると櫛のプロムナードがあり、その青い芝生の上を時々車椅子の患者が散策している。中庭の奥は従業員用の宿舎でその裏手が洋蔵の果樹園となる。

中庭はちょうど坂の上のテラスになっていて、晴れた日には遠州灘は勿論の事、富士の山まで青い山稜の彼方に見渡せ

た。テラスの下には何時^{いつ}からか、住民達の足によつて踏み固められた、やつと人一人が擦れ違えるだけの下草に縁取られた小道が、日光のいろは坂のようにジグザグと下つていき、その先はやがて麓の住宅の裏庭や脇をすり抜けて、小さな船着場に通じている事を発見するのは、見る者に新鮮な驚きを与えた。

理紗はその日の午後、パートから帰宅すると、夏の熱気に蒸された部屋の窓を開け放ち、中庭に干して置いた洗濯物を手早く寄せていた。遠くで子供達の歓声がするので、自分の娘を捜そうとテラスの方へ視線を投げた。見ると子供の一人が今丁度テラスから坂の下に向けてジャンプする所だった。

「えっ」と彼女は思わず驚きの小さな叫びを上げて、手にした日向の臭い一杯の代物を和室の畳の上に放り出すと部屋から飛び出していった。彼女はあのテラスの堤から下の小道までの高さを思い出して身震いしたのである。大人なら飛び降りても、下は柔らかい下草の生えた土であるから、よもや骨折はしない高さであろうが、今、飛んだ子供が誰であろうと、着地した勢いでピンポン玉のように傾斜に転がったり、足を挫いたりするに違いない。そう彼女は判断して石垣添いの階段を二段置きに駆け登って、中庭を突っ切つていった。

テラスの手前で息が上がってゼイゼイした。眼の前に悦子が怖々と下を覗いていた。

「悦ちゃん、何しているの?」と言って、堤の下を覗いて、

その瞬間、白く大きい物が眼の中に飛び込んできた。その上に明奈が座っていた。「あなた達大丈夫?」と思わず口に出してはみたものの、怪我をしている様子はなかった。見ればそれは古びた大きなマットレスであった。

子供達はその午後、従業員宿舍の駐輪場脇に出されていた廃棄ベッドのマットレスを引っ張り出して、テラスの堤の下に広げていたのだ。慌てふためいて自宅を飛び出してきた自分の狼狽ぶりが誰も見ていないのに恥ずかしくなった彼女は、子供達に「気を付けてね」と一言念を押して帰つていった。

「きゃあ」と叫んでユリがマットレスの上に飛び込んできた。見上げると悦子が堤の上で逡巡しているので、明奈は「悦ちゃんは辞めな」と言う。けれど彼女は頭を二度ほど振つて勇気をその小さな身体に充電させている様子である。「悦子も行く」明奈はマットレスの脇に立つて彼女の身体が外に飛び出さないように身構えた。青空の中に飛び出した悦子の小さな身体は一瞬間に浮いて、その大きく広げられた両手と両足が大の字に広がった。彼女の軽い肉体はマットレスに大きな窪みを付けることもなく落下してトランポリンのように跳ね上がったが飛び出すほどの事もない。彼女は手を引いてケラケラ笑う悦ちゃんを救いだし、堤に上がると少し喉の乾きを覚えた。

「ユリ、ちょっとお水呑んでくるね」そう声を掛けて、明奈は掛けだしていった。

タクシーを病院前で降りた。今の慎一にバスを待つ余裕はなかった。彼の姿を見たら理紗は醜く自分を叱責するだろう。吐き捨てるように罵る彼女の鬼子母神のような歪んだ顔が眼に浮かぶ。

今の時間ならば仕事に出ているだろう。彼女と対面する気遣いはない。そう思えば少しは慎一の後ろめたさのみ、そんなじゅうの薄皮一枚救われるような気がした。病を背負ってから臆病なくらい他者に対して謙虚になった。と言うより医師や看護師は勿論、汚れ物を片付けてくれるヘルパーさんを含めた人間以外に彼を救い出そうと戦ってくれる存在はいない。彼はあまりにも怯え、その魂は縮こまっている。

「なぜ？ 人間は死ぬのかなあ？ いやだなあ」と彼は呟いた。それは死ぬ運命を持った人間に産まれて来たからだ。それを前もって知っていたら産まれて来なかつたかも知れないと思った。騙されたんだ、生きていけば良い事があると騙されたんだ、親に。でもその親もその両親に騙されてこの世に招かれたんだ。結局、この世界に死なない生き物はいないんだ。なんて事だろう。この世界のシステムを作ったのは何者なんだろう。彼の脳裏になぜか人生の最後の瞬間にその何者かに会えるような映像が生まれた。創造主が自分の目の前に現れて、全ての真理を万物の起源と存在の理由を語ってくれそうな気もする。その時は逆ギレして「よくも騙したな」と恫喝してやろうか。そんなふうには彼は思った。

でも、きっと死の瞬間が来ても、やっぱり何も劇的な感動的対面は起こらず、待ちわびていた約束をすっぱかされたように、肩透かしをくらうばかりなのだろうな。オレなんかちっぽけすぎて、こんな極小な生命など相手にしてくれる神様はいないだろう、とそんな風に慎一は溜息をついた。

病院前のバス停から懐かしい住まいまで、かつて通い慣れていた道を行くと、木立が切れて左手に大きく眺望が開かれ、午後の光が半分山の陰になった湖面を白く光らせていた。その展望台とも言える丘の先で今子供達が騒いでいる。そこはかつて夕暮れに理紗と湯桶を抱えて出向いた小さな銭湯といった感じの従業員専用浴場への帰り道でもあり、二人で芝生に座って濡れた髪をタオルで拭きながら、湯上がりの冷たい缶ビールで喉を潤した、夕暮れの街が見渡せるテラスだった。

子供達の中から「悦ちゃん」、「悦ちゃん」と呼ぶ声を聞いた時、慎一は思わずその歩みを止めた。見ると堤の傾斜から坂の下に向かって小学生が叫んでいる。「早く場所を空けて」と彼女は言う、スルスルと芝生の上を滑り降りてスツとその身体を堤の彼方に消していった。それとほぼ同時にまだ幼い女の子が堤の上にひよいと頭を出して、右手に回り込みながら坂の上に現れ、手にしたダンボールをお尻にあてがうと、小猿のように「キャッキヤツ」と叫びながら滑っていく。慎一はいつのまにか引きずられるようにして子供達の脇に

寄ると年長と見られる女の子の傍らで、「あの悦ちゃんといふ子は洋蔵さん家の子かい？」と聞いてみた。彼女は西日をまぶしそうに見上げて慎一を一瞥すると、「そうだわ」とぶつきらばうに返事をした。

慎一は胸が潰されるような痛みを感じた。「滑るのは楽しい？」慎一は悦子に声を掛けて見る。少し言葉尻が震えているのが自分でも解った。

「うん」と言つてダンボールをお尻に敷いた。両足でずりずりとお尻を引っぱっていく。

「押してあげよう」とダンボールの端を両手で持つて前に滑らせた。悦子は思つた以上に軽くスリりと芝生の上を滑走して坂を流れ、下に置かれたマットレスに弾んだ。

慎一は未熟児センターのガラスケースの中でこれでもかという勢いで泣き叫んでいた彼女の姿を思い出した。あの時見かけの百倍も元気な子だと思つた。これなら大丈夫と理由もなく安心したその子が今、こんなに伸び伸びと飛び跳ねている。親はなくても子は育つ、そう思つて悪びれもせず我が儘を押し通して、こんな罰当たりの自分が当然の報いを受けた。そうしおらしく自分の不甲斐なさを突き詰めてみても胃を半分犠牲にしたのだからチャラじゃあないかと毒づいてみる元気すら残つていなかった。

「おじちゃん。見てみて、こんな事も出来るんだよ」

気が付くと悦子が彼のジャケットを引っぱつて見上げていた。「えっ」と返事をする前に彼女は堤からひよいとジャン

プして下のマットレスに飛び降りていた。一瞬ひやりとして「危ないから飛び降りては駄目だよ」と言う。

「大丈夫。恐くないもん。こうすると空を飛んでいるような気がするよ。楽しいからおじさんもやってみたら」

「おじさんがかい？」

そう答えて一歩前に乗り出すと、船着場が眼下に広がつていた。たきや漁の船だろうか、白い船体の小型船が、今白い航跡を残して群青の海に一本の線を描きながら、定かではない空との境界の果てに乗り出していく姿が見えた。ぐじぐじと身体を蝕む悪魔に捕らわれて苦痛に耐え続ける未来なら、いつそのままこの堤から空に飛び出して、悦子のそばで時計を止めてしまえば、それも本望かもしれない。坂の下に横たわる自分の姿を理紗が見つける場面をふと想像して、思わず自虐的な笑いが唇に浮かぶのが楽しかった。

「よし、おじさんも飛ぶぞ。下に誰もいないね」

子供達の居場所を確認すると慎一は数歩後戻りをして、短い助走を付けて空に飛びだした。腕を大きく広げて、掌で風を掴むような仕草になった。まるで自分が蠅の翼を背につけたイカロスのように思えた。空に浮かぶ白い雲が光った。やがて海が見えてごてごてした町並みが広がった。

自宅の冷蔵庫に冷えていたスポーツドリンクで喉を潤し、ほっと一息を付いて駆け戻ってきた明奈は子供達の中に見慣れない大人が一人混じっていることに警戒心を呼び起こす。

彼女はすぐにこの事を理紗に知らせるべきだと考えて駆け出した。

その時、理紗は夏掛けと敷布団を取り込んでいる最中だった。子供の呼ぶ声に驚いて窓の下を覗くと明奈が慌てた表情で見上げている。

「どうしたの？」と問い掛けると「悦ちゃんがね、知らないおじさんと遊んでいるよ」と言う。理紗は不安になって縁側のサッシを開けたままの和室に布団を放り投げると駆け出して行った。

先を走る明奈の後から病院横の芝生を駆けていくと、なるほど男が一人子供達の中に混じっていた。悦子も楽しそうに遊んでいるのでほとと安堵して、歩調を緩める。が、次の瞬間、理紗の表情が能面のように固く強ばった。男が誰であるか認識したのだ。理紗は本能的に銀杏の陰に身を隠した。慎一だった。慎一が悦子と楽しそうに遊んでいる。その姿は彼女には許し難いものであった。胃の底からマグマのように重い物が湧き上がり、溶岩に触れた火傷のような痛みに変わっていく。私に断わりもなく、約束を違えて悦子の前に現れた。それは理紗の自尊心を逆撫でする。彼女はポケットから携帯を取り出すと待ち受け画面を開いた。

十分もすると一台のパトカーが病院のエントランスを半周してやって来た。中から制服警官が二人ドアを開けて出てくると、迎りを見回して、子供達の一団を認め真っ直ぐ近づい

てくる。慎一はその時子供達から少し離れた芝生の上に座って胃の痛みを顔を歪めていた。マットからの弾みでしたたかに土手で打ち付けた右膝もズキズキと痛んでいる。

警官は慎一の後から困い込むようにして覗き込む。不意打ちを食らって慎一は怯えた。二人は冷たい声で職務質問を始めた。子供達がいつの間にか遠巻きに円陣を作り、彼らをわくわくと興奮しながら見つめている。免許証の提示を求められて、シオルダーバックの中からパスケースを取り出し、警官に差し出した。

「今日はどちらから来られました？」

「名古屋です」と慎一は答えた。

警官は猜疑心に捕らわれている様子であった。子供達の真ん中に悦子がいる。慎一は恥ずかしさを感じた。と同時に慎一は「不審者ではない。彼女の父親なんです」と叫びたかった。見上げたその視線の先に一人の女が現れて、悦子とその女の膝に抱きついた。理紗だった。彼女は冷たい目をして慎一を一瞥すると逃げるように悦子を連れてゆく。

慎一はかつての妻を見て、全てを了解した。

夕方洋蔵は警察から一本の電話を受け取った。署で確保している不審者が悦子の父親であると釈明しているのので、身元確認をしてくれないかという問い合わせだった。洋蔵はあまりに突然の事ではあったが、そのまま放置するわけにもいかず、やむなく引き取りに出掛けることにした。

バス停前の正面に白い湯気を上げた温泉饅頭を商う湯治客目当ての土産物屋が在り、その脇を細い散歩道が南に通じている。両脇には食堂や飲み屋が軒を連ねて、大須観音の門前通りほどの賑わいはないが、湖畔の温泉街はこぢんまりと落ち着いている。その一角に赤い暖簾の中華食堂があり勤め帰りの常連で賑わっている。洋蔵は馴染みのこの店に慎一を招き入れた。

「親父、お湯割とレバニラ炒めをくれ」と言う。「君はビールが良いか？」と聞かれると、慎一はもちろん、「酒は禁じられている」と答えた。顔が土色に見えた。

「君はどこか具合が悪いのではないか？」と焼酎を喉に通しながら洋蔵はぼつりと言った。洋蔵は初対面の時から慎一に對してはそれ程抵抗感がなかった。息子に恵まれなかった洋蔵だった。からつぽの湯たんぽに湯が満たされたような温かさを感じた。決して容姿に恵まれているとは思えない理紗がようやく家に連れてきた青年は気弱そうで、どこか頼りなげではあったが素直な氣質が入った。結婚して同居したのはほんの僅かな期間ではあったが、娘とは違つて洋蔵は新しい話し相手に好感を持っていた。娘と彼の間に何があつたのかそれは知らないが、僅かな時を隔てて見違えるほど窶くたれてしまつてゐる姿は余りに痛々しかった。

「おやじ、ウーロン茶でも出してくれ」と言った。

「ところで、悦子に会いに来た事は理紗には言っていないのかい。アイツと顔を会わすのがいやならオレに一言連絡をく

れば他に方法もあつたらうに」

「すみません。あそこでまさか悦子に会うとは思つて見なかつたのです。明日からまた入院をするので、その前に一度自分の娘を見てみたいとは思いましたが、理紗に自分の事を知られるのは避けたかつたのです」

「一体どこが悪いのかね？」

「胃を半分切除しました」

「それは可哀想な事をしたね」洋蔵は予想外の事に表情を曇らせた。

「じゃあ、いつもは何を食べているんだ」

「ヨーグルトなら」

「おやじ、ヨーグルトはないか？」

おやじは首を横に振つたが、脇にいたカミさんに「ひとつ走りスパーで買ってこい」と言った。カミさんはカウンターを廻るとスツールの後ろを抜けて暖簾を潜り突っかけの音を高く響かせ駆けていった。洋蔵は差し出されたレバニラ炒めを口に運びながら慎一にこの街を離れてからの経緯を聞いていた。

程なくカミさんが手に入れたヨーグルトを喉に通すと、少し慎一の表情にほおずきのような赤みが差した気がした。

「今日はどうするつもりだ。もし良ければ連れの民宿にでも案内するが」

「明日入院ですから、これから名古屋へ帰ります。今日は大変ご迷惑を掛けました。今度は何時退院できるかも解りませ

んが、その前にもかくあの子に会えましたからこれも神様のおかげだと思えます」慎一はポツリと言った。

「病院に戻って早く直る事が一番だから、無理に引き止めたりしないが、最後に一つだけ聞いて置きたい事がある」

「何でしょうか？」と不安げに慎一は見上げた。その表情には痛みをじつと耐えている様子が浮かんでいる。

「君は悦子に自分が父親だと告げたのかい？」

「いいえ」

「そうか、まあもしそう話した所で悦子の記憶に今日の君が残るかどうかはあやしいからね。ただ君が彼女に自分の事を知らせたいというなら、私が機会を見つけて必ず悦子を見舞いに病院まで連れて行くから、一日も早く健康を取り戻すことだ」洋蔵はそう話して、庇かばうように慎一と連れだつて店を後にした。

慎一が突然腹を抱えてうずくまり、マリ・モのように小さくなる。洋蔵がタクシーで自宅まで連れ帰つたのはその直後の事だった。運転手と洋蔵に肩を支えられて客間の急ごしらえの寝具に横たえられた慎一を見て理紗は半分パニックに陥りそうではあったが、その憔悴しきつた病んだ姿を見るとさすがに声を荒げる気持ちも気力も起きなかつた。洋蔵に言われて病院宿舎に住む馴染みの榛原医師を訪ね、自宅でくつろいでいた先生に足労を駆けて慎一を診察して貰うと、理紗はたとえどんな理由があろうとこんな寔たじれた病人に酷い仕打ちをした昼間の自分を責める気持ちになつていた。

「母さん。お茶を一杯入れてくれんか？」

榛原医師が帰つた後、居間のテーブルに肘を乗せて洋蔵が言った。いくら痩せているとはいっても病人を肩に担いできただので、上腕から首の付け根にかけて筋が張つて病めた。差し出された湯飲みには新茶の若々しい香りが馥郁ふよくと広がっている。理紗が客間から戻つて来たので、洋蔵は「先生は何だつて」と問い掛けた。

「明日、検査入院してみないとほつきり解らないが、こんな夜中に担ぎ込んで本人が大変なだけだろうから、翌朝外来へ来なさいって」

「慎一君は明日名古屋の病院に入院するとか話していたが、そちらには連絡を入れておく必要があるだろうな」

「本当に迷惑な人ね」と理紗は自分で急須に湯を注ぐ。

「養育費はちゃんと振り込まれているのか？」

「この所、滞っているわ。ま、あんな状態じゃあ働くことも出来なかつたでしょうけど」

理紗は自分の湯飲みをテーブルの上にコトリと乗せて、横のイスに腰を下ろした。

「何しに来たのだろう、今更臆面もなく」

「体を病んで、心細くなつたんだろう。それで悦子の顔を見たくなつたと言つていた」

「見たいなら見たいで一言挨拶ぐらいしろつていうの。悦子の父親は死んだことにしてあるのに」

洋蔵はやれやれといった表情で近くに置かれた夕刊に手を伸ばした。

「そんな嘘、いつかはばれる。本当の事を素直に伝えておくのが一番だと父さんは思うぞ。将来、悦子が親を捜そうとした時、おまえはどうする。嘘に嘘を重ねるばかりだ。それより悦子に彼が父親である事をありのままに見せておいた方はるかに良いとオレは思うがな」と諭すように呟いた。理紗は反論したい言葉を口元まで用意したが、新聞の活字に目を移している洋蔵に反発する気持ちが不思議に起こらなかった。

朝が来て、慎一は薄ぼんやりとした白い思ひ出の中にいた。そこは故郷の生家の使い込まれた板敷の階段で、子供の膝高もある段差をナマケモノのように一歩づつ両手両足で苦勞しながら登り切ると、二階のたたきに北に向けた大きな窓があり、庭の木立の向こうに賑やかな表通りの喧騒が聞こえていた。振り返ると一間の和室の向こう、窓の外の瓦屋根に後から造られた木造の物干し場があつて、灰色の作業着に身を包んだ二人のおじさんが朝の光にキラキラと反射するテレビのアンテナを立てていた。

そうだ。あの時、僕は手伝おうとして掌を傷つけてしまい、お母さんが白い包帯でぐるぐると僕の左手を捲いてくれたんだ。慎一は左手を目の前に差し出した。その包帯はなんでもんなに大きいのだろう。あの日初めてテレビを見た。そして

あれから僕はもうこんな遠くまで旅をしてきてしまった。どうしてこんな事になつてしまったのだろう。どうして時間は流れてしまうのか。

その時、かすかに畳を踏む足音を慎一は臆気に感じた。やがてその人の気配が窓辺に立ち止まった気配と共に、雨戸が引かれる音がした。眩しい朝日が射し込んだせいとか、臆気な夢がそうと消えていくのが慎一には解つた。ここはどこだろうと思つた。すると、誰かが自分の布団の上に乗つて上がつてくるのが解つた。彼はぼんやりと目覚めて、その不思議な重さに戸惑つた。重さは足元から傷む腹部を越えて薄いあばらの上を過ぎ、肺の上でとどまつている。少し息苦しさを感じてうつつすらと瞼を開くと、目の前に子供の大きな顔があつた。

悦子だつた。彼女はニコニコわらつて、慎一のほっぺを小さな両の指で引っぱりながら

「お父ちゃん、朝だよ。お父ちゃん、早く起きてよ」と言つている。

慎一は何の事か訳が分からず、夢の続きを見ているようで「うん、うん」言いながら、なぜか涙ばかりが溢れ出して、悦子の顔が滲んできた。やがて溢れた熱い物がほほにどつと流れて伝い落ちていくのを感じているばかりであつた。

二

それから長い時間が流れた。その年も燕の家族達が帰つてきた。洋蔵は彼らの姿を電線の上認めると何ともいえない

馥郁ふくよくとした満足感を感じるのだ。一昨年こぞの事、長い空き巣かきに新しい店子が帰ってきて彼を喜ばせた。彼らは子作りの為にあの不出来なバラックを選んでくれた事に、不良物件を紹介した不動産屋のような申し訳なさを感じた。親鳥にえさを求める可愛い雛の轉りまわりが聞こえた時は声に出したいほど彼を喜ばせて、その暑い夏を楽しみ季節に変えた。彼らが南に旅立ち、次の年にもまた洋蔵の元に戻ってきた時は、ほっとしてその長い航海に思いをはせた。理紗が言うには「同じ燕が一つの巣に帰ってくるのはほんの稀で、大概帰ってくるのは別の燕だそうだ」とテレビか何処かで仕入れた知識を披露していたけれど、洋蔵は少し意固地いこちになって巣立った故郷の家に帰ってくるのは人間の盆ぼんの里帰りと同じだと、三年目の今年はその一行が二十羽を越していたので大満足であった。

その日、昼飯の後、昨日の台風で飛んでしまった小屋の棟板を補修しようかと考えていた彼の所に、突然の訪問者があった。大きな荷物を抱えた近頃珍しい和装の端正な婦人だった。玄関先に立ち挨拶をする年配の女に彼はほとんど覚えがなくて「ばあさんなら今、買い物に出ているのだが」と言うのと、「自分は亡くなった慎一の姉です」と答えたものだから、突然今日の曜日が思い出せなくなったように吃驚きつしょうした。そういえば法事の時に顔を会わせた記憶はあるが、思えば慎一の三回忌さんかいに尋ねたきりすっかり無沙汰むさたをしていたので、とんと忘れていたのだ。

「ああ、それは失礼しました。どうぞ、いま家族は出払って

私一人だがお茶でも入れますから上がっていただくさい」
「いえ、私はここで結構です。ところで悦子さんは今年、小学校に入学されたと聞いていたので、これ、ほんの気持ちです」と言いながら手に持っていた紙袋を差し出した。

「あつ、いや、これはほんとに申し訳ない。こんな事をしていただくなんて」と洋蔵はその紙袋を受け取っても良いものかどうか戸惑いながらも付き返す勇氣も理由もないので、判断に迷った。「なぜそんな物を受け取ったのよ」と理紗の小言を言う顔が一瞬脳裏を掠めた。

慎一の姉は片手で袋の中から一つの封筒を取り出してみせた。

「実はこの包みの中には、その、慎一の遺品というか、手紙が入っております」

「と言いますと悦子宛の手紙でしょうか？」

「いえ、お父様にと本人が言っております」

「私にですか？」

「ご存知の通りあの子の残した物は借金位で、身の回りにこの世に残していく物など何も有りませんが、本人が病院に居りました時に私に申しますには、『ともかく悦子ちゃんに会うことが出来たので本望なのだけれど、いざ会って見るとあんな可愛い子供の父親として自分は何もしてやることもなく、この世を去るといふのは未練が募って苦しい事だ』と」

「けれど、今までの自分の不義理を思えばそれも致し方が

ない事なのかもしれないから、せめてあの子に父親として何かを残したいとずうっと思い巡らして来たのだけれど、姉さん、なにか自分出来る事はあるだろうか？」と相談するの
で、その時の私は『何を気弱な事を言うのですか』と叱った
ものですが、あの子も愚かな頭で一先懸命考えたみたいで、
次の日ですか、『このー』といって脇に横たえていた大きな
黒い楽器ケースを指差しながら、『このギターを送りたい』
と言ったんです」

彼女は袋の中から手紙を出して洋蔵に渡した。

「慎一が、離婚をしてから少し精神的にめげていた時期がありまして、そんな時、『学生時代に続けていたギターをもう一度やるんだ』と退職金をつぎ込んだとか言っていました。随分と当時では高額な宝物だったようです」

「『慎一が元気な内に送ったら』と言った事があつたのですが、『ただあの子にこれを今渡しても、理紗さんがそれを拒むだろうし、悦子ちゃんもわからないから、あの子が大人になるまで洋蔵さんに預かって貰いたい。手紙を書くから』とこう言うので、私も戸惑つたのですがそれが結局あの子の遺言になつたようなものですから。悦子ちゃんはまだ親の事を理解するには間がある事は私も知っていますが、実は私自身もこのところ体調が思わしくないので、この春、小学校入学と聞いて、お持ちしたようなわけです」

「いや、それはわざわざありますがどうございます。悦子もきつと喜ぶと思います。あの子は可哀想に父親と再会してもすぐ

に別れなければならなかつた不憫な娘ですが、母親譲りないつこくな所もありまして、思春期には少し難しい所がありますよ」

「いまさ形見だと言つて受け取つて貰えるか判りませんがケースの中に慎一のものにやら楽譜ノートのような物も入つております。受け取るも、受け取らないも、まったく悦子さんの自由でありますので、万一不要とお思ひでしたらどうぞ捨てて頂いても少しもあの子が不満にする筋ではございません。その他、拙いものですが私からのお祝いを同封させていただきますので本当に肩の荷が下りた気持ちです」

「それではこれで失礼致します」と頭を下げた。

洋蔵は慌てて、「せめてお茶の一杯でも」と引き止めたが、車を外に待たしてあるからと固辞されて、やむなく玄関先まで見送つた。

洋蔵は残されたギターケースを戸惑つたように見据えていたが、さて、家族に見られたらなんと説明しようと思案に暮れて、取りあえず納戸の中に片付けておいた。

それから数日がたつた頃、理紗たちは洋蔵がおかしな振る舞いを始めたので少し驚いた。彼が何処からかギターを手に入れて、夕食の後、ソファに深ぶかと腰を下ろして、パンやで膨れた枕を抱きかかえるような形でギターを懐に抱え込み、ポロン、ポロンと爪弾きはじめたのである。

「あれ、お父さん。随分ハイカラな事を始めたのね、お父さん、ギターなんて弾けたのかしら？」と理紗が台所からからかうようにハナに言う。

「弾けるもんですか。生まれて初めてだつて。なんでも西公園の脇の立花さんに誘われたとかで、ほら公民館でフオークソング同好会主催している人なんだけど」

「へえ。まあ老化防止には指を動かすのが良いと聞いたことはあるけど、でもお父さん、楽譜よめるのかなあ？」

「そうよね。いつまで続くかしらねえ」と言つて小さく笑つた。

当の洋蔵はギター教本を片手にソファに座つてぶつぶつと独り言を呟っていた。

「なぜ小学校ではドレミで音符を教えるのかなあ？ あれはイタリア語だろう。それなのに和音のコードは英語。ハ長調なんかはハニホヘトだ。音符ひとつ読むのにオレは二回も通訳しなけりゃあならん。なぜ子供の時からCDEで教えてくれないんだ」と言つた後、使い終わったカレンダーの裏の白い光沢紙にマジックで大きく楽譜を写している。遠近両用眼鏡でもとても見辛い印刷物をなんとか一瞥出来るように、手書きで書く五線譜とタブ譜は、時々肘が揺れて海辺のさざなみの様にのたくっていた。

三

「ねえ、母さん。この間湖畔の花園パークで開かれたフォークジャンボリーに出た明菜さんが、今度秋の街中フェスタに

出るんだつて。『あんたも少しやってみないか？』つて言うので私、バンドに入ろうかなあ」と悦子が理紗と話している。洋蔵は読みかけの新聞を脇に置いて、二人の会話を耳を傾けた。あれからもう十年近い時間が過ぎていた。

悦子はすでにセーラー服の良く似合う高校生になつている。誰が勧めた訳でもないのになぜかバンドをやりたいと言いつつ始めて、ギター教室に通つていた。洋蔵はそろそろ慎一との約束を果たす時期が来たのだと考えた。

次の日曜日。洋蔵は理紗が買ひ物に出掛けていて、悦子がテレビを見終わつた時を選んで彼女に声を掛けた。

「悦ちゃん、実はおじいちゃんから悦ちゃんに渡しておきたいものがあるのだが……」と言つた。

「えつ、何、おじいちゃん？」と悦子がテレビを消した後で答えた。

「実はこの私が使っているギターなんだけどね。理紗やおおあちゃんには内緒にしているんだけど、本当はあんたのお父さんのギターなんだ」

「へえ……」と悦子は感に入つたように答えた。急に父親の話が出てきた事に少し戸惑つている風であつた。

「何、じいちゃん、それお父さんから貰つたんだ？」と言う。

「いや、じいちゃんはただ一時的に預かつていただけなんだ。本当は『いつかあなたが大きくなつたら手渡してくれ』と頼まれていたんだ」

「私に？」

「うん、なんでも百年弾き続けると綺麗な音が鳴るそうだ。その音を悦ちゃんに聞かせたいと、お父さんがあなたに残してくれたギターなんだ」

「ふうん」と悦子は感心したように答えた。

「じいちゃんはお父さんの手紙と一緒にこのギターを預かったけれど、そのまま物置に入れて置いたのでは弦も錆びてしまし、楽器も傷んでしまうと思ってね。ともかく百年後もちゃんと鳴って欲しかったから、悦子にも慎一君にも許しを得ないで、自分でギターをなんとか鳴らそうと思ってね。もう還暦も過ぎていて、目も霞むのに楽譜一つ読めん。えらい難儀で、はじめは投げ出そうと思っただけれど、楽器というものは人間相手と違って下手は下手なりに音が出る。今更、先生についてあれこれ言われるのも業腹で、結局、図書館から手当たり次第に教則本を借りてきて、チューニングの器械を名古屋の楽器店で買って使い方を覚え、時間ばかりかかったけれど、毎日こうしてカラオケ代わりにギターを鳴らしてきたら、毎日がどんどん楽しくなっていくのは本当に不思議なものだ」

「悦ちゃんが近頃、なんとという偶然かギター教室に通っていると聞いて、今なら本来の持ち主になるべきあなたに手渡せると思うと爺も本意だよ。今、ケースとお父さんの楽譜ノート、それから爺宛の手紙もあるから、少し待っていてくれ、取ってくるね」と言って洋蔵は居間を出て行った。悦子は「ふうん」と言ってソファに残されたままギターを見つめていた。

手紙

前略

この手紙をお父さんに届けて貰うように姉に頼みました。本当は直に悦子に伝えておきたい事を本人に宛てて記すべき所ですが、そのような手紙を理紗が快く本人に手渡すかどうか今の私には心もとなく思われます。先日は温かいご配慮を誠にありがとうございます。お陰様で悦子の父である事を本人に伝える事が出来ました。僅かな時間ではありましたが親子の幸福な時間を過ごす事が出来ました。心から感謝いたして居ります。

あれから名古屋の病院に戻り、治療を続けておりますが思うように体調は回復せず、痛みと薬のせめぎ合いで、体力も日毎に失われていくような心細い毎日です。そんなわけで私に後どれほどの時間が許されているか不安になるばかりで、それを思うにつけても残されていく悦子のことを考えると悔しくて仕方ありませんが、一日でも長く彼女の成長を見守りたいという希望は今となってはひどく難しい望みのようであります。

私に万一の事があればと愛用のギターを娘に残したいと思いましたが、ここにその理由をお伝えしたいと筆を取りました。

ご存知の通り、離婚後私は少し自暴自棄になり生活を荒らしておったわけですが、そんな折、昔よく聞いていたフォークソング歌手のTさんが地元でコンサートを開かれました。

現在御歳が六十八歳でいらっしやいますが、昔と変わらぬ声量と艶のある歌声に心を洗われ、思わず握手会でその厚く広い掌をきつく重ねるとなぜか奈良の大仏様と握手をしたような落ち着いた安らぎを感じて安心を得る事が出来ました。

そのTさんがコンサートの合間に手にされているギターの由来について話をされたのですが、なんでも本場のアメリカに渡って、漸く探し出した逸品だったそうです。大戦前後はドイツ人の腕の良い職人さんがあの辺りには多数居られて、今に残る名品を奇跡的に作られたとか。貴重品の事、随分高値だったそうですが勇氣を奮って声を掛けたら、店主がまず口にされた言葉が『あなたは息子がいるか?』という予想外の問いかけだったとか。思わぬ質問にたじろぎながら、『息子はいる』と答えると初めて『そんなら売ってあげよう』と思わぬ条件付には驚いたそうです。

なぜそのような問いかけをされたかというのと、このギターは年月を経て使い込むごとに良い音が出てくる。木が乾燥して益々音色が良くなるから百年使ってみなければギターの本当の音はわからないのだと。

それを聞いた自分もそんなギターが欲しくなりました。それで手元にあった退職金をはたいて一本のギターを買ったのです。ずうっと使い続けるつもりでした。それから自分の子供にこのギターを手渡して、百年後に良い音を響かせてみたいと思つたのです。けれど、僕は百年後はおろか、子供に手渡す事すら出来そうにありません。

—ここでお願いがあります。どうか娘が成長するまでこのギターを預かっていて欲しいのです。父親として子供を育てるといふ当然の責務が果たせない不甲斐ない私ですが、せめて子供に百年使い込んだギターの音を聞かせたいと思うばかりなのです。

どうぞ、この気持ちを哀れと思つて、彼女がその年齢に達しますまで保管してくださいれば幸福です。

慎一

こうして、悦子は慎一のギターを受け取った。父からの手紙も手に入れた。父親の記憶のない彼女にとって、もうひとつピンとは来なかつたけれど、渡されたギターは良い音がした。洋蔵が欲しいというので今まで教室で使っていた安物のギターをおじいちゃんに渡し、今では少し草臥れた黒いケースに入れて悦子は慎一のギターを抱えている。時折、父親の作つた楽譜ノートを開いて弾きながら口ずさむ時もある。

涙、ポロンとにじんんでいる

父親が手に入れてから百年の時間使い込んだギターの音を、悦子はどうやら聞く事が出来そうに思っている。(了)

(西区)

「入選」

母・娘

の ぶ 恵

夕食を済ませると、テレビは、ニュースから釣り情報に変わっていた。

麻子は台所で食事の後片づけを始めていた。

六畳二間きりのアパートの部屋は、テレビを見ている夫からも台所に立つ麻子からも見通しであった。

彼は釣情報に夢中で見ているようであった。

電話のベルが鳴る。小机の上の時計は七時一分に変わった。

夫は麻子の方をちらりと見たが、立つ気配はなかった。

「七時からは料金が割り安なのよ」

と言いつつ訳の様に言っている母からの電話である。時計の針が七時を示すのを待ちかねて、電話番号を口ずさみながらダイヤルを廻す、母の指先が眼に浮かんだ。

水に濡れた手のまま女は受話器を取る。

「はい。麻子です」

毎晩ではあるが麻子の声は弾む。近頃では夫の姉や弟たちとは、すっかり疎遠になっていた。

始めの頃は、「おやじさんの具合は、どうですか」と受話器の向こうの母に問にかけていた夫であったが、もとより口下手な彼のこと、近頃では毎晩同じ言葉を繰り返すことにも億劫になったのであろう。無関心を装って、受話器を取ることも無かった。毎晩の電話である。そして麻子の言葉も決まっていた。

「あのねえー。とうさんの事なんだけど、先生に呼ばれたのよ……それでね……」

なんとなく何時もの母と違った歯切れの悪さであった。明るさが失われている様に聞こえた。

「とうさんに何かあったの？ 先生の話ってなんでしたの……」

その日のことを一気に語り尽さなければ済まない母の口調は、どうしたのか……麻子は苛ち始めた。夫を忘れて、声は大きくなっていった。

夫は妻の声に、テレビのボリュームを下げると、境の襖を半分ほど閉めた。

襖にかけた夫の手を見たら、そんな気遣いをする夫が麻子には煩わしくなっていた。

父は、ここ数年の間、高血圧と糖尿病で苦しんでいた。そして此の一年は、病院の入退院を繰り返していた。

自宅で療養をして母が介護に疲れると、病院に入院することになっていた。

「私が入院している間は、母さんは、ゆっくり休むといい」
父は、自分の入院は母のためだと、決めている口振りであった。

入院の度に母は、細々としたものをスーツケースに詰めこみ、父は小旅行に出掛ける様な気安さで入院していた。

そして気難しい父は、個室でなければならなかった。母は日中は病室の父の見える所に腰かけていた。

自宅に戻った時に、或る日、体を支える母の手を振り払うほど元気だった父が、病状が悪化したのか、急に歩行困難となった。

痩せている母には、病人とはいえ六十キロ余もある父は、まさに「重荷」であった。

父を早急に入院させたのは二週間前であった。母の顔にも深い疲労の影が見え、父の顔にも険しさが見えていた。

麻子は母を父から離すことで、ほっとした矢先であった。

「どうしたの。しっかりしてよ。聞こえないのよ」

彼女の強い口調に、母は思い切った様に、

「先生が、『歩くことは諦めなさい』って……折角、リハビリも始めかけていたのに……」

母の声が涙声に変わっている。馴れない専門用語のリハビリも、やっと滑らかに出るようになったのに、主治医の言葉は、母にとって苛酷にひびいたのである。

麻子は歩けなくなった父より、父に寄り添って途方にくれ

ている母の姿が胸に迫った。入院以来、病室には、車椅子は勿論のこと歩行器が持ち込まれていたが、気力さえない父であった。

麻子は週末、父を見舞う度に、父の足を洗った。

ベットに腰掛けた父の足は、筋肉がすっかり落ちて、女の子の様であった。平扁足になった足裏は、いくら洗っても感覚は無いのか、なんの反応もない。バケツの湯の中の足は棒の様に自分から動かすことは無かった。

「病院と言う所はね、『治療』が無ければ退院しかない所ですからね」
母は応えなかった。

「どっちにしても明日は土曜日、病院の方に直行しますから待っていてください。出来るだけ早く行きますから」

この一年、麻子は、週末はほとんど「浜松行き」であった。

電話の終るのを待ちかねた様に夫は、

「コーヒーを入れてくれないか……」
と言った。

先週求めたコーヒーは、缶の底の方に残っていた。計量カップで計らずに、ミルに空けて豆を挽き始めた。

思ったよりコーヒーは多かった。狭い台所にコーヒーの香りが匂い立った。

夫の前のテレビは「花鯛」を釣り上げた釣り人の笑顔を映

していた。

麻子は心の中で「しまった」と叫んでいた。

夫は、「下田辺りに釣りに行こうか……」とつい三日ばかり前に麻子を誘った。母の電話ですっかり忘れていた。

彼女は、明日の「浜松行き」を、どう夫に切り出そうかと思つた。

「浜松行き」さえなかったら、二人でコーヒーを飲みながら、テレビを見ていたかもしれない。

酸味の強いコーヒーは、ミルクを落とすと、ちりちりとカップの中で散つた。案の定、コーヒーは苦かつた。

「父の容態がはつきりしないので、土曜日は早目に浜松に行きたいのですけど……」

「どうぞ……」

夫は応えた。しかし今の応答は、夫からだつたのであろうか……まるで他人の様な素つ気無さであつた。

彼はテレビを消すと自慢の釣竿の手入れを始めた。磨き込まれた「漆竿」は、電灯の下で鉛色に輝いていた。

「すみません。舟宿の方には連絡をとっておきます。餌の方も用意して貰います……」

アナタとの約束を決して忘れたわけではないと、麻子はつけ足していた。

「来週は必ず行きます」

彼は「ああ」とも「うん」ともつかない、曖昧な返事はしたが、それ以上口を開くことはなかつた。

彼の濃い眉が、妻を寄せつけないほど厳つく、麻子の眼に写るのだった。

襖を半分閉じたままの部屋に戻ると、昨日からの読みかけの本を開いたが、本は、ただ文字の羅列でしなかつた。

新幹線が「浜松」に着いたのは、土曜日の午後一時を過ぎていた。午前中には着く予定の筈が、架線事故とかで一時間も遅れていた。

母は二時間近くも待つていたことになる。昨夜の電話の折にも、

「明日は、お昼前に着くのね。駅で待つていますから……」と急に声を弾ませた。そして、

「アチラにもよろしくお伝えして……」

といつもの様に必ずつけ足すのであつた。

五年前に四十をすぎた麻子は、同年の夫と再婚した。母は、その話の折にも、

「麻ちゃんが良いと思つたら……独りは淋しいからね」と言い、その時から麻子にとつては二度目の夫のことを、母は「アチラ」と呼んでいるのであつた。

「電車に乗る時間は未定ですから」と母に告げると母は、

「かまいませんよ。そんなこと。母さんは待つているだけで楽しいのだから……」

と言つていた。

土曜日の午後とあって駅は混雑していた。人波に紛れてホームから階段を降りると、改札口に急いだ。改装されて間もない駅の構内は広々としていて、大きいガラス戸越しに、秋の陽が眩しかった。

眠らないままに朝を迎えた麻子は軽い目眩めまいを覚えた。

悔のない筈の再婚が、父母の事を想うと気が重かった。彼女が気に入っていたアパートの部屋さえ他人の部屋の様な気がしてくる。

「麻ちゃん!! お帰りなさい!!」

改札口を出ると、とたんに母の声がした。と、同時に彼女の手からスーツケースをもぎ取る様に自分の手に持ち変える母が居た。

麻子は、昨夜からのとりとめのない思いを振り払う様に大きく首を振った。

「それ、シートととうさんのパジャマ、それと、かあさんのブラウス、みんなバーゲンの安物だけど……」

母の手にしたスーツケースを眼で示した。

「いつもお金ばかり使わせて……電車賃も上がったし、それと病院の支払いの方までみてもらっていることだし……」

母は麻子の顔を覗き込む様にして言った。

「少し睡眠不足かな。気にしないで、一時間もすれば治りますよ。それとお金のことは気にしないで。アチラの給料からではないのよ、私の以前の貯金だから……」

母の顔を見ていると昨夜からの減入った気分も、ベットの

父さえも遠ざかって行く。

穏やかな秋の昼下がり、彼女は母と二人きりの嬉しさが込み上げてきた。

麻子の記憶 (一)

私は、幼い日の記憶は、小学校に入る前頃からだったと思っています。

私は、祖父母、母の四人暮らしでした。浜松に住んでいました。「横浜生まれ」とよく言われましたが、「横浜」には記憶はありません。

幼児には「出生地」など知る由もないし、必要ともしないのです。その事を確認したのは、女学校の入試の時に必要だった「戸籍謄本」だったと覚えています。

私は記憶というものは、最初は、嬉しさ、楽しさ、美味しさからだと思っています。そして、年令と共に、哀しさ、淋しさ、辛さが形成されて行くのではないのでしょうか……「高町二十四番地」の家は、東京から移り住んだと言われているが、その東京も引越しも記憶はありません。

「高町二十四番地」の町名と番地。これだけは、しっかりと覚えていきます。

きつと越して来たばかりの孫が迷子になった時に必要だと、祖父が幼い私に覚えさせたのではないのでしょうか……庭の広い家でした。祖父は「ニワトリ」を飼って、時々小

屋から玉子を取り出していました。祖母は、植木棚に朝顔の鉢植を並べたり、風鈴を吊して、いい音がしていた事は覚えていません。今想うと、「父」という存在は、ありませんでした。

祖母は、私にとつては大事な人でした。特に「オバアちゃん」の存在は大きかったと記憶しています。

私の記憶は四人から始まります。今想うと、決して豊かではなかった。しかし、子供の私には居心地の良い私中心の家族でした。

母と祖母は何時も縫い物をしていました。それに代わって、祖父がごはんを炊くこともありました。

「麻ちゃん、ごはんがこげちやったよ。オニギリさんにしよう」

祖父は笑って、オコゲのおにぎりをお皿いっぱい並べました。

みんなで「オカモエ」にも行きました。オバアちゃんは「綿ガシ」を買ってくれました。

手をつないで夜店を歩きました。
楽しかった。嬉しかった。美味しかった。

麻子の記憶 (二)

美しく着飾ったかあさんが、とうさんと連れ立って出て行きました。「麻ちゃんも行きたーい!!」と追いかけて泣きました。やはり、小学校前の記憶です。四人で暮らしていた中に突然現れた「とうさん」、私が泣いたのは、それが始めて

の様な気がします。幼い私には、家庭の経緯は判るわけもないことだし、聞かされたからといって、理解する能力などあるわけはありませんでしたが、「悲しさ」「淋しさ」の残っていることは確かです。私の小さい手を握りしめて祖母は言いました。

「麻ちゃんの欲しかったママー人形を買いに行こうね……」
「三人で『うどんやさん』に行こうか……麻子は『ニカケ』うどんが好きだろ」

祖父は、そう言いながら表の門を閉めました。余りにも遠い日の出来事です。

私には、あの日の祖母の手の暖かさ、祖父の優しい声を今でも甦らせることが出来ます。

それなのに、あの頃の、とうさんの顔もかあさんのことも浮かんでは来ないのです

「母さん、おながが空いたわね。時間が大分すぎたものね。お寿司でも食べましょうよ」

麻子は母の返事も待たずに、駅に続くレストラン街に入っ
た。

一週間ばかり前に逢ったのに、母の体はまた一廻りも細く見える。

紺色のワンピースにしめた共色のベルトが、母の体付きを更に頼り無げに見せていた。

薄い肩が布地を通して尖っていた。向き合って腰を掛けた

母は、麻子の視線に気付くと、

「おかしいでしょ!! この頃は、すっかり洋服になっちゃったのよ。この方が楽で動き易いのよ。とうさんには叱られるけど……」

母は恥ずかしそうに笑った。

「そんなことありませんよ。色も良いし、かあさんに似合っていますよ」

麻子の言葉は母を慰める口調になっている。真夏の暑さの中でも母は常に着物を着ていた。

上布の着物の衿を少しつめて、博多帯をきりつとしまっていた。母は美しかった。母の着物姿も見納めであった。

ストッキングが少しよじれているのも、麻子には哀しかった。た。

そして病院で待っている父のことを、ちらりと浮かべた。

「とうさんにも、なにか握って貰いましょう。」

トロが好きでしたね。それと玉子かな……」

母は低い声で言った。

「トロは高いのよ。この間、食べたいと言うので、ここまで買いに来たのよ。トロは一つ千円もするのよ。五つしか買えなかったの」

「じゃあ、今日は、思い切り食べてもらいましょうよ。麻子のお土産だから……」

カウンターに注文する麻子に続いて、母は、

「病人が頂くので、山葵は少しにしてくださいな」

と付け足すのだった。湯呑みを持つ母の手が老いていた。指の付根に小さいエクボの出来た白い手は、いつの間にか荒れていた。

「ところで、とうさんは、どうなの？」

麻子は昨夜の電話の時と同じ言葉を繰り返していた。

「もう歩けないのだから、自宅で介護するしかないと言われるのよ……」

母の口調も電話と同じであった。母は病院のことや父の事を語り出したが、それは麻子に訴える愚痴の様なものでしかなかった。

病室に小型テレビを入れて、終日、見ているか眠っているのだと言う。そして相変わらず母は、父の見える所に腰をかけて一日を過ごすというのだった。

十日毎に支払う個室の料金は、麻子にとっては大きい出費ではあったが、それでも母の体が楽ならばと思っていた。

彼女は残り少なくなっている預金通帳の末尾の数字を浮かべた。

後一ヶ月は、大丈夫。せめて、もう一ヶ月、父を入院させておかなければ……

いつの間にか、テーブルの上には寿司桶が乗っていた。母は娘の好物の「生うに」を麻子の方に移していた。

「かあさんだって好きなんだから、食べなさいよ。やっぱり浜松の魚は美味しいわね」

母は、軽く笑った。眼尻の皺も、いつの間にか深くなってい

る。

カウンター横の大きい水槽には、何種類かの魚が泳ぎ、海草の陰には海老が身を隠している。

「麻ちゃん!! お酒は、いいの……」

「やめたわけではないんだけど……アチラもあまり飲まないのよ。そうだ、たまには飲んでみようかな……かあさんも海老でも刺身してもらいましょよ……」

酒と、しまあじ、海老の刺身を頼んだ。

「本当に心配ばかり掛けて、ごめんなさい」

母は頭を下げた。

「やめてくださいよ。親娘じゃあないですか。当たり前のことなのに……」

「親娘」無意識に出た言葉であった。

麻子は父や母に対して常に他人行儀なのだ。家族でありながら打ちとけた言葉遣いが出来なかった。しかし、祖父母とは、孫とじじ、ばばとの会話であった。

変わったのは、あの日、あの人が出現して以来だった気がする。

そのせいか麻子は、夫との会話にも親しみが無いのに気が付いた。

頼んだ酒に肴が添えられて、テーブルの上に並んだ。

鰯のたたきの上に乘った分葱の緑が鮮やかである。海老も頭だけは焼いて灰赤い刺身になっている。

母は麻子の猪口に酒を注いだ。

「親に、こんなことさせて罰が当たりますね」

母は、

「親らしいことは何もしていないのに……」

と独り言の様に言った。

「土曜日毎にこっちに来ては、アチラも困るでしょうに……いいのかしら……」

「気にしなくていいのよ。お互いに独り暮らしには馴れていたのだから……いても、いなくても良いみたい……」

彼女の言葉も終りは独り言の様になっていた。冷えたコーヒを前にした夫の冷めた顔が浮かんで消えた。

「とうさんは、あのま、歩けなくなるのかしら……」

麻子は母の悲しみに引き込まれないようにカウンターに向けて叫んでいた。

「すみません!! お銚子、追加。このお酒は浜松の地酒ですか。のどごしが良いですね!!」

麻子の記憶 (三)

日曜日の遅い朝。とうさんが二階から降りて来る。三段。二段。下で待っている私は、大きく息を吸いこんで、とうさんを待つのです。とうさんが私の前に現れました。

「おはようございまーす」

オカッパ頭の私はべこりと頭を下げるのです。とうさんは黙って頷いたのでしょうか……

これだけのことが、中々言えないのです。オバアちゃんは朝から私の耳許で、

「麻ちゃん。朝のご挨拶は、きちんとね」

と何回も言うのでした。

「オハヨウゴザイマス」が言えた朝は、オバアちゃんは、嬉しそうな顔を私に見せるのです。

私は、今日は、うまくいったと急に体が軽くなるのでした。

とうさんはお仕事で、帰りは遅いのです。日曜日だけは一日中、家の中です。

先週の日曜日は失敗でした。

とうさんの後からかあさんが何か話したら、降りて来たのです。

大きく息を吸いこんだ時に、とうさんはもう私の前でした。黙ったまま立っている私の前を通って洗面所に消えました。

かあさんは、「麻ちゃん。朝のご挨拶、どうしたの」

かあさんの顔も声も恐かった。私は「ゴメンナサイ」と小さい声で言いました。

心配そうに見ているオバアちゃんの所に、飛んで行きまし

煙草の匂いと、ナフタリンの匂いのする、オバアちゃんの着物の袖に顔を付けて泣きました。

「おかあさん!! 麻ちゃんを甘やかさないでください!!」

オバアちゃんもかあさんに叱られたのでした。

私を抱きしめてくれるオバアちゃんの胸を叩きながら泣きました。

「かあさんなんか大嫌い!!」

「このお家にも居たくない!!」

「オハヨウ!! なんて大嫌い!!」

しかし、「とうさんなんて大嫌い!!」

とは、言っではいけないことだと思っていました。

私の記憶に、悲しみと淋しさが追加されたのです

了

母は寿司を食べ終ると、腕時計を見た。何気ない仕種ではあったが、病院で待っている父を気遣う母がそこに居た。

残った酒を慌てて飲み干すと、母はほっとした表情を見せて寿司折を手にして歩き出した。

父の入院している病院は、駅からバスで二十分ほどの、丘の上に建つ九階建ての病院である。

前庭には、秋色に染まった花壇があり、赤、白、ピンクとコスモスの花が風に揺れていた。

そのまま病院の入口に通じている。ナースや、ヘルパーに付添われている患者は、退院も間近いのであろう。足取りもすっかりとっていた。

正面玄関の脇のエレベーターで九階の病室まで直行する。エレベーターの前は広いロビーになっている。ここにも数

人の患者が野球の中継に見入っていた。

母は、その前を腰をかがめて通り抜ける。麻子は、ここに来て急に、酒の香りが気になった。調子に乗って、つい飲んでしまった酒であったが、父を不機嫌にさせ、母を困らせるのではないかと……

母は麻子を振り返ると首をすくめて、病室に入った。麻子も続いた。

傾斜させたベットで父も野球中継を見ていた。一週間前と少しも変わっていない。蒼白な母の顔色と比べたら血色も好いし、元氣そうに見えるのだった。

「おとうさん。いかがですか」

父は彼女の声に「やあ!!」と手を上げたものの、眼はテレビから離れなかった。

母は慌てて寿司折を父に示すと、

「あなた。麻子のお土産です。お好きなトロも、たくさん握って貰いましたよ」

母の声に、そして寿司折を眼にすると、初めて麻子の方に眼を向けた。

「おとうさん。お元氣そうで安心しました」

母も、ほっとしたのか、

「お湯をもらって来ますから、少し待っていてくださいね」とポットを抱えて出て行った。

あの精悍な体付きと鋭い眼をした父は、どこに行ってしまったのか……

虚ろな眼をして、終日テレビを見入っている父。

幼い子供に言いよかせるような母の口調に、父は寿司折に伸ばしかけた手を止めた。

麻子は寿司折を開けると、父の前のテーブルに乗せた。

「ほ!! トロか……いい色をしているな。かあさんに頼んでも、中々、買って来ないんだよ。」

と言って食べ始めた。父の前には、野球の中継も、麻子も無かった。

ただ寿司のみ。寿司だけであった。

麻子は、そんな父の姿を正視するのに耐えられずに窓辺に寄った。病室の大きいガラス窓からは、遠く赤石山脈が見渡せた。

澄み切った空に稜線を濃く描いた山波は、雲の色と共に変化を見せていた。

かつて、小高い丘に登ればいつでも見ることの出来た赤石の連山。麻子は、眼の裏が急に熱くなった。

麻子の記憶 (四)

日曜日は私の嫌いな日でした。嬉しい休日の筈なのに、落ち着かない日曜日でした。

小学校二年生の時でした。ママ一人形よりも「綿ガシ」よりも、嬉しいことでした。

でも、決して誰れにも言ってはならない「秘密」でした。あの人が居なくなるのです。

とうさんに「召集令状」が来たのでした。

「赤紙」と言う人もいました。

毎夜、親戚の人達や近所の人たちが集まり、お酒を飲んだりしていました。

「とうちゃんが居なくなるから、この家もたいへんになるな。麻ちゃんも淋しくなるねえー」

私は淋しくは、ありません。けれど、かあさんは淋しそうな顔をしていました。私も何故か淋しそうな顔を見せなければと思ったのです。

「召集令状。赤紙。出征。」聞き馴れない言葉が、みんなの口から出ます。

「勝ち戦だから、二、三年もしたら無事に帰れるだろう」

男の人達は父を囲んで遅くまで話をしていました。私には判らない話もありましたが、はつきりしていることは、間もなくあの人がこの家になくなるということでした。

「国防婦人会」と書かれた「タスキ」を掛けたオバサンたちとかあさんは、街に出て行きました。「千人針」と言う腹巻を作るためだったのです

「敵の鉄砲玉に当たらない腹巻なのよ。麻ちゃんも、おとうさまのために、一針縫って上げなさいね」会長だというオバサンは言いました。

「子供ですし、糸が絡んで切らなくてはならなくなると困りますから、私が代わります」

オバアちゃんは言ってくれました。その時に気が付いたの

ですが、オジイちゃんも、オバアちゃんも、いつもより元気のいいような気がしました。

とうさんの出発の日が来ました。四日前から家の門の前には「幟」が、たくさん立っていました。朝、早くから来る人達は、お酒をのんだり串にさした「オデン」を食べていました。

近所の子供たちも集まり、お祭りみたいでした。

「麻ちゃん。とうさんもいつお帰るか判りません。静かになさい!!」

スキップで幟の回りを走っていた私に、かあさんは言いました。

さあ!! 出発です。町内の人達の前で、少し高い台に上ったとうさんは「ケイレイ」をしました。

国防色の洋服を着たとうさんは、

「妻や年寄りを残して参ります。よろしくお願いします。私はお国のために……」

とうさん、かあさん、ジイちゃん、バアちゃん、そして麻子の私を囲んだ人達は、

「バンザイ」を三唱しました。

私も誰れにも負けない様な大きい声で叫んでいました。

とうさんは皆に、大きい声で、

「行ってまいります」と応えました。私は、大きい声で、生まれて初めての大きい声で、はつきりと、

「とうさん!! 行ってらっしゃーい!!」

と叫んでいました。みんなは「エライ子だね」とか、「しっかりしている子だね」と私に拍手をしました。

とうさんは、私を見下ろすと、小さい声で言いました。「今日は、うまくいったな」と。

私は、とうさんに誉められたと思って、ニコニコしました。

オバアちゃんの方を見ました。オバアちゃんは、悪いことをした人の様に黙って、とうさんに深くお辞儀をしていました。

とうさんを見送る人々の列は、氏神様に寄り、駅に向かって歩き始めていました。

「これからの日曜日は楽しいよ」

「オハヨウなんて無しだよ」

と私は独り言で言いました。誰れにも聞こえない様にです。

日の丸の小旗を振りながら駅に向かっていました。

その夜は、かあさんは部屋から出て来ませんでした。私は、とうさんに誉められたのだったかしら……と、後日思い出しました。私の記憶には秘密の喜びが追加されました

了

「あら!! もう召し上がってしまったのですか」

母の声で麻子は自分に引き戻されていた。

母がポットを持って戻って来たのであった。寿司は、ひとつも残っていないかった。

父は麻子たちに照れた笑いを見せた。笹の葉には、一切れ

の生姜が張りついた様に残っていただけであった。

「食欲のあることは、いいことじゃないですか……退院したら、美味しいものをたくさん召し上がればいいのですよ……」

麻子は、母の入れたお茶の茶碗を父の手に持たせた。父の手は、冷やりとした感触であった。

麻子は、かつて勤務していた老人ホームの人達を思い出した。

彼女の手を撫でながら、

「若い人の手は暖かくて良いねえ。それに、すべすべして……元気を貰っているんだねえ」

老人たちは日課の様に麻子の手を撫でた。或る日「椅子張り職人」の老人は、

「あなたに看て貰って死ぬるなんて、大往生まちがい無しだよ」

骨だけになった様な手で麻子の手を握りしめて逝った。

彼女は急速に体温の落ちて行く老人の手を握り涙を流した。

この父も、臨終の折にはあの老人の様に、麻子に声を掛けてくれるであろうか……

彼女もまた、涙を流すことが出来るであろうか。

「かあさんの作るものは皆な薄味でな。その方が体に良いの

かも知れないが。しかし、今日の寿司は、久し振りに美味かったよ。あの駅の寿司屋は高いけど、ネタは最高だからな。ありがとう!!」

父の眼が潤み声がかくもって聞こえた。母は機嫌の良かった父に安心したのか急に饒舌になり、父もまた母の他愛もない話に、ひとつずつ大きく頷き返している。麻子は、そつとテレビを消した。もう母の哀れな姿はなく、病気の夫に寄り添った妻だった。父と母だけの世界であった。

麻子の記憶 (五)

「支那事変」は未だ勝ち戦だったのか、とうさんは四年ほどで、無事に帰還して来ました。

日焼けした顔と前よりも元氣そうな大きい体に、私は何故か嫌悪感を持ちました。

女学校に入る年の春でした。私を中心にしていた家族も、四年前に戻りました。

庭には新しい部屋も建ちました。

とうさんとかあさんは、その離れ屋に住むことになりました。嬉しさと淋しさが半々でした。顔を合わせることもない代わりに、かあさんとも逢うことが少なくなりました。

女学校に入学しました。そんな日に突然、「初潮」がやって来ました。

私は離れ屋に住む母には告げずに、オバアちゃんにだけ話

をしました。

その夜の夕食には、食卓にお赤飯が並びました。「麻ちゃんも大人の仲間入りをしたんだからおめでとう」赤いご飯で祝う程、いいことなのであろうか……私は疑問を持ちました。

そして、二階の私の部屋からは赤石の連山が見えました。黄昏れ時に、山には夜が迫っているのに空には茜色が残り、少しづつ夜の世界に移行して行く。少女の私は、わけもなく淋しくて、涙が出ました。

そして、自分の世界に入って行きました。決して楽しい世界ではありませんでした。独りが好きになったのです。了

麻子は父と母との話の間合ごまかいを見て、

「とうさんも退院も近い事だし、思い切って私の方にいらしたらどうですか……」

と言いつつ父の顔色を窺うかがった。

上眼遣いに父の顔を見ながら、父の様子を窺った。幼い日の癖の治っていないことに彼女は思わず胸の内苦笑していた。学費を貰いに行った日、進学して入学金を貰いに行った日、麻子は多分、こんな眼をして話をしたのかもしれない。

「かあさんも独りだと心細いでしょうし……」母も娘の切り出した話を待ち兼ねた様に、

「家は、しばらくはそのままにして置いてもいいでしょう。」

時々、開けにすれば……」

父は無言でいた。

「とうさん。実は病院の方からも『退院するように』という話がありました。この際、思い切って麻子の方に行きましょ

!! 向こうにだって大きい病院もあるそうですし……」

母の白い顔に赤味が差していた。

湯呑みを持つ父の手が小刻みに震え出したのに、麻子は気付いた。

「麻子の近くに住居を見つけて貰いましょ!! そして具合が悪ければ入院も出来ることだし」

(もう駄目、これ以上、言ったら!!)

麻子は母の口を塞ぎたかった。

「暑いな!! 窓を少し開けてくれ!!」

不機嫌な声に、母は初めて気が付いたみたいだった。母は、父の後に続く言葉に怯えた眼を麻子に向けた。

激情を押さえているのであろう、父の顔は更に赤くなった。

三人の間に息苦しいほどの沈黙が続いた。開けた窓からは、生温い風が吹き込んで来た。

父の髪も母の髪も風に揺れ、白々と光った。麻子は吸い込んだ息を、父の気配に不安を覚えながら少しずつ吐き出していた。

酒の香りが今になって少しずつ出てきた。湯呑みを枕元に置く父の手を、母と麻子は、じっと見つめているだけであった。

スローモーションの画像の様に、それは、音も無く長かった。父の言葉を持った。

父の声は前よりも低く押し殺した様に、ひびいた。そして一言一言を区切る様に、

「君たちには……いやお前たちでいい。俺の心は判るまい。

判る筈はないだろう……ふるさとを持たない奴らには判れと言つても、無理な話だろうな……」

麻子は「とうさん……」と言いかけたが言葉は声にはならなかった。

「お前たちには……」

そうだ、私は、とうさんの子供ではない。

「ふるさとを持たない奴らには……」

麻子は、父の言葉を胸の中で繰り返していた。

母は眼を伏せたまま無言であったが、噛み締めた唇は血の氣を失っていた。

幼ない日「オハヨウ」が言えなくなつて落ち込んだ日曜日、突然浮かび上がつて来た。

あの日あの時は、抱きしめてくれた祖母がいた。

祖父も祖母も遠い世界の人になっていた。

「麻ちゃん。かあさんとは仲よくね」

それだけが心残りの様に麻子に咬いた人はもういない。

麻子は黙ったまま病室を出た。ロビーのソファに腰を下ろす。風の出たせいか、窓越しに見える山の頂きを雲が素早く横切つて流れた。

麻子は眼を閉じた。霧に覆われた様な幼い日を手繰り寄せても、父の想い出も母の想い出も、確かな情景としては、何ひとつ思い出せなかつた。

どれだけ時がたったのであろうか。

「麻ちゃん、帰りましょう」

麻子は母の声を背中で聞いて、立ち上がった。父の病室に戻ろうとする麻子に、母はスーツケースとコートを手渡し、「さあ」と言つて、エレベーターに乗つた。

病院を出ると、バス停から帰宅のバスに乗つた。

「かあさん。少し歩きましょうか……なんだか病院に酔つたみたいだわ。湖を見て帰りましょうよ。久し振りに……」

三つばかりバス停を通り過ぎると、「湖入口」のバス停で降りた。

湖に近付くにつれて道は狭くなり両側には「薄」が生い茂つている。銀色の穂が揺れている。小砂利が、ハイヒールの踵をよろめかせた。

「本当に悪いことしたわねえ。折角の麻ちゃんの心を無にする様な事を言つて……」

風に向かつて歩いている母の項に乱れた白い髪がまつわりつく。磯の香が鼻先を掠める。

湖は近い。黙つて歩く娘に母は不安を覚えたのか、

「とうさんは、此の土地を離れた事のない人だから……それに身内の人も多いしねー」

麻子は母の言い訳めいた言葉を聞きながら私は此の人に抱

かれたことはあつたであらうか、母の胸で涙を流したことは……と想像してみても、絵本の様に空々しく色も動きもないものであつた。

「麻ちゃん。ごめんなさいね」

「仕方がないわね。あの人の言う通りかも知れない。あの人は、娘になる私を頼ろうともしない。身内も、たくさんある。私とは関りあいのない人なのね」

「そんなことは、ありませんよ。先刻だつて、お寿司をあんなに喜んで頂いたのでしょ」

「私はね。小さい時から『あの人』から遠ざかつて生きて来た気がするのよ。病気になつてやつと身近になつたのに……」

長い年月を経て、やつと「とうさん」と呼べる様になつたのに、また、あの人は遠くなつて行く。

麻子は、母の悲しみの深まるのを承知で「あの人」と呼んだ。

小石を蹴飛ばしながら歩き続けた。母は小走りに歩いて麻子と肩を並べた。

「お前たちには、ふるさとは無いか……強いこと言つてくれるわねえー。だけど、ここで生まれて、ここで育つて、死んで行く。それが一番、幸せなのかも知れないわねえ」

湖からの風は一層冷たくなつた。

「もう私の側で……なんて言いません。あの人の言う通りにして上げましょう。私も出来るだけ応援しますよ。もう一度、

働いてもいいのよ。お金の事なんか気にしないで……」

無言の母の顔は涙で濡れていた。

「泣き虫の麻ちゃんだったのに……私も強くなったものでしょ。かあさん!!」

言葉が途切れたら麻子は声をあげて泣き出すだろう。

強がりを書いて生き続けた自分が崩れそうで恐かった。

それ程学ぶことが好きではなかったが、家を離れたくて進学した。

彼女は卒業しても家に戻ることはなかった。祖父母に逢いに帰るだけで、その日に戻っていた。

麻子は「これよりは在るを能わず」と自在な生き方を選んだ。決して幸せな選び方ではなかった。

もつと素直に生きたかった。

挨拶などは、どうでも良かったのだ。父と母との間に入って手をつないで歩きたかった。

たった、それだけの事が出来ない廻り道。

「麻ちゃんに毎月、病院の支払いや仕送りをして貰っていることも、とうさんは知っているのよ。気の強い人には辛いことかもしれないけど、『こんな筈ではなかった』がとうさんの口癖だったのよ……」

父の言葉は酷であったが、父の萎えた足が眼に浮かんだ。

湖に出た。湖の彼方に朱色の太陽が落ち始めた。秋の落日は早い。麻子と母は足を留めた。

「かあさん。綺麗な夕日!!」

麻子は母の薄い肩に両手をかけると、落日の方角に向けた。揺めく小波は太陽と一つになり、一瞬赤く燃え上がった様に見えた。

母は額に手をかざして空を見上げた。

母の手も顔も茜色に染まった。壮大な落日。

麻子の幼影なのであろうか。

この様に美しい夕焼けを、彼女は母と一緒に何処かで見たと確かに眼にした。

若く美しい母は麻子の手を引いて海辺に立っていた。

濡れた砂の上で、貝殻や小石がルビーの様に輝いていた。手を引かれていた麻子は幼かった。

裸足の下を擦る様に潮が寄せ潮が引いた。

母の手は柔かく暖かかった。

「本当に綺麗な夕日だこと!! 麻ちゃん!! 何もかも忘れてしまうほど……」

母は繰り返した。麻子は空白の想い出が甦ってきた。母の声は彼女の胸に快くひびいた。早い落日はバス停に引き返す母娘の足許を、すっかり暗くしていた。

了
(中区)

懲役十五年

長谷川 稔

深・深・深……秋虫の合奏すら聞こえなくなつたような深い秋の夜。風ぎきつた冷気が枯れ葉の梢に凝集し、節くれだつた樹皮をますます硬く悴ませていく。遠くの孤犬が時折はるか彼方で吠えているが、沈黙の乏しさを富ませるわけではない。痛みに似て、それは悲壮であり、ますます色濃く冬の接近を皮膚感覚で感じさせる。

そんな名前のない晩秋の夜。午前零時の天辺に時計の針が辿り着いたとき、孤独な絶望者の千々に乱れた想念が、急激に明澄さを擡げていき、若かりし時に持っていた清々しさを脳内に恢復させていった。現象としては、社会の底辺に沈み続けているのに、彼の住む陋屋がある種の抽象性を帯びていった。思索の湖がなみなみと清澄な水を湛えていき、止観の舟がその満々たる水面にたゆたゆと浮かび、夢想の風が晴朗と戦いでいった。

もはや彼は、惨めさにもだえ苦しむ賃労働者ではなくなつており、思弁を紡ぎ、創作の念を織り上げる書かざる詩人となつていた。

決してどこからも支持されることのない、選ばれることがない矜持に満ちた思索作家となつていたのであった。

彼は自身の内部の明澄さに気づくと、彼が陋屋の中、吊るされている事にも気づき、確かに木造アパートの一室にあり続けているはずなのに、天と地の両極に引つ張られていく。彼の肉体を通じてではなく、彼の精神そのものに直截的に影響が与えられ、彼の脳内宇宙そのものにダメージが与えられる。大脳新皮質から順番に引きちぎられ、次は大脳旧皮質、間脳、小脳といった具合にぼろぼろに崩されていった。同じ大脳辺縁系の扁桃体を取り除かれたときに、海馬ばかりが、彼の「精神」として残された。

突き刺すような恍惚と苦悶に苛まれ、彼は声なき絶叫の中で、静謐な明澄感に恵まれていった。彼は選ばれないことによつて、黙殺のかなたにおいて、逆説的に選ばれていたのであった。無名の夜に、大多数の緘黙者の代表として選ばれたのであった。

血ならざる透明な液体が、彼の「精神」から滴り落ちていき、そしてそれはまんまんと湛えられ、小さな沼として彼の陋室内に囲われていった。

脳髓の粉碎とともに、誕生した意識の無数の断片は闇に映える玲瓏たる煌めきの粒子となつて、小沼の周辺に広がつていった。繊麗たる小貝のようにも見えるその夥しさは、艶やかにして瑰麗であり、小さいながら、優美な気品を帯びて、超然と煌めいていた。夜天に輝く星々のようでもあるそれ

は、バラバラで無規範に散っているようでありながら、微細な摂理に貫かれているのであり、まるで占星術めいて、意義を隠していた。古めかしくも、最先端の科学を宿していたのであった。

「精神」になった彼が、残された純正なる意識の眼差しをその無数の輝きの貝の群に投擲してみると、ただの一つとして、一様なものなく、すべての形態・質量・輝きに変化があり、個性の独自を主張していた。中庸の美德・平均値の美しさ・均整美などはそこにはなく、すべては異形の極みであり「絶対」という終焉の始まりに到達していた。

またそれらはサロメが所望した預言者にして「神」の洗礼者ヨカーナンの首のように、
 生々しくも残酷にして厳肅に綺羅めいていた。そこで彼の「精神」は溢れんばかりの愛情から、そつと口づけをした。すると歓喜の澎湃に戦慄し、その過剰さゆえに、沼の小世界から投擲されてしまった。

*
 彼は自身ざんきが慚愧の谷にしばし転がっていたことを知った。

コキユートス 氷の幽冥、闇ですらない乏しい閉塞の世界の中に、転落してしまっていたのであった。「精神」の奥底まで凍りつく世界 また別の言葉で言えば 「魔」の宇宙 「キーン」 彼の脳幹に無機

質な激痛の矢が直接突き刺さる。まるで金鋸が内面から引かれたような、痛みに糾ひだされ、眼差しを投げやると、巨魁な存在が氷の世界の中央に繋がれているのが知られた。彼が自身の「海馬」に直截的に会話すると、「ダンテ」の書物から、そのものがルシフェル・墮天使・魔王であることに気づかれた。かつて端正を誇っていたその大翼は構造の蝙蝠の帆となつて無残に凍りつき、そして華麗であったその体軀はおぞましき肥満となり、醜悪に晒されている。

ルシフェルはただ氷に繋がれている囚人というわけではなく、またそのものも獄卒でもあった。三つに分岐した巨大な頭が、その貪婪な鬼齒で、それぞれ三つの影の存在を食んでいたからであった。生かさず殺さず半殺しの状態で食み続けていた。「ダンテ」の書物によると、歴史上の三汚点・三人の裏切り者 ロングヌス・ブルータス・ユダを銜くわえているはずであった。

忌まわしい風景の極み ここは黄泉の果てにでも通じてるのか？ 醜くも美しいその光景。凄艶 醜と美は斥けあい、決して折衷へと赴くことはなく、双方とも極端に分離しながら、破調に同衾する この怪異な悦よろこびしさ、残酷な清々しさ 「精神」である彼を恍惚と戦慄へと誘う。

紫色の唇とか黒い舌が滔々と生贅の血を容赦なく吸引し続けている しかし眼差しを向けている彼の「精神」が「忘我」の極み深淵に到達するにはまだ早すぎた。なぜな

ら・・・なんと魔王ルシフェルの三つの首が食^はんでいるものは、ロンギヌスでもブルータスでも、ユダでもない。他でもない彼自身であつたから・・・まだ海馬に成りきる以前の肉体を帯びていた当時の彼が、三分割され、三つの人格となつて、それぞれ違う惨たらしさで食^はられていた。

しかし食^はみ続けていくうちに、醜^{みにく}くも美しかった魔王ルシフェルの顔が、彼の血のせいであろうか・・・徐々に彼自身へと変貌していく・・・大魔となつた『彼』が、彼^をを食^はつていく・・・そしてその姿を冷徹の眼差しで見ているのも、彼の「精神」・・・これは『彼』が、彼^をを食^はべたい・・・彼を殺したいという・・・心の表象なのであるうか？ またこれは彼の心の中、すなわち『脳内宇宙』の魔の閉塞・・・心の独房なのだろうか？

「あなたに」・・・不調和な子供の声に、賢者の彼の「精神」が振り返ると・・・エグリちゃん、ゆがんだ唇で、自分の腕を食べながら、せせら笑っている・・・そして彼女の後方で、ガルボスが・・・いつもの不可解な形体・ルドンの一つ目の巨眼で、哀れっぽく「彼」の驚愕を睥睨^{へいげん}している。

＊

地獄の魔を見た彼と、『脳内宇宙』の深淵を知った私は、位相転移によつて、奈落のそこから、高みへと飛翔していく。

白雲を遙か眼下に従えた瀾^{うらみ}気^な漲^{たか}る高み、凜^{れん}乎^と痺^{しび}れる『絶対零度の狂気』の高みに到達していたのであつた。撰氏でも、華氏でもない、相対性、物理性を一切排した「絶対」の零度。誰も住み得ない、何もかもが行きえない。凍^こえの高みに転落し、転落することにより却つて克服した彼が、ここに居る。エグリちゃんもガルボスもここには存在し得ない。彼^がが化生した魔王も居ない・・・あるのは息苦しいまでに透徹した孤独と清明な恩恵、宇宙との連関たる蒼穹が存在するばかりである・・・彼は孤独の巉^{ざん}厳^{げん}に於いて、神として生まれ変わった太陽の暁光を拝む・・・そして誠実すぎて、明晰すぎて終に発狂してしまつた透明の老哲学者『過去』を、詩として斉誦する。

「あなた方の善人が持つ多くのものが、私に嘔吐を催させる。彼らの悪が嘔吐を催させるのではない。むしろ私は願う。これらの人々の錯乱が狂気であつたならばと。自ら破滅する、あの狂気が・・・」

まことに私は願う。そうした狂気が、真理とか忠実とか正義とか呼ばれているものとなればいいが、と。だが善人たちは、ただ長生きをし、哀れむべき快適な生活をするために徳を持つているのだ」

善意の彼岸が私たちを惹きつけ合う。時間・空間・次元を通り越し結び付けあう。

この叫び、血の「精神」は、癡狂院てききやういんに通じているのかもしれないが……だからこそ彼は決して治癒しない。ますます自ら狂つていく意図的狂者となるのだ。

……
……それは愛あひそして理想りやうきやう

……

*

もはや想像上の化け物は、彼の内外の何処にも存在しては居なかった。もうそのようなものと戯れる理由がなくなつたのであるから……

あるのは大いなる黒き〈不在〉の充溢じゆういつばかりであった。漆黒の深遠の中で、彼の心は戦ぎ、微妙なビブラートで震撼し、彼方が太虚たきょでもつて、それに答えた。始原の母なる胎動が、彼を抱いたのであった。

〈不在〉を通じて、彼は名のない誰かと交信することが出来た。幽かすかな「精神」の電流でもつて、心として触れ合つていたのであった。隣人愛ではなく、遠人愛の成就の瞬間であった。

最早、彼は孤独などではなかつた。大いなる黒色の海が媒介となつて、友誼ゆうぎが成立していたのであつたから。

透明な酩酊めいていのなかで、ますます冴さえていく意識。見えないままの姿ながら、彼は自身が巨大化していく感覚を覚えてい

つた。増上慢に由来する巨大さではなく、謙虚さに基づく大きさであつた。宇宙の遼遠さに呼応し、優美にとろけだしていった。

また名前を喪失していることを、嘆かなくなつていた。むしろ好事として考え、名のないことを誇り、世界による受容として感じていた。巨大な夜の〈海〉あるいは「死」という無の豊穡とせうじやくのようにすら想い、宇宙の巨女のように恩恵を意識するようになっていた。……神のように、名前で呼ばれる心配がない。

「死」に尚、憧れ続けている彼。しかしながら「死」への憧憬けいけいがあまりに広大すぎて、いまはただ瞳若どうじやくとして、手をこまねいているばかりである。

以前のように、小手先の手段に拘ろうとはしなくなつていた……だれかを傷つけ、それによつて、よりいっそう自分を傷つけようとはしなくなつていた。

(浜北区)

竹腰幸夫

歴史小説から私小説まで、多様な応募作品であった。本年も昨年度と同じく、生き難いこの「時代」に向き合った作品に秀作が多かった。しかもそれに正面からぶつかって苦しむというのではなく、その受け入れ方の柔軟さ、問題を包み込んでゆく心組みの豊かさ、共通点が見られたように思う。私たちの生き方に、あるいは幅ができてきたのかも知れない。

『水滴』 小学校の用務員として週三日を働く六十過ぎの主人公。かつて三方原開拓地で生まれ育ち、そこで夫と一人娘を得た。しかし今は一人暮らし。暮らし方が変わってしまった今、それを「覚えて実行する以外に生きる方法がない」屈辱にも耐えて働くのだ。孫との遊びの時が唯一ひとつの楽しみ。「ぼちゃん」という水滴のメールの着信音が鳴る。孫からである。一方、老いがじわじわと身に迫る。孫の生き生きとした姿を見つめる眼に過去の記憶が甦る。構成描写ともに優れていて読む者を引き付ける。

『きっかけ』 クラスに溶け込めず生徒指導の先生からもマークされている主人公（女子高生）。一方、本好きだが国語の授業が好きではない男子高校生。二人の出会い、きっかけが、少々乱暴だが巧みなシチュエーションで語られる。軽妙な青春小説。ところどころにえくぼのように光る表現力が魅力。

『犀ヶ崖』 「遠州大念仏」の起源物語。武田信玄の上洛南下に対する浜松城の徳川家康。双方の思惑、駆け引きの末の「祝田の坂」決戦。

これに破れて敗走する家康。夜闇が双方を一旦は分けて信玄軍は冬の三方原に野営。夜半、夜襲の恐怖と半蔵の暗躍によって犀ヶ崖への道逃げ惑う武田軍。こうして家康は逆転勝利を収めたが犀ヶ崖の飲み込んだ死者はおびただしいものであった。これを家康が供養したのが「遠州大念仏」の起源なのだった。単なる歴史小説に終わらず、今日の無形文化財を通して同じ土地（空間）に生きるものとの心をつなぐという構成が説ませる。

『鈴の音』 まるで右の『犀ヶ崖』に呼応するかのよう、まさにその「遠州大念仏」を、内気な高校生の心を通わせるきっかけとして描いた青春小説。難しい家庭環境に揺れる現代の思春期を、古い念仏のメロディ、リズムが掬いとるという設定が面白い。

『故郷（ふるさと）』 炭鉱の町筑豊を十五歳で出てきた「私」、少年時代を回顧する。映画館のただ見、大相撲の興業と賭博、「祇園祭」の山笠、そして悲惨な落盤事故と閉山、などが生き生きと語られる。そんな中「私」は残された仲間への後ろめたさを持ちながら集団就職によって離郷。やがて四十五年ぶりの祇園祭の夜。涙が故郷へのわだかまりを洗い流す。

『懲役十五年』 人間の「意識」「精神」の座標を、言葉の海の中に求めようとする抽象的作品。断片的には鋭く研かれた表現と感性が生きる。ただ、小説としては読者の共感を得られるかどうか。この作者には「詩」のジャンルへの挑戦を奨めたい。

『乱世の旅人・家康と勝頼の葛藤』 本誌54号、55号入選作の続編。筆者のこのテーマに寄せる情熱が心を打つ。史実を丁寧に捉えながら、家康と武田勝頼の二侯城攻防を巡る武将の心模様を描いた。副題では「家康と勝頼の葛藤」だが、むしろ二侯城主依田信蕃（よしたけ）に徹底的に焦点を当てたほうがよかつたのではなからうか。

小説選後評

柳本宗春

今年は、作者の意欲が例年以上に感じられました。「ドラマ」を感じられる作品が多くなってきたと思います。ただし、毎年申し上げているように、原稿は読み返して、校正、清書をしてから提出することを心がけてください。

では、恒例によりまして、一言ずつ感想を記します。

「あの岬の向こうに」

構想は良いと思うが、五十枚でこれだけの話をまとめようとして、描写が説明になってしまっている。また、登場人物の名前が途中で変わってしまうなど、未完成という感じがする。

「長篠の戦いと小栗大六の心境」

歴史を説明するのではなく、主人公を決めて、その歴史の中のドラマを描くと、より小説らしい作品となるだろう。

「母・娘」

物語はきちんと構成されている。展開にも無理が無く、ラストシーンの舞台も良い。会話表現にもうひと工夫を。

「好日点描」

生活の周囲の動物、自然などを、触れあいながら見つめる視点が良い。随筆とした方がしっくりくるだろう。

「乱世の旅人続編（家康と勝頼の葛藤）」

力作であるが、詰め込みすぎの感がある。焦点をしばって深めてほしい。

「鈴の音」

「岩村」さんの姿の描写が足りないのが惜しいが、一気に読んで、青春の甘さ、切なさを味わわせてくれる、スタンダードナンバーのような、爽やかな秀作。

「犀ヶ崖」

現在と結びつける工夫が今ひとつ生きていない。犀ヶ崖にまつわる歴史物語の部分のドラマを十分に展開させてほしい。

「水滴」

主人公である祖母の目から見た娘と孫の姿、自分に迫る老後の心配など、とてもよく描けている。

「涙ボロン」

物語の流れが良くできている。全体を見つめるものとして、洋蔵の視点から描くと、より読者が感情移入しやすいだろう。

「きっかけ」

ライトノベルの書き手として手慣れている印象を受けた。

「あさきゆめみし」

終戦後のソ連での抑留生活を描いた部分は読み応えがある。老人ホームの描写はもっと軽くて良いのではないか。

「懲役十五年」

昨年に続き観念論的手法の小説。評価が難しい。

「初恋のひと」

筆致が軽妙で面白いし文章もうまい。ただ、自伝的随筆という雰囲気、小説としての構成には物足りなさを感じてしまう。

「故郷（ふるさと）」

一つ一つのエピソードが興味深い。ぜひ、回想録というだけでなく、その時代を映すドラマを描き出して欲しい。

「やゝ元気」

これも追悼の意味を込めた回想録ということで、小説としての評価は難しい。散文詩のようでもある。

児童文学

「市民文芸賞」

「ずつとつしよ」

宮島ひでこ

今朝、ぼくがいつものように、窓ぎわのベッドから、庭をながめていると、二羽のむく鳥たちが、キョロ、キョロとまわりを見まわしている。さびついた物干しざおは、大きいのびたキンカンの木のそばにあり、鳥たちが止まるのに、とっても都合のいい足場となっている。

黄色い実を、たくさんつけたキンカンの枝は、おもそうに、先の方がたれている。そして、その実は、お陽さまの光をあびて、さらさらと風にゆれている。

『こんにちは、むく鳥さんたち……』
ぼくは、心の中であいさつをしてみた。

すると、知らん顔をして、一羽のむく鳥は、ぶらんこにのっているように、パサ、パサと木の枝をゆらしながら、実を食べはじめた。もう一羽のむく鳥は、のんびりと木の根もと

を歩きながら、落ちているキンカンの実をつついている。そして、鳴きもしないで、ときどき、ぼくの方を『あいつは、何もの？』といった顔で、ふしぎそうに見ている。

ママは、楽しそうに、歌を口ずさみながら、台所にあるテーブルの上に、白くて丸い形の花びんを、静かに置いた。そして、ぼくの頭をなでて、

「ボンタ、見てごらん。きょうのお花はね、フリージアって言うのよ。いいかおりよ」

ママは、花びんごと、ぼくの顔の前に近づけて見せてくれた。

『うん、いいかおりだね、ママ』

ぼくは、毎日、ママが楽しそうに花を飾って、その花のままを教えてくれるのが、とってもうれしい。

ぼくは、ミニチュアピンシャーという小型犬の雄で、毛の色は茶色。生まれてからペットショップでくらしていた。生

後三カ月を過ぎようとしていた頃に、ママの子供になった。

あれから、何年たったのだろうか……
しあわせだった。

いつものように、ぼくが、ベッドにすわっていると、ママは、ぼくの顔をじーっと見つめ、両手の指先で、ゆっくりりと、頭、目のまわり、口のまわり、鼻となでながら、歌うように声をかけた。

「ポンタ、お顔がまっ白ね。おじいちゃんになったね。お鼻と、お口のまわりが、白髪のアートマークでかっこいいよ」
ぼくは、ママの声をしつかりきいた。

「ポンタ、きょうは、あさちゃんの誕生日なのよ。おかいものに行ってくるから、いい子でいてね」

ママは、元氣よく台所を出て行った。

あさちゃんは、パパとママのひとりっこである。

ぼくは、ベッドの、やわらかいふちに顔をのせ、すっぽりとかぶった毛布の中で、玄関から、きこえてくる音に、耳をかたむけ、じーっとしていた。ママが「バターン」と、玄関を閉める音がする。

『行ってらっしゃい』
そっと、買いたったものでかけていくママの方へむかって話しかけた。

でも、ママは、わすれものをするのが得意で、出かけても、かならずもどってくる。

『きょうは、どうかな?』

と、思っていたら、バタ、バタと足音が大きくなって近づいてきた。

『何をわすれたのだろう』

「ああ、ポンタ、ママ、かいもの袋をわすれたわ。また出かけてくるからね。待っててね、おりこうさん」

ママは、息を、はあ、はあさせて、ぼくの顔をのぞきこむと、わすれたかいもの袋を両手でかかえながら走っていった。

しばらくして、玄関の方が、さわがしくなった。出かけたはずの、ママのかん高い声。

「ポンタ、ポンタ、大丈夫?」

「なにが、おこったのだろう」

毛布の中から、顔を出してママを見上げてみると、青ざめた顔で、ぼくを心配そうに見つめている。

「ポンタ、ママね、胸がきゅんと痛くなって胸さわぎがしたの。ポンタのことが、急に心配になってね……」

「ぼく、なんともないよ」

そう言ったけど、でも、本当は、胸が、ときどきいたくなくなってくる……

「ああ! 安心した。ポンタ、ママは、ほっとしたわ」

ママは、また出かけていって、今度は、ちゃんとかいものを用意させてかえってくると、あさちゃんの誕生日のごちそうと、ぼくの夕食の準備をはじめた。

今夜のぼくの食事も、あさちゃんと同じ特別なメニューだと

いう。

ミルクと、カボチャ、ニンジン、さつまいも、キャベツ、ブロッコリーをゆでたもの、そして、ぼくの大すきなチーズ。

ママは、ぼくがペロリと、だれよりも先に食べ終えたので、うれしそうに、ぼくの背中をなでながら、

「ボンタ、よかったね。元気になるといいね」と、ほほえんでいる。

あさちゃんの十才の誕生日。ママ、パパ、あさちゃん、そしてぼく。にこにこ顔がやわらかいローソクのあかりにうかぶ。チョコレートケーキに、ローソクがともされる。

『おめでどう、あさちゃん』

ぼくも、うれしくて、あさちゃんの方をながめていた。

「ボンタ、ケーキ、ほら、食べてごらん、おいしいよ」

あさちゃんの手のひらにのせてある、ふわふわのカステラ。ひと口で食べられるように、小さくちぎってある、ぼくは、あまりのおいしさに、あさちゃんの手のひらを、何回もなめつづけた。

それから

「わん、わん、わん」

それは

「あさちゃん、おたんじょう日おめでどう」

といういみだ。

「ボンタ、ありがとう」

あさちゃんは、ぼくの顔に頭をくつつけるようにして、ぼく

をだきしめてくれた。

あさちゃんのたのしい誕生会が終わったあと、しばらくして、ぼくは、ときどき呼吸することがつらくなってきた。でも、ママは、そのことに気がつかないでいる。

「ボンタ、きょうは、お散歩してないから、行ってこようね」

と、言って準備をはじめている。

『ママ、ぼく、息ぐるしい……』

ぼくは、むねがいたくなってきた。

ママは、いつものように、ぼくをだきあげ、毛がついたコートを、ぼくに着せると、歩きながら首輪をつけて、玄関を出た。

夜の風は冷たく、ぼくは、目を閉じていた。お月さまは、すきとおったような光で、あたり一面をつつみこむように照らしている。

歩いている人も、走っている車もない。

いつもの、お散歩コースへとむかった。

ぼくは、動くのがつらい。十歩ほど、ふらつきながら歩いた。

両足がもつれ、たおれそうになった。そのすがたを見て、あわてたママは、急いで、ぼくをだきあげた。

「ボンタ、つらかったんだね。ごめんね。気がつかなかったね。もう、お家へ帰ろう。体の具合が悪いんだね」

ママは、ぼくをだきしめ、着ていたコートをぬいで、ぼくの体をあたためてくれた。

ママの目には、涙があふれでている。

『ママ、ぼく苦しいよ』

ママは、ほおずりしながら、

『ポンタ、がんばるのよ、ポンタ……』

ママの大粒の涙は、ぼろ、ぼろと、ぼくのほほを伝わって流れ落ちていく。

ママは、ぼくをだいたまま家へと急いだ。

『ママ、いつも散歩の時、教えてくれた草や木、花のかおり、なつかしいよ。ママ、いっしょに散歩した道だね。ママの足を、電柱とまちがえて、おしっこかけたりしたね……』いろいろな想い出が、息苦しさの中に、なつかしく浮かびあがってくる。

『ポンタ、ふたりですわって、夕涼みをした所だよ。いろんなことを語りあったね。ママの子供でいてくれてありがとう。ポンタ、ありがとうね……』

いそぎ足で歩きながら、ママは、ぼくにほおずりしてくれた。家にもどると、ママはぼくを、ベッドにそおとねかせた。

ぼくは、目をとじて、今までのことをふりかえってみた。

ぼくは、五才ぐらいの頃、お散歩をしていた時、近所の白い大きな犬に、突然おそれ、背中を二カ所かみつかれた。血だらけになったぼくを、あさちゃんは、泣きながらだいて家に帰り、ママといっしょに病院へつれていってくれた。手術して傷は治ったけれど、それからのぼくは、大きな犬を見ると、体がふるえ、ワン、ワンと、ほえつづけるように

なった。

あの時は、ほんとにこわかった。

迷い子になったこともある。

家の玄関が少し開いていたので、ちよつと出かけてみたくなり、とびだしたのだ。

車がいつも混んでいる道を渡り、道にそって歩いて、十字路を細くなつた小道へ入り、左手の家々が並んでいる中に、犬小屋を見つけ近づいてみた。

黒い毛の、ぼくより少し小さい犬が、小屋から、ぼくの方をみて、あなたはだーれとたずねているような顔でみつめている。しばらくすると、後ろむきになって、ひなたぼっこをはじめた。

ぼくも同じようにしていたら、家の中から見ていたおばさんが、

『あなたは、どこの子？ あなたは、自分の家に帰れるでしょう。さあ、早く、お帰りなさい』

『ぼくは、そつと出てきたし、初めてだからどうやって帰るか、わからないよ』

ぼくは、ほんとうに、どうしていいのか……困っていた。しばらくすると、遠くの方から、ぼくを呼んでいるママの声がきこえてきた。

『ポンター。ポンター』

だんだん、声がスパーマーケットの駐車場あたりから、ひびいてくる。

ママだ。

ぼくは声のする方に、両耳をじっとたてた。だんだん、ママの聲が近づいてきた。手には、ぼくの写真をにぎりしめている。

『ママー、ここだよ、ママ』

ぼくは、しつぽをふりながら、ママのところへ走っていった。

「ああ、よかった。ポンタ、みつかつて良かった。大丈夫？こわかったね」

ママは、ぼくをだきあげると、犬小屋のそばにいたおばさんに、お礼をいった。

「ポンタちゃんというのね、この子。今、お家に帰るように、お話していたところだったんですよ」

おばさんの話をきいているママは、とてもうれしそうだった。

ぼくが、ママの子供になって、十六年四カ月。

人間の年令だと九十才をとくに越えている。両手足の関節は曲がり、ゆつくりしか歩けなくなつた。最近では、目も見えにくくなり、ぶつかったりする。散歩は、いつもママにだっこされていることが多く、ねてばかりいるようになった。

そして、ぼくが苦しさを最後に訴えた時、ママは、ぼくの目をしっかりと見つめて、わかるように、大きな声で、

「ポンタ、あなたは、おりこうなワンちゃんだったよ。ママとパパの子供になってくれてありがとう。きつと、天国という所へ行くと思うよ。ポンタのこと、神さまに祈っているからね。しっかりとのおくからね。神さまのおっしゃると

おりに行くんだよ。わかったね。ママは、いつもポンタのことと忘れないよ。ありがとう。又、会えるよ。ポンタ、ママは、ポンタのこと大すきだからね」

ぼくは、ママの言葉をしっかりと聞いた。それから、しずかにママのむねにだかれ、ふかいねむりについたのだった。夜中じゆう、ずつとぼくのそばで看病していたママは、まぶたが腫れるほど泣いていた。

ママは、ぼくの四十九日の法要が終わるまでは、と言って、神だなのそばに、ぼくの写真を飾り、水とドッグフードや、ぼくの好きだったものを、お供えし祈ってくれた。そして、花のかおりが好きなぼくのために、ぼくが食事の時に使っていた器に、花をいっぱい飾ってくれた。毎日のんでいた水専用の器も、花を生ける器となつた。

ぼくが、さようならをして一カ月過ぎたある日の朝、新聞をみていたママは、黄色の水仙や、ピンクの金魚草を飾りながら、ぼくの写真にむかつて、まじめな顔をして話しかけた。

「ポンタ、ミュージカルをみてこようと思うの。横浜にあるキャッツシアターという所であるんだけど、人間が猫ちゃんの姿になって、表現する舞台なの。ポンタは、ワンちゃんだから、おもしろくないかな。でも、ついてくる？」

ママは、いつのまにか、朝、昼、夜、出かける時も、帰ってきた時も、ぼくの写真にむかつて話しかける。

ぼくは、いつも、なにかわすれるくせがあるママが心配なので、だれにも見えない姿になっていたけど、ついて行くこと

にした。

ミュージカルに出てくる猫ちゃんたちは、人間なのに本物の猫ちゃんの動きにそっくりで、ぼくは、ママの背中に、かくれるようにしてながめていた。

明るいミュージカルと、期待していたママは、一匹の猫ちゃんが、天に召されるシーンもあったので、暗い気持ちのまま、家に帰ることになった。

その帰りのことだった。ミュージカルで、となりにすわったおばさんが、帰る方向が同じということで、ママを車で送ってくれることになった。

外は、星がいっぱいの空で肌寒い。ママは、深呼吸したけど疲れた表情で、車のうしろの席に目を閉じてすわった。

車は、広い道へ出た。

目をあげ、はっと気がついたママは、大きな声をはりあげた。

「あら！この道ちがうんじゃない？」

「ええっ、本当？」

車が、こつちに向かってくる。

「ああ、まちがった。わたし、逆に走っているわ！ どうしましよう」

「とにかく、ハンドルを切りかえて！」

ママは、かん高い声で叫んだ。

まんまえから車が来る。

一秒、二秒、三秒……危い！

ぼくは、すわっていたママのひざから飛び出し、むこうから

走ってくる車の前に、光となって立ちほだかった。

「キキーツ、キキーツ」

ひびきわたる、ブレーキの音。

ママの乗った車は、相手の車に、ぶつかる寸前で、その車とすれちがいがながら、はなれることができた。

『ママ、大丈夫？』

ママの顔は、青白く、力がぬけた表情をしている。

「あれは、たしかにポンタだった。

光の形がポンタにそっくりだった。ポンタが助けてくれたんだわ」

光を目で追うように、ぼくをさがしているママ。

「ポンタ、ありがとう」

ママは、かほせい声で、バックにつけてあるぼくそっくりの、犬のアクセサリーをにぎりしめながら、なんどもくりかえしていた。

事故の夜、ママは、夢の中でぼくの姿をみたという。黄金色に光りかがやく大草原。

その中を、ぼくは、大ぜいの仲間たちといっしょに、楽しそうに走りまわっていた。

ママが、ぼくの名前を呼ぶと、ぼくは、うれしそうに、しっぽを強く左右にふって、ママへ近づき、飛びはねていたという。大草原のなかでぼくの姿も、黄金色に光っていた。そして、とつてもしあわせそうだったと。

ママは、夢の中でぼくに会ってから、明るくなった。

ぼくが天国に行つて四十九日目、和尚さんに御経をあけてもらう日（一月三十日）、ママたちは、ぼくがねむつてい
るお寺にきてくれた。

その日は、晴れわたつた春のような、あたたかい一日だった。
ママ、パパ、あさちゃん、ぼくのすきなミルク、かぼちゃ、
さつまいものゆでたもの、パン、りんご、ドッグフード、お
花をお供えしてくれた。

その後で、ママは、和尚さんに、ぼくのことを話した。ぼく
の、小さい時から、年をとつて、天国に行くまでと、ぼくが
光になって交通事故からママをまもつた話や、ママの夢の話
をママからきいた和尚さんは、うなずきながら、にこやかな、
まなざしで、

「ポインタちゃんは、ほんとうに、お幸せなワンちゃんでは
ね」と、話された。

ぼくは、天国へ行つて、ずいぶん時間が、とおりにすぎてい
つたけれども、いつもママたち、みんなの心の中にいる。

ママは、ぼくの写真が飾つてある台所のカウンターに、朝
も、夜も、花を生けかえている。

白や、黄色、むらさき、ピンク、いろいろな種類の花の色と、
かおりに囲まれたぼくは、写真の中で、そつと、ママに語り
かける。

『ぼく、とつてもしあわせです。』

ぼくは、ママのポインタだからね。

ずつと、いっしょだよ。

ママ、わすれものなあい？

いつも、ママは、わすれものしていたね。

ほんとにママは、わすれもののチャンピオンなんだから』

（中区）

「入選」

空を飛んだニヨロ

生崎美雪

畑に夏がきました。

「ふあー」

かぼちゃの葉っぱの上で、大きくのびをしたのは、いもむ
しのニヨロです。

ニヨロの細長い薄茶色のからだに、おひさまの光がふりそ
そぎました。

「おはよう、ニヨロ」

おひさまがにっこりほほえみます。

「おはよう、おひさま。今日もまた暑くなるの？」

「そうね。雲のおじさんが、空のどこかで、ねむったまんま、起きてこないのよ。雨を降らせることを、忘れてしまっっているみたい」

「ふーん。それで、ずっと雨がふっていないんだね。畑の野菜さんたちがなかなか顔をだしてくれないよ」

「ほんとうね」

おひさまは、ちよつとさみしそうな顔をしました。

そこへ、いつぴきの黄色いちようちよが飛んで来ました。

ニヨロの頭の上にちよこんととまって、言いました。

「おはよう。ニヨロさん」

「おはよう。ちようちよさん」

「毎日暑くて、ひまわりの花も元気がないのよ。わたし、今からあつちの山まで、飛んで行こうと思うの」

「あつちの山？ 山の上は、すずしいの？」

「そうよ。この畑よりはずっとすずしいわ」

「へえ。それなら、雲のおじさんは、きつとその山の上で、ねむっているんだらうね」

「雲のおじさん？」

黄色いちようちよは、ニヨロの顔をのぞきこみました。

「そうだよ。おひさまが言ってたんだ。雲のおじさんがねむっていて、雨がふらないから、いつまでも暑いんだって」

「そういえば、山の上に、大きな白いふわふわした雲がうかんでいるわよ」

「それ、雨をふらせてくれる雲のおじさんだよ」

ニヨロは、遠くの空を見つめました。まっ白い雲が、ほんやりと見えるようでした。青い空の下には、深緑色の山が広がっています。

「それじゃあ、行ってきます」

黄色いちようちよがひらひらと空にまいあがりました。

「待って。ぼくも一緒に連れて行って」

ニヨロがあわてて言いました。

「いいわよ。だけど、ニヨロさん、あなたのせなかには羽根がないじゃない。山は高くて遠いところにあるでしょう。羽根をつかって、飛んでいかなくてはいけないのよ」

ちようちよは、黄色の羽根を、ひらひらさせてみせました。

それから、ふわりと風にのって、ニヨロの上を上品に舞い飛びました。

「ぼくにも、あんなにきれいな羽根があつたらなあ」

ニヨロは、ちようちよの羽根をうらやましそうに見つめました。

「ニヨロさん、この畑のどこかに、あなたにピッタリの羽根があるかもしれないわよ。さがしてみたら？」

ちようちよはそう言うのと、黄色い羽根を、ひらひらさせて、山のほうへと飛んでいってしまいました。

(ぼくに、ぴったりの羽根？ この畑のなかにそんな羽根があるのかなあ)

ニヨロは、畑をぐるりと見渡しました。

畑には、緑色の草がたくさんはえているばかりです。

(この草のなかをさがせば、さつきのちようちよがいいうように、ぼくにびつたり羽根が見つかるかもしれない。よし、さがしてみよう)

ニヨロは、かぼちゃの葉っぱから、細いくきをつたって、乾いたうす茶色の土の上におりました。土の上を、ニヨロニヨロとゆつくりすすみます。

顔をあげてみると、かぼちゃの茎に、小さな丸い顔がたくさん見えました。

薄い緑色とオレンジ色のかぼちゃのこともたちです。

「きみたち、雨が降るのを待っているのかい？」

ニヨロは、ちよつとおにいさんぶつて、かぼちゃのこともたちに声をかけました。すると、一番小さなオレンジ色のかぼちゃが、からだをゆらゆらとゆらしました。

「そうなの。あんまり暑いから、ずつと葉っぱの間にかくれていたの。はやく雨がふつてくれないかしら」

「ぼくが、ねむっている雲のおじさんを起こして、早く雨をふらせてくれるようにたのんでくるからね」

「そんなことができるの？」

「ああ。背中につける羽根が見つければね」

「その羽根は、どこにあるの？」

ニヨロは、少しこまったようにからだをニヨロニヨロうごかししました。

「この畑のどこかにさ。かならず見つけてみせるよ」

「お願いします」

かぼちゃのこともたちがゆらゆらとからだをゆらして、ニヨロの薄茶色のせなかを見送ります。

カボチャ畑を通りぬけていくと、こんどは、トマトのこともたちが見えてきました。小さなトマトのこともたちの顔は、みんな黄緑色です。

「トマトさん。きみたちも雨が降るのを待っているんだね」

「そうです。雨がふつたら、ぼくたちの顔も、ぴかぴかの赤色になるんです」

「そうかい。ぼくがきつと雨がふるようにしてあげるからね」

「そんなことができるの？」

「ああ。羽根が見つければね」

「待ってます」

黄緑色のトマトのこともたちが声をそろえて言いました。

ニヨロは、トマト畑を通りぬけて、トウモロコシの实の間をニヨロニヨロすすんでいきます。どこかに、羽根が落ちていないか、こげ茶色の土の上をみつめながら。

おひさまの光ががりつけて、土が焼けるように暑くなってきました。

「暑いなあ」

それでもニヨロは、どうしても羽根を見つけたくて、一生懸命にすすんでいきます。

ぼうぼうとはえている草をかきわけるように、じつと前を見つめて、ずんずん、ずんずん、すすんでいきます。

（ほくにびつたり羽根は、いったいどこにあるんだろう。ああ、疲れた）

ニヨロは「はあー」と大きなため息をつきました。すると、どこからか、こんな声が聞こえてきました。

「ニヨロさん、私のところで、少しおやすみなさい」

大きな白い石が、ニヨロに声をかけたのです。

「ありがとう」

白い石は、大きなレモンの木の下にあつたので、のつてみると、ひんやりしていました。

「はあ、よかつた。これで少し、涼しくなつたよ。ありがとう」

「ニヨロさん、君、羽根をさがしているんだつてねえ」

白い石がこう言ったので、ニヨロは、びつくりしました。

「そうだよ。でも、どうして知つているの？」

「さつきまで、黄色のちようちよさんが、わたしのところで休んでいてね。そのちようちよさんが、君のことを話していたんだよ」

「ほくに、羽根を探すようにとつてくれたちようちよさんだね」

「そうだよ。『もうじきここに、いもむしのニヨロさんが羽根をさがしくるだろうから、助けてあげてね』て、言つていたんだよ。ニヨロさん、羽根は見つかつたのかい？」

「ううん。まだだよ。たくさん歩いてさがしてみたんだけど、見つからないんだ。本当にこの畑に、羽根はあるのかなあ。

僕、疲れちゃつたよ。もう羽根をさがすのは、あきらめようかなあ」

「白い石は、しずかにニヨロの話をきいていましたが、優しい声で、こんなことを言いました。

「ニヨロさん、ここで、深呼吸してごらん」

「え？ しんこきゅう？」

「そう。まず、ゆつくりと深く息を吸つて」

白い石の言うように、ニヨロは、すーっと畑の空気を吸つてみました。

レモンの香りをつつみこんだ、さわやかな風が、ニヨロのからだに吸いこまれました。

「気持ちがいいなあ。いい香り。ほく、この香り好きだよ」

「さあ、こんどは、思い切り、息をはいてごらん」

「ふーっ」と思いきり息をはくと、ニヨロの目がきらきらと輝きました。

「なんだか、とっても元気になつたみたいだよ。ありがとう。ほく、もう少し、羽根をさがしてみようよ」

「きつと、見つかるよ。君にびつたり羽根が」

白い石は、にっこりと微笑みました。

ニヨロは、つめたい白い石から、また、あつい土の上におりました。土は、焼けるようにあついです。それでもニヨロは、元気をだして、きゅうり畑のなかを、ずんずんすすんでいきます。

「きゅうりさん、もうじき、雨を降らしてもらおうからね」

「待ってます」

きゆうりたちは、黄緑色の体を小さくゆらしました。

ニヨロは、草の間から、空を見上げました。おひさまが、空の上からニヨロを見つめています。ニヨロは、おひさまにむかって言いました。

「おひさま。ぼくの声聞きえますか？ ぼくはどうして、こんなにならなければならないのですか。自分の羽根を見つけないもむしなんです。よくにびつたりの羽根は、本当にあるんですか？ ぼくも、ちょうちよさんみたいに、自由に空を飛んでみたいんです」

おひさまは、優しく微笑みました。

おひさまの金色の光が、畑のまんなかの、小さくすのきを照らしました。

「ニヨロさん。このくすのきの葉っぱを食べてごらんさい」

風が吹きました。

くすのきの葉っぱが、さわさわとゆれます。

ニヨロは、小さくすのきの幹によじ登りました。長く伸びた枝には、緑色の丸い葉っぱがたくさんついています。

ニヨロは、そのくすのきの葉っぱを一枚、はしのほうから、少しずつ食べてみました。

「おいしいなあ」

二枚、三枚とくすのきの葉っぱを食べていきます。そして、とうとうくすのきの葉っぱを十枚も食べてしまいました。すると、薄茶色だった、ニヨロのからだは、みるみる黄緑色に

かわりました。

「わあ。ぼくのからだ、こんなにきれいな黄緑色になったよ」

ニヨロは、びつくりして、くすのきのこげ茶色の枝の上で、黄緑色のからだをニヨロニヨロ動かしました。

「ふわー。おなががいっぱいになったら、なんだかねむくなってきたなあ」

ニヨロは、くすのきの枝の上で、いつのまにか眠ってしまいました。

どのくらい眠っていたのでしょうか。

目をさましたニヨロは、おどろいて、声をあげました。

「うわ。真っ暗だ。何にも見えないよ」

ニヨロのからだは、黄緑色の葉っぱのようなからに、すっかりとおおわれていたのです。

「きゅうくつだなあ。どうして、こんなことになっちゃたんだろう。ぼくは、羽根がほしかっただけに」

ニヨロは、真っ暗なからの中で、もぞもぞと動きました。からの中は、おひさまの光が少しもさしこんできません。

ひんやりとしていて、真っ暗で、何の音も聞こえません。「ぼく、また、おひさまの光をあびたいよ。外の空気をすいたいよ。鳥さんたちの鳴き声を聞きたいよ。野菜さんたちとお話したいよ。ぼく、ここから出たいよ」

ニヨロは、暗いからのなかで、ひっそりからだを動かします。

かさかさと小さな音をたてて、からのさきつぽがやぶれま

した。

ニヨロの体から、真つ黒な細長いひげのようなものがでてきたのです。おどろいて、ふるえるように動かすと、その空気を感じます。

「あつたかい。おひさまの光だ」

二つの黒い目が、畑を見回します。

緑色の草が、しおれかかっています。野菜たちが元氣なく頭をたれさげています。

「そうだった。雨。雨をふらせてもらわなくっちゃ」

ニヨロは、ちぢこまった黒いからだをすこしずつ動かしました。葉っぱのようなからの中から、外へ出ようとします。

「さあ、もう少し」

おひさまが、金色の光をいつそう輝かせて、ニヨロを照らします。

ニヨロは、びっくりしてしまいました。いつのまにか、ニヨロのからだには、しわしわの黒い羽根がついていたのです。ニヨロは、からだについた、しわしわの黒い羽根を、ゆつくり、ゆつくり、ひろげます。

おひさまの光のなかで、真つ黒い羽根が、ふわーっと大きく開きました。

左右に大きく開いた黒い羽根には、水色に光る二本のすじがついています。

「わあ。羽根だ。ぼくの羽根だ。すごいや。僕の体に羽根がはえたよ」

ニヨロは、水色に光るすじのついた真つ黒い羽根を、ひらとゆらしました。すると、ニヨロのからだだが、ふわりと、空にうかびあがつたではありませんか。

「うわー。飛べた。ぼく、飛べたよ。おひさま」

「よかったわね、ニヨロ。その羽根があれば、山の上まで、飛んで行けるわよ」

「ありがとうございます。おひさま。ぼく、これから、空を飛んで、雲のおじさんに会ってきます」

ニヨロは、空高く舞い上がりました。

「ニヨロさん、よかったわね」

下のほうから白い石の音がします。

「羽根がはえたんだね。ニヨロさん」

畑の野菜たちが、空をとんでいくニヨロを見あげています。

空は青くて、どこまでも広がっています。

ニヨロは、黒い羽根をいっしょうけんめいにひらひらとはたかせながら、山にむかつてとんでいきます。水色のすじがきらりと光ります。

畑がどんどん小さくなっていきました。

「ああ、気持ちがいい。空を飛ぶって、こんなに気持ちがいいんだね」

生まれて初めて飛んだ広い空のすばらしかったこと。

むこうから、つばめの親子が飛んできました。

「こんにちは。素敵な羽根ね。とつてもお似合いよ」

「ありがとう。つばめさん。ぼく、いもむしのニヨロです」

「いもむし？ よく見てごらんさい。あなたは、ちょうちよさんになったのよ」

「え？ ほくがちょうちよに？」

ニヨロは、びつくりして、自分の姿をよく見てみました。ちつぽけないもむしは、どこにもいません。

ニヨロは、アオスジアゲハというちょうちよになったのです。

「ほく、ほんもののちょうちよになったんだね」

ニヨロは、うれしくなりました。水色のすじのはいつた黒い羽根をひらひらさせて、つばめの親子のまわりをくると一周、飛んで見せました。

「ほく、これから、あつちの山まで行くんだよ」

『みどりのやま』ね。わたしたちの住んでいる山よ」

『みどりのやま』？ そういう名前なんだね、あの山は。

どんなところなの？」

「すてきなところよ。行けばきつと、わかるわよ」

ニヨロは、目を閉じて、まだ行ったことのない『みどりのやま』のことを想います。

「ほく、早く『みどりのやま』まで飛んで行きたいよ」

「あんまりあわてて、途中で疲れてしまわないように、のんびりと景色をながめながら、飛んでいくといいわよ」

つばめのお母さんが優しく微笑みます。

「そうだね。そうするよ。つばめさん」

「すてきな空の旅を。いってらっしゃい」

「いってきます」

ニヨロは、羽根をふわーと大きく広げました。風につて、ひらひらと、青い空の上をゆつくり飛んでいきます。

『みどりのやま』をめざして。

「ニヨロさん、こつちよ」

風がニヨロのからだに、ふーつとやさしく息をふきかけて、『みどりのやま』のほうへとみちびいてくれます。

「ありがと。風さん」

ニヨロは、周りの景色を見渡しながら、空の上をゆつくり飛んでいきます。

石のトンネルをくぐり抜けると、ニヨロの目の前に、高く大きな、緑色の山が広がりました。

『みどりのやま』だ。やつとついたんだね」

ニヨロは、『みどりのやま』の前で、いっしゅん羽根をとじて、大きな白い百合の花にとまりました。そして、百合の花の甘い蜜を吸いました。

それから、「はー、ふー」と、大きく深呼吸をしました。『みどりのやま』のすんだ空気がニヨロのからだのなかにすーつとはいってきます。緑色の木々のかおりです。

「あー。気持ちがいい。元気がでたぞ」

くねくねと曲がった道がみえてきました。

深緑色の杉の木がたくさん、空にむかつてならんでたっています。山の斜面では、笹の葉がゆれていきます。

杉林をすぎると、細長い川がまっすぐに流れています。き

らきらと銀色に輝いて。ぴしゃん、ぴしゃんと、魚たちの飛
びはねる音がきこえてきます。

川辺には大きなまつ白い山百合が、たくさん咲いています。
ふわりふわりと飛びながら、ニヨロは、山百合の甘いにお
りをかぎました。

山のとつぺんは、白いけむりのような霧がたちこめていま
す。

ニヨロは、その霧のなかへ、すーっとはいつていきま
した。霧のむこうに見えてきたのは、まつ白いもくもくした、大
きな雲でした。

雲は、スーと小さな音をたてて、ねむっているよう
でした。水色の空の上をぶかぶかとうかんで。

ニヨロは、しずかに羽根をとじて、くものおじさんのやわ
らかいあたまとまりました。

「くものおじさん、こんにちば」

「スー、スー」雲は、ねむったまま、ちよつとも動きません。
「雲のおじさん。起きてください」

ニヨロは、もういちど、雲のおじさんに声をかけます。

「スー、スー」くもは、やっぱりねむったままです。そこで
ニヨロは、雲のおじさんの頭の上で、羽根をはつとひらいて、
ぱたぱたとふりました。

「ふあー。クシヤン」

くものおじさんが、くしゃみをしました。

「雲のおじさん。目がさめた？」

「うーん。よく寝たなあ。おや？ 君は、誰だい？」

雲のおじさんは、白いわたのようなからだをもくもくさせ
て、ニヨロを見ます。

「ぼく、アオスジアゲハです」

「ちようちよさんかい。君の羽根、とつてもきれいだね」

「ありがとうございます。ぼく、この羽根で、畑からここま
で飛んで来たんです」

「へえ。そんなに遠くから飛んで来たのかい。いったいどう
して、わしに会いに来たんだい」

「お願いがあるんです」

ニヨロは、雲のおじさんをじつと見つめました。

「なんだい、お願いって。言つてごらん」

雲のおじさんは、優しい声で言いました。

「雨を降らせてほしいんです」

「雨？」

「はい。畑の野菜さんや、木や、花、草たちが、みんな雨が
降るのを待っているんです」

「そうだったのかい。うっかり眠りこんでしまったんだねえ」

雲は、そういうと、「ふーっ」と大きく息をはきました。

すると、もくもくしたくもが、空いちめん広がって、灰
色に変わりました。

「ザザー」

灰色のくもから、大粒の雨がふってきました。

「みどりのやま」のはるか下にある、畑にむかって、たくさ

んの雨粒が、次から次へと降り落ちてきます。

「雨だ。雨がふった」

ニヨロは、羽根を思い切り広げました。そして、雨のふる水色の空の上を舞い飛びます。

「きつと、畑で、みんなが喜んでいます。ありがとうございます。雲のおじさん」

「どういたしまして。長いことまたせてしまったんだねえ。畑のみんなは、きつとこれで、元気になるよ」

雲のおじさんは、うれしそうにっこりと笑いました。

『みどりのやま』のてっぺんから、ニヨロは、下を見下ろしました。

雨のしずくをたくさんもらった、畑の野菜たちが、空をみあげています。木は、緑色に、花は、赤や黄色に、輝いています。

「ニヨロさん、ありがとう」

畑からは、元気になった野菜たちや、木々や、花たちの声が、すずやかな風につて聞こえてきました。

「みんな。よかったねえ。元気になったんだね」

ニヨロは、うれしくなりました。

雨がやみました。

おひさまが、『みどりのやま』のなかへ、しずかに沈みかけています。ニヨロは、茜色にそまった空の上を、羽根を大きくひろげて、飛びました。

見まわしてみると、川辺に咲いている、白い百合の花のみ

わりでは、たくさんのおオスジアゲハが舞い飛んでいました。川の水を飲んだり、百合の花の蜜をすったり、輪になって飛んでいたり。

「この『みどりのやま』は、ぼくのお父さんや、お母さんや、きょうだいや、なかまたちのいるぼくのふるさとだったんだ」
美しいアオスジアゲハになったニヨロは、羽根を広げてひらひらと、アオスジアゲハの輪のなかへとはいっていきました。

「こんにちは」

「いらっしやい。待っていたわよ」

たくさんのおひさまはちやうが、ニヨロの周りに集まってきました。

「よかったわね。ニヨロさん」

茜色のおひさまが、にっこりと微笑んで、ニヨロを優しく見つめています。

(中区)

「入選」

しようたすぎ
 正太杉

江川俊夫

(古里浜松をこれ以上焼かせてなるか)

そう決心した正太はしっかりと操縦桿(そうじゆうかん)を握りしめました。何しろ相手のB二九は幅四五メートル、長さ三十メートル、針ねずみのように十三門の機関砲を備え、四トンもの爆弾を積み、しかも一時間に五七〇キロの速さで飛んでくる怪物みたいなアメリカの爆撃機です。それに引きかえ正太の乗っているゼロ戦(日本暦二六〇〇年製造の戦闘機で年号の末尾がゼロのことからそう呼ばれました)はもう旧式機で、時速も五百キロ足らず、武装も機関砲二門に機銃一挺だけ、これではB二九とまともに戦っては撃合(うちあ)いでも速度でもとてもかなうものではありません。

そこで正太は、あらかじめB二九が飛んでくるコースの上で待ち伏せ、すれ違いざま大きく宙返しをして、背面のまま真つ逆様にB二九の真上から攻めようと考えたのです。

もちろん、チャンスは一回限り。そのためにはまず高度を五千メートルは取っておく必要があります。愛機を上昇飛行に移した正太が南西の浜名湖方面を見ますと焼けただれた町

の一带が目に入りました。それはB二九の爆撃で焼かれた浜松の中心街だったので。

正太の胸は悔しさで一杯になりました。浜松生まれの正太は小学校を終えると市内の中学校へ進みましたが、三年生の暮れ、日本は不幸にもアメリカと戦争になってしまいました。当初こそ日本は勝ち戦でしたが、やがて物量も豊富、科学も優れたアメリカ軍の反撃に遭って次第に負け戦となり、今はB二九の爆撃で日本の主な都市は次々と焼かれ、このままでは日本は滅びてしまうと、みんな必死になって国のために働いていました。

両親を早くに亡くし祖父源吉に育てられた正太も学業半ばで少年飛行兵を志願すると戦闘機乗りとなり、今日も空襲警報発令と同時にB二九要撃のため近くの海軍基地から飛び立ってきたのです。銀色に光る天竜川の川沿いに壊れた箱庭のようになった古里浜松を見た正太は

(この古里のため最後まで戦ってやるぞ)

と再び決意を新たにしていたのです。だが馬力の弱いゼロ戦では一気に五千メートルの高さまで昇れません。正太は大きく旋回を繰り返しては徐々に高度を取っていきましました。

それは丁度、下から見れば、トビが大空をぐるぐる回りながらだんだん空高く舞い上っていくように見えたことでしょう。正太自身も左旋回の舵(むき)を取りながら

(この飛び方はあいつと同じだな)

と、ふとトビ太郎のことを思い出したほどですから――

(あいつ、元気でいるだろうか)
緊張を続けていた正太の頬が、この時ちよつとほころびました。

トビ太郎とは昔、正太が助けてやったトビの名前です。あれは正太がまだ小学生の頃のことでした

ひどい台風のあつた次の日の朝、正太はいつものように近くの森へ様子を見に行きました。家から森までは約百メートル、畑を抜けていけば五分とかかりません。森を抜ければすぐ天竜川の河原に通じます。台風の通り過ぎた後の森は、雨風に洗われた木々の緑が輝いて朝日が幾筋もの木洩れ日を作つて、何とも言えない清清しさです。正太は胸一杯澄んだ空気を吸うと、おつはよう、と大声で森中に挨拶をしました。森は正太にとつては遊びと憩いの場所であり、又いろいろなことを教えてくれたり体験させてくれる大切な場所でもあったからです。だから正太はいつの間にか森の中のことなら木の種類や通り道など大抵のことは知つてるようになります。

この日も、いつもの近道を抜け見慣れた大きな檜の下を通つた時のことです。太い根元の所にまだ羽の出そろわない鳥のヒナらしいのがぐったりしているのを見つけました。それは正太にとつては初めて見るものでした。何だろうと近づいて触つてみますとまだ温といし、指で突ついてみるとわずかに首をもたげてくちばしを左右に動かします。

(こいつ、生きてる)

そう気づいた正太は何のヒナか分らなかつたけど、両手でそつと抱えるようにして家に持ち帰ると、早速源じいに見せました。

「源じい、これなんずらか」

すると源じいはいは、差し出されたそのヒナらしいのを一目見るなり

「正太、そりゃトンビの子だ。間違いいねえゆんべの嵐で巢から落つちたずら」

と言いました。トンビの子を初めて見た正太は、折角持ってきたのにこのままでは死んでしまふと思つて

「源じい、こいつ、まだ生きてるじゃん。かわいそうだで助けてやらまいか」

そう言うとな源じいも同じ思ひだつたのか笑顔を見せて

「そうだな、トンビは悪い鳥ではねえ良い鳥のほうだ。助けてやらざあ。名前はトンビの子だからトビ太郎だあな」

こうして名前のついたトビ太郎は、源じいの作つた巣箱の中に入れて、その日から正太たちと一緒に暮らすことになったのです。

危い命を助けられたトビ太郎は、やがて元気を取り戻すと源じいの釣つてきた小魚や正太が養鶏場からもらつてきたモツなどを毎日ガツガツと食べ始め、みるみる大きくなっていききました。そのうちに正太や源じいを親兄弟のように思つたのか、すっかりなつて呼べばすぐ飛んできますが、羽を広げると五十センチ、頭から尾っぽまでが三十センチにもなる

と肩や腕に止まられると正太には重くて困るほどでした。そして身体全体が暗褐色の羽毛に包まれ、頭の部分に柳の葉のような筋模様が出て、眼も爪も嘴も一段と大きくなったトビ太郎はもう誰が見ても立派なトビだと分るようになりました。源じいの作った巣箱も最初は大き過ぎると思つたのですが、今では夜寝る時に羽がはみ出る始末。こうなつては正太も源じいも、トビ太郎がいよいよ一丁前のトビになつたことを認め、何とかしてやらなければいけないと思うようになつていました。そんなある日、源じいが思い切つたように正太に言いました。

「正太よ、そろそろトビ太郎を元の森に返してやらざあ」

正太も日毎に成長していくトビ太郎を見るにつけ、いつかはそんな時がくるのではないかと気になつていたので、今日も自分の手から嬉しそうに餌をもらつているトビ太郎の顔を見るとすぐには「うん」と返事が出来ません。そこで「源じい、トビ太郎をこのままずっと家に置いとくわけにいかんのけ」
と頼むように言つてみました。すると源じいは今までの優しさと變つて

「正太よ、トビ太郎はな、自然の森の生き物だで、やつぱ、自然に返してやらざあ。トビ太郎にとつてもそれが一番の幸せと言うもんずら」

と源じいにしてはいつになく厳しく改まつた顔で言つたので、正太は急に悲しさがこみ上げてきて涙がポロポロ出て止

まりませんでした。

別れの日、最後の餌を腹一杯食べさせた正太は、源じいと一緒に巣箱を取り払いトビ太郎を大空へ追い放つてやりました。放たれたトビ太郎はしばらく家の上を飛び回つてしましたが、すぐ又、降りてきて正太の肩や腕に止まろうとしました。だが正太は半分泣きながら、わざと乱暴に両手を振つて自分の近くに寄せつけなかつたのです。それでトビ太郎は困つたように、あちらこちらに止まつては正太の顔を見つめていました。やがて今夜寝る巣箱も無いのに気がつく、とうとう諦めたのか寂しそうに森の方へと姿を消していったのです——

あれからも何年経つたことでしょうか。

元氣だつた源じいも亡くなつて、今の正太には随分遠い昔のことのように思えました。

そう言えば正太が飛行機乗りになつた切つ掛けと言うのも、祖国日本の切迫した危機に殉じようとしたのと、もともと空を見るのが好きだつた正太が、あの頃、成長したトビ太郎が毎日楽しそうに大空を飛び回つてのを見て、心のどこかにそれをけなす（羨ましく）思つていたせいだと言えます。

（確かにあの広い大空は、戦争さえ無ければ少年の夢と憧れに満ちたロマンの世界です。その綺麗な青空で人間同士が互いに撃ち合つたり殺し合つたりする戦争とは本当に残酷で、人間を悲しく不幸にするばかりの愚かなことと言うほか

はありません。賢明な人類はこのような悲惨な戦争などこれからは絶対に起こしてはならないのです。

間もなくB二九の編隊がやってくるはずですが。正太は首にかけた飛行時計を見て要撃の準備をしました。彼らは遠くマリアナの基地から飛んでくるのですが、始めは日本本土の防空砲火や要撃戦闘機等を警戒して夜間だけでしたが、日本の防空戦力の弱まった現在は昼間堂々と富士山を目標にやってくる。そしてそれぞれ目的地に焼夷弾をまき散らすと再び富士山周辺に集まり残弾などあれば所かまわず投げ捨て身軽になって太平洋上へ帰っていくようでした。そのため浜松周辺の町では突然家を焼かれたり壊されたりして、思わぬ被害に遭うことも度度あったのです。正太はそんなB二九の帰りのコースをねらって待ち伏せしました。

高度五千メートル。正太はゆつくりと旋回を続けながら周囲を警戒していました。するとあるか東方から編隊を離れたB二九が一機大胆にも四千メートル位の低空で悠々と天竜川下流に向かってくるのを見つけました。

空戦では一秒でも早く相手を見つけた方が有利です。視力二、〇の正太はいち早く相手の進行方向を確かめると、すぐその真正面の上空に機首を向け全速力で接近していききました。それは大鷲に向かう鳩みたいに見えたでしょう。相手はまだ気がつきません。空中での接近はお互いの相対速度であつという間です。

真正面下方にB二九を見下ろした正太は、*ここだ*とば

かり操縦桿を思い切り引いて大きく宙返りを打つと背面になって、魔物のようなB二九の巨体を照準器にとらえました。この時、相手も気づいたのでしょう。一斉に正太目掛けて防禦砲火を浴びせてきました。

正太はその赤い滝のような火の中へ臆することなく全弾発射のレバーを握りしめて、真つ逆様に飛び込んでいきました。ところが何とということか一発の弾も出ません。

この頃の器財は材料や熟練工の不足で不良部品が多くなり、このような故障が時々あったのです。

一瞬のうちに発射不能と判断した正太は咄嗟にこのままB二九の尾翼を体当たりで壊してやろうと決意して突っ込んでいきました。

ガ、ガン

正太のゼロ戦はビルみたいにそそり立つB二九の垂直尾翼に沿って接触、その方向舵と右の昇降舵を吹き飛ばしたので

す。強烈な衝撃で一時失神状態になった正太でしたが、破れた風房から座席の中へ吹き込んできた風圧に打たれ、すぐ気がつくといいで辺りを見回しました。見ると愛機の右翼半分近くが無くなっていましたが、プロペラは異常音を立てながらも何とか回転していました。

相手のB二九はと見ますと、機体を上下左右に動かす舵が壊れてしまったので糸の切れた凧のように飛んでいきました。が、すぐにぐらりと傾くと裏返しになって太平洋上へ消えて

いくのが見えました。だが正太の目の前には一軒の民家が押し寄せような早さで迫ってきていました。高度が五百メートルまで下がっていたのです。このまま民家に衝突すれば燃料のガソリンや不発の弾薬が爆発引火して大切な民家を焼いてしまいます。正太は衝撃でしびれた右腕を懸命に動かして残った左右のエルロン（補助翼）を操作して民家の屋根をかすめるように飛び越えたのです。そして前方が何もない天竜川の河原だと分ると、接地して発火することのないようエンジンスイッチを切る力尽きたように地上に激突して愛機諸共その場にくずおれました。この時、立ち上った薄煙と共に正太の魂も空に帰っていったのです。最初に駆けつけた村人の話では座席の中にうずくまる正太の顔には、かすかに頬笑みが浮かんでいたように見え、首に巻いた白絹のマフラーには正太の名前と五社神社の朱印が記してあったそうです。

そんな正太の死を悼んだ近くの人たちは、その場所に一本の杉の苗木を植えてやりました。以来、その苗木はすくすくと育つて、どんな嵐が来ても倒れることなく、いつもしっかりと墓標のように立っていたので誰言うことなく正太杉と呼ばれるようになっていました。

それから間もなくして戦争が終り、日本によりやく平和な日々が戻ってきましたが、悲惨な戦争のために実に沢山の人が大切な家族や家を失い、食べ物も着る物も無くして毎日毎日、大変困難な苦しい生活に追われたのです。正太杉はそんな人々を慰め励ますように昔のままの姿で、四季折り折

りの移り変わりを伝え、日本の復興に努める人々と共に次第に大きくなっていきました。

やがて戦後も六十五年という長い長い平和な月日が流れて、いつの間にか正太杉という名は、人々からすっかり忘れ去られてしまいましたが、この杉はいつまでも枯れることはありませんでした。そして不思議なことには年々この木の周りには次々といろいろな木の実が根づいてだんだん増え始め、知らぬ間に小さな緑の森となってしまったことです。

この森は今では近くの子供にも大人にも優しく楽しい憩いの場となつて親しまれていますが、特徴は何と言つても中央に一際大きく高く突き出た杉の古木があることです。それは遠くから見えるので人々の目印となつて重宝がられています。この木のかつての呼び名や由来については、今は知つていない人は誰も居りません。

ただ晴れた日には、この杉の木の天辺で、いつも一羽のトンビが平和な日本の空を楽しむように、ピーヒョロロ、ピーヒョロロと鳴きながら輪をかいて飛んでいるそうです。

（中区）

ライオンの成人式

恩田 恭子

ある日のこと、高い山の中に一匹のライオンがやってきました。ライオンはぐるりと見渡すと大きな木の下の茂みに入っていききました。何をするのでしょいか。

茂みの中へ入ったライオンは、せっせせっせと前足で穴を掘り始めました。一日目、二日目、三日目ようやくそこからライオンが出てきました。ライオンが入って休めるくらいに長く深い横穴を掘っていたのです。

しばらくするとオスのライオンは、お嫁さんを連れてきました。お嫁さんは、そこに入って仲良く暮らしていました。

ある日のこと、お嫁さんは三匹の赤ちゃんを産みました。二匹は男の子、一匹は女の子でした。みんな小さなかわいいライオンでした。おかあさんが捕ってきた獲物を仲良く食べでは元気に暮らしていました。日向ぼっこをしたり、おかあさんのおなかに乗ってじゃれあったりして遊び、すくすくと育っていききました。おかあさんもお守りが大変です。おとうさんが帰ってきたとき、

「そろそろ表に出してもいいでしょうかね」

と相談をしました。

「表はなかなか危険だからなあ。よおく見張っていて、少しずつ慣らしていくようにしなさい」

そうおとうさんは言いました。

次の日からおかあさんは、三匹の子どもたちを連れて表へ出しました。表に出た子どもたちは、いろいろな木の間をくぐってはじゃれあっていました。初めて外の世界を知り、興味いっぱいでした。

「あまり遠くへ行つてはいけないよ。おかあさんの目の届くところにいなくてね」

そう言ってお守りをしていました。毎日毎日そうした日が続いているうちに、子どもたちは大きくなり、ライオンらしい姿になってきました。子どもたちはおかあさんと散歩に出るのが大好きでした。おかあさんは、少しずつ範囲を広げていき、子どもたちも慣れてきました。

そんなある日、おとうさんが

「もうそろそろ狩りの方法を教えてもいいのではないかね」

そんなことをおかあさんに話しました。

「そうですね。少しずつ遠くへ行けるようになりましたし、お天氣のいい日を見計らって、やってみましょうかね」

そういういました。

ある日のこと、おかあさんは三匹の子どもたちを連れて、かなり遠くの草原へ出掛けました。

「見てごらん、あそこに野うさぎがいる。今からおかあさん

があれを捕ってくるから、ここで黙ってじっとしておかあさんの様子を見ていなさい。そこから離れてはいけませんよ」

そう言っておかあさんは、そろりそろりと音がしないように近寄っていききました。野うさぎは気付きません。するとおかあさんは、さっと野うさぎめがけてとびかかり押さえようとしました。しかし、獲物のほうが気付くのが早くて、くると、おかあさんの後ろへ行きました。しかしおかあさんはすかさずしっぽでびしゃりとたたき、向きを変えて前足で押えてしまいました。そして、その野うさぎをくわえて子どもたちの前へ持つてきて殺しました。おかあさんはそれをがぶつと前歯で噛んで皮をむきました。子どもたちはびっくりしました。おかあさんはその肉を子どもたちに少しづつ分けてくれたのです。

「おいしい。でも、おかあさんすごいねえ」

「そうだよ。みんなこうして自分で獲物を捕って、立派な大人になっていくんですよ。これからは毎日、狩りに行きましようね」

そうおかあさんは言いました。日が暮れるまで遊んで楽しかったのも、やがて狩りの道へと進んでいったのです。

それからしばらくすると一番目の男の子も二番目の男の子もどうやら小さな獲物なら捕ることができるようになりました。でも、三番目の女の子はなかなか捕れません。

「やったあ」

と思つては逃げられてばかりいるのです。

「そのうちにだんだん慣れるでしょう」

おかあさんもそんなのきなことを言っていました。

また雨の季節がきました。毎日毎日雨降りです。でも、おかあさんが獲物を何とか捕つてきてくれるのでよかつたのですが、そのうちにおとうさんが来なくなりました。

「もうおとうさんは、帰つてこないかもしれません。だから、みんな自分で狩りをするのを考えなくてはなりません」
おかあさんは子どもたちに本格的な狩りの方法を教えることにしたのです。

「きょうはおかあさんが大きな獲物を狙うから見えていなさいね。でも、大きな獲物を狙うのはなかなか大変で、危険が伴います。勝つか負けるかのどっちかなんです。でも、ライオンは百獣の王といつて世界で一番強い動物なのです。だから負けてはいけません」

そう話しながら歩いていくと、草原にとても大きな鹿が一匹いました。鹿はライオンたちに気付いていません。しかし、おかあさんはその鹿を黙って見過ごしました。そして、草むらの中に入ると、子どもたちに

「あれは、鹿という動物なんです。鹿には大きな角があるの。だからそれをねらつて捕ることです。でも鹿は足がすごく速いから気をつけなさいといけません。今からおかあさんが捕ってきますから、よく見ていなさいね。ただ、ここから動いてはいけませんよ」

こう話していると、さっきの鹿がまた草原に戻ってきました

た。今度も鹿は一匹だけです。鹿がおかあさんライオンを見付けました。お母さんは追いかけるのではなく逃げました。藪の中へ藪の中へと大急ぎで逃げていきます。鹿もすごいスピードで追いかけてきました。そしてライオンに近づいてきました。実はそれは、おかあさんがおびき寄せていたからです。作戦だったのです。だんだん竹の茂みに入ると、鹿は大きな角が邪魔になり、なかなか前へ進めなくなりました。そこがチャンスです。おかあさんライオンは、鹿の横から飛びかかりました。鹿の角が折れました。すると今度は鹿の背中をぎゅっと押さえました。後ろへ行くと足ではねられるからです。鹿も暴れました。お互いに生きるか死ぬかの戦いからです。必死です。おかあさんライオンは見事でした。自分の体重を鹿の背中にドスンと乗せて、すきを見て、鹿ののどにかみつきました。とうとう鹿をしとめました。

おかあさんはその鹿を子どもたちの所に引きずってきました。子どもたちは、とてもびっくりしていましたが、大きなごちそうをおなかいっぱい食べました。おかあさんはそれを見て、ニコニコしていました。そして、子どもたちが一番おいしいところを食べ終わった後に、おかあさんはバリバリと骨をしゃぶっていました。子どもたちはこうして狩りの仕方を覚えながら毎日が過ぎていきました。

ある日のこと、おかあさんは、子どものライオンたちを呼んで

「さようはお前たちの成人式ですよ。お前たちは狩りも上手

になったし、もう立派な大人になりました。だから、どこへ行っても大丈夫。元気に過ごしていきなさい」

そう言って一番上の子を送り出しました。

「行ってらっしゃい。いえ、行きなさい」

一番目のお兄さんライオンは後ろを振り向き、おかあさんや弟、妹をじっと見てから歩き始めました。二番目の男の子はお兄さんを追って出ました。

「さあ、今度はあなたの番ですよ」

おかあさんは言いました。

「私も行くの？」

「そうですね。あなたも立派な大人なんですから」

おかあさんは三番目の女の子の目を見てそう言いました。女の子はおかあさんのらんらんと輝く目を見て震え上がりました。おかあさんのおなかの中にはすでに次の赤ちゃんが暴れていました。なかなか動きださない女の子を見ておかあさんは言いました。

「さあ行きなさい」

でも女の子は行こうとしませんでした。するとおかあさんは

「ついていらっしゃい」

と歩き始めました。女の子は

「散歩に行くのかな」

とうれしくなって、ついていきました。しばらく歩いて、崖の上まで来るとおかあさんは後ろ向きになり、ポーンと後ろ足で女の子を谷底へ蹴り落としました。

「ぎゃー」

という女の子の声が一度響きました。そして、後は何にも聞こえませんでした。

おかあさんのライオンは下をのぞくことはしませんでした。百獣の王になる子どもたちを育てるためのすさまじい訓練なのです。

三番目の女の子は谷底へ落ちる途中で崖にぶつかり腰の骨を折ってしまいました。そして、何回転もした後、木々が茂っている中へ放り出されました。わずかな力を振り絞って、動かない体を少しづつ少しづつ引きずって、木の葉が集まっている所へ体を横たえました。

「お兄ちゃんはどうしているかなあ」

そんなことを思い、痛さをこらえているうちに、落ち葉の柔らかなさに慣れてきて眠りにつきました。

しばらくして目が覚めるとあたりは真っ暗になっていました。女の子のライオンはおなががとでもすいていることに気がつきました。体が動かせないので、周りをゆっくり見回すと、遠くのほうにパンが見えました。小さなパンのみのようです。手を伸ばしましたが、届きません。もう一度

「よいしょ」

と思い切り手を伸ばしたら取れました。それを食べるとまた眠りにつきました。食べたと思ったパンは、実は雲の間から落ちていた三日月だったのです。

朝になって目が覚めてもやっぱりおなががすいています。食べる物はもちろんありません。

「ゆうべのパンがないかしら」

きよるきよる見回しましたが、なんにもありません。ほかほか暖かい春の日です。動けないままにじっとしているうちに暗くなりました。寂しくて

「おかあさん」

と呼んでみましたが、おかあさんのあのらんらんと輝く目を思い出し、もうおかあさんは私の所には来ないのだと思いました。

何日かたつと、体がだんだん楽になってきました。

おなががすいて仕方ありません。その日は、十五夜のきれいなお月様が出ていました。

「ああ、パンがあった」

女の子はそう言って飛びつきました。でも届きません。もう一度ぴょんと飛びついたら届きました。おいしいパンでした。でもそれは女の子の夢でした。お月様がふつくらパンに見えたのです。

うとうとしていると、何かごそごそと音がしました。何かが付いてくるようです。じっとしていました。よく見ると、それはお兄さんのライオンです。

「おにいちゃん」

呼んでみました。返事はもちろんありません。なぜなら、それは夢の中なのです。お兄ちゃんはいないのです。

「おにいちゃん」

もう一度呼んでみました。もちろん聞こえるはずはありません。

しかし、遠く離れたお兄ちゃんライオンの耳に妹の声が聞

こえたような気がしたのです。なんとなく、どこかで聞こえたな、そう思いながら山の中を必死で歩いて進みました。やつぱり聞こえたのです。

「おにいちゃん」

「ああ、妹の声だ。今行くよ。」

そう言つて妹のほうへ走つて行きました。妹を見てお兄ちゃんはとても驚きました。すぐに妹の体を調べました。するとどうやら傷だけではなく背中にも怪我をしています。体がひんやりしています。お兄ちゃんは、妹の体をなめました。なめてなめて、舌が疲れるまでなめました。そうして元の落ち葉の上に妹を戻し、その上にさらに落ち葉をたくさんかぶせて

「まつているんだよ。」

そう言つたとさつとどこかへ走つていきました。しばらくすると、お兄ちゃんが戻つてきました。口には子狐をくわえています。眠つていたところを捕つてきたのです。お兄ちゃんは、その子狐を妹の上に乗せて、さらに狐にも落ち葉をかぶせて、そこを去つていきました。

朝になって、女の子は目をさしました。なんだか体がぬくぬくしているのです。なんとなく、前足を伸ばしてみました。

「あら？ なんともないみたい」

後ろ足に力を入れて立ち上がってみました。首を動かしました。

「どこも悪くない。よかったあ」

そう思つたとき、そばには冷たくなつた子狐が一匹いるこ

とに気がつきました。子狐の体温で女の子は守られ、命を吹き返したのです。

「おなかがすいたあ」

女の子は、迷わずその子狐の皮をむいて、むしゃむしゃ食べました。おかげでさらに元気になりました。もう大丈夫です。それから、思い切り身震いをしました。落ち葉が取れました。「さあ、これからどうしよう。おなかもいっぱいになつたし、散歩でもしようか。でも、気をつけないとね」

そう思いながら、一足二足西に向かつて歩き始めました。女の子は歩きながら、ふとおかあさんのことを考えました。ある日、おかあさんがこう言つたのです。

「あなたは、本当に何でもできるよになつたね。でも、あなたにひとつだけ足りないものがあります。それは、勇氣です。あなたはもう勇氣さえもてばどこへでもひとり歩いていけます。これからは、勇氣をもつてしっかりやりなさいね」そんな言葉を思い出しながら、広い草原のほうへ向かつて歩いていきました。

お兄ちゃんは、その様子を少し離れた岩場からじつと見ていました。

「ああ、妹ももう大丈夫だ」

そう思いながら、妹とは反対の方向へ歩いていきました。その二匹のライオンは、もうすっかり立派な百獣の王と呼ぶのにふさわしい堂々とした姿でした。

(天竜区)

児童文学選評

那須田 稔

本年度の「児童文学」応募作は、例年に比べて数が少なかったのは、残念であった。けれども、それぞれの作品が魅力的でさわやかな読後感にひたるものが出来たのは嬉しかった。

それは、子どものために心こめて語りかける作者たちの誠実さが作品に滲み出ているからだと思う。どんなに巧みに描かれていても、読者への真摯な姿勢がなければ、感動を呼ばない。

その意味で、今回の応募作はどれも楽しく読むことができた。

市民文芸賞

「ずっといっしょ」

これは、十六年四ヶ月の生涯を過ごした幸福な犬のポンタの物語である。ポンタはママに可愛がられて楽しい日々を送っている。その最晩年の、すでに老いてあまり動くことができないポンタは、ママのユーモラスで優しいしぐさの一つ一つが深い愛に包まれているのを感じている。

そして、ポンタは死んだ後も、ママへの恩返しを忘れなかった。この「ずっといっしょ」は、いのちの尊さ、不思議さ
を表現したすぐれた作品である。

入選 三点

「空を飛んだニョロ」

いもむしのニョロが、暑い夏に苦しんでいるみんなのために雨をふらす雲のおじさんを訪ねるところからこの物語は始まる。ニョロは、いくつかの困難を乗り越えて旅を続けるうちにアオスジアゲハになっていく。その過程が上手に描かれている。

「正太杉」

太平洋戦争末期、B29の本土空襲を迎え撃つために、ゼロ戦に乗って戦う少年航空兵の物語。少年航空兵の正太は、小さいころ助けたトビが飛ぶ姿に思いをはせながら空を飛行する。そして、B29にうち落とされても、民家への墜落を避けようとする少年航空兵正太のやさしい心の動きを作者は的確に描く。正太の死を悼んで村人が植えた杉の木が、六十年後の今、大木となり、その上をトビが鳴きながら舞う。リアルな戦闘シーンと、トビへ寄せる抒情がみごとにとけこんでいる。

「ライオンの成人式」

ライオンの子どもが母親の愛情の下で成長していくプロセスが描かれている。欲をいえば、子どものライオンの自立への道に、もう少し紆余曲折があればと思う。

選には惜しくも入らなかったが、「やっぱり夢だった？」も楽しいメルヘンである。一層の努力を期待しておく。

評論

〔市民文芸賞〕

大正歌人群（浜松詩歌事始 後篇）

中谷節三

大正十三年一月三日、「新年遠江短歌大会」が弁天島の白砂亭で開かれました。この歌会は聖樹社（中泉）、落葉松社、谷島屋タイムス社、犬蓼短歌会の連合で開催されました。その頃、遠江の短歌会は最盛期で、歌人たちはそれぞれ精進して、ことに大連合して一堂に会したのです。

平成二年三月十日付の静岡新聞の「懐しの写真館」に「遠江の歌人ら大連合」の見出しで、そのときの写真が載りました。

参列者は（後列）花井陽三郎、白井善司、野沢虎造、赤井哲太郎、旭赤光、柳本城西、袴田恵丹、近藤用一、蒲清近、宮崎狐屋、江間作一、山本誠一、林俊三、（前列）永田武之、宇波耕作、瀬川草外、加藤雪腸、鈴木肇、松山莊平、中津川空郎、世話役の中谷福男。（久野養、石川新作、他一名の三氏は写真欠）合計二十四名でした。城西、草外の医師は洋服姿、他は全員和服姿でした。弁天島の

松林も懐しく、当時を偲ぶ一枚の写真でした。

子規直門の県下一の俳人と目された雪腸が短歌に転じたのは明治四十四年であった。大正二年に伊藤紅緑天らと「曠野会」を設立、「第三者」なる機関誌を発行した。紅緑天は大正四年に二十二才の若さで死去し、遺詠『雁來紅』を雪腸の「彼の純な心境と清い風格とを永遠に偲ばんとするものである」を結語として第三者社より刊行した。

雪腸は明治三十八年以來、浜松中学校（現北高）教諭となつたが、大正五年八月、十四年間に及ぶ教員生活（明治三十五年、文検に合格し中等教員となつた）に別れを告げ、明石合名会社（石油販売）に入社し、大阪出張所長として大阪に赴任し、一人で専ら短歌に精進していた。大正十一年、出張所閉鎖により帰浜したが、ちょうど浜松地区に近代短歌の芽ざしが出始めた時であった。

「まんだら」創刊 当市の青年歌人奥村晋^{しん}

細田西郊等の同人の手により短歌雑誌「まんだら」の創刊号が四月一日に創刊された。「谷島屋タイムス」第三号（大正十一年三月）一、二号は五月、三号は六、七月合併号として七月に発行されたが、三号で終刊となった。寄る辺を失った歌人たちは、画策を考えたが「木犀歌会」なる名目で歌会を大正十二年一月三日、浜松城趾の天守閣樓上で行うことにした。ちょうど頭首の「新年遠江短歌大会」の一年前のことであつた。当時の天守閣には畳敷の部屋があつた。当日は雪の降る寒い日であつたが、雪腸、草外を始め十九名の参加者があつた。この歌会を「天守閣歌会」といつた。

雪腸と浜松歌人たちとの接觸はこの時からで、雪腸宅で毎月歌会が開かれた。当時雪腸の住まいは中沢町の楽器中通りであり、入口の受付に卓子があり、令息の万古刀氏が玄関番をしていた。歌会では同人たちが夜の更けるまで過ごした。議論は大抵雪腸と草外の間で行われ「異論のある方は遠慮なく言つてくれ給え」という雪腸の鋭い舌鋒に立ち打ち出来るのは、東北人特有のねばり強さを持つ草外より外に無かつた。

草外は本名を瀬川深と言ひ、盛岡中学校の出身で同窓の啄木と親交があつた。「谷島屋タイムス」97号（昭和十一年十一月）に「啄木の追憶」の一文を寄せた。僕が啄木を知つたのは中学二年からで、啄木は三年であつた。（明治三十三年—十五才）——当時、盛岡中学校の先輩には及川古志郎（海

軍中将）、野村胡堂（作家）、金田一京助（国文学者）等があつた。——啄木が中学を去り上京する三十五年十月まで僅か三年間、僕は絶えず啄木と往来し浜民村へも何回も行って泊まつたりした。

中公文庫『日本の詩歌⑤石川啄木』の年譜（明治三十四年十六才）の項に「十二月三日『岩手日報』に石川翠紅^{さいこう}の筆名で友人の瀬川深^{ふか}らと『白羊会詠草（一）夕の歌』を發表、啄木の活字になつた最初の作である」とある。

啄木と号するようになるのは明治三十六年（十八才）『明星』に長詩を發表したときからである。

草外は昭和十三年十一月十八日、誠心高等女学校での講演（「谷島屋タイムス」の編集人であつた同校教諭中村精の要請によるものと思われる）でも「私が啄木と仲よくなりましたのは啄木が三年生で私が二年生の時でした。しかし、私は啄木の研究者ではありません」と言っている。「浜松市史新編史料篇四」P920（平成十八年刊）草外は伝馬町の羽公宅に下宿して俳句もやり、のちに元城町に小児科医院（京大医学部卒）を開業した。戦争で焼失するまであつたように思う。

「まんだら」廃刊よりちよつど一年経つた大正十二年七月「落葉松^{からまつ}」が創刊された。同人は福男^{とみお}、用一^{とみ}の兩人で、發行所は東伊場八十八番地の中谷福男方であつた。

かねてから心に計画はあつたが、こつ突然的に創刊号を出し得るとは思わなかつた。之は全く加藤雪腸、瀬川草外両先

生始め皆様の深い御援助と近藤用一君の努力の賜でありま
す。私達は乏しい力を奮つて軌道の為につくす積もりです。
華美より質素に、到達すべき彼岸は遠いが長い才月は必ず我
等の望みを入れて下さる筈です。(福男)

明るい小ぢんまりとした中谷兄の二階で小机に向かつて、
よねもなく之から生まれる「落葉松」の編集をしている。隣
りのトタン屋根にさやる雨の音を聞きながら、包み切れぬ喜
びをおさえ集まった歌稿を整理している。一月雪腸先生を訪
ねて、かねての計画について意見を發表した。先生は両手を
あげんばかりに喜んで賛成して下さいました。私等の歩みはおそ
い、けれどもたゆまぬ努力をしてこの芽生える「落葉松」も
諸兄のいつくしみある御同情によつて青々とした緑の繁らん
事を望んでやまない次第です。表紙の誌名及びカットは相生
垣貫二氏^(註)(当時、浜松工業学校図案科の教師)が特に私
達のために描いて下さいました。厚い御同情を御礼しま
す。(用一)

本誌はアト紙八頁の緑色印刷であつた。出詠者は宇波耕
作 河島菊子 加藤雪腸 江見孝子 平松東城 松倉水声
永田武之 袴田恵丹 山田千之 細田西郊 松浦辰治 亀井
静子 蒲 清近 奥村晋遺稿 近藤用一 中谷福男の諸氏で
あつた。

大正十三年五月の十一号を以て誌名を「はりはら」と改め、
九月に十二号を發行した。用一は同人を退き、雪腸 草外
寂村 武之 福男の五氏が同人となつたが、十四年五月の

二十号を以て終刊となつた。その後、東城 福男の二人で「ア
カシア」をガリ版刷りで發行したが、之も翌十五年の九月に
九号を以て終えた。十一年四月の「まんだら」以来「落葉松」
「はりはら」「アカシア」と引きつがれて、足かけ四年半に
亘つた大正歌人群は、雪腸の大正末年に自由俳句に転向した
為指導者を失い、城西の「犬蓼短歌会」へと移つていった。
「犬蓼」二百五号(大正十五年一月)の編集余録に東城の
筆にて、大正十四年の総勘定として「新人彗星の如く出現す。
曰く亮一、曰く祐一、曰く源二郎、曰く福男云々」それぞ
れ松浦亮一、長谷川祐一 菊沖源一郎 中谷福男の諸氏のこ
とである。

「落葉松」が創刊された大正十二年七月と同じくして、青
塘社同人の山本さとるによつて「処女地」が發刊された。
——「谷島屋タイムス」20号(大正十二年八月)——『浜松
市史 新編史料篇三(平成十六年刊P1138)』にも、「ア
ララギ歌風の浸透を伝える史料、平松東城、小松東幹、近藤
用一、中谷福男、山本さとる、高杉幸次郎、鈴木登志夫の七
名の短歌作品を取める。いずれも純号王のアララギ歌会であ
る。平松、中谷は城西の門下、とある。史料は城北図書館に
収蔵されているが未見。

「犬蓼」会員は又「アララギ」会員でもあつた。「アララギ」
三卷六号(明治四十三年)の巻頭を飾つた木村秀枝と佐藤綠
郎の作は「犬蓼」23号所載(中篇参照)の歌であり、「アラ

ラギ」四卷（明治四十四年）八号の「子規十周年記念号」に城西の作二首を見る。

○くれなゐの蚊帳の釣手を目守りつつうつろ心にいめに入るかも

○さみだれの夕晴れくれど花摘の葉のたまる水かわきあへずも

城西のふる里の風土を愛する秀歌抄の一つ。

西來院に築山御前の墓所を訪ふ

○しのび立つおくつきどころ荒れにけり松葉もつもり玉垣の上に

西來院はわが家の菩提寺であり、藤の花の名所で——咲きながらのびすむなり藤の花——の十湖の句碑があり、少年時代は遊び場であった。築山御前の墓所も荒れ放題で土塀なども崩れたままであった。戦後、寄付する人あり修復されてよみがえった。

「アララギ」初期の郷土歌人を「アララギ二十五周年記念号」（昭和八年）に見ると次の如くである。

初出号 終号

- 柳本城西 1巻2号— (明41—昭39)
- 山下愛茂 1巻2号—6巻5号 (明41—大2)
- 木村秀枝 1巻2号—8巻3号 (明41—大4)
- 榎不言舎 1巻2号—16巻6号 (明41—大12)
- 奥島欣人 1巻2号—2巻1号 (明41—大4)
- 佐藤緑郎 1巻2号—8巻2号 (明41—大4)

川下静夫 3巻5号—8巻3号 (明43—大4)

大塚唯我 3巻6号—10巻2号 (明43—大6)

加藤雪腸 5巻3号—18巻4号 (明45—大14)

伊藤紅緑天 5巻3号—7巻11号 (明45—大3)

平松東城 13巻12号—14巻1号 (大9—大10)

奥村 晋 15巻5号—16巻6号 (大11—大12)

中谷福男 15巻7号— (大11—昭49)

近藤用一 15巻12号—17巻7号 (大11—大13)

蒲 清近 15巻4号—15巻5号 (大11—大11)

御津磯夫^{注③} 17巻11号—22巻8号 (大13—昭4)

細田西郊 19巻10号—22巻11号 (大15—昭4)

細田仲次 21巻12号—25巻9号 (昭3—昭9)

安中新平 23巻3号— (昭5—)

斉田玉葉 24巻7号— (昭6—)

佐藤房一 24巻2号— (昭6—)

太田進一 24巻2号— (昭6—)

このあと、鈴木喜之輔、大竹玄吾、紙谷庭太郎、加山俊、前田道夫などの俊英に引き継がれていった。

福男は「アララギ」に入会したとき、岡麓を選者に選んだ。

アララギも初期のころは雑誌代を払えば何首でも自由に歌を載せることができたが、大正二年（第六巻）から会員組織にした。特別会員は五十銭出費して五十首、普通会員は三十銭で二十五首を投稿できた。大正四年（第八巻）編集担当が茂吉より赤彦に代ると同時に、選者を赤彦・千樫・憲吉・茂吉

の四人が分担して選歌を掲載することになった。これは会員が増えたためであった。しかし專屬的な制度にすると、党派的な弊害が生ずるであろうと投稿者を順廻りに各選者に廻していたが、いつしか自然的に師弟の關係が固定するようになっていった。福男が麓を選者にしたのも自然の成行きであった。

子規没後十五年程歌を離れていた麓が、憲吉の進めで復帰したのは大正五年であった。根岸派としては左千夫、長塚節亡きあと子規直門の最長老として麓を迎えた。茂吉はこの大正五年を以て、歌壇の主汐流をアララギが形成したと考える、と言っている。大正十一年の選者は麓・赤彦・千樫・憲吉・文明・土田耕平の六氏であった。茂吉は文部省在外研究員としてドイツに滞在（大正十一年四月）していた。

「岡麓（通称三郎） 明治十年三月三日本郷金助町に生る三谷ともいえり はじめ傘分かみかたという 歌を詠み書を教えて一生をおはる」これは麓が自分の写真の裏に書きつけた自伝である。岡家は代々幕府の御典医で、祖父は十三代將軍家定付の漢方医であった。長兄、次兄が他界したので岡家を継いだ。生家は歌を離れているとき手放して出版社を経営したが、武士の商法で失敗し、聖心女子学院で習字担当の教師を、代々木山谷の自宅では書道塾を開いていた。前編で多田親愛に仮名書を習い、後年生活の資となったと話したのはこのことである。

「都雅で輕妙なところがあると思えば、奥の方に洪味があ

り、艶もあり、円味もあり、深いあわれもある」と茂吉は麓の歌を評した。

○すみすりてよこれたる手をあらはむと月夜あかりにこほりをた、く

麓直筆の短冊が掛軸に表装されてわが家に残されている。○庭すみに束ねられたる紫陽花の新芽に今朝も氷雨ひこめふりつぐ——アララギ浜松歌会の主導的人物といえよこの人にまず指を屈するだろう。（浜松市書店主・歌人 中谷福男氏）浜松市の谷島屋書店の番頭を二十年間つとめ歌道に入ってから三十年という歌歴の持主。気分の転換や頭の大掃除には歌がなよりの良薬という。

自然美や人間美を深く広く表現したいと理屈抜きで親近感の歌が得意のこの人は、みえすいたお世辞がいえす俗気がなさすぎて経済的には貧困だという。練達の写実精神が商道に生かされたらと評している人が多い。「金に執着不情しては立派な歌は出来ません。早い話が○点のつけどころ、句読点のおきどころで別な意味になる……」とごく平凡に、平凡の開眼開眼をしてくれる。

東京開成中の出身で同校の先輩故斎藤茂吉博士に師事。（一年生のとき、茂吉は五年生であった）雅号はなく、浜松市新町に書店を持ち、晴耕雨読が日常の仕事。お酒は好まず甘党。輕妙なしゃれも得意だが、反面、失笑症失笑症ではないかといわれるほど謹嚴なところがある。極端な考え方の出来ない典雅なというのが一般の評。引佐郡の産、本年六十五才。

以上は、某新聞・県版の「顔」欄に載った。（昭和二十八年、月日不明）大体的を射ている。茂吉を訪ねた時の歌がある。

（昭和九年）

○をやみなき秋雨のなかたづねつ、脳病院に今ぞ参りぬ
（世田谷松原の青山脳病院）

私の手許に「アララギ」の昭和十九年九月、二十年十月（戦後復刊2号）、十一月、十二月、二十一年一月、二月の六冊がある。惜しむらくは復刊1号の二十年九月の見当たらぬことである。その復刊1号の^{注4}編集所便に文明が「十九年十二月号を二十年三月に発送したのち、本号（二十年九月）まで休刊の止むなきに至った」と言っている。

空襲による編集所、印刷屋、歌稿などの焼失により、二十年一月号より八月号まで八冊欠号となったのである。世相の混乱している戦後の最中、たとえ仙花紙の八頁とはいえ九月には発刊し得たということは、関係者の並々ならぬ努力があったと思う。文明は「アララギも相当古くなったから、会員諸君がこの辺で新しい方面を学びとる努力を怠れば、腐ってしまうかも知れない」と、戦後の出発に当たり、既にアララギの行末を見据えているかの如き発言をしていることは注目すべきである。

復刊2号の二十年十月号も仙花紙八頁であるが、「私案としては、地方のアララギ会というものが十分に文化的役割を果たし得るように地方会員が進んで勉強して欲しいことであ

る。新しい任務があるのではあるまいか」と、従来エリート選者による中央集権的な感があったアララギとしては地方分散を考え「地方会員諸君が自ら研鑽の機会を多く持つようにしたい。連絡先としてさし当たり次の諸氏を煩わしい」と画期的な提言をして、全国を十四地区に分け静岡地方は張間喜一（県静岡工業試験場長）を指命した。それに応じて張間は「静岡県アララギ月刊」を二十一年十月創刊した。

当地の戦後の動きを福男の日記に見る。

（二十年十一月十日）柳本先生ヨリ書信 新町通りニテ小生疎開先ヲ探シ中ノ紙谷庭太郎氏ニ会ス 犬蓼廻冊再興ニ就テオ話しアリ又柳本先生ノ書信モ当地ノ消息ヲ伝ヘ十五日マデニ歌稿送レトノ事ナリ

（二十一年四月三日）小松ノ池谷（宗観）宅ニテ犬蓼歌会。城西、紙谷、鈴木、寺田、太田進一、加山、野中みさを、池谷、小生。

（八月九日）午後一時追分小学校ニテアララギ歌会。城西、庭太郎、大竹玄吾、加山、鈴木（旧上村）、池谷、斉田、松山夫人、井口、安中、中谷。（安中新平が追分の校長だった関係があるが、戦後初の浜松アララギ歌会だったのでないか）。

浜松アララギ歌会、中谷福男の尽力によって創立の運びに至る。十二月三日午後六時より元城町、江見定則方（家康鑑掛松裏通り）にて開催す。連尺町博文舎内 中谷福男。「谷島屋タイムス」の記事であるが年次が不明。博文舎は谷島屋

書店の古書部で谷島屋が改築する昭和十三年まであったから、十一、二年頃ではないかと思うが意外と遅かった。集った人達も不明である。

戦後の二回目は翌年の四月二十七日、同じく追分小学校で開かれた。

「アララギ」二十一年一月号になると、仙花紙ではあるが四十頁に増えて、岡麓が巻頭を飾り茂吉、文明と続き会員の投稿歌も載り始めた。同号で注目すべきは「写生論発表のために」（杉浦明平）の一文である。

〔短歌は戦争中に国民の生活と感情とを比較的正しく表出した唯一のものであった。恐らく渡辺直己の歌が文章として発表されたら直ちに発禁は免れぬ運命であつたらう〕

映画監督の小津安次郎が「お茶漬の味」で、出征兵士をお茶漬で送るとは何事かと不許可になった時代である。直己の歌は『支那事変歌集』^{注⑤}（昭和十五年）に九十六首載っている。

○黒部峡に召集受けし感動が疲れし夜は浮び来るかも
 ○涙拭ひて逆襲し来る敵兵は髪長き広西学生軍なりき
 編者の文明が「公表がはばかるものがあるので削った」という幾つかの歌がある。

○命令を持ちゆか心決すれど軍の人間物品化に思ふ
 ○憤ほろしき心わきくる夕暮に反戦主義の語をおもひたり
 なおこの歌集に城西としては異彩と思われる歌二首を見

○旗の先にアイスカクテル^{くつ}括りつけ過せる列車の兵にとらしむ
 ○還りける小川部隊に君はなしかなしきかもよその遺骨さへ

『昭和万葉集』（全二十巻）が昭和五十四年から五十五年にかけて刊行された。これに当地主要歌人が記載されている。数字は巻数で、6—7を境に戦前・戦後に分かれる。

細田西郊	1—	アララギ
細田仲次	3—	同右
白井善司	1 4 5—14 15	国民文学派
赤井哲太郎	1 3 4 6—14	同右
柳本城西	2—7 8 9	アララギ、犬蓼
御津磯夫	3 5—15	三河アララギ
鈴木喜之輔	3 4—	アララギ
中谷福男	6—	同右
紙谷庭太郎	4 5—15	同右
松原 旭 ^{注⑥}	6—12 20	水がめ
加山 俊	—9 10	アララギ
前田道夫	—13 14 17 19 20	同右
山田震太郎	—16 19	「翔る」主宰

「アララギには廃刊など申す事実は到底あり得べからざる事に候。若し寸豪にてもアララギを疑はむものは正に無間地

獄に随すべし」この言は「アララギ」第三卷二号（明治43年）

の茂吉の編集消息抄である。その強気の茂吉も遅刊、休刊が続き経営的にも苦しんで明治45年アララギ子規没後十周年記念号を以て廃刊するつもりだった。が意外にも左千夫も無条件で賛成したので、拍子抜けして赤彦に知らせたところ、不賛成で全力を挙げて応援するから踏み止まれと言われ、アララギの廃刊は思いとどまった。（二十五周年記念号）

左千夫の死後、赤彦編集に携わり部数も倍増し、最盛期には一万部にも達した。赤彦死後、一時茂吉が再び継いたが昭和五年文明に移ると共に、戦中・戦後の復興を成し遂げた。平成二年百才を以て文明の死と共に求心力を失った「アララギ」は平成九年九十年の幕を閉じた。

○牛飼いが歌よむ時に世のなかの新しき歌大いにおこる

（明治三十三年） 左千夫

○みづうみの氷は解けてなお寒し三日月の影波にうつろう

（大正十三年） 赤彦

○最上川逆白波のたつまでにふぶくゆうべとなりけるか

（昭和二十一年） 茂吉

○小工場に酸素溶接のひらめき立ち砂町四十町夜ならむと

（昭和八年） 文明

私も老いました。次の文明の歌（昭和二十一年）をもって
終りたいと思います。

○君もわれもはげしき時代に生れあひて静かなる老なで願

ひ得るや否や。

〔六〕

注

（1）『雁來紅』葉鶏頭のこと。秋、雁の来る頃紅色になるのでこの名がある。紅緑天が最も愛した植物で、表紙にその彩色画を見る。

（2）『相生垣貫二』戦後は国語科担当となり、羽公と共に「蛇骨賞」を受賞。句誌「海坂」を創刊した。

（3）『御津磯夫』愛知県御津町の医師、今泉忠夫。「三河アララギ」主宰。『引馬野考』（昭和九年）著者。「犬蓼」と交流。

（4）『砦』同人歌誌、創刊号（平成七年八月）「編集↓所便に見るアララギ戦後の復刊」

（5）『支那事変歌集』（茂吉・文明共選「アララギ双書」

（77）収録歌三千六百余首。

（6）『松原 旭』名古屋女学院出身。家は積志の西伝寺。水がめ派。「犬蓼歌会」に出席。歌集『黄色亜麻』（昭和二十七年）。

全篇、お名前前の敬称略させていただきました。深謝いたします。

（中区）

年譜 (年齢は数え年)

姓	正岡	伊藤	斉藤(守谷)	岡	加藤	柳本
名(本名)	子規 <small>のほろ</small> (昇)	左千夫(幸次郎)	茂吉	麓(三郎)	雪齋(源平)	城西(満之助)
出生年(地)	慶応3年(松山)	元治元年(千葉)	明治15年(山形)	明治10年(東京)	明治8年(静岡)	明治12年(豊橋)
出生年(西暦)	1867	1864	1882	1877	1875	1879
明	14 (1881)	(17才)上京 明治法律学校 眼を病み帰郷				
	16 (1883)	(17才) 松山中学 中退・上京				
	17 (1884)	(18才) 大学予備門				
治	18 (1885)	(19才)(同門) 漱石を知る	(21才) 再上京			
	22 (1889)	(23才)嗜血 子規と号す 年未帰郷	(25才) 本所に牛乳搾取業 を営む			
	23 (1890)	(24才) 文科大國文科入学		(14才) 私立補充中学入学		
24 (1891)			(15才) 東京府立一中に 転校			
25 (1892)	(26才) 文科大中退 母・妹を 迎えに西下	上根岸へ家を構う 「日本新聞社」 入社	佐々木信綱に和歌 を、多田親愛に仮 名書を学ぶ	(16才) 府立一中、中退 私立大八州学校へ 入学		

小説

児童文学

評

論

随

筆

詩

短

歌

定型俳句

自由律俳句

川

柳

26 (1893)					香取秀真を知る		(15才) 豊橋時習館 中学へ入学
27 (1894)	(28才) 『二葉集』俳句革新			(20才) 静岡師範学校入学			
28 (1895)	(29才) 日清戦争従軍 帰国船中にて咯血 年未帰京	(32才) 同業者より 茶の湯・和歌を学ぶ		子規に俳句を学ぶ 『承露盤』75首 (28年～31年)		(17才) 同校中退 医学の基礎を学ぶ	
29 (1896)	(30才) 『背随カリエス』と 判明		(15才) 父と上京 東京開成中学入学				
30 (1897)	(31才) (松山) 『ホトギス』創刊	(34才) 桐ノ舎桂子 の歌会(岡麓を知 る)・牛飼ひの歌		(23才) 師範卒業 上京、子規を訪問 臨時句会開催			
31 (1898)	『歌よみに与ふる書』 第1回子規庵歌会	(35才) 『日本』に2首載る (春園の号)		(22才) 『心の花』創刊 (投稿)			
32 (1899)	(33才) (麓と香取) 第2回子規庵歌会			(23才) 子規を訪問 (香取と歌人として 初)		(21才) 豊橋歩兵18連隊 へ入隊	
33 (1900)	(34才) 『日本』募集短歌→ (8月) 大咯血	(37才) 『新年雑誌』3首 ←子規を初訪問		(24才) 子規庵歌 会を左千夫、麓宅 で35年まで開催		(22才) 東京済生学舎入学	
34 (1901)	(35才) 『墨汁一滴』 『仰臥漫録』	(38才) 『日本』に 『櫻花』18首	(20才) (3月) 東京開成中学卒業			(23才) 同学舎退学	
35 (1902)	(36才) 『病状六尺』 9月19日午前1時没		(21才) (9月) 第一高等学校入学			(24才) 医師国家 試験に合格。 豊橋病院勤務	

明治

		アララギ歌人	左千夫	茂吉	麓	雪 膺	城西
	36 (1903)	(40才)『馬酔木』 創刊。西遊の途次、 浜松一泊(山下愛花)		↓	(27才) 『馬酔木』同人		(25才) いちじく 『無花果短歌会』
	37 (1904)	(41才) (5月)『竹の里人選歌』 (11月)『竹の里歌』	(23才) 『竹の里人選歌』を 読み作歌。 (9月)東大医科へ	(28才)以後大正5 年まで約15年間歌 を離れる。 生家を手離す。	(30才) 豆場中学校教諭	(26才) 軍医として 日露戦争に出征	
	38 (1905)				(31才)(現 北高) 浜松中学校教諭		↓
	39 (1906)	(43才)『野菊の花』 (ホトギス)	(25才)『馬酔木』2 月号に5首載る。 (3月)左千夫訪問、 入門	(30才)『彩雲閣書 房』経営			(28才)召集解除 篠原村に『柳本医 院』開業
明	40 (1907)	憲吉(19才)作歌 (七高2年生)	(26才)青山脳病院 に移る				
治	41 (1908)		(45才)(全32冊) 『馬酔木』終刊 『アララギ』創刊		(33才) 『彩雲閣』開店		(30才)5月、 『犬蓼短歌会』 (廻覧形式)
	42 (1909)	『文明(20才)4月、 左千夫宅へ寄寓 一高へ入学、作歌 』憲吉(21才) 7月、左千夫宅訪問 東大入学、子規墓前に詣でた。		↓			犬蓼 5号 左千夫 選評
	43 (1910)		(47才)信州に赤 彦をしばしば訪れる	(29才)東大医科卒業 医科大学助手			
	44 (1911)	(7月)赤彦・憲吉 合同歌集『花』	『アララギ』9月号 子規没十周年号 (50才)7月30日 左千夫急逝	(30才)1月より 『アララギ』編集担当		(37才) 短歌界に入る	
大	2 (1913)			(32才)10月 歌集『赤光』刊	(37才)『聖心女子 学院』習字科教師	(39才) 『曠野会』	天蓼60号

3 (1914)				(38才)自宅に 書道塾を開く		80号まで廻覧
4 (1915)	(7月)憲吉(27才) 東大卒、アララギ を手伝う	(2月)赤彦、上京 「アララギ」編集発 行人	「アララギ」 選者固定制となる		(41才)「第三者」 『雁来紅』発行	(4月)81号より 冊子となる
5 (1916)	憲吉、林泉』刊	(7月)文明(27才) 東大卒。教員		(40才) 「アララギ」に復帰	(42才)教員をやめ 「明石合名会社」へ	(38才) 「犬蓼」100号
6 (1917)		[長野県内の 高女校長を歴任]	(36才) 「長崎医専」教授			
8 (1918)		大正13年(35才) 上京			(45才)「同社」 大阪出張所長となる	
9 (1920)		大正14年(36才) 歌集『ふゆぐさ』刊	(39才)「短歌にお ける写生の節」		(46才)大阪にて 短歌に精進する	
10 (1921)	大正歌人群		(40才)文部省在外 研究員「ボヤ」へ			
11 (1922)	(3月)(1~3号) 「まんたら」創刊	「谷島屋タイムス」 創刊			(48才)大阪出張 所閉鎖 帰浜	
12 (1923)	(7月) 「落葉松」創刊 (1~12号)	(1月) 「天守閣歌会」		(9月1日) 関東大震災	(49才)浜松短歌界 の指導者となる	
13 (1924)	(5月)「はりはら」 (1~20号)	(1月)「遠江新年短 歌大会」 (弁天島白砂亭)	(「青山脳病院」全焼) ↓			
14 (1925)	(5月) 「アカシア」	大正歌人群 「犬蓼」へ移る	(44才)1月帰国 ↓ (45才)赤彦没 再び「アララギ」編集。 世田谷に「青山脳病 院」復興、院長	(49才)代々木・山 谷に落着く	(51才)7月弁天島 にて「子規句碑建 立」記念句会	(47才)8月 「犬蓼」200号 記念歌会(弁天島)
15 (1926)					(52才)「曠野」 (自由俳句誌)	

大 正

	大正歌人群	文明	茂吉	麓	雪 麿	城 西
昭和 (戦前)	5 (1930)	〔41才〕「アララギ」 編集担当となる	〔48才〕「アララギ」 編集を辞す	福男、状況の都度 麓宅を訪ねる	〔58才〕11月 交通事故にて没	〔55才〕「犬蓼」 300号記念歌会
	7 (1932)	〔43才〕 『万葉集年表』刊				
	8 (1933)		〔1月〕「アララギ」25周年記念号			
	9 (1934)	御津磯夫 『引馬野考』	〔5月〕 憲吉 没(46才)			
	12 (1937)	第1回 「浜松アララギ歌会」	〔55才〕6月 芸術院会員。			
	13 (1938)	「谷島屋タイムス」 終刊(107号)	『万葉秀歌』上下 (岩波新書)		〔1月〕「雪麿遺墨展」 (市立図書館)	
	15 (1940)		〔10月〕「アララギ双書」 ^⑦ 文明・茂吉編『支那事変歌集』			〔犬蓼〕384号にて 発行中止
	19 (1944)		〔55才〕(7~12月) 陸軍報道班員で中 国に派遣さる	〔20年4月〕(64才) 山形県に疎開	〔68才〕(9月) 「聖心女子学院」を 退く	
	20 (1945)		「アララギ」19年12月号(20年3月発送) にて休刊(20年1~8月号) 20年9月号(復刊第1号)より発刊		〔69才〕(3月) 長野県に疎開	
	21 (1946)	〔10月〕創刊 「静岡県アララギ月刊」	〔20年6月〕 群馬県に疎開			〔68才〕 「犬蓼」復刊
22 (1947)	「犬蓼」「アララギ」 歌会—復活		〔66才〕11月上京 世田谷に移る		〔犬蓼〕400号	
24 (1949)		〔60才〕「万葉集私注」 刊行(37年完結)		〔73才〕 芸術院会員		
昭和 (戦後)						

昭和	26 (1951)		(62才) 上京 (9月19日) 子規50年忌	(70才) 文化勲章	(75才) 7月 疎開先にて没		
	27 (1952)		「アララギ」編集担当 を退く(五味保義へ)				
和	28 (1953)			(72才) 2月 3月2日築地本願寺 にて葬儀、告別式			
	30 (1955)						「犬藝」500号
戦後	37 (1962)						
	39 (1964)						(86才) 2月 没 「犬藝」598号にて 歴史の幕を閉じる
平成	40-64	『昭和万葉集』(全 21巻)(54・55年)					歌集「犬藝」刊
	2 (1990)		(100才) 12月 没				
	9 (1997)		「アララギ」終刊 (90年) (1993-1997) 小市巳世司発行人		「心の花」110周年 (1817号) 明治31年分刊 (1898年)		
出典	20 (2008)						
		『子規全集』全25巻 (講談社) 昭50年	『日本詩人全集』⑤ (新汐社) 伊藤左千夫他 『日本の詩歌』⑥ 文明他(中公文庫)	「アララギ」 昭和28年10月号 斎藤茂吉追悼号	「アララギ」 昭和27年5月号 岡藤追悼号	「雪隠」豊墨展」 参考資料 (昭和13年)	「城西展」(平成5年) 参考資料

戦後処理と呼ばないで

杉山 大

憤り抱えての帰国

二〇〇九年、師走の成田空港に降り立った私は、やり場のない憤りに苛まれていた。私の押すカートには、日の丸を貼ったダンボール箱が積まれている。箱の中身は、戦死者の遺骨である。つい数日前まで、灼熱のパプアニューギニアのジャングルを駆け、数十の村々を訪れ、収集した遺骨。自らの手で土を取り除き茶毘に付し、灰の中から拾い上げたものである。箱に手を置けば、南国の光景がよみがえる。肌が黒く人懐こいパプアの人々の顔が浮かぶ。しかし、空港の雑踏に飲み込まれると、それまで感じていた誇らしさは萎んでしまった。せわしく行き交う人波に「戦争で死んだ人が帰ってきたぞ」と叫んでみたところで、果たして理解されるだろうか。足元から首筋から冷気が忍び込み、ぞくぞくと寒気がした。凱旋帰国には程遠い寂寥感に、唇を噛んだ。

二〇一〇年七月十五日、我が国の総理が、硫黄島戦死者の遺骨収集を強化する特命チームの設置を指示した。現在、米

軍側の埋葬情報に基づいて調査が進行している。ほとんどの人にとつて関心の薄いニュースであろうが、私の胸の鼓動は高鳴った。骨を拾うだけが遺骨収集ではない。そこには汲み取るべき教訓や、未来の平和創造のためのカギが隠れているはずだと、インスピレーションを感じていた。

遺骨収集は、戦後六十五年という歳月を経て、道半ばどころか、もはや手遅れと思ってしまうような現状にある。私自身も、この行為にどんな意味があったのか、何かの役に立ったのか、ずっと未消化のままであった。そこで、あらためてトロピカルな体験を振り返り、人間の生死とは、戦争とは何かということを考え、遺骨収集の今日的意義を探索してみた。

パプアニューギニアへのいざない

パプアニューギニアがぐっと身近になったのは、二〇〇一年に遡る。きっかけは、祖父と大叔父から誘われた慰霊の旅だった。探検記や漂流記の類が大好きな私は、喜んでついていった。祖父の兄、私にとって大伯父が戦没した地には、いたるところに朽ち果てた兵器が転がっていた。同行の戦友や遺族の話を聞いて、観光気分は吹き飛んでしまい、強い印象が刻まれた。

二〇〇八年に、ある遺族の紹介で、政府の遺骨収集事業の存在を知った。そして、大伯父の死んだ土地で、戦死者の遺骨にふれたら、何か違う実感が得られるかもしれないと思っ

た。翌二〇〇九年にも応募し、二年続けて参加した。

パプアニューギニアは、『ゲゲの女房』で向井理さんが好演した漫画家水木しげる氏が、左手を失った地である。オーストラリアの北隣に位置するニューギニア島の東側半分とビスマーク諸島からなり、日本の約一、二五倍の国土に約六五〇万人の人が住む。四〇〇〇m級の峻険な山脈が連なり、深い密林に覆われている。その過酷な自然環境が、長く人間の往来を妨げていたため、言語の異なる五〇〇以上の部族が存在し、固有の文化を築いている。一九七五年に独立国となったばかりの若い国である。(それ以前を戦史用語の東部ニューギニアと呼ぶことにする)

ジャングルに散在する数戸〜数十戸規模の部落が人々の生活の場だ。その暮らしは自給自足にちかく、裸足で裸の子どもが普通に存在している。遺骨収集は、そのような村々をくまなく訪問し、遺骨の存在を尋ねていく事業である。

断続的・限定的だった遺骨収集

敗戦後、遺骨収集を実現するには、サンフランシスコ講和条約の発効を待たねばならなかった。一九五二年、遺骨収集の国会決議が採択され、政府は、第一次計画（一九五三〜一九五八年）、第二次計画（一九六七〜一九七二年）、第三次計画（一九七三〜一九七六年）を策定して遺骨収集をすすめてきた。

第一次計画において、東部ニューギニア方面で初めて遺骨

収集が実施されたのは、終戦から十年後の一九五五年であった。厚生事務官中心の派遣団十九名が、運輸省の航海訓練船大成丸に乗船し、東京芝浦を出港した。遺骨収集は、商船大・商船学校の航海訓練と平行して行われ、ソロモン諸島、ビスマーク諸島、ニューギニア島の主要戦跡で、船長以下六十八人の船員、及び八十九名の実習生が、作業員として献身的に収集を支えた。

約十五カ所の地区で収集を行ったが、一カ所当たりの作業日数は一〜三日に限られていた。当初から時間不足は想定されていた。計画書には「全部を収容することは困難であるので、一部（例えばのど仏等）のみを摘出して茶毘に付したうえ収集することとし、その他の部分は当該墓地にそのまま埋葬し置くものとす」と示されており、いわゆる象徴的収集にとどまった。大成丸は約四〇〇〇柱の遺骨と共に東京に帰港した。

第二次計画における遺骨収集は、一九六六年に実施された。厚生省職員五名と現地事情に詳しい東部ニューギニア戦友会の復員者五十五名が協力団として参加した。六十名の団員は、野戦病院跡や陣地跡で調査・収集を行い、八八〇〇柱の遺骨を送還した。

第三次計画の遺骨収集は、一九七三年に実施された。厚生省派遣団七名と民間協力団六十五名が、八グループに分かれて、今まで未実施だった地区、不十分だった地区を重点的に探索した。野ざらしになっていた遺骨を多数収集したが、地

形は著しく変貌していた。全部で一六三一柱が送還された。第三次計画終了後、大掛かりな計画は立てられていない。国は「自然条件、相手国の事情等により収集ができない地域を除き、おおむね収集は終えた状況にあるが、今後も残存遺骨情報が寄せられた場合には収集団を派遣する」（『厚生白書』）とし、南方地域の遺骨収集をおおむね終えたという立場をとった。

実際は、膨大な遺骨が残されており、その後も熱心な戦友や遺族が、発見情報を寄せ続けたために、例えば一九八五～二〇〇五年の二十年間に十二回も遺骨収集団が派遣されている。

掛け声と施策のギャップ

日本武道館で開催される全国戦没者追悼式等の行事では、総理・閣僚が決まり文句のように「最後の一柱まで……」「国の責任でお返しする」と述べている。死者へのたむけのつもりであれば、軽すぎる。国は実態把握を怠り、放任・放置したに等しいのである。

そもそも、遺骨収集に対する国家の責任が曖昧である。遺骨収集事業は、一九五二年の国会決議が根拠になっている。その決議文は、遺骨が放置されている状態が「遺族の心情・国民感情上忍び難い問題」であるから実施すべきとしている。巧妙に責任を回避する表現である。戦死とは、国家が兵役義務を課して徴兵し、戦場へ派遣した結果である。遺族が

切望しているからやるのではなく、第一義的に国家に責任があるのではないだろうか。

遺骨収集には、戦場の実相を明らかにする戦史研究が欠かせない。五味川純平氏らが詳細な戦争小説を書くことができたのは、部隊ごとの行動記録や戦闘詳報、帰還将兵の膨大な証言や回顧録があったからである。それらのデータを基に計画を策定していれば、より確度の高い収骨が可能だったはずだ。

先に述べたように、国は第三次計画の終了によって遺骨収集が完結したという立場をとってきた。一九六八年二月の厚生省援護局の公文書は「遺骨収集は概了したところである」と宣言している。実際は全く手付かずの戦域が圧倒的であるため、民間の遺骨収集が継続し、ときには現地住民とトラブルをひき起こすケースが生じた。そこで国は、個人・民間団体による送還を禁止、遺族に対しては慰霊・巡拝を行うよう指導した。それ以降も定年退職を迎えた戦友らがボランティアで細々と遺骨収集を続けたが、国は積極的に関与しなかった。

遺骨収集を包括する援護行政は、あくまで自国民である元軍人・戦没者遺族を受益権者とした国内行政の観点で、初期の厚生白書の章立ての中では「社会福祉の増進」に位置づけられていた。次第に「障害者施策と地域福祉の推進」に分類され、遺族の高齢化にともない「高齢者福祉」に移動している。様々な援護行政の中で、遺骨収集は慰霊事業に含まれ、

遺族が参加し易い墓参・慰霊巡拝へとシフトしている。

停滞を打ち破った情報収集・調査事業

二〇〇六年に、未送還遺骨情報収集事業という調査事業が開始された。この事業は、身軽な人数で派遣され、州政府への事業説明及び協力要請、ラジオ局への宣伝依頼、各所へのポスター掲示等の周知を行う。そして地図上に存在する部落をくまなく訪ね、村のリーダーや地方議員と面会して協力を要請する。その場で、次々と遺骨の目撃情報や保管情報が提供される場合もある。それらの情報（地名、発見者、地権者、保管者）が丹念に記録される。村に情報が無くても、発見されたときのために調査シートとインスタントカメラを配布して、記録を依頼しておいて、後日回収する。パプアニューギニアの識字率は高く、詳しい記述が期待できる。

遺骨の所在情報を調べておけば、後日、政府派遣団が確実に受領できるという、合理的な手法である。「情報を待つ」だけだった国は、ようやく積極的に情報を得ようと方策を練ったのだった。この事業は、「概ね三年間」という方針であったが、成果を上げているため継続中である。

私は、ちょうどこの時期に派遣されたので、調査事業が現在進行形で役立っている様子を実感した。同時に、同行した遺族から、日本の「親父の背中」を見せられたような気がした。前置きが長くなったが、続いては、遺骨収集に今日的意義を肉付けする試みである。

戦後処理と呼ばないで——絆と癒しの再定義

遺骨収集は「戦後処理」とも呼ばれている。言葉尻をとらえるようだが、まるで書類をシュレツダーにかける廃棄処理を連想してしまふ。

交通事故や事件に肉親が巻き込まれ、不幸にも命を落とした場合、遺族の悲しみは薄れるどころか日々強くなる。当局は原因を究明し、責任者は償いを求められる。大事故なら、当事者は現場に長期滞在し実態把握を行うはずだ。JR福知山線脱線事故に見られるように、遺族が追求を続けているのは、再発防止である。

戦争による死であっても、例え六十五年も昔のことでも、ある日突然大切な人を失った場合の悲しみ、苦しみは、同じである。

いま熱心に遺骨収集を担っている人たちは、猛烈に働き経済成長に貢献した世代である。ある程度の地位も財産も築き、余生を謳歌できるだろうに、よくもこんな困難な事業に参画していると脱帽する。いったいそうさせるのは何だろうと耳をすませば「父親の顔を知らずとも立派に成長した姿を見せたい、父に認めて欲しい」と、背中が語っているように聞こえてくる。あるいは「苦勞して育ててくれた母親への孝行」と聞こえてくる。それは人として、自然な行為のように思われる。骨を拾うという行為に、言い尽くせぬ想いが込められている。

出征した人は、ある日突然「〇〇島で死亡」という漠然とした通知で死亡が知らされ、木の箱になり、帰ってきた。中は身は、石ころ一つだったりと和紙の切れ端だったりした。当時の遺族は、生きるために必死で、死に様を究明する余裕はなかった。それでも、忘れたわけではなかったのだ。

近年、遺骨の身元が判明し、家族の元へ送還されるケースが続いている。それは、一九九一年にシベリア抑留中に死亡した人たちの遺骨収集が可能になって、二〇〇三年からDNA鑑定が実施されるようになったためだ。我が静岡県だけで、すでに十件を超える身元が確認され、遺族の元に届けられている。静岡新聞は、遺骨を迎えた遺族の様子を丹念に取材して報道している。辺見じゅんの書いた「収容所から来た遺書」という小説がある。死者の遺書を、戦友が記憶し、口頭で家族に伝えたノンフィクションである。戦友は、四人の子どもたちに「力強く生きよ」というメッセージを伝えたのである。国は戦友にかわり、骨の主の生き様、死に様まで伝える責任がある。

いま無縁社会という言葉がうまれ、命の価値が揺らいでいる。それは、戦争責任を総懺悔で逃れようとし「仕方なかった」と人の死に様から目をそむけ続けたことが一因ではないだろうか。遺骨収集は、家族の絆をとりもどす、一つのアプローチになると思うのだが、それは飛躍的発想であろうか。

守れなかった家族——銃後と前線の実相

国と県は、戦死者の記録、即ち「軍歴」情報を保有しており、そこから生前の行動を再現することができる。(ただし、玉碎部隊など、一切の手がかりを得られない場合もあることも付記しておく)

私は県庁の長寿政策課援護恩給班から大伯父の記録を入手し、同じ戦地に展開していた部隊史、戦誌を参照して、再現を試みた。

浜松高等工業学校(現静岡大工学部)に通う大伯父は、戦時措置で十二月に繰上げ卒業。翌二月に臨時召集を受け、豊橋で入営。中国山西省大同に送られた。新部隊に編入され、翌年三月、上海から一カ月の航海を経て、東部ニューギニアに上陸。直ちに密林の山岳地帯を縫う自動車道路の建設に取りかかる。その途上に工兵から主計兵へと転科している。これは、食料調達のための原住民の懐柔を担う要員不足のためと想像する。敗色濃厚になり、逃避行に次ぐ逃避行を強いられる。大伯父は、ゆうに一〇〇kmを越す距離を徒歩で行軍していた。軍靴は二カ月で破れて使い物にならなくなったという。

東部ニューギニアは、ダグラス・マッカーサー將軍指揮する米豪軍の反攻を、一九四四年四月まで食い止めていた戦場である。日本軍は一九四二年のミッドウェー海戦から制海権を失っており、陸軍三個師団を中心とした十数万人の将兵は、ニューギニア島の北岸一五〇〇kmを退却しつつ戦った。最前線の部隊は、富士山より高い山脈を二回も踏破して、

二〇〇 km 以上の撤退行軍を強いられた。この地の勝敗が決すると、米軍主力は破竹の勢いでフィリピンへ、次いで沖縄へと向かう。大伯父が守るうとした故郷浜松は、空襲や艦砲射撃にさらされた。生家は全焼し、弟の一人は爆弾で足をちぎられた。

東部ニューギニアの日本軍は、静岡県西部と東三河を合せたぐらゐの山間部に立て籠もり、狩猟採取の持久生活に耐えていた。同じ部隊にいた同僚の手記を読めば、大伯父が日々、何を食べて何を考えていたのか鮮明によみがえり、一日でも長く生きようとした執念が感じられる。

食料・弾薬の補給は一切途絶えていた。連合軍機が飛び交う昼間は息をひそめ、「ルーズベルト給与」と呼んだ食料を目当てに敵陣に切り込んだ。兵隊の死因は、病死と餓死が圧倒的に多く、兵隊は、大本営の無責任な戦争指導を身をもって知っていた。生存兵は、戦争には負けたが、生きるために過酷な自然と闘い抜いて勝利した。

十数万人の日本軍が、降伏時には一三、二六三人に減っていた。さらにそこから生還できたのは一〇、〇七二名に過ぎなかった。大伯父も、帰還船に乗ることなく、敗戦の年の十一月に捕虜収容島で死んだ。

東部ニューギニアの戦没者は一二七、六〇〇人、うち遺骨送還は五〇、〇九〇柱、残存遺骨は七七、五一〇柱。先の大戦における、日本本土以外の戦域における戦没者は二四〇万人、送還された遺骨が一二六万柱、未送還遺骨が一一四万柱。

うち三〇万柱が海没で収集不可能とされ、六一万柱が収集可能、二三万柱は相手国の事情により収集困難とされている。

(二〇一〇年三月三十一日現在、厚生労働省)

戦後のある日、生還した同郷の戦友が、東伊場のバラックを訪ねてきた。そこで両親は、息子が終戦後に餓死したことを知らされた。日本社会は「戦争はもうコリゴリ」と安堵して戦争放棄の新憲法を受け入れた。国会を取り巻くデモは起きなかった。様々な反省や総括が試みられた。しかし、私の世代はその当事者たちの総括を省みることなく、何となく戦争があつて、何となくたくさんの人が死んだらしいことだけ知っている。私より新しい世代は、日米が戦争したことすら知らないという。

何でもよいから、戦争で生じた事実を目を向けることが重要ではないだろうか。かつての戦場には、遺骨だけでなく大量の遺留品が眠っている。飯盒や水筒、眼鏡や万年筆、銃剣などの兵隊の持ち物が多数見つかる。想像を掻き立てるものばかりである。派遣団の方針では、持ち帰るのは遺骨だけで、遺留品は残置することになっている。歴史教材への活用の道があると思う。日本の教育現場に需要は無いのだろうか。

私には、次から次へと疑問がわきあがってくる。最大の激甚災害は、戦争という人災である。戦争に反対か否かより一歩踏み込み、どう予防するかを知りたい。新聞各社の憲法改正世論調査の項目には、私の答えたい項目がみつからない。神国日本の臣民は、コロリと態度を変えて、鬼畜と蔑んだG

HQの占領を受け入れ、たった十一年後に「もはや戦後ではない」と宣言した。であるなら、仮にまたもし戦争が起きても、戦わず命を失わないで降参して、十年で占領者を追い出せばいいのではないか。絶対に戦死者を出さない有事の備えを見いだすべきではないだろうか。

国際協力時代に相応しい枠組みを

日進月歩の国際社会は、地球サミット（一九九二年）やミレニアムサミット（二〇〇〇年）で、世界の課題を克服するための理念を生んでいる。国際協力を重視する日本は、パプアニューギニアに対しても、様々な援助を投じてきた。首都ポートモレスビーのジャクソン国際空港と新ラバウル空港、二つの空港を建設した他、病院、学校などのインフラを整備している。大蔵計画省に管理業務の専門家を派遣し、公共事業省に人材養成のアドバイザーを派遣した。教育省に提供した遠隔地への基礎教育普及プロジェクトによって、国営テレビでモデル授業が毎日行われている。さらに、青年海外協力隊員を毎年二十人前後派遣している。

これほどの国際協力の枠組みがあるにもかかわらず、遺骨収集をサポートする仕組みが構築されていない。もともと、大使館を通じてPNG国立博物館に協力を要請し、遺骨収集専門家が派遣される他には、収集エリアに赴任している青年海外協力隊員が個人的に関わることはあっても、開発援助施策と遺骨収集事業は、全く別個である。有機的にリンクさせ

て、相乗効果を生むことはできないものであろうか。

なぜなら、派遣団が現場でぶつかる困難は、急激な市場経済化に原因があるからである。日米が死闘を繰りひろげていた頃のニューギニアは、弓矢と石斧の原始的な共同社会で、文字も存在していなかった。一九八〇年代に入っても、貨幣や加工品が流通しておらず、物々交換が行われる地域も残っていた。

未熟な国家建設は、汚職の温床となり、遺骨収集エリアの住民は、口々に「自分たちは貧しい。行政は何もしてくれない」と、立ち寄った派遣団に不満をぶつける。日本が道路・橋梁建設や、給水設備等のインフラ整備を行っていることを知っているからである。日本だけでなく、先進諸国や、キリスト教系団体は、施し型の援助を行っていた。

派遣団は、遺骨収集のミッションとODAの違いを説明するも、交渉は難航する。ときには、遺骨収集への協力と引き換えに、様々な対価を要求してくる部落もある。遺骨は金になるとの誤った風評も生まれかねないのである。

今日、施す援助は見直され、技術者を派遣して行う人材育成、さらに包括的な開発援助が重視されている。遺骨収集の対象地域に、一人でも日本人が滞在して関与していれば、遺骨収集の地ならしになることは間違いない。外務省やJICA、そして現地政府の諸機関を結ぶ枠組みが作られ、サポートを得られるならば、より精度の高い事業へと発展できるだろう。

世界に通じる人材育成につなげたい

「いつまでやるの」と言われる遺骨収集には、「相手国の事情で困難」な国が残されている。中国と北朝鮮である——

「お互いの要求を出し合って、話し合えば分かり合えないことはない……」これは、慰霊の旅に共に参加した大叔父の言葉である。警察、自衛隊、在日朝鮮人と等しく商売をしてきた経験に裏付けられた言葉だ。「苦手な人のところほどよく通え」という、トップセールスマンの鉄則もある。ベトナム戦争で枯葉剤を散布した米国でさえ、ベトナムで現地人と共同で米兵の遺骨収集を行っているのだ。

遺骨収集は、極めて人道的な国際活動であり、しかも、通常、現地人の作業員を雇用して、共同作業で実施する。パプアニューギニアの場合も、私たちを案内するガイド、専属ドライバー、警護の警察官、コテージのオーナーとスタッフ、調理人と、たくさんさんのコミュニケーションが生まれる。ときには、相互理解なんて「絶対無理!」と思うこともあったが、やっぱり同じ人間なんだなあと、価値観を新たにすることもある。パプアニューギニアに火葬の文化は無いが、遺骨を清め・焼き・拾う、一連の追悼行為の全部を、近所の村人が手伝ってくれた。無邪気な子どもたちが細々とした作業まで率先して手伝ってくれた。そして一緒に遺骨を拭い、骨を拾った、何時間もそれが未知なる物への好奇心からだとしても、心から嬉しかった。

日本は経済大国である。勤勉な我々が、パプアニューギニアを未熟な国だと笑うのは、た易いことである。では我々は、そんな彼らへ、自由と民主主義について、公正な選挙について説けるだろうか。自助努力による発展の説き方を、学んできただろうか。パプアニューギニアの子どもは、初等教育の成果で十四歳までに英語を習得している。私はデジカメを首から提げて優越感にひたりながらも、彼らとデイスカッションできなかつた。

本当に多くのことを学んだ遺骨収集だったが、青年学生の参加枠はわずか二人だった。いま、若者のボランティアに対する意識は高く、何らかの形で国際協力に関わりたいと思っている人も多い。そんな若い世代が、先の大戦の戦場だった国で遺骨を見せられて「知らない」と答えることを危惧する。遺骨収集は、古いものを処理する事業ではなく、日本人が日本を見つめなおし、心を豊かにする事業であって欲しい。派遣団の獲得した知識・経験は、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に埋めてしまうことなく、広く国民に還元されるべきである。国民全てに戦争の真実を伝える事業として、新たな意義を付加する再定義が必要であろう。

(中区)

中西美沙子

今回は、国文学、戦後論、地名考、言語論など多様な評論の応募がありました。思いを記すことだけでは「評論」になりません。論を深めるためには、それなりの構成が求められます。それは筆者の見解を強固なものとするためです。良質の評論は音楽の楽譜にも似ています。主要なテーマが、変容と繰り返しで構成されているからです。

大正歌人群（浜松詩歌事始後編）

大正期浜松の文芸活動が手に取るように分かり、興味深く拝読しました。丁寧に資料を読み解き、時の流れに没したものを掘り起こす作業に、敬意を表します。浜松文芸史の良質な資料になると思います。淡々と事実だけを記す方法に、読み手の想像力が膨らみます。読後感が爽やかなのは、そのせいでしょいか。

戦後処理と呼ばないで

この論には、筆者の憤りが溢れています。怒りに似た感情も理解できます。が、論をする場合は「事実」と「根にあるもの」を客観的に文章化することが求められます。遺骨収集からみた国家の在り方や現代日本人の感覚は、どこからやってくるか、分析する必要があります。このテーマはむしろ「エッセー」か「ノンフィクション」のジャンルの方が意図が伝

わるのではないでしょいか。

貴布祢の地名由来考

地名の由来を考えることは、共同体の発生をみつめることと同じだと思います。その場所に存在することの証として地名はあるのかも知れません。この論を読みながら、そのような考えが浮かびました。興味深く読んだのですが、文章が少し杜撰なのと、私的な感情の羅列が気になりました。文末の助動詞は統一する必要があります。

翳り

評論は感想だけでは成り立ちません。歴史的な出来事と現代が有機的に結びつかなくては、論になりません。現代の持つ翳りの出所を、緻密に分析する必要があるのではないでしょいか。20枚でそれを表すとしたら、論点を狭くして考えないと散漫になってしまいうでしょいか。同感する部分は多々ありました。次回に期待します。

文は分析と想像で成り立つ

文章を分析、想像することは、文章を書くためだけでなく、鑑賞する折にも必要ですね。この論を読んで「分析とは何か」「イマジネーションとは何か」の論の根拠になるものが、推敲されているように感じませんでした。そのせいか、ユーモアに関する文章の並列の意味が汲み解けません。人は或いは書かれたものは、なぜユーモアを必要とするのでしょいか。そんなことを読みながら考えさせられました。

随筆

「市民文芸賞」

根深皮むき機

石橋朝子

現在は、磐田市となっている私の育った村には、もはや昔の面影はない。十年ひと昔と云ったその言葉さえ既に死語である。もう五年前ですら昔になったような気がする。あの祖父が現存していたら、何と嘆く事だろう。

私と祖父が百姓であった頃から、今もずっと続く特産物に、白葱がある。

白葱の出荷は大変な労力で、寒ければ寒いほどに商品の価値がある、とういものなのだ。朝霜の溶けるのを待って葱畑に立つ。寒風は頬や耳をもぎ取るかと思ふほどに冷たい。冷たいと言うより痛いという方が正しいかもしれない。葱の畝

と畝の間に身を置き、鍬で葱の根元をめぐる様にして掘って行く。その名のとおり、土の中に深く育った白い部分が高いほど、価値が上がる。そうする為には、二度三度と葱の根元に土掛けをやらねばならない。これがまた大変で、葱の畝を跨ぐと、短足の私などその葉先がお股につかえてしまう。根深の先は出荷の時までは折ってはならない。成長の妨げになつてしまうからだ。叱られながら根深の畝を削った思い出は、やはり忘れられない。とにかく寒風との戦いであった。そのくせ一生懸命だから汗をかく。火照つたり身に冷たい風を感じて働いたもの

だ。掘り起こした葱を畝に並べる。それを藁で一抱えほどの束にして縛り、畔に止めてあるリヤカーに積んで家まで引いて帰るのだ。何度も繰り返して運び終えると、おうどに山の様に積みあげた葱の皮むきが始まる。

軒先の日あたりのよい場所に筵を敷き、専用の座布団を置いて目の前に葱の束を四、五把運んでから、其処に座つて皮むきを始める。筵の前部を折り返して膝に掛け、ほろ布と包丁を用意して作業にかかる。まず葱の根を切り捨て、中心の綺麗な葉を残し、なるべく白い部分を長く見せる様にして、一枚ずつ丁寧皮を剥いてゆく。軍手をはめているだけの手は、その指先から凍えてくる。泥のついた手袋の両手を擦り合わせて、息を吹きかけ温めながらなるべく楽しい事を考えるようにして働いた。こうして丸一日葱の皮むきの日もあった。私是要領よく適当の処で計量の役に回つた。

綺麗に剥き上げた葱の十本位を、根元と葉の付け根ぐらいの処で縛り、これを横に四つ並べ三段ぐらい積み重ねたら、

菰で巻き細縄で上下真ん中と三か所を縛る。こうしてやつと一つの梱包の完成である。これを出荷の度二十個位作って、葱の葉先を揃えてカットする。葉っぱから出るぬめりと鼻を突く刺激的な匂いに、最初は参つたものだ。こうして決められた時間に村の出荷場へ運んで行く。それもまた活躍するのはリヤカーしかない。一人が引き、後押しをする者と二人以上の手が必要であつたから、毎回大変な思いをしたものだけれども、その時はそれが当然と信じてもいたし、疑いもしなかつたのだ。

やがて私は、過労から葱の皮むき中略血をして、入院手術の憂き目に合い、もう百姓の出来る体では無くなり、妹に全てを譲って嫁いだ。

何時だつたか在所を訪ねた時、作業場の方から聞き慣れない妙な音がしてきた。シューシューという何か蒸気音みたいである。覗いてみると妹が葱の皮を剥いていた。それは細長い台付きの機械で、右端にラツパみたいな口があつて、そこに葱を畑から取って来たままの状態

で一本ずつ差し込むと、蒸気力で見事に皮を剥く、剥かれた皮もシャツと飛んで落ちる。そして白く輝く根深葱になつていた。驚いた。

何という事よ。あれほど厳しかった葱の出荷など、夢のまた夢。

「あんたねえ……なに時代の人もう何年も前からこうしてんのよ。余所で言わんでよ恥ずかしい」

ポンポンと歯切れよく次から次に飛び出す妹の説明で、今更ながら時代の流れと、物事の進歩を痛感した。根深の土掛けも掘るのも全部機械、その上運んでくるのもトラクター、仕上げも束ねたりすることなく、細長い段ボールに並べて詰めれば終わる。

「楽になつていいわねえ。手早に出来るしさ」言い終わらぬうちに妹の鉄が飛んで来たのだ。

「だけどさ、これ全部買ったのよあんな！ わかつてる？ 支払いに大変だからーだつてさ百や二百じゃないんだよ」なるほど申し訳のない事で、心の中で呟いた。

「そうだよ。だけどほんと偉いわ、あんただから出来るのよ」

つくづくわれながら情けなく、もつと上手な言い方もあるうものをと反省しきりであつた。

根深皮むき機そばかすの妹よ

立派に新築した作業場には、大きなストーブが燃えていた。日向を追い掛けるようにして、息を吹きかけながら一本一本丁寧に葱の皮を剥いていたあの頃の自分が愛おしい。

これでいいのだ。あれはあれで私の体験したという財産でもある。立派な経験でもあつたのだと。小癩な妹に一句、そばかすをつけてやった。

斜めに差し込んでくる夕日を足もとに集め、私は小さく微笑んでいた。

雀斑美人という言葉があつたっけ。

(東区)

「市民文芸賞」

寒節句

吉岡良子

孫が初節句を迎える時期になって、わたしと娘はひな人形の店へ出かけた。孫はパパとお留守番である。

チラチラ小雪の舞う曇天の日曜日だ。成人式間近の振り袖姿があちらこちらと華やかに目を楽しませてくれる。

人形店も一段ときらびやかだった。一面の赤いもうせんに色とりどりの勢揃いで、店に入って感嘆の声をあげ、ゆっくり見て廻った。しかし、歩き進むにつれ、ひな人形というものは想像以上に値段の張るものと分ってきた。次第に歩き方も恐る恐るという感じに変わる。

「奥様」「おばあちゃま」と勧誘の声に責め立てられて、身の置き処もなくなつた。急いで一番安いものを求め、逃げるように店をとび出してしまふ。

ヤレヤレ：という感じで街を歩いた。母娘ふたりで歩くなんて何年ぶりだろう。娘は安い人形でもうれしそうにくれてくれるし、嫁ぎ先でも家庭円満のよう、わたしとしても充ちた気持であった。

浜松の街もずいぶん店が入れ替わつたけれど、有楽街やモール街なんか、なつかしいよねえ——と言いつつ。

「でもさ、この季節になるときつと昔を思い出すんだよ。寒くて、寂しくつてさ」

娘が屈託のないような顔で言い出した。わたしは驚いて立ち止まりそうになり、たたらを踏んだ。そのまま歩きながら娘は続ける。

「お正月が過ぎて鏡開きの頃になると、お母ちゃんは必ず旅公演に出たでしょう。家の中は急にしんとつて、わたしは一人になってしまつてさ。お兄ちゃんも札幌の大学に戻つたし、父ちゃんも仕事で、正月が賑やかだった分落差があつてさ。ほんとに寒いと思つたっけ」

当時のわたしは劇団の仕事で、正月明

けから沖繩へ二か月ほど公演に行くのが定番だった。つまりその日を皮切りにずつと寂しい生活が始まるという、一年の幕開けだったというのだ。わたしは返す言葉もない。

「でもそれは当たり前なこと、どこの家もそんなもんだと思つていたから、平気は平気だったんだけどね」

わたしは冷たい風が鼻がキユンとなつて、そのまま涙をこぼした。ちょうど娘が十一才から十八才くらいまでの間、長い巡業が続いていたのだった。

わたしも思い出す。

「ごめんよ、いい子にしていね。お土産買って帰るから」

と、慌しく出かけたものだ。後ろ髪を引かれて飛行機の窓から真っ白い富士山の頂を見つ、浜松あたりを探しては「ごめんよ」と空からつぶやいたりした。

北海道の時もそうだった。公演や移動の合間に遠く南西の方角へ向かつて、やはり「ごめんよ」とつぶやいた。あと何週間：と帰る日を指折り数えて暮した。けれど子供たちはいつも何も言わな

った。だからそれなりに、浜松では父ちゃんと三人で仲良くやっていると想っていた。それなのにこの日突然娘は歩きながら言う。それも恨むようでもなく、むしろ懐かしそうに笑っているのだ。

「父ちゃんの作るごはんはどうもねえ。たいてい野菜いため一品だったし、味がないのよ。だからどんなにおなか为空いていても、沢山食べられなかった。わたしが食べ物の好き嫌いが無いのは、きつと目の前の物を食べるしかなかったせいかもよ。今だに味覚が定まらないところがあるもの」

娘は次々と思いついて出していた。

「ところがさ、近所のおばさん達がとても親切にしてくれたの。うちの仕事のことをよく分ってくれた人ばかりだったよ。『お母さんがいなくて大変ね』と言って、山盛りのご馳走を届けてくれる人や『この子よ、いつもずっと留守番してる子』と紹介されて、そこのお母さんを手厚くもてなされたり、寂しい思いをした分だけいいこともあったような気がするよ」

わたしはグズグズと涙をふいて娘について行く。

小雪がチラチラと行き交う振り袖に舞って、確かに寒い日である。道ゆく人達もきつと多くの幸せを持ち合せているのだろう。みんなニコニコと活気があり、涙をふきながら歩くわたしとすれ違っても、誰も振り向きはしない。

子供たちが無事に育った上、孫にも恵まれて節目節目の祝い事も続いた。様々な体験を積んで親も子も学んでいく。いいことも悪いこともみんな丸くまとめて大きく包もう。そしてそれを至福と思い、感謝してお節句を迎えることとしよう。

娘と別れて家へ戻り、しみじみと考えた。つらいこともあっただろうに、よく今まで不満も言わず成長してくれたものだ。彼女にとつてあの頃は修業の場だったのかもしれない。これからわたしの季節にはきつと娘の言葉を思い出し、今まで以上にひとしおの寒さを感じるようになるのだろうか。

(南区)

「入選」

「黄色い キャラメルの箱」

山田 知明

それは、今から五十年以上も前の私が五、六歳の頃の話である。父は国鉄職員、母は日本楽器の天童工場に勤めており、私は父方の御祖母さんに育てられていた。又、この頃の国は、高度成長に支えられ東京オリンピックに真っ直ぐに進んでいた時でもあった。

父は夜勤が多く、ほとんど家に昼間居なかつたが、一ヶ月に一回位、公休と呼ぶ休みがあった。

その日は決まって夕方になると「おい、行くぞ」と言つて、私を父の自転車の荷台に乗せ家から十五分位の所にある居酒屋に連れて行ってくれた。父は仲間と酒を飲み、私は予め用意された角の小さな椅子に座り、来る前に買ってくれた

黄色い箱のキャラメルを食べるのである。父の酔いが回ってくると、決まって「全部食べたらだめだぞ、虫歯になるで」と、言った。これは父の口癖であったが、当然その頃には箱の中は空であり、父もそれを知っていたに違いない。

ここで一息つくと、私達は夕餉の支度の出来た家に帰り、早速空になった黄色のキャラメルを箱を今度は母に渡すのであった。母は顔一杯に笑みを浮かべ、茶筆筒にそれを仕舞う。

そして幾日かが過ぎ、月末となり、父が夜勤で夕方出掛ける日となった。いよいよ今度は黄色いキャラメルが父の手に渡される。父が大事に服のポケットにそれを入れるのを見ると、母は、又安心した顔をした。

翌朝、母は寝ている私を起こして、母の自転車に乗せられ「ちんちん踏切」に向かうのであった。当時の私達は、この遮断機が降りて警報機が鳴る無人踏切をこう呼んでいた。

しばらくすると、下りの貨物列車が来た。私が遮断機が上がる前にいつも線路

内へ入るので、母は私を捕まえていた。

さて、列車が通り過ぎる。最後尾を見る。居た居た。父が笑顔でデツキの外に居る。右手にはあの黄色いキャラメルを箱を持ち、母に向かって投げるのである。そして、それを列車の通過後に即私と母とで線路内を探すのであった。そう、この日は父の給料日、母はそれを見ていたのであった。当時は現金支給であり、この給料袋が四つに折られ、ちょうどキャラメルが四つに入るのであった。

何故この箱が選ばれたかと言うと、手に持ち易い、目立ち易い、そして投げ易いという理由からであったと思う。

しかし、ある夏の日の朝であった。台風が近づいており、空は今にも泣き出しそうに曇り、いやな東風が吹いていた。いつもの様に父の列車が通り過ぎるのを待ち、父の投げてくれた黄色いキャラメルを、母と私は必死で探した。「無い」「何処を探しても無いのである。母は汗びっしょり、私も子供心に不安で一杯であった。

雨が降り始め、風は強さを増し私達を

邪魔物扱いしだした。「無いよ、お母ちゃん」私は、大きな声で言った。母は「も

う上りの列車が来る。だめだよ」と、言った。その時、警報機が鳴り出した。母が線路内から「出よう」と、言った。大きな声を出したその時、私は丁度ススキと側溝の間にあるキャラメルを箱を見つけた。「あつたよ」と、叫んだ瞬間、母は既にキャラメルを手にして私を抱え込んでいた。ほんの短い時間であったと思うが、上りの列車は何事も無かった様に行ってしまった。そこには私達が呆然と立っている姿だけが残り、雨は容赦無く降っていた。

今、老人ホームのベッドに耳の遠くなった母が居る。ホームを訪問した折に、母に言ってみた。「母さん、あの黄色いキャラメルを箱の話を知ってるかい」母は、大きく頷き「そう言えば、最近お父さん見ないね」と、言った。「そうだね」と、答えて「今度来る時にキャラメルを買って来るからな」と、言ってしまった。

帰り道、いつものちんちん踏切を通るのだが、この踏切も時代の流れには勝て

ず既に高架化となって仕舞い、その面影は何一つ残っていない。ただ、何処までも続く線路がキラキラと光っているのみである。風が、遠い日の思い出を全て持ち去ってしまった。しかし、あの黄色いキラメルの箱だけは、母と私の心の中に永遠に生き続けている。

(中区)

【入選】

笑顔と混乱の 都マニラ駐在記

畑中一郎

ニノイ・アキノ国際空港に降りた。到着通路を進むと、生暖かい風と、三人のバンドマンが奏でる「デキシーランドジャズ」が迎えてくれた。十五年前、三年契約で工場の立ち上げを委嘱されたときである。

日本人駐在員が待つているところに、仲間二人と向かった。駐車スペースを区画するための金網フェンスに、現地の人が大勢群がっている。

旅行用バッグを転がしながら近づくと、

「バッグ運ぶよ!」

片言の日本語で、親しげに数人の現地人が近づいてくる。

「バッグを渡さないでください、そのま

ま持ち去られます!」

駐在員が叫ぶ。まさに修羅場である。住まいのコンドミニアムに向かう道路には、乗用車、バイク、自転車に、有名なジプニーが入り乱れ、われ先に進むので、渋滞がますます激しくなる。相手を威嚇するためにクラクションを鳴らすので、喧騒ははなはだしい。大変な国で仕事を引き受けたものだと、初日の感想だ。

技術者の先発隊を派遣してあったので、当夜の食事はメイドが用意してあった。就寝時間になったので部屋に入ったところ、約束のカーテンが付いていない。仕方なしに、ロハス大通りを走る車両ライトの洪水と、南十字星をベッドから眺めながらの夜となった。一カ月後にカーテンが付いた。

翌日、はやる気持ちを抑えながら、私たちは工場に向いた。日本で研修を積んだ、二十人のスーパーバイザー(SV、リーダー)と、採用されたばかりのワーカー(作業者)が、笑顔で迎えてくれた。指導を受ける姿勢は素直であり、貪欲で

ある。しかし、日本人の目の届かないところでは、手を抜く場合が多い。

ある日コンテナ発送場に、フィリピンの長蛇の列があった。採用面接に応募した人たちである。三十人募集のところ、およそ十倍集まるとのことであった。年齢は二十歳未満が多い。この素人集団を一年の間に六百人まで増やし、交代勤務に就かした。毎日が戦場で、気の抜けるときがなかった。

仕事開始半年後、急な増員により一ヵ月分相当の部品不良が発生した。想定内ではあったが、注意が行き届かなかったのだ。不良品の対応は、国内でも多くの経験を積んでいる。基本に立ちかえっての解決方法が最適である。その後三ヵ月かけて修理し、ことなきを得た。この間が最大の苦しい時期であった。

日曜日にメイドは教会のミサに出掛ける。この国は熱心なローマカトリックの信者が多い。朝食は用意してくれるが、昼、夜は無い。夜は繁華街に出て済ませることがほとんどだ。現地食、中華、日本食ありで、不自由はない。料金も日本

と同じくらいである。

その後のコースは、カラオケクラブが定番だ。バサイ通りの「イリュージョン」が有名である。感覚鋭く日本人と見分けて、フィリピーナは声をそろえて、

「いらっしやいませ！」

と舌たらずな言葉と笑顔で迎えてくれる。彼女らは、天性のエンターテナー振りを發揮して、歌や踊りをたくみに演ずる。

日本の男性はフィリピーナ・ホステスに対して、偏見を持っていろいろだ。彼女らは敬虔なクリスチャンであり、牧師の教えに忠実で、「性のモラル」は高い。

治安の悪い国である。街中に、「CO LT」の看板を掲げた、ピストルを製造する家内工業が存在する。繁華街を歩くとき、タクシーに乗るにも、お金を上着、ズボンに分散所持するのは常識だ。靴下の中にも入れたことがあった。幸い私は被害に遭わなかった。二十二歳のスタッフから、

「暗がりです三人組に囲まれて、所持金を巻き上げられました」

と報告があった。但し、タクシー代の百ペソ（四百円）を返してくれたというのが滑稽だ。

海外で生活したとき、最大の課題は食と住である。特に食事はその国独特な味付けがある。この国は、油はオリーブ油であり、醤油は魚醤油を使う場合がある。工場の食堂でワーカー向けの昼食を作る。主食の米飯と二種類のおかずが五十円で足りる。これを一ヵ月利用してみた。

これらの料理を食べられないのでは、体がもたない。精神的に追い詰められて早期帰国となる。私の年代は、戦中、戦後の貧しい時代を過ごしてきたので、好き嫌いは許されなかった。その財産が今は幸いした。

よきスタッフに恵まれた。最初の方針で、工場の彼らと目線の高さを合わせて付き合うこと。私もトップとして積極的に現場に向いて、彼らとコミュニケーションを図ることを心掛けた。「トップは雲の上の人」。他国系の企業のトップは現場に出ない。そのため異例なほ

どの評価を受けた。そうしたことで、我々の気持ちを理解してもらった。SVはじめ現地の幹部、ワーカーの人たちに、多大なる協力を得られた。

三年の契約を二年半年で軌道に乗せることができた。私たちが引き揚げる前日、月給四、五万円のSVが、田舎のレストランで送別会を開いてくれた。

その後、かの地を訪問していない。東南アジアの国々が近年目覚ましい成長を上げている。わがマニラ工場の子供たちも、豊かで幸せになっただろうと、思いを馳せている。

(浜北区)

「入選」

寿命

井上 清

歴史上敗戦を初めて体験した日本国民は、焦土と化した故郷で祖国復興のためにと、食糧難を始め生活の困窮した中で無我夢中で働いた。努力の結果、生まれ変わった日本は、経済大国と言われるほど経済が成長し、同時に世界でも有数の長寿国になってきた。

日本の発展に寄与してきた人々は、高齢者になった時は安心して老後が送れるだろうと、期待していた。ところが、数年後にバブルがはじけ、世の中不況に落ち込んできた。おまけに、次代を担う子供の出生が予想以上に減少し、少子高齢化の時代が到来した。政府も高齢者に対する年金、医療、介護などの対策に苦慮し、高齢者にとってはだんだん冷たい世の中になってきた。このため、高齢者も

青壮年層も、こんな筈では無かったと将来の生活に不安を持つようになった。

私も超高齢者の仲間入りした所以か、若い頃のことを頭に浮かんでくる。

戦時中は、愛国心に燃えて軍の学校に志願したので、一般の勉強が十分できなかった。もう一度勉強がしたくて、昭和二十一年に東京の学校へ進学した。下宿は金がなくて出来ないの、学校の寮に入った。

その寮たるや、戦時中軍隊が使用した馬小屋を改装したもので、部屋の入り口の戸も無い状態で、三畳間に四人が住むことになり、一人は何時も押し入れに寝た。しかも、東京は田舎で想像していた以上に戦争の傷跡が残っており苦しい学生生活だった。それでも、全国から集まった若者たちの寮生活は、意外に楽しいものでそれが救いだった。

私の前の部屋に一風変わった後輩が居た。彼は古いに凝っており、寮生も面白半分には手相など見て貰っていた。彼の手相占いは当たると噂が流れた。彼の手相は、「先輩、手相を見させて下さい」

と部屋に尋ねて来た。彼とは親しい付き合いは無かったが、退屈しのぎに見ても良かった。両手を丹念に見ていた彼が、真剣な顔で、

「先輩、言い難いですが、先輩は三十才までしか生きられないかも知れません」と言った。部屋で遊んでいた仲間も一瞬息を飲んだ。すかさず親友の千葉が、「当たるも八卦、当たらぬも八卦と言うだろう。気にしない、気にしない」と、その場の空気を和ませてくれた。当たらないとは思っても、己れの寿命を予告されるのは気持のいいものではなかった。

翌日から、予言が頭の隅から離れない日々が続いた。そのうえ、実家から結核で寝ていた兄が死んだ知らせがきた。享年二十六才だった。ますます寿命というものを考えさせられた。

半年くらいたったある夜、気晴らしに友人と新宿へ出掛けた。メイン道路のあちこちに占い師が客待ちをしていた。後輩の予言が気になっていたので、年配の占い師の前に黙って手を差し伸べた。

「学生さんよ。何を見て欲しいのかわらないが、あなたの生命線は短いね。三十才くらいまで気をつけな」

占い師の冷徹な言葉に、一瞬背中に悪寒が走った。見料の支払いもそこそこに、近くにあった屋台に飛び込んで、飲めもしない焼酎をあおった。寮でのいきさつを知っている友人は、黙って付き合ってくれた。

手相を見た二人に同じことを言われ、占いを一笑に付することができなくなった。軍隊から帰ってからは、死など考えたこともなかったが、予告された三十才まであと十年余かと思うと、死についても真剣に考えるようになった。それにしても若くして他界する人、逆に百才近くまで長生きする人と、世の中様様である。一人人間の寿命は誰が決めるのか、決定者がいれば、私の寿命はと聞いてみたい心境になった。

どうあがいても、あと十年余しか生きられないなら、悔いのない人生を送ろうと心に決めた。決意はしたものの、朝目覚めると命が一日減るといふ不安にから

れた。今思えば、誰だって朝が来れば命は一日減っていくのは当然だったのだ。それすら気が付かない心理状態だった。不安と焦燥感にさいなまれながらも、日常生活は死に繋がらないよう細心の注意と行動で対処した。その結果、学校の勉強も、知人に紹介されて始めた満州引揚者へのボランティア活動も、悔いの残らない学生生活だった。

社会人になり、縁あって二十五才で結婚し、二人の子供の親になった。その間、誰にも予言については言わず、必死に己の運命と戦った。時には神経衰弱や、十二指腸潰瘍で入院したこともあったが、なんとか三十才を超えた時は、背中に背負っていた荷物に、羽根が生えて飛んで行ったような、すっきりした気持ちになった。この時、初めて妻に学生時代に見てもらった占いのことを打ち明けた。

「ひどい人、もし占いが当たっていたら、私は二人の子を抱えた未亡人になったのね」

と笑いながら酒を注いでくれた。爾来五十有余年、よく生きてきたとい

うより、生かされてきたものだと思う。今まで多くの宗教学家や学者が、「生命」について諸説を披露している。成程と納得する説も、とんでもないと全く賛同出来ない説を述べている人もいるので、輕輕にはこれが正論だと決め付けることは出来ないと思っている。高齢者になった私もそれなりに寿命というものを考えてみた。

子供の頃から自分の周りにいた人の死を観察してみると、こんな思いにかられる。天界には地上にいる我々の日々を見守っている誰かがいて、この人間はまだこの世で果たす役目が残っていると思われ、人は生かされ、役目が終わったと思われる人は、老若を問わずご苦労さまとスィッチをひねられるのではないだろうか。人間がこの世で果たすべき役目の基準は、残念ながら人間では判断出来ないのだ。あの人はあんなに世のために役立っていたのと思う人でも、早く死んでしまう場合があり、全く反対の人でも長生きしている人がいる。納得はいかないが、天界の誰かが人間の役目が終わったと

判断する基準を持っているのだと思う。これが寿命というものだと思う。

長寿国日本の一員として、今日も私は生かされている。自分には分からないが、知らないうちに世の中の役にたっているのかと思ひ、スィッチを気にしながらも、私なりの生き方を貫いていこうと決意し、朝の来るのを願って今日も床に就く。

(西区)

「入選」

「焼けん前ねえ」

宮野 和子

小学校のころ、会話の中でよく「焼けん前ねえ」という言葉を使った。

私は昭和二十一年の四月に小学校へ入学したのだが、同級生のほとんどが、二十年の六月の浜松大空襲で家を焼かれた罹災者であったから、戦時中のことは「焼けん前」で話が通じた。

学校の校舎も焼けて無くなってしまっていたから、校舎のない校庭で行われた入学式で板に紐を通した画板を持って持って来るようにと、先生からお話があった。次の日から八幡神社の境内で青空教室が始まった。雨が降れば出席をとって家に帰され、傘のない子は欠席した。子供にとっては気楽なことだったが、今もって基礎学力が足りないと思っている。

疎開先から帰ってこない近所の家の焼け跡は、子供にとっては格好の遊び場で、毎日、遊び道具になるものはないかと歩き回っていた。焼け跡は明るくて解放的でわくわくする楽しさがあった。

戦争中は、寿司屋の隣が小間物屋の勝ちゃんの家、その隣が下駄屋の和江ちゃんの家、向かいが薬屋の茂子ちゃんの家と、同じ年の子供がいる商店が並んでいたのに、彼女たちはそのままの場所に戻ってくることはなかった。

私は昭和十五年の一月生まれだが、記憶では十八年の初めごろまでは、まだ物資があったと思う。街中の大通りには電灯がいっぱいついていて、母や姉と一緒に夜店に出かけ、浴衣を買って貰った。あんなに電灯がキラキラしていたのは、その後終戦過ぎまで見たことはなかった。あの日あたりが、明るい日本の最後だったのかも知れない。空襲が頻繁になると、電灯に黒い布がかぶせられて夜はいつも薄暗くなってしまう。

二、三歳ごろの記憶で楽しかったの

は、色々な屋台の引き売りだった。茶碗や皿やガラス製品をいっぱい積んだ瀬戸物屋、鉛細工屋、きれいな造花や風車を並べた玩具屋があり、「造花を買ってえ」と泣き叫んでいた記憶がある。買ってくれなかった母を一日恨んで泣いていた。かなり強情な子供で、六十五年以上たった今でも恨んでいる。

団子屋もみたらし団子ばかりで、私の欲しい色のきれいな三色団子を母は絶対には買わなかった。母と私は相性があまり良くないと自覚した最初が団子だった。

数ある屋台の売り物の中で今でも一番食べたいと思うものは、べっ甲焼きだ。熱い鉄板の上に、黄ザラを溶いたどろっとした液を流す。金物のヘラで長方形に型を作ると、薄い茶色の砂糖煎餅ができる。大きいのが十銭、小さいのが五銭だった。甘くて香ばしくて、噛むとパリパリしていて、私の大好物であった。もう一度食べてみたいお菓子だ。戦後はカルメ焼きに変わってしまった、べっ甲焼きを一度も見ることがない。

まだ卵が手に入るころだった。近所の製材屋の国男ちゃんが「かあこちゃん」と毎朝お弁当を持ってやってきた。母が筒型のアルミのお弁当箱にいり卵のおかずを入れて、私の朝ご飯を作ってくれた。国男ちゃんと二人でお弁当を食べた。食が終わると、一つ年上の私が先生になって、学校ごっこをした。ラジオで歌っている（僕は軍人だいすきよ）を踊った。国男ちゃんが下手だと、先生気取りの私が怒った。怒られても国男ちゃんはケロッとして、また次の日遊びに来た。

空襲が激しくなると、我が家も、国男ちゃんの家も、その他の子供の家もそれぞれに疎開をした。半年も経たないうちに終戦になり、我が家はすぐに焼け跡にバラックを建て、疎開先から戻った。しかし、国男ちゃんは戻って来なかった。疎開先でお母さんと一緒に疫病にかかり、亡くなってしまったという。鳩ぽっぽのような目をした小さな男の子だった。

（あの町この町日が暮れる）という歌があるが、この歌を聴くと、日暮の淋しさが身に染み込んでくる。焼けん前の薄暗い町並みや帰ってこない国男ちゃんや、勝ちゃんや、茂子ちゃんが幼い姿のまま、どこかで泣いているような気がする。

ぼーっと闇に包まれたような記憶は淋しくて暗い。

（東区）

「入選」

やんぞうこんぞう

鈴木富美

近くの画廊に、古びた大きなテールブルがあります。その上に置かれたガラスの花瓶に、見覚えのある葉物が活けられています。緑の茂みの中に、赤と青の、双子のような小さな実が見えます。「やんぞう」でした。私が住む浜松では、榎の木の実が、「やんぞうこんぞう」と呼ばれています。生まれ故郷である静岡では、なぜか「ん」が抜けて、「やんぞう」と言い習わされています。私の中を、言いようのない想いが流れました。

父の実家は掛川にあり、葛布問屋を営業にしていました。母屋と蔵の間にある庭に、一本の榎の木がありました。夏の終りになると、その木に、赤い実がたくさんなるのです。

その木の横で、従兄の季（とし）ちゃんが泣いていました。今も、その泣き声の哀しそうな響きが、私の中に残っています。

二学期が始まる朝のことでした。「いやだ！ いやだ！」そう言いながら泣いて逃げる季ちゃんを、伯父さん、伯母さん、お祖母ちゃん三人が追っていました。三人は季ちゃんをつかまえて、何かを取り上げたのです。

帆かけ舟。手先の器用な季ちゃんが作ったそれは、とても美しく仕上がっていました。ページユの帆布が風を受けて、今にも海原を行くようです。同じ歳の真ちゃんの船は、大きさも形も同じなのに、半分壊れたような船でした。大人三人がかりで取り上げた、その帆かけ舟は、真ちゃんの夏休みの宿題となったのでした。

季ちゃんと真ちゃんは従兄弟です。季ちゃんの父親は、大阪でお茶問屋を営んでいましたが、若くして亡くなり、季ちゃんたち幼い三人兄妹は、それぞれ親戚に預けられました。こうして季ちゃん

は、父親の実家である祖母の家にやって来たのです。

「小町」と云う形容がつけば「美人」の象徴ですが、祖母のように自分から「掛川小町」と自負する人を私は未だに知りません。その「小町」の自慢は、家でした。「この家は御殿のような家だ」祖母はいつも、このように自慢するのでした。家の屋根は、両端が天に向かって反り、お祭りの御殿屋台のようでした。私はこの家に母に諭され、時々静岡から泊まりに来ていたのです。

祖母は、長火鉢の前に一日中座っていました。気ままに鉄瓶から湯を汲み、自分の分だけ上等のお茶を淹れ、煙管から煙を燻らせながら、表を眺めています。往還を行き交う人を指さしては、「あれは何処の誰兵衛」と品定めをします。「掛川小町」の、色白で目鼻立ちの整った顔立ちと、胸元の真っ白な半衿は、子供心にも美しく映りました。

祖母はなぜか、実の孫である季ちゃんに辛くあたりました。今思えば、その理由は息子の儂い一生があつたからではと

思えます。季ちゃんの父親は結核で亡くなりました。嫁の結核が、息子に移り死んだのだと、祖母は思いこんでいたようです。

肉親というものは残酷なものです。よその人であれば許されることでも、何時までも根に持つことがあります。

祖母の家での夕餉時のことを、私は鮮やかに思い出します。皆が食事をしている障子一つ隔てた隣の外間で、季ちゃんは一人で食べていました。台所から自分でご飯と味噌汁、粗末なおかずを一品乗せて、小さな文机の前にちよこんと正座をして食べる彼の姿が、今でも目に浮かびます。

掛川小町の三男坊である私の父は、昭和初期から、コーヒー商を静岡で営んでいました。当時は、コーヒーなどという物を知らない人達が、大勢いました。そのため父は、店頭のウインドーにセルロイド製の大きなキューピー人形を飾って、「キューピーさんのコーヒー屋」と人の目に留まることをしました。子供の目には、その人形がとて大きく見え、

コーヒーの香りが、そのキューピーから生まれてくるようでした。

浅間神社通りの商店街。そこに面したこの店の向い側には、肉屋さん、写真屋さん、その隣は、わさび漬で有名ななつた田丸屋さんがありました。

いつの頃からでしょうか。夏休みになると、季ちゃんが掛川から静岡にやってくるようになりました。静岡での季ちゃんは、いつも笑っていました。口角がキュッと上がって細い小さな目が下がり、にこにこ、にこにこ、しているのです。季ちゃんの後姿からも、笑っている顔が見えるようでした。

肉屋のうーちゃん、田丸屋のときやちゃんとは、同じ年齢。朝から夕方暗くなる迄、三人組は一緒でした。毎朝、キューピーさんの前で「季ちゃん」と呼ぶのです。季ちゃんは、びよんびよんと跳ねながら嬉しそうに飛び出して行きました。お浅間さんの裏で蟬を捕り、小川でザリガニを探し、ちよっと高尚にと、県庁前から市電に乗って市内遊覧に。

私には季ちゃんと同い年の兄がいまし

た。その兄は幼くして亡くなり、そのせいか、父は季ちゃんをとても可愛がっていました。

ある夜遅く、誰もいない筈の真つ暗な店の隅で、季ちゃんが泣いていました。やんぞうこんぞうの木の横で泣いていた時のように、両手で顔を覆い、商品棚の横で泣いていたのです。夏休みが終わるため、明日は掛川小町の家に帰らなくてはならない時が迫っていました。

次の日、便利屋さんの小父さんが季ちゃんを連れて行きました。便利屋さんの小父さんは大きな箱を背負い、東海道線に乗って仕事をしていました。頼まれた荷物を、各駅で下車しながら配達するのです。この便利屋の山下さんを、父は「山下便」と呼んでいました。時々私は「山下便」に連れられて、掛川に行ったことを思い出します。山下さんは車中で何人かの便利屋仲間と大声で話し、煙草を一つ吸い、ワツハハッと豪快に笑うのでした。「今日は変わった荷だな！」仲間一人が私を見て言いました。私は「山下便」の隣で黙って座っていました。そ

んな私を見て、皆で笑うのでした。季ちゃんは「山下便」に連れられた汽車の中で、楽しかった夏の出来事を噛みしめていたと思えてなりません。

人の一生は、上手く帳尻があうようになってくるのか、季ちゃんは大手楽器会社を定年退職し、静かな余生を送っています。

何の皮肉か、季ちゃんは祖母や伯父たちが眠るお寺の「檀家総代」になります。今年のお寺の時、私は彼に「季ちゃん、今、幸せで良かったね。『終わりをかけてみました』って言うし」と、声をかけてみました。「あの時に身につけたフロンティア精神が何よりの宝物だよ」只一言、季ちゃんはいつものように微笑みながら言いました。目の前で楽しそうに明るく笑う彼の姿に、幼い頃の季ちゃんがゆつくりと重なり、ほっとしたような温かなものが一杯に広がってゆきました。その感覚の先に、やんぞうこんぞうの、赤い小さな実が見えるようでした。

(中区)

「入選」

〳〵勝手読み〳〵は、

わが性分か

幸田健太郎

皆さんは、〳〵勝手読み〳〵という言葉をご存知だろうか。棋界の言葉で、「対局において、相手の手を自分の都合のいい様に、勝手に読んで(予想)しまうこと」である。もちろん勝負の世界では禁物だ。

私は六十三歳の誕生日から、囲碁を習い始めた。若い頃から勝負事にはまったく興味がなく、囲碁はもちろん、将棋、マージャン、パチンコ、競艇、オートレースなど、そういつたものには、まったく手を出したことがなかった。べつに、真面目ぶっていたわけではないが、「そんなことをして、一体、何がおもしろいの？」と、不思議に思っていたのだ。それが、会社を退いて第二の人生の入

口に立ったとき、これからの長い余暇人生の過ごし方（ひま潰し）と、将来心配される認知症への予防（ボケ防止）に、少しでもなればと思つて、軽い気持で習い始めたのである。

幸い、初心者でも親切に教えてくれる教室が市内にあつて、毎週そこに通い出したが、これが、実は大変なことになったのである。

日本語が、まったく理解できないのだ。いや、正確に言うと、日本語は分かるが、先生が説明される碁石の働きやテクニク、死活問題などの内容が、まったく理解できないのであつた。

一緒にいる孫みたいなき供たちは、大声で元氣よく答えるのに、私の頭は真っ白、仮死状態だつた。

六十三年も生きてきて、それなりの仕事もし、世間を渡ってきたつもりだったが、このショックは大きかつた。登校拒否の子供たちの気持が、よく分かつた気がした。

先ほど述べたような軽い気持で始めたのに、なんでこんなに苦しく、嫌な目に

遭わなければならぬのか、本当に恨めしくさえ思つたものである。

それでもせっかく習い始めたことだし、途中でバンザイするのもいまいましいと思つて我慢しいしい通つたが、やがて一年が経ち二年目に入る頃になると、先生の言われることが、少しずつ分かるようになってきた。前方に仄かな薄明りが、感じられるようになったのである。

教室での勉強が終わると、一階に降りて初心者同士の対局が始まる。上位者が見れば、見るに堪えない。大ザル碁でも、当人同士は大まじめである。カスカスになった頭をふりしぼり、小声でぶつぶつ言いながら必死に打つが、ここでテゝマの「勝手読み」が出るのである。

囲碁の基本は、「三手読み」という、自分がこう打つたら、相手はたぶん最強の手をこう打ち、そうしたら自分がまたこう打つという三手の読みをして打て、と先生は教える。

ある程度の棋力の人同士だと、互に分かるようだが、へボに相手の頭の中な

ど、分かるはずがない。どだい無理な話である。

乏しい知識で自分なりに考えるが、これがほとんどの場合、自分にとつて都合のいい所（当方に有利になる場所）に打つてくれるだろう、と思ひ込んでしまうのだ。

へボ同士だと、それでもうまくいくときがたまにはあるが、少し上手にかかると、てんで話にならない。

思いもよらぬ所にビシッと打たれて、こちらは真つ青。へボの甘い夢などこつぱみじんに吹っ飛び、こちらの石は取られて、相手の地が増える。

こんなことはしょつちゅうある。その度に自分の読みの甘さを、イヤというほど味わわされるのである。

しかし、いま静かにこれを書きながら、自分の人生を振り返ってみると、このような「勝手読み」の癖は、なにも囲碁に限ったことではないことに、気付かされるのである。

今までの人生の中で、まったくの善意

で、相手の方のために善かれと思つてや
つたことでも、相手にとつては必ずしも
そうではなかつた、ということが幾度も
あつた。後でそのことが分かつて、互い
に気まずい思いをしたり、自分の軽率さ
を心から悔んだものだ。

また、日常の生活の中でことが起きる
と、「あつ、これはこうだ」と、割と簡
単に決めてしまふ癖が、私にはあるよう
だ。そして、これも後になつてまったく
違ふ結果に出会すと、愕然とし落ち込ん
でしまふ。

このようなことは、決して誉められた
ことではないが、残念ながら今までの私
の人生の中では、結構多かつた。

考えてみればこのようなことは、囲碁
でいう「勝手読み」そのものではないか
……。

私は、根は真面目である（と思つ）。

そして、何事にも一生懸命に取り組む性
格である。しかし、どうも勝手な思い込
みが強いように思う。

それは性格が甘いのか、おつちよこちよ

いなのか、或いはまた、思慮深さが
ないのか、恥ずかしながら当の本人にはよく
分らない。

しかし、六十代の後半にもなり、今後
はもう少し落ち着いて、周りの状況もし
つかり見て、「勝手読み」にならないよ
うにせねばと、強く思うこの頃である。

だが、どう考えてみても、私は「勝負
師」には向いていないことだけは、確か
なようだ。

(中区)

随筆講評

たかはたけいこ

今年の応募作品は去年までと異なり、書き手の年齢が一気に若返った。団塊の世代の台頭だ。作品を読み進んでいると、私自身の幼少期の記憶と重なる部分が多々あって、懐かしかったり、切なくなったりした。敗戦後の日本の躍進とその後が続く不況のなかをその時代の担い手として生きてきた世代でもある。

そうして企業の定年を迎え、「ひとつ、書いてみよう」とそれぞれの作者の意気込みが伝わってくる作品群でもあった。

文字の怖さは刻まれることだ。一度、吐き出され刻み込まれた文字は、作者の意向を問うことなく、読み手とともに一人歩きし始める。

そういう意味で毎年、賞の選出をするにあたり、自分なりの基準を作っている。作品が活字になり、浜松市民文芸賞作品として、何年も何十年も読み続けられることに値するか否かだ。

選外となった作品も惜しいものが多く、今回ほど選別に戸惑った年はなかった。新たな書き手たちを迎えた市民文芸賞の嬉しい悲鳴でもある。

一方で今まで書いてきた人が筆を折ったのかと、少々心配に変わった。(筆者名は伏せられているが、書き方などで常連さんがわかるのだ)

文章を書くことは脳と手先を同時に動かす、最強のボケ防止になる。記憶を辿り、順序を組み立ててひとつの作品に仕上げる。とそのものに文章を書く意味がある。

来年の応募作品の質はもちろん、量に大いに期待する。

根深皮むき機

読み進むほどにセピア色の写真に色がつき、やがて描かれた人々が動き出してくる。わずか五十年前の平均的な日本人が当たり前にしていたのに、今では忘れ去られてしまったことがこの作品に生かされている。

なにより作者の大きさを感ずる。身構えるわけでもない、肩肘ははらない。「今」をどーんと受け止めている。

寒節句

母親になったばかりの人から、「子育てに集中したい」とよく言われる。そのたびに、「あなたが真面目に前向きに生きていること」と応えているが、本作品が実証してくれた。

切なくて健気な子供の心情が時空を超えて母親に伝えられるという展開はドラマチックであり、作者の作り方のうまさを感じさせる。

黄色いキャラメル箱

銀行振り込みもクレジットカードもない昔。「給料日」は特別な日だった。その日は糊のきいた割烹着を身につけ、給料袋を持ち帰るご主人を待つ人もいた。肉料理が食卓に並ぶ家もあった。

作者夫婦はどうしてキャラメル箱に給料をつめて渡すようになったのか。そこに新しい作品のヒントがある。次回作にも大いな期待したい。

笑顔と混乱の都マニラ駐在記

多くの企業戦士たちが作者のように東南アジア各地に出向いていた時代。かれらは根気よく、忠実に、時に自分が犠牲になり課せられた業務を全うした。それは即、在職企業の利益となり、やがては教えられた各地の見えない産業基盤となった。今日、アジア諸国の経済台頭が報じられているが、私は彼ら企業戦士たちが担った役割は大きいと思う。

寿命

手相の生命線が短いゆえに二十代で「短命」と宣告された作者は一日一日を悔いが残らないようにと生きる。短い生命と向かいあいながら。

ところが死ぬはずの年齢を超え、作者は生き続け、後期高齢者と称される年齢になって改めて、ひとつの結論にたどり着く。この世で果たすべき役割が残っている人は生かされている。この一文は作者が真摯に生きてきたからこそ、発せられ、重さがある。

「焼けん前ねえ」

空爆、貧困、様々な離別……戦争が起こした様々な傷跡が、作者の軽妙な語り口で次々と語られていく。敗戦六十余年を迎えた

現在、日本は確かに物質的に豊かな国になった。けれど「焼けん前」を知っている子供たちの古い傷跡はこの作品のように、時々、こんな風に疼く。

やんぞうこんぞう

列車で隣に乗り合わせると、互いの行き先を尋ね、時にみかんやお菓子の交換をした時代が日本にもあった。家族はたいがい大人数で血縁者だけでなく、わけあって一緒に暮らすことになった人もいた。当事者にとっては逃れられない現実には小さな差別が生まれた。

差別する側もされる側も、それを見守るしかなかった作者も、その時期をひたすら生ききって今がある。そうしてこの作品が紡ぎだされた。

勝手読みは、わが性分か

還暦を過ぎた作者が囲碁を習い始め、「勝手読み」という棋界の言葉を知るところから、本作品は始まる。

囲碁を習い始めた経緯、練習と勝負。作者はその事実を淡々と筆にのせている。そうして、再び、勝手読みという言葉に向かい合い、気づく。これは囲碁だけの言葉ではない。生きていくための言葉なのだ。

そんな心の経緯が大上段にせずに、実に素直に描かれている。「文は人なり」という言葉がよぎる。すばらしい人格を持った作者だと推測する。

詩

「市民文芸賞」

戦跡に眠る

松野タダエ

機影が 雲からぬけ出ると
心の壁に 重く貼りついていていた島影が
ルリ色の海に浮んでいた
この島に 兄が眠っている——
なぜか ホツとするような いとしいような
島は 私を吸い寄せる

やっと訪ねた沖繩戦終焉の地 真栄平
あゝ、この辺りが兄の最期の地か
四面敵中砲撃火焰の地獄だったと——
国柱を信じ 土となった真つ正直な若い命
ひと握りの土さえ 故郷に還れぬままに
地下は 今でも地獄のままだろうか
私の胸の鼓動は じわじわ搔き筆しられる

六十五年の中に埋れた戦跡の上を
青々した畠が広がっている
所々で さとうきび畑の葉がのんびりと
何事もなかったように 風を扇いでいる
ふと
戦火一年前の 兄の便りの風景が重なる
——今は梅が満開 所々で麦も青々とし
百性の呑気な姿が眺められます——
なんだか すぐその葉蔭から
軍服姿が微笑みかけそうに 葉がゆらぐ

偶然か 兄の魂の導きか
畠にいた老人の話から 出会った南北の塔
塔は 人気のない丘に遠い故郷を偲ぶよう
背のびして佇んでいた
塔の下の数千柱の霊は 今もまだ
縛めき合ったまま 眠れぬままなのか
冷たい霊気と慟哭が 肌にくく刺さる
足元に転がっている石は 珊瑚のかけらか
もしかしたら この石に兄の霊が……
思わず手に取り ゴツゴツの石面を撫ぜると
悲しみの絆が じーんと心の襞を震わす

母の愛に 日本一の倅者だと便り遺した兄
せめて一度 あの息子の眠る地にと遺した母
「兄さん ホラ お母さんが逢いに来たよ」
ほほ寄せ合う如く 塔に添わした母の遺影
と

突然 にわか雨が塔を濡しはじめた

兄の涙か 母の涙か

それとも 天からの鎮魂の水だろうか

戦跡を 白い雨すだれが被^{おほ}う

どうか 安らかにお眠りと――

(東区)

〔市民文芸賞〕

浮かぶ窓

竹内としみ

全身の力を大地に預け空を見上げる

視線の先には小さな天窗

陽の光の恵みをいっばいに受ける時間

小さな窓枠からぐいぐいはみ出していく

広い広い青のキャンパス

限りなく上へ上へと引き上げられていく感覚

夜のとばりが降りて少しのざわめきも消された沈黙の時間

小さな窓枠は消えて

見えない空と一体になった淡いモノクロのカーテン

静かに静かに内なる自分の中を覆いつくしていく感覚

それは夢の世界

そんな小さな自分だけの空間を願っていた

家のでっぺんに忘れられたちっぽけな部屋

小さな天窗が唯一の贅沢

家の中なのに自然と一体になる錯覚

浮かぶ窓にその手をかける日

(中区)

きまぐれな空が描く自然の絵画

時に怒りをぶつけるような激しい風の音楽

そよそよと心地よい香りを運ぶ風の粹ないたずら
星は動かさず心の琴線をピロピロんとつまびく

「市民文芸賞」

雨の日もいいね

窓を優しく濡らす雨

窓枠に集まる水滴のひとつひとつが

物語を運んでくる

空から突然

高柳龍夫

小さな天窓が弱い弱い私を守る

小さな天窓はあなたたちとの境界線

窓を開いて飛んでいきたいのに

優しい大地がそつとそんな私を押しとどめる

窓を開けるのはもう少し先……

熱い衣をまとう沈黙のさなぎはじつとその日を待ち続ける

ほら、目を閉じてあなたのすべてを巨大な耳にしてごらん

ゆらめく内なる炎がちろりちろりと衣を焦がし、見えない内
部をきゆるきゆると震わせているよ

その震えはすでに高い窓にも伝わって、古い窓枠の煤けた輪

郭がかすかにたわんでいく

もうすぐ……もうすぐ……優しい大地に別れを告げ

降ってくるのを誰も

見ていたわけじゃないけれど

市民センター駐車場

黒いアスファルトに

オタマジャクシが

生きたまんまで100匹ほど

転がっていた、と

新聞やテレビのニュース

名前のない小さな沼の上

垂れた緑の木の枝に

泡に包んで産み付けられたカエルの卵

オタマジャクシになったところで

強い風で空へ高く吹き上げられた、とか

白いサギか黒いカラスか

鳥が飛びながら落としてしまった、とか

田んぼの上で竜巻が吸い上げた、とか

長雨の影響で雲の中で孵化した、とか

散らばった範囲が狭いから

そんな高くから降ってきたはずはない、とか

謎は膨らむばかり

世界のどこかでは

リングやワニまで降ったこともある、とか

昔の日本だって

お伊勢参りのきつかけは

空から突然降ってきた神社のお札、とか

時には星さえ空から流れ落ちてくる

オタマジャクシのニユースの後

同じ現象が各地で発生

珍しくもなくなつて

騒ぎもいつしか収まった

困ったことなど起きないから

ひとつの現実に見方はそれぞれ

甘い夢の多くは消えていく

遊びに飽きてしまった少年が撒き散らす

覚めた現実

光と熱と水は空から降つて

雲と季節は空を流れる

わかりきつてる当たり前

天気はいつでもそのまま受け入れる

無色の空気に地上の誰もが包まれる

確かな現実

(西区)

「入選」

「贈り物」
ギフト

A
O
I

一つ 箱を開ける

一つ 箱を押し開ける

一つ 箱に封をして
一つ 箱を解き放つ

未来は 過去からの贈り物——
過去は 去るものなんて ただの思いこみ
箱づめされて 現在に そして未来に

開けたくない 見るのもいやな箱を
何度も遠くに放つても
しつこく戻ってきてしまう

手元に置いておきたい箱もあるけれど
それはできない できないのだ
大切な想いのつまった箱から
せめて 解いたリボンを手首に結ぶ
いつかまた 出会えるように
いつまでも 想いを忘れぬように

私は贈り物の 捕らわれ人か
私は時間に 縛られてるのか

いっそ贈り物を 無視できないの？
時計の針は なぜ回っているの？

時計の針には 回っている自覚などない
ひたすら前に 進んでいるだけだ
贈り物をどうするかは おまえ次第
針を止めたきや 止めれば良い

もしも……
時計の針が止まったら
この贈り物は どうなるのか
手首に結んだ このリボンは——

もしも
時計の針が止まったら
そのまま 箱づめして リボンをかけられ
どこかの未来の 誰かの手元へ

(中区)

〔入選〕

ありがとう

勝田 洋子

八十九歳 腰椎骨折で入院した姑は 柵に囲まれた高いベッドの中で 一日中大声で私の名を呼んだ
あなたがヨウコさんなの もっと来てやればいいのに
朝昼晩通う私に 病棟の入院患者が言った

百二歳になった姑は 肺炎をくり返し
食事も排泄も大変で 家での介護はもう無理ですと 医師に
言われて 老人ホームへの入所がきまった

手がかかる人をお願いして申し訳ないですね
私が言う
疲れきっておばあちゃんのベッドに頭をつけると そうっと
撫でてくれるの 私元気になります 同じようなことを三人
もの看護師が言ってくれる

生活すべてに人の世話を受ける姑が人を癒やすことができる
眠っているかなと思って見ると

ありがとう とくちびるが動く
ありがとう 今まで何千回も言ってもらった
長い間 私がお世話することができたのも
姑のおかげだ

何でいつまでも生きるの 生きててもしょうがない
一時 正気にもどった姑が言ったことがある
みんなの心を ほっとあたたかくしてくれる
姑は 私達に必要な人なのだ

(中区)

〔入選〕

二人の教師

北野 幸子

その時私は小学四年生
担任の柴田先生は独身女性

一枚の記念写真には六十三名の顔

緋のもんべに藁草履

セルの着物をほだいて母が作ってくれた

セーラー服の私がいる

終戦直後 学校へ進駐軍がしばしば訪れた

水色の帽子を被ったアメリカ人に気をつけよ

連れて行かれるかも知れないとみんな机の下に隠れた

三人の進駐軍が通訳を伴い教室を廻って来た

柴田先生のひくオルガンをみんなで囲み

故郷の人々を聞いていた時

進駐軍が近づいて来てペラペラと英語で何か言った

通訳が、

その歌は大変懐かしい歌 遠い故郷を思い出します

それにあなたは大変美人ですね

先生の顔がぼつと桃色に染まった

その時進駐軍は恐くないと思った

翌年一人の青年教師が赴任してきた

背が高く今でいうイケメン

たちまちの内に「トッポイ先生」とあだ名がついた

或る時先生はピカピカに磨いた黒い皮靴で教壇に立ち小気味

よく靴を鳴らしてタツプダンスを披露した

—赤いりんごに唇よせて黙って見ている青い空 りんごはな

んにも言わなければ

りんごの気持はよくわかる——

終戦後の開放感に誰彼となく口ずさんだ歌

学校での流行歌はご法度といえども時代は微妙に変化しつつ

あった

春三月

会礼台に立って大きく手を振り

「グットバイ」と風のように花の中を去って行った トッポ

イ先生

美人で優しかった柴田先生

あれから何年か経って柴田先生がねんねこで子供を負いバ

スに乗って行くのを見た

柴田先生は結婚したのか

終戦から六十五年

私の心の中に二人の教師が今も生きている

(東区)

〔入選〕

おまじない

桑原みよ

私はこの世に生れてきた

母は言う

あなたは 袋子だったと

美しい袋に守られ生れてきたと

きつと 運の良い子になると

そつと おまじないをかけるように言う

いつの間にか 耳に小さな黒子ができた

母は言う

耳に黒子のある子は

誰れよりも 親孝行だと

私を見るたび 口ぐせのように言う

山の昔話をよくする

母はそのたび言う

花が美しく咲くのは

みんなが沢山ありがとうを言ったからだ

私を促すように 笑って言う

いつしか

私には神様がついていて

ラッキーな事が多いような

確かに

母を自転車荷台に乗せ

こいだベタルの重みが好きだった

本当に

花を見るたび

「ありがとう」の言葉が笑顔と一緒に出る

いつしか

母のおまじないは 私のお守りになった

八人もの子育てに

自信にあふれた愛情でくるみ

母親の歩む道を教えてくれた

母のおまじない

赤い夕陽に 母の面影を描きながら

娘と孫のうなじにも

素敵なおまじないを

しっかりとかけておいた

（東区）

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

別れの曲

小池祥元

君の瞳に僕が居た
僕の瞳に君が居た
瞳の中の君と僕
物思いに耽る君の視線の先
いつも遠くを見つめて居た
幸せの景色が見えたのか
幸せの心象風景を心のカンバスに
描こうとして苦悶して居たのか
晩秋の枯葉舞う街角の喫茶店
君の口から出た言の葉
理由を聞いても語らない
突然の別れの言葉
破局は突然訪れた
君の瞳から大粒の
真珠の涙がこぼれ落ちるのを見た
会うは別れの定めとは
忘れられない人の性

別離と言う言葉を噛みしめた日々
あれから数えきれない程の夏が過ぎ
ちちろ虫鳴く秋も通り過ぎた
アルバムの写真今はセピア色
脳裏に残る想い出は
いつも鮮やかに甦る
同窓会での再会
君は明るく爽やかに振舞っていた
二言三言の会話には穏やかな言の葉
あの時はごめんなさい
彼女の一言で全てが氷解した
青春を駆け抜けた
虹の様に消えた恋
二人で通った喫茶店
今は幻の喫茶店
テーブルの向かいには
いつも笑顔の君がいた
純白のワンピース姿で
コーヒーを飲んで居た
コーヒーの苦い味だけが
妙に懐かしく想い出す
わが青春の涙の染み
今はもう蠕り無く素直に話が出来る
プラトニックな愛は

永久とわに僕の脳裏に住み着く白昼夢
シヨパンの別れの曲が流れる喫茶店

戦後見た映画の一場面

美しい旋律は鮮烈に甦る

美しい想い出と成って

エンドレスの音を奏でる

蜃気楼しんきろうを見るように

青春は美しい暦となつて甦る想い出

〔入選〕

「彼岸花」

柴田修

九月半ば

新聞に「フラワーパークにて」と

彼岸花の写真が載った

この辺では一番早く咲いたのだろう

(中区)

今度私は老人ホームに飾ってくれる絵を

この写真の彼岸花を描くことにした

なぜなら今年四月に他界した妻の

初彼岸だから

「親子だけでお別れしようね」と長女の一言でお経も花も飾

りもないほんとの親子だけの妻には申しわけない送りだった

あれからもう半年過ぎた

待つてはいない月日はもう彼岸花の咲く季節を持ってきてく

れた

このホームの庭の桜の木の根元に一株の彼岸花を見つけた

それからの私は珍しいものでも見るように毎日一人彼岸花に

足を向けた

赤い花は今年の私の目に限りない愛着をおぼえさせてくれた

そして数日後

彼岸花は私との暫くのつき合いを残して次第に姿を消してい

った

又来年を約すように茎だけを残して。

(西区)

「入選」

『鳴く』

新村健一

凸レンズを二枚も重ねたオゾン層から太陽の光が大地に注ぐ灼熱の八月の終戦記念日

暑くて言葉も出ない
葉桜の下で

クマゼミが激しく鳴いている

この地球上にて 僅かな湿気と熱風の空間にいきるものは
生を受けてすべて鳴く

鳴くとはなぜか 生きているものの証存在である

しゃべることを失った政治家はただの人 嘘でもしゃべれ
泣くことを忘れた アブラゼミが 地べたに転がっている

明日の我が身 空蟬である

マスメディアは忙しい 鳴く 泣く 啼く
これでもか これでもかと 鳴く

老いて 鳴くことも 泣くことも忘れたらすべてが終わる
だ

やや子が泣くと言うが 泣くは生きる証し

なぜ泣く子を殺す 泣く子は可愛い 泣く子はいとおしい

カラス何故 鳴く 蟬が何故鳴くか語ろう

薄い オゾン層の中で われらは鳴き 泣きわめきながら
短い一生を終える 泣くのをやめたらすべてが終わる

真夏のお化け屋敷のお化けよりも怖いのは泣かない老人か
長寿高齢者の所在が分からないという

泣かない死体が白骨化して 住民票は生きている

泣くんだよ 最後の一滴 唾を吐き出しても 泣くんだ
石ころのように転がり

影はなしとは さびしいもんだ

鳴くとは 生きる存在をアピールしている

最後の声帯である

短い夏を 今日クマゼミが鳴いている

(西区)

葱の気持ち

田村 国昭

スーパーで 細葱を買いました
 セロファンに包まれ 根の部分も真っ白
 ヒゲも 行儀良く揃っている
 何だか 蠟で出来ているみたい
 もしかしたら 根やヒゲは
 生きているかも？
 手遅れにならないうちに すぐに
 土に戻してやるう
 根っこの部分を切り落とし
 日暮れたベランダへ
 鉢に突っ込んだ
 水を たっぶり注ぐ
 次の朝早く
 期待に胸を鳴らし 様子を見に行く
 なんだ なんだ
 おっ 切り口が変形しているぞ
 少し 皮と皮の間に

隙間が出来ているではないか
 1ミリ程度 真ん中の皮が伸びている
 一晚のうちに
 ヒゲが土の栄養分を 取り込んだのだ
 ペットボトルを持って 台所へ走った
 生まれたての小鳥に 餌をやるように
 水を ひとつひとつに かけてやった
 昼ご飯のあと また 見に行った
 なんと まあ
 小さな緑色の舌が
 ぐぐっと 伸びている
 5本とも ピヨピヨと
 餌をねだっているよう
 わたしは また 親鳥のように
 台所へ走った

(広島市)

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

〔入選〕

命日

中津川久子

師走の命日破ります

※注 怒る、駄々こねる

〔南区〕

「おかあさん」
おかしさ九十六歳

お母さんを探しながら旅立って

丸 三年

あんどき

おかあさんだよ おかあさんはここに居るよ

おかあさんが居るから心配ないよ

ふっと出まかせに言った私の

その場しのぎの私の

村芝居

猿芝居

今もちんぷりかいているかしらん

それとも

だまされていたのは私かしらん

……

ニンマリとおかしさ

座布団五枚！

〔入選〕

一本の薔薇

長浜フミ子

お花は魔法使いだ

たった一本の赤い薔薇を

部屋に飾った瞬間から

部屋は見違えるように

明るくなった

いつも見なれたテーブルも

古いレースのカーテンも

輝いて見えるから不思議だ

やっぱり

「入選」

松

お花は魔法使いだ
 たった一本の赤い薔薇を
 部屋に飾った瞬間から
 私の心もうっとり
 思わず囁いた綺麗だね
 絵本の音読をしながら
 勉強できる環境に感謝した

中村弘枝

今私の体は六十兆の細胞が生き生きと
 活動を始めた
 やっぱり
 お花は魔法使いだ
 たった一本の赤い薔薇を
 部屋に飾った瞬間から
 工夫する事の大切さを
 気づかせてくれた

(東区)

街中に庭のある家は少ない
 昭和四十年庭師の設計で作る
 中心に松あとは謂れのある木を
 配置し 好きな梔子も入れて
 小さいが灯籠と蹲踞
 寛の水に鳥の水遊びにくる
 春には虫も出て小さな自然を
 庭に運んでくれた

何年か経ってから
 庭師さんが松に酒をやるとよいと
 太くなつた幹の根元より一尺位
 離れた所に垂木を打ち込んで
 その穴に酒を入れるのを
 初めてのことをみんなで囲んで見る
 一升びんの酒を逆さにして
 底をぐるぐる回転すると

どくどくと一気に吸い込んでゆく
松も成年となり ひとつの儀式だと

松は三等級に分けて
一番と言う目出度い木と知る
近づくとうっすら黄色の霧状に
テレビで見る杉の花粉のように

夏が近づき松の幹をゆっくり上っていく
辺りはうす暗く懐中電灯でてらす
足許に蚊取線香をつけ目を離さない
背中が割れ出し頭がひっくり返る
新しい蟬の誕生だ
しばらくしてうす紫に色が変わり
十糎位枝を移動し
闇に翔びたつた 思わずあつ！と
神秘的なドラマを初めて見た

正月用の松竹梅を活けた
太さ直径四糎位の青竹が中心
或る人が新聞をまるめて酒に浸し
竹の一番上の斜の切り口に入れると
酒がしみ込んで青さを保つと
酒は生き生きさせる魔法の水と

年を重ねた私にも
もう一度若さを蘇らせる
魔法の水を持つてくる人を
私は手をさしのべて待っている

(中区)

〔入選〕

三本足の犬

長谷川 稔

三本足が叩く
懈怠の昼下がりのアスファルトを
偽りの健全さの虚光を背に受けながら
パツン・パツンと
力強く叩く
初夏の粘液的多湿を
軽やかに弾き

歌うように韻律を刻む

遠い希望のようなものをまっすぐに見据え

事実を事実として受容し

事故の衝撃も

怪我の痛みも

病魔の呻吟も

現実凝視の彼方に見やる

無駄吠えをする駄犬は

近くにあっても

遼遠の向こうにあり

知らないまでに

犀利の光を

両の眼にともす

伶俐な眼差しは

哲学者の目

瑞々しくも透徹の若さに富み

老成の練磨にも熟成している

わずかな惑いにも微動だに

することなく

事物の正鵠を貫き通している

まっすぐ聳える両の耳は

遙かな高音域を聞き

哲人でも知りえない

宇宙交響曲を

大脳辺縁系に編み上げる

知っている

にこやかな晴朗さのうちに

その寡黙な穏当さに

生命肯定の律動が何処にあるのかを

だから

無駄にほえない

決して怒ることは無い

あの日の衝撃すらも

既に許容している

諦念ではない

寛恕の包摂の拡がりの中に

何もかも一切が

整頓されている

(浜北区)

〔入選〕

水仙の花

林 龍 男

水仙の花が言いました
もう根元から抜いて欲しいと
花は枯れて昔の面影も無く
薄茶褐色の花弁がただ淋しげに頭^{こうべ}を垂れ
後は風雪に任せるだけ
土に環えるだけ

隣の水仙が言いました
「馬鹿言うではない。ヤセても枯れても私の仕事は残っています。」
こんな枯れ果てた身でも
まだまだ根っ子の球根に少しでも大きくなって欲しいから
栄養を送り続けるし
続けられる限り頑張ると
栄養は目に見えぬもの
心で感じるもの

水仙の命はあなたの命
ホラッ！

分るでしょう
命を燃やして来た分だけ
球根は逞^{たくま}しくなつたんです

隣のまた隣りの水仙もそう言つて頷いた

(西区)

〔入選〕

赤く染まつたドレス

— 『フリーダとデイエゴ』を観て—

ヒメ巴勢里

身体は病に侵された
けれど絵を描くことに何ら変わりはない
彼もそばで描く
わたしと一緒に描く

いつも自信にあふれていたわたし
彼は静かに見守っていた
命ある限り 二人で一緒に描こう

共に生きよう

赤い絵の具で バラの花びらを
塗ろうとした その時
手から筆が落ち 鼻高の才能も落ちた
気の遠くなるような高い空から
わたしの全身は墮つこちた
ドレスが赤く染まった：

彼は おちたわたしを受け止め
高慢で満ちたドレスを剥ぎ取り
素になったわたしと手をつなぎ
静かな地上で踊りながら微笑む
また絵を描くことが出来るように
白い羽根を背につけて
厳かに祈りながら
わたしを天へと送ったのだ

彼はもう わたしについて来れない

けれど彼の優しさは

わたしの全身に染みついて
今までの高慢ちきを反省しながら
静かに天を上った
羽根のおかげで 楽に行くことが出来た

ありがとう

このわたしが感謝している
これまで忘れていた心が甦える
絵を描いてこられたこと
彼と共に描き 生きてこられたこと
全て ありがとう

(中区)

入選

廃屋のシヨツトバー

水川亜輝羅

都心を離れてはいるが駅も近くにある

裏側に小高い丘があり周りは建物が密集している 側面に坂がある 五十坪程の空地の中木造の二階建があり 左側にはレンガの煙突もある 正面にはB A Rの赤いネオンの看板 駅のプラットホームで足元に転がって来た メタルを拾った縁で バーに案内された
メタルは会員証だと云う

頑強そうなドアを開くと胸元の高さに

両開きの短い錠戸があり両手で押して入る

西部劇に出て来る酒場の造りである

床は板張りで ギシギシしむ

室内はタバコの煙と肉を焼く匂いが立ち込めて 酒臭く薄暗い ジャズが低く流れている

目が慣れて来ると 案外広い十人は座れる

カウンター 途中 四、五席のテーブルもある 案内した

男はメタルを手渡ししてくれて カウンターに置くと 酒が飲

めると云う

スロットマシンの硬貨のようで重い

「トイレは右側の奥」とだけ云うとさっさと行ってしまった 止り木に座りメタルを置くと バーテンが 酒ビンとウイス キーグラスを持って来た 広口の部厚いグラスである 酒ビンにはラベルがない 注いで香りを嗅ぐと正しく酒である 含んで舌上で転がすと 胃の奥に届いて カアーツと体が熱くなる

バーテンがチラとこちらを見る 親指を立てて見せると ニヤリと笑った 何時の間にか赤いチャイナドレスの女が左隣に居た

右肘をつけて左側の男と話をしている

腰の辺りまでドレスが裂けていて白い太ももが丸出しなのである 赤いドレスが黒く見える気もする 足の長さからすると大女である

バーテンが近付いて来て「ビヨウキモチカカワルナ」と耳元で呟く 係る気もない

左隅の階段を昇る白い太ももが見えた

バーテンがカウンターにメタルを置いて

「マタコイヨ」と云って右の奥を指差す

出口があるのだ

入って来る客は見たが出るのは見なかった

酒ビンは空になっていてグラスにはまだ残っていた それを飲み干して止り木を離れた

始発の電車が走り出していた　ポケットをまさぐると
くしゃくしゃのタバコが一本
それにメタルが「こつん」と指先に触れた
案内した男の姿はどこにも見当たらなかった
異次元の世界を覗いた気がして　妙に疲れた

(南区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

詩選評

埋田昇一

自然を描くにしろ、人や社会などさまざまな事象を描くにしろ、それらの情景が、作者とどうかかわるのが欠けていればその作品は絵に描いた餅に過ぎません。作品を書くためには、何を書こうとしているのか、自分が生きている意味を問う主題がなければなりません。作品を拝見して感じることは、ほとんど思うままに言葉をたれ流している作品が多いということです。その上で、作品が「いいな」と思う「詩」の勝負どころは、常套語や使い古された情感をそのまま言葉に記すのではなく、言葉に切れがあること、作者の情景に対する新鮮な「発見」があることです。

「戦跡に眠る」は、兄が戦死した沖縄戦終焉の地に立って掻き窺られるような胸の鼓動を感じたという作品ですが、一連一連言葉が正確で、文の構成も変化・展開があり、起承転結の「転」があつて読み応えのある作品に仕上がっています。終連に近く、突然のにか雨が降って「兄の涙か 母の涙か / それとも天からの鎮魂の水だろうか」の語が感動的です。「浮かぶ窓」は、自分だけのちっぽけな部屋に開けられた小さな天窓が自然と一体になった夢や物語を運びます。天窓から見る風景とは発想が新鮮です。「熱い衣をまとう沈黙のさなぎ」とは後半の「内なる炎」となる伏線なのでしょうが

現実の火事なのか、それともこれも夢のなのかのことなのかちよつと分かりません。「内なる炎」とありますからこれも夢の中のことのように思いますが、やはり展開は少し無理なような気がします。

「空から突然」は、空から突然オタマジャクシが降ってきたという異常気象の話題がテーマですが、ひとつの現実にはさまざまな見方があり、「甘い夢の多くは消えていく」という覚めた現実に気がつくところ面白い。ただ、後半の作者の感慨部分が抽象的でイメージが湧かない弱さがあります。

その他、激しく鳴いているクマゼミの声を聴きながら、鳴くことの意味を問う「鳴く」、淡い初恋の思い出が懐かしく蘇る「別れの曲」、終戦直後小学校時代の担任の女の先生と若くてかっこよくタップダンスを踊った青年教師の思い出が忘れられないという「二人の教師」、花が美しく咲くのは、みんなが沢山ありがとうと言ったからだというお母さんの言葉が私のお守りになったという「おまじない」、駅の近くの裏側に西部劇に出てくるような酒場の造りのバーの情景がよく描かれている「廃屋のショットバー」が印象に残りました。

「わが心の」は、親鸞の「わが心よくて殺さぬにあらず」という言葉が年経るごとに心の響きも様々に成長していくという精神の成長物語です。ミニ評論としてはよく書けているのですが、詩は評論やエッセイではありません。「詩」となるためには言葉と言葉の間の空間に飛躍がほしいのです。

短歌

〔市民文芸賞〕

妻の足継ぎたる小さき鉄の型二つ除けあり骨のかたえに
苦しみを越えし妻なりわが胸の遺骨を静かに静かに抱く

西区

柴田 修

パン買ってパンの匂いと共にいる古書店の中雨の昼すぎ
ひとつだけ聞きたいことのある今宵リングの兔耳立てて待つ

中区

新田 昌子

アイロンの熱冷めきらぬワイシャツを抱けば君の匂いが揺れる

中区

柳 光子

洗ふたびやさしくなりてゆくシャツを捨てかねてまた洗ひては着る

中区

小林 和子

鯉の目わたしをじつと見つめてる人の鮮度を測る目つきで

南区

赤堀 進

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

〔入選〕

盲目の人乗り来たるバスの中皆が見守る腰掛
くるまで
南区 太田 静子

体育で靴を履く君みつけてはそらした視線行
き場がなくて
南区 渡橋 鶴

負ひし児のくつ下一つ落し来ぬ素足撫でれば
声たてて笑ふ
東区 久米 玉枝

磨き上げし鍋が朝日に光れるを幸せ色とお
り思う
北区 伊ヶ崎智世枝

三体のはだか小僧が三様の帽子かぶされ遊歩
道夏
中区 新田 えいみ

新しく生れし生命の息吹かも蝌蚪ら千尾が水
面擡げて
中区 大橋 康夫

癌を病む妻を置きいて行く出向きフロントガ
ラスに叩きつける雨
中区 石黒 實

三角のおむすび百を握りたれば個々に生命の
誕生せし如く
北区 古谷 聰一郎

玄関にずっと置かれし亡き夫の靴見つめけり
一人居も馴れ

中区

藤田 淑子

電球を替へんと椅子に乗りし吾の腰だきくれ
し妻の髪白し
かねたとき数多の虫に際だてり吾子が死にた
る夜に鳴きし虫

浜北区

前田 徳勇

すずやかにオーボエの音高鳴ればわがチエロ
の音太く膨らめ

中区

宮本 恵司

声合はせ妻がさし出す稲束をすかさず掴む月
のあかりに

中区

仲村 正男

紫陽花に音色のあらばこの辺り騒がしからむ
タクト振るなり

南区

水川 彰

偶然のチャンスに逢いて語りたる不思議な折
りのコーヒーの味

中区

鴉多 健

朝の陽のやはらに射せる娘の部屋にモード雑
誌が秋を誘ふ

中区

寺澤 博子

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

八十過ぎて大波小波は静まれど齡とう波どつ
と寄せくる
東区 内藤 雅子

良寛の自然石になる墓のそば海風受けて白菖
蒲咲く
北区 野沢 久子
托鉢の姿で立てる良寛像どこを見遣るや細き
まなざし

朝あさを遺影の姑に語りかく今はもつとも親
しき人にて
西区 袴田 ひさ

五六本の土筆見つけて児等の列わつと崩れて
春が広がる
東区 飯田 裕子

なんとなく泣きたいような夕まぐれ芙蓉の花
が優しげに咲く
西区 近藤 榮子

良きことも悪しきも縋いませ若きらと同居三
年つわぶきの花
中区 小笠原 靖子

天井の節の数ほど苦勞した五人の子供育てた
父母よ
東区 長浜 フミ子

中區 岡本 蓉子
リハビリで作りしネギが青々と亡き夫偲ぶ三
回忌すぎ

中區 井浪 マリエ
三姉妹揃うは久し墓参り三女は今も三才のま
ま

東區 北野 幸子
子規などを知らない孫が庭に咲く花はよくみ
て描くべしと言う

中區 安藤 圭子
俄雨病む妻かばい行く傘が我に気づかず通り
過ぎゆく

南區 竹山 秀子
群青の空にさそわれ深呼吸萎えてはおられぬ
今日がはじまる

中區 川上 とよ
さわやかなコスモスの花に囲まれて河野裕子
を京都に偲ぶ

天竜區 恩田 恭子
新じゃがの塩煮一皿湯気たつを家族で囲む日
曜の午後

東區 森脇 幸子
朝まだき初殻の煙青く立ち火守の媼の影も穏
しき

寒い朝ぎこちない手でむつき替うあなたに笑
みつつ心安らぐ
南区 出原久子

曼珠沙華は茎も萎えしと行く堤早や穰田は二
番穂が萌ゆ
北区 益司郎

松林に入れば潮騒遠のきて樹上をわたる風音
となる
中区 松江佐千子

打ち水に陽の匂ひ立つ庭先にとび出す蜥蜴と
目の合ひにけり
中区 岡田よう子

じき母の三回忌が来る蓮の花かたどりし砂糖
使ひきるころ
中区 松浦ふみ子

この辺り兄の最期か戦跡の土抱ければ絆沁み
入る
東区 松野タダエ

「悲しく」と書に表すはいと難し細く書きて
も太く書きても
中区 今駒隆次

かくれんぼ花弁の裏のカマキリは西日に透け
て影絵みるごと
東区 高橋正栄

北区 堀内 榮子
もくせいの里に夕日はよく似合う七、八、
九十、百歳の棲む

東区 杉山 佳子
足腰に余生の不安少しあり露天の風呂で今日
を楽しむ

中区 遠山 長春
三歳の吾が過ぎりにし半島の羅津らじんの位置をル
ーペもて追ふ

東区 村木 幸子
笹の葉に添ひて出でたる笹百合を見まがふこ
となし年々に訪へば

東区 鈴木 壽子
桐の柾目の下駄を並べて盆の日を帰り来ませ
と迎へ火を焚く

西区 荒木 治子
なやみ事ばかり聞かせしお不動さんにはずむ
心で今日は逢いたり

中区 手塚 みよ
歯を抜きて麻酔の残る口許にパラソル越しの
西日射しくる

中区 飯尾 八重子
背伸びしても届かぬ事は届かない今日の一
日を良かれと思ふ

中區 江川 冬子
縺しめすえり子襟はったんに八端織りのねんねこは母が吾負い吾
が孫負う

中區 木下 芙美子
濃き赤の口紅の合ふ秋となる旅に着て行く服
を選ばむ

浜北區 松島 きみ子
この施設慰問に来りし過去ありて入居の挨拶
丁寧に成す

中區 中山 和
曇天に発電ファンのあはあはし天竜河口の遠
州灘に

東區 寺田 陽子
立ち去りし我が家の庭の夏椿咲くを忘れぬ白
き一輪

中區 野田 よし子
里よりの卵抱きし落ち鮎を炭火に焼きて熱き
を頬ばる

北區 大石 みつ江
最後まで家事がんばってくれました友の夫よ
り便りの届く

中區 石原 新一郎
腰まげて凍てたる野良に収穫す充ちたるもの
の手応へあつし

中区 江間 治子
 二十羽の小雀フェンスに並びたり落穂草の実
 しっかり食べよ
 薔薇という漢字をさらりと書きし人逝きて三
 年サークル続く

中区 新谷三 江子
 濃密な生き様ならねどそこそこに幸ある一生
 か等身大の

中区 坂東 茂子
 一本の大根とねぎ新聞に花束のごとく包みて
 だきぬ

西区 水嶋 洋子
 幼き日我が手を温めし姉の手を今日はしびれ
 たその手をさする

南区 曾布川くり子
 八十八歳の老いを受け入れ少し嘆き才媛たり
 し叔母よりの文

中区 塩入しず子
 いかばかり知恵詰まりて重からん辻井伸行
 首まはす癖

西区 河合 秀雄
 温もりのある介護師に恵まれて夢と希望が芽
 生えそめたり

今年もまた産地直送と隣人は庭のブドウをも
ぎて来訪
中区 小池みちよ

わが財布生活保護に足らずして税の通知書き
ちんと届く
浜北区 鈴木利安

フィアンセを伴ひ来るとふ夏休み祖母の身の
ゆゑ心して待つ
中区 織田恵子

新米は千葉産とあり嫁ぎたる娘を偲び買ひ求
めけり
北区 望月昭子

土の香は祖母の香りよつつがなく八十路を生
きて我が胸に住む
中区 倉見藤子

巫女は舞う鈴と榊の両の手を高くしなやか願
い山ほど
中区 畔柳晴康

教室にありたる頃の表情で「先生百まで生き
てよ」という
北区 山口久代

はるかなるアルプスの嶺輝きて煙の如く雪舞
いあがる
中区 金取ミチ子

南区
溪水の音立ててゐる崖の上伊豆の七滝ななだるさまざ
まに落つ

南区
大方は匂い失せたる私に蜜柑の花の夕べ匂え
る
鈴木芳子

中区
嫁の焚く門火の炎燃えたちぬ妻よ来ませよ今
宵語ろう
井上利一

浜北区
空突きし三千年の杉巨木神の使いか神その者
か
竹内オリエ

南区
父の木を温き大地に植えかえて蘇鉄は持てり
赤き実の房
大庭拓郎

北区
寄せ書きの日の丸の旗肩にかけ兵となりし日
あれから幾年
乃 歩

中区
常用漢字の勺が消えたり「液用」と印ある五
勺の柵を今も持つ
中村弘枝

南区
寒風の吹き荒れている駐車場角のつくしが春
を呼んでる
白井忠宏

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

川土手のなだりに群れて咲き初めし野イチゴ
の花いちめん白し
中区 高橋 幸

蜘蛛膜下出血に倒れし友見舞ふ見開く眼何を
思ふや
中区 澤田あい子

もうこれが最後の本と伝え聞き寂しい胸に喝
入れるなり
北区 滝本 保代

それぞれの体調安否問いくれてデーサービス
の朝がはじまる
天竜区 鈴木 銀

病院の送迎バスに馴れ合いて交わす言葉も温
もりており
東区 森 安次

筆握る変体がなの師の妙技流るる墨痕研鑽の
日々
北区 伊藤 美代

柿の葉の色鮮やかに輝いてまばゆい笑顔心に
しみて
中区 井口 真紀

秋祭り笛や太鼓に誘われて老いも忘れて手拍
子とる
中区 石川 きく

障害の友の作りし七夕の飾り美し高く飾りぬ
東区 北島 はな

難しい話論ずる友なれど「水戸黄門」を好む
東区 原 哲
と言えり

若き母携帯電話左手に遊ぶ子供の姿目で追ふ
中区 山下 文子

露天風呂より見下ろす入江の灯出船入り船い
東区 岡本 久榮
づこへむかふ

急斜面眼下に見える天竜川瀬尻のぶか凧上昇
北区 田中 健二
気流に

桜花いつかは散ると国のため命散らせし若者
北区 半田 恒子
悼む

戦災に耐へて繁りぬプラタナス青葉の蔭に鎮
東区 宮澤 秀子
む歳月

歌声が若若しいの講評に反応静かシニアグル
東区 寒風澤 毅
ープ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

中區 山崎 敏子
リハビリの師に見守られ歩く時歩き初めの幼
児のごとし

南區 井口 信子
母逝きて四年年月流れたる墓経響く山の緑に

中區 鳥井美代子
高齢の施設にひびくハーモニカ涙の顔が声高
に唄う

南區 太田あき子
おさなごのなれぬ手つきで柿をむくありしの
日の夫好物だった

浜北區 松本いふ
教え子も喜寿を迎える敬老会「ひとり薩摩
路」を二人して歌う

短歌選評

村木道彦

「写実派」は実体験を嘘偽りなく述べるとする立場、それに対して「ことば派」はかけがえのない想い——想いはことばそのものだから——かけがえのないことを求める立場。つまりは「まず体験ありき」か「まずことばありき」という相違。この二つのあり方は現在の短歌の振幅を示しているのだが、いづれの立場にしる、いい作品はいいというただその一事に尽きる。市民文芸賞は次の五名の方。ベテランに伍して若い感性の輝きが見られたのが、本年度の収穫だった。

- ・妻の足継ぎたる小さき鉄の型二つ除けあり骨のかたえに
- ・苦しみを越えし妻なりわが胸の遺骨を静かに静かに抱く

柴田 修

作品の背後に在る事実の重さに圧倒される。「小さき鉄の型二つ除けあり」とあるが、焦点化の確かさはすなわち、妻への哀惜の深さ。二首目「静かに静かに」の繰り返し利いている。

- ・パン買ってパンの匂いと共にいる 古書店の中雨の昼すぎ
- ・ひとつだけ聞きたいことのある今宵リングの免耳立てて待つ

新田 昌子

「パン買ってパンの匂いと共にいる」が秀逸。「パンの匂い」は今を生きている作者の生命感でもある。二首目のモノガタリは「ことば派」ならではの軽妙さ。「耳立てて」が着想の原点。

- ・アイロンの熱冷めきらぬワイシャツを抱けば君の匂いが揺れる

柳 光子

——「匂いが揺れる」。ことばがびたつと決まったときの力がこの作品の力である。詩とはそういうものだと思う。

- ・洗ふたびやさしくなりてゆくシャツを捨てかねてまた洗ひては着る

小林 和子

「洗ふたびやさしくなりて」という発見がこの作品の眼目。下の句はその感覚を素直に受けて収まりがよい。

- ・鯉の目わたしをじつと見つめてる人の鮮度を測る目つきで

赤堀 進

読者の意表を突く「人の鮮度を測る目つき」がおもしろくて楽しい。生鮮食品の鮮度を真剣に値踏みするわたしたち自身の姿が、目の前に彷彿とする。最後に入選作のなから、記憶に残った幾つかを挙げる。

- ・盲目の人乗り来たるバスの中皆が見守る腰掛くるまで

太田 静子

- ・体育で靴を履く君みつけてはそらした視線行き場がなくて

渡 橋 鶴

- ・負ひし児のくつ下一つ落し来ぬ素足撫でれば声たてて笑ふ

久米 玉枝

- ・磨き上げし鍋が朝日に光れるを幸せ色とおりおり思ふ

伊ヶ崎智世枝

定型俳句

〔市民文芸賞〕

花うぐい折り重なりて登りきし

北区

鶴見佳子

どの木にも天辺のあり良夜かな

東区

石橋朝子

波音のただ波音の九月かな

東区

稲津とし子

人形の氣息ととのへ菊師去る

西区

佐藤政晴

てのひらに落花の重さありにけり

東区

山本峰子

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

里山は理科の教室星涼し

中区

神谷冬生

藁塚の整列ひとつだけ傾ぐ

東区

田中美保子

胸中に熱きものあり寒牡丹

南区

大田勝子

残菊や心貧しくてはならず

中区

伊藤サト江

金魚掬ふ思はず力入りけり

南区

伊藤久子

「入選」

長いなあをんどりのこゑ秋祭

東区

石橋朝子

かくれんぼの鬼の子とをり秋の虹

秋夕焼見たことのある船帰る

製畳の匂ふ青さよ天の川

秋耕の姉さま被り一輪車

中区

浅井裕子

検針員ひとこと褒めし唐辛子

木賊殖ゆ吹き抜く風の柔らかき

秋桜卒寿の夫は匂友なり

中区

池田千鶴子

絢台や夜なべの母の鯨尺

冬ぬくし父の遺愛の恵比須さま

親しさか捨て身か肩へ秋の蝶

中区

伊藤サト江

草揺るるほどに飛蝗の鳴きて跳ぶ

危機孕む国境の空鳥渡る

乙女らの太股白く夏来る

中区

稲津とし子

吐息まで青く染りし梅雨の星

大曲りして銀漢のひとかけら

銀漢のこぼれて冬の螢かな

浜北区

岩城悦子

後ろより声して芒やるといふ

中区

梅原栄子

水槽の真白きスッポン冬ざるる

棉吹きてほつこり雨を弾きけり

子に何かひとつ遺さむ零余子飯

柿たわわ挽ぐ人もなく日に透けて

中区

右崎容子

南区

浦岡ユキ子

ねぢを巻く柱時計や夏座敷

帚木のまつ赤な総身さらしけり

ふんだんに地下水のあり新豆腐

沙羅の花ポツリと散るも景色かな

ゆくもまたかへるも烏瓜みつ

上段は今朝新しき柿すだれ

東区

氏原知恵子

南区

大田勝子

秋晴れや大極殿の朱の柱

十薬の良き香となりし軒の風

文化祭のポスター貼りの女子高生

空蟬の寺領に光溢れるし

蓮根掘る漢の長きゴム胴着

父の手の鎌の温もりちちる鳴く

蝸蝸千尾池に漲る生命かな
中区

大橋 康夫

秋日和古本市に人の群
中区

加藤 和子

ごんぎつね現れさうな春の宵

台風の子報選句の迷ひかな

鶯に出勤時間あるごとし

大根蒔く小型ラジオのリズミカル

中区

大村 千鶴子

中区

神谷 冬生

五月晴通し柱の立ちあがる
さつきばれ

十三夜手相見せ合う船溜まり

茅葺に火災報知機寒すずめ
かやぶき

緋目高の仮の住まいは手つき鍋

滾る湯に五穀占ひ寒の雨
たぎ

冬廊下母の遺せし手摺り棒

西区

刑部 末松

西区

加茂 忠

踏青や見上ぐる空に飛行船

明明と寒紅梅の隣家かな

見つめれば出目金我に目を逸らす

軽鳧の子の親につき行く力かな

マスクして瞳の笑ふ通園児

盆踊町の若衆の勢揃い

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

マフラーを二重に巻きて会ひに行く
中区
 齊藤三重子

古稀傘寿卒寿もそろひ初稽古

つくしんぼ思はず声の揃ひけり

高階を行き交ふ小鳥聖五月
西区
 坂田松枝

背泳ぎの空見上げれば夏の雲

里歌舞伎おひねりとんで菊日和

いつか又逢ふと指切りいわし雲
南区
 佐原智洲子

「オオソレミヨ」声高々に敗戦日

きりぎりすやがて絶えなん声すなり

葉桜や誰も気づかぬ別れあり
中区
 澤木幸子

花冷や温もり残る哺乳瓶

ひと言が子に告げられず蟬時雨

水槽のクリオネ捜す春隣
北区
 鈴木章子

授かりし恋の話や春めける

燈台は無人となりて冬銀河

棒稻架のコの字コに暮るるかな
東区
 鈴木千寿

木道を守りし漢草紅葉

溪紅葉愛でて百戸の村に入る

棒稲架に光集めて山暮るる

南区

鈴木秀子

烏瓜こんなになき日の匂ふ

船虫のぱつと散りたる虚空かな

鈴木浩子

コスモスや駅長の吹くハーモニカ

東区

こつこつが考の信条実千両

東区

田中美保子

秋の夜や子と諳ずるいろは歌

ごくごくと牛乳を飲む体育の日

溶接の火花青白秋暮色

夜泣きの子に冬満月を見せし日も

鈴木美代子

婚の日の雛の前の別れかな

中区

不規則にビル街歪む油照

西区

為永義郎

秋天にハートを描く基地の街

柿食めばまた子規のこと鐘のこと

木枯や睨と抱き合う道祖神

万象の音を根雪が閉じ込める

立ち読みの背中合わせや秋の風

北区

鶴見佳子

鯉のぼり息はき出して畳まるる

暗闇を飛び交ふ螢のランデブー

中区

永田恵子

夏燃ゆる少年の腕黒光り

アゲハ蝶ツンツンと飛ぶ花畑

梅干して明かるき空となりにけり

買ひ置き乾麺茹でし春の雷

中区

手塚みよ

鶯の声ひろひ行く里の道

中区

中原まさ

零れ種育つ三つ葉を畝にせり

そら耳で返事してゐる十二月

排水に樋滴りの音色かな

ビル谷間抜けて冬日の濃かりけり

ポケットに音楽があり冬の旅

中区

戸田幸良

旅の夜が冬満月となりにけり

西区

中村心誠

落葉踏む音には旅の音がする

秋澄むや礼儀正しき生徒ゆく

眞つ先に秋風が来る野の佛

廃船も秋の浜辺の構図かな

夜明け道どつしりと立つ入道雲

中区

錦織祥山

葺狩り山は静かに眠りおり

ローカル線見え隠れする遠火花

中区

西村充雄

ゲリラ梅雨「侵略戦争」熟読す

うるこ雲テニスボールをバシッと打つ

先がけて旗掲げたり建国日

中区

二橋記久

行灯は千筋細工雛の宿

天高し歓声あがる檣頭礼

ひとところ田の色変へて麦熟るる

花冷えや校門かたく閉じしまま

西区

野中美美子

如月や能面彫師の白き髭

焚火して河岸の漁夫らの声高し

中区

長谷川絹代

万緑の底水音の走りけり

ゆきあひの空に響くや鳥威とりおどし

無きにしもあらずよ来世らいせ冬銀河

中区

華世

ポケットの小石木の葉は子の宝たから

ふる里やいまだ白寿の母が待つ

春を待つ虫が落葉に息潜め

振り向けば髪切虫に啼かれたり 東区 日置文代

半眼といふ御仏の涼しさよ 南区 藤田節子

蝸牛夕べと同じ葉の上に

ゆきあひの空より給ふ秋の雷

ひよんの実を吹みてみせたる少女かな

二冊欠く清張全集冬灯

中区 人見亜紀

中区 藤本幸子

あきらめぬ熱闘球児汗すがし

日向ぼこしつ本読む鼻めがね

ヘルメット胸に抱へて三尺寝

夏足袋に力込めたる剣舞かな

日の短か「とげぬき地蔵」素通りす

玉虫やあまりに高き幹の上

東区 平野道子

北区 牧沢純江

穏やかに白寿の年の明けにけり

真つ新たな切株匂ふ浅き春

母の日や屋号で呼べば答へけり

指尺で計る株間に大根蒔く

許されて許すこと知る石露日和

掲げある遺影三代障子貼る

木の実降る風の出できし午後を降る

中区

松江佐千子

雁の棹少し流れて納まりぬ

煤逃の鰻食らつてをりにけり

東区

宮澤秀子

宵星の輝く茅の輪くぐりけり

墓のみを残すふる里法師蟬

夕月の路地から路地へ祭笛

中区

宮本みつ

千年の銀杏仰ぎ立志かな

どんぐりの弾みし音や出世城

言の葉もよきお茶席や実紫

捨てがたき五色の紅葉葉とす

南区

森明子

天高し伸び切っている気功の手

フランスパン出来たて十本春爛漫

西区

山内久子

紫陽花の明日は何色雨雫

何時も居て何時もの遊び水馬

今日からときめて今日から冬帽子

西区

山口久江

すこやかな卒寿賜り豆の飯

山容の変らぬ故郷赤のまま

柚子の香の湯浴み愉しむひとりかな

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

千年の杉森閑と淑氣満つ

北区

山口英男

散歩道今日は植田となりてをり

東区

山本峰子

空蟬の目玉大きく天睨む

遼太郎の小説座右に遠火花

百仏の百のおん顔小六月

橋の上漢が一人佇つ師走

B型の女三人花の宿

西区

山崎暁子

篝火に浮かぶ鶴匠の勇姿かな

西区

横原光草子

夕焼を使ひ果して子等帰る

盆踊久しき客も輪の中へ

寒卵こつんと朝のしじま割る

喜雨に手を広げ安堵の農夫かな

羽音して子燕一斉口になり

西区

山本兵子

静かかも知れぬ越後の初音かな

南区

赤堀進

なんとなく言葉あらため屠蘇祝ふ

来年はスーパ―になる刈田かな

焼藪や竹の箒に顎をのせ

送り火に残るはかなき思ひかな

中区

安藤すゑ

湧きあがるごと地虫鳴く母の郷

中区

飯尾八重子

百才の姉の遺影や走馬灯

中区

屈み込む漢二人の良夜かな

西区

石川 染

どこからか話声する今朝の秋

無造作に束ねられたる冬薔薇

東区

飯田裕子

西区

伊藤しずゑ

炎昼へ音膨らませ草刈機

藁舟に乗せて夫婦の流し雛

赤とんぼお前も夕日大好きか

万灯に兄の面影訪ねけり

中区

池田保彦

南区

伊藤久子

陽光をかへして白子干されけり

紫陽花の藍深ければ愛もまた

秋灯下父母とならびし子の遺影

大安に始まる九月人と逢ふ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

浴びながら濡れゆく草の月しづく

中区

伊藤 齊

あらはれて今朝の荇田を鷺祝す

鱗雲動くともなく動きをる

西区

岩崎 芳子

秋めくや手料理するも手抜きなく

南区

井浪 マリエ

夏至の夕この明るさをしかと見る

西区

岩崎 良一

しばらくは籠に飾られ枝葉柿

敗戦忌耐え得る限りの記憶かな

中区

井上 利一

西区

岩 渕 泰三

音立てて風吹き通る刈り田かな

春愁やあちこち向きたる子らの靴

鶏頭の西日に射られ燃えにけり

六地藏炎がゆらす野焼かな

中区

今駒 隆次

浜北区

大久保 朝夫

老木に登りつめたる兜虫

かたつむり御家担いで御引越

日向葵の日に向く不思議思ひけり

ほころびの月下美人に月淡し

鈴掛けに色無き風が漂中区いて

大城 まき

お手玉のおひとつふたつ春の縁東区

岡本 久榮

夕暮れに蜻大群西へ飛ぶ

甘夏をもぐ手ためらふ香りかな

西区

太田 沙知子

西区

岡山 小夜

鉄音身をのり出して松手入れ

三日月の傾きてをり空の果て

落し文秘め事誰も二つ三つ

みちのくの新酒は北の香りかな

浜北区

太田 千代子

中区

小川 恵子

冬日向縁に寝かせる赤ん坊

初浴衣下駄も会話も弾みけり

伸びやかに命名の筆秋高し

我ひとり空澄み渡る芒原

北区

大場 瑞穂

東区

小野 一子

児の泣く日我にむくげの花揺るる

それぞれに団扇の動きお寺寄席

木犀の記憶の中の香りかな

歩を止めて聞く篠笛か春おぼろ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

尾根の上十羽ならびし初雀 中区

影山ふみ

学びしを心に刻み卒業す 西区

金田チヨ

二羽の鳩銀杏落葉のただ中に

山峡の螢の舞に星応ふ

初めての茅の輪くぐりや身の軽き 西区

加藤新恵

道の辺に夕べの名残りか花火屑 中区

加茂隆司

盆供養少年僧の読経かな

果てしなき北に向ひて鳥帰る

菜の花や春の迷路に見と遊ぶ 東区

加藤ゆう子

四月始まる早生れ遅生れ 西区

河口康子

さくら炭の切り口花の咲くごとし

砂時計おちて忽ち冬に入る

春眠や少女の頃の夢を追ふ 中区

金取ミチ子

山羊放つ丘のベンチの夏帽子 中区

川島泰子

名月や童話の世界へ誘われ いざなわれ

平常の時を刻むや原爆忌

チューリップ咲かせて犬の診療所

西区

川瀬慶子

真つさらな風の信濃や青胡桃

鯉跳ぬる湖畔に憩ふ足湯かな

南区

金原はるゑ

馬酔木咲く靴職人の家の前

東区

北野幸子

手話の子と交すあいさつ今朝の秋

中区

倉見藤子

菩提子の並べてありぬ禅の寺

秋天へはじけるほどの子の笑ひ

中区

北村友秀

南区

栗田よし江

走りくる子の息白し父よりも

砂の上ペットボトルの浮かぶ夏

土用波サーファー沖に見えかくれ

紫のちかちか染みるエシヤレット

東区

切島正子

中区

畔柳晴康

青き田に羽ばたく鷺の白さかな

初日差す笥の水の光りけり

親燕風雨の中をまつしぐら

丹念に硯を洗ふ筆供養

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

輪の中に母の影見ゆ盆踊南区

齊藤あい子

秋の雲一期一会の人の顔中区

佐藤永典

日向ぼこ影がぶつかり踊つてる

御九日の踊りの列のきらやかに

中区

齊藤てる

西区

佐藤政晴

みどり児の拳ひろげて春立つ日

父が子に引いて引かせて風日和

身をしばるものなかりけり秋刀魚焼く

幾たびも鳥の帰るを見とどけし

東区

坂下まつ江

中区

佐野朋旦

語りたきこと胸に抱く夜寒かな

秋刀魚焼く日本男子になりにけり

秋夜長深夜のラジオ友となる

柔らかく扱ひ難し白桃は

中区

佐藤千恵

中区

沢田清美

自己流を貫いて菊咲かせけり

更衣背筋に残るたたみ癖

牛膝グーで始まるジャンケンポン

畔道の背丈揃ひし曼珠沙華

桜散る小蝶の群の如く見ゆ
西區

柴田 修

法師蟬の声聞きたくて近づきぬ

蟋蟀の声を綴りて日記閉す
西區

新村あや子

葭切の去りし葭原荒れにけり
西區

柴田ミドリ

雑念も忘れて聞くや虫の声

稽田を赤く染めつつ夕陽落つ
西區

新村ふみ子

抱へきて秋灯に繰る広辞苑

墓家主の如く居座れり

はらからのみなすこやかに初便り
西區

清水よ志江

チャンチャンコ輝く火星見つけたり
西區

新村八千代

父の日にだまって渡すプレゼント

梅雨晴間野外授業の声はずむ

遠き日の花野の見ゆる蔵の窓
中區

白井宜子

当もなき夢を楽しむ草むしり
東區

杉山佳子

姿見の奥行き深し冬に入る

朝顔の大きなつばみ明日ひらく

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

父亡くも在所の枇杷の花盛り 天竜区

鈴木きぬ代

冬ぬくし机上にありし新刊書 東区

鈴木富美

やらの笑み甘く匂ひし小春かな

夕顔や父を思ひて佇みし

西区

鈴木ちよ

西区

鈴木与一

落ちさうな連翹の花今盛り

砂浜の会話が途ぎれ初日の出

花筏三度流れて葉桜に

初筆や紙をはみ出す園児の書

西区

鈴木智子

北区

関和子

新松子潮立ち上る浜灯台

筆太の父の賀状や墨匂ふ

路の臺摘んで見せたる手の温み

嫁ぐ子の眩しき白の夏帽子

南区

鈴木寿子

西区

平幸子

存分に空をもらひし初桜

退院の朝に洗ふ新小豆

紫陽花や雨降りてこそ濡れてこそ

秋耕の孤高の若き農夫かな

稲刈の棚田を守る二人笠 中区

高橋 紘一

桜吹雪ふらここに降る髪に降る 浜北区

竹内オリエ

秋茄子のはちきれそうな色姿

夏蝶やひとりふたりと見送りて

草に寝て見上げし空に返り花 西区

高橋 順子

子規(天林寺)の碑や少し太めの時鳥 中区

竹下 勝子

まのびした露の臺あり我に似し

陽の残る茅(八幡神社)の輪くぐるや今年も (こんどし)

夕闇の桜吹雪のほの明し 西区

高橋 ひさ子

菖蒲風呂暫し無言で瞑想す 西区

田 中 安 夫

葉隠れに揺る野牡丹の気品かな

若竹の光背見えし今朝の藪

寄り合ひの露持ち帰る戸口かな 西区

田川 由紀子

華麗なる歴史の帝都雪の中 南区

黒葛原千恵子

一息に日の沈みゆく刈田原

冬の月ドナウの波にゆらめける

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

愛用の古着のひとつ更衣 西区

徳田五男

春愁やはたと止まりぬ聴診器 南区

中津川久子

渾身のつくつく法師刻惜しむ

裸の子からだ丸ごと笑いおり

中区

戸田田鶴子

中区

中野はつゑ

思い出がとび出してくる赤蜻蛉

薄氷に瞬き程の線光る

念佛の果てて満月昇りけり

梅雨しとど柱時計のにぶき音

北区

豊田由美子

中区

中村貞子

蟋蟀こおむせの鳴きとおしおり夜明前

しやぼん玉ひとつひとつの顔があり

来しかたの暮しでこぼこ秋思かな

着る児より着せる喜び初浴衣

西区

中嶋せつ

西区

中村勢津

人寄せの夕べふっくら豆の飯

名物の柿干してある風の道

盆踊果てて静寂の夜更かな

幔幕に菊人形は見得をきる

春雷や亡^なき夫^{つま}に呼び起こさるる

中区

中山志げ

投げ餅に氏神の湧く秋祭

夏の夜に目覚めてひとり無の世界

西区

野島やすゑ

ほととぎす筈返しの谷深し

西区

西尾わさ

炎天下バイク走らす郵便屋

北区

野末法子

秋灯やパズルの如きビルの窓

ちちははの面影ほのか盆の月

北区

野沢久子

西区

野田俊枝

歩を止めて滴る音を聞きにけり

湖を舞ひつくしたる秋の鳶

湧水の水輪の影の広がれる

登高の足に優しき獣道

一輪車すいすい乗りて夏終る

西区

野嶋薫子

家系図の一字消されし紙魚の跡

中区

野田正次

道連れは中天にあるオリオン座

暮鳴きて池の波紋の広がらぬ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「内緒だよ」おさな囁く春の午后
 しんがりを行く気楽さや紅葉寺

中区

野又恵子

卓袱台の男爵へ塩ひとつまみ
 草の実を証に帰る子の使ひ

中区

星宮伸みつ

音もなく北へ流るる天の川

南区

袴田吉一

堂々とももの忘れして秋ひと日

中区

堀口英子

人獣に椎は千年降りやまず

中区

林田昭子

足るを知る老の幸はせ彼岸花

浜北区

前田徳勇

産土の浜納豆や山笑ふ

真つ赤にて手のとどきしや烏瓜

南区

深津弘

大寒の雨あたたかし誕生日

一村を巡りて尾花探しけり

中区

松島ひろ子

火を重ねひと文字となる曼珠沙華

涼しさは頷く程となりにけり

くちなしのほのかなる香り朝餉時

いただいで少し酔つばい夏みかん

着ぶくれの雀にぎわい草んぼこ

東区

松野タダエ

首振れば首の骨鳴る松の内

南区

水川放鮎

そこだけはいつぱいの春福寿草

どの蟬が音頭取りしか蝉しぐれ

若芝に降した嬰の五歩六歩

中区

松本賢藏

吊るされて褒められてゐる吊るし雛

中区

水谷まさ

衣被ばあちやもかあちやも白い指

母の日の「ドライブ」と云う贈りもの

外にも出よ大きな月を仰ぎ見む

西区

松本美都

気まぐれに鳴る風鈴の位置を変え

中区

南裕次郎

公園の菊人形の勢揃ひ

現るかも知れぬ無月の庭を掃き

紅さして行くところあり寒椿

南区

松山洋子

チエロ背負ひ一步一步の極暑かな

中区

宮本恵司

露草をあふるるばかり摘みにけり

湧く汗をぬぐはぬままの一楽章

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

野ぼたんの明日へ明日へと蒼付け
東区
 最北を目指す原野に秋夕焼

村松綾子

花筏絵巻の中にゐるわたし
西区
 瘧秘めて向日葵のごと友笑ふ

八木若代

白足袋に気合い込めたる夏舞台
東区

村松津也子

忘れぬ母の豆飯終戦日
西区

山崎勝

花筏流れにまかす我身かな

日向ぼこ生命線を指で追ふ

七夕の大きな文字の願ひかな
西区

森下昌彦

木蓮の混み合う白さ空に映え
中区

山田美代子

聞きそびれ言ひそびれたる夜長かな

白蓮の大きな葉つば風わたる

ちちろ虫紬の好きな姉なりし
南区

八木裕子

天高しクレーンの動くビルの上
中区

横田照

ぶな黄葉八甲田への九十九折

ひとり言多くなりたりて冬隣

指先に息吹きかけて若菜摘む

西区

吉田 梅子

平凡にくらして菘をくくりけり

南区

渡辺きぬ代

夕風につくつく法師鳴き了り

満月の清さに迷ひふつ切れて

爽やかや五百羅漢ごひやくらかんのほほゑみ

西区

吉田 高德

日本がフライドチキンになつた夏

南区

あべこうき

日時計に秋の日影の差してをり

風の道おち葉一気に吹飛びし

北区

あひる

名月や薨の波の果てにあり

西区

和久田志津

新酒酌む香りに酔ひてしまひけり

茶柱の香り床しき春の宴

西区

池野春子

葱坊主風の囁き聞いてをり

西区

和久田りつ子

放牧の牛生いきと風光る

北区

伊藤あつ子

終戦日無口の父を思ひけり

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

銀河こえ一年ぶりの素敵な夜 北区

内山あき

七夕や父よ歩めと便りする 中区

小楠恵津子

千両も万両もあり小鳥来る 西区

海原悠

ぼろぼろの人形抱きし冬かまち 中区

勝田洋子

朝市に耳赤くして春浅し 中区

大石睦治

窓越しの弥陀に合掌風薫る 中区

川合泰子

柏餅二つ並んで祖母と夫 東区

太田しげり

月仰ぐ後姿のまどかなる 西区

川瀬雅女

気持よく種をはじける鳳仙花 南区

太田静子

ひと仕事終へて夕餉の新酒かな 西区

北野谷清香

梅干しをざるに並べて母偲ぶ 中区

岡本蓉子

上棟や槌音高く天高し 中区

小池祥元

曼珠沙華刈り残されて土手まだら

東区

寒風澤 毅

元朝は父の訓示で生まれり

西区

新村 幸

百八に今日なる父よ秋の天

中区

塩入しず子

晩秋の箱根古道はなほ暗し

中区

鈴木田 鶴

洗つても指先にある露の香

北区

柴田 ふさ

風熏る大空に舞ふ祝い風

東区

高橋あゝ子

雨走り紫陽花そつと光りだす

南区

白井 忠宏

風花に低くとどろくジェット音

中区

高山 紀恵

あかあかと湖が燃えたる渡り鳥

西区

新村 健一

栗爆ぜる下の地藏さま石頭

西区

千 弥 預

五六個もぶらりさがりてからすうり

西区

新村 康

吹く風を音にかえたり江戸風鈴

北区

辻村 榮市

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

生きてあるものことごとく芽吹きをり
中区
 寺田久子

若水を荒れし両手で汲みにけり
西区
 中嶋保男

8・6 広島はちてんろくの宙祈りそらのみ
中区
 鴫 彦 健

古里の手筒花火に帰省の子
北区
 永田キク

そつと吹く風に香れる生姜畑
中区
 富永さか江

ゆつくりと自転車をこぐ蕎麥の花
東区
 長浜フミ子

風に乗りまつりばやしの子等の声
中区
 鳥井美代子

ころ柿や母御座さねば里遠し
中区
 中村弘枝

花ずおうあか柴を主張して
東区
 内藤雅子

朱の艶を柿と紅葉の競いおり
東区
 中村雅俊

あじさいに雨水たまり焔みなめいて
南区
 永井眞澄

先づ茅ちがやぶく選ることより茅の輪結ふ
北区
 野沢建代

短日や友と出逢ひし妻篋宿 北区

野末初江

初風呂や嬰兒両手を突きあげて 天竜区

深田千代子

小さき手と別れの握手桃の花 中区

野田ますゑ

見上げれば皇帝ダリヤ宙に咲き 中区

藤田淑子

彼岸花白きが一つ風に揺れ 北区

乃歩

三代の仏間の写真西日入る 北区

藤原咲子

年の瀬や畑はたに淋しき忘れ鎌 中区

のぶ女

わがままも絆のあかし母子草 中区

松本緑

手作りす縞のもんぺや秋灯 中区

浜美乃里

溜池に白鷺一羽佇めり 西区

山崎百十三

寒の星コトリと新聞置かれけり 南区

原田ゆり

薔薇の香に弾む語らいカフェテラス 中区

山下静子

桜散る眠りのごときひとよ一生かな
中区

山田 知明

桜餅売り切れの文字くろくろと
西区

山本晏規子

目を閉じて合はす手に降る盆の月
中区

吉野 民子

名月や中天にあり動かざる
西区

和久田孝山

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

定型俳句選評

九鬼あきる

本年度は応募作品数では減ったものの、内容的には変化に富んだ作品が見られ頼もしく思った。最終的に一一九九句の中より次の十句を第五十六集の市民文芸賞に推薦することにした。

花うぐい折り重なりて登りきし

鶴 見 佳 子

鍼は春の産卵時には著しい婚姻色が出るので、桜鍼とか花うぐい等と呼ばれてきた。この句の眼目は「折り重なりて」である。大群の花うぐいが登ってくるのがわかる。その勢いも。この作者の鋭い写生眼、凝視の姿勢は見事と言つてよい。

どの木にも天辺のあり良夜かな

石 橋 朝 子

当たり前のことを当たり前に言っているのだが、何故か新鮮に響いてくる。また、句の拡がりにも注目した。自然に対する作者の敬虔な心あればこそ出来た一句。

波音のただ波音の九月かな

稲 津 と し 子

優れた自然諷詠の作品である。あるのは「波音」だけ。このリフレインが実に効果的。この句は「九月かな」が全て。このこれほど作品に溶けこんでいる季語は他にない。

人形の氣息とのへ菊師去る

佐 藤 政 晴

歌舞伎役者やその年の大河ドラマの主人公等さまざまな菊人形がずらりと並んでいる。いよいよ開幕間近。「人形の氣息とのへ」に菊師の気合いを見る。この一体感が素晴らしい。てのひらに落花の重さありにけり

山 本 峰 子

日本人の花に対する思いは格別なもの。中でもその散りざまは私たちの美意識を育ててきた。「てのひらに落花の重さ」を発見したところがこの句の凄いと。ありそうで無かった句。

里山は理科の教室星涼し

神 谷 冬 生

学校の体験学習であろう。生き生きとした子供たちの様子も見えるようだ。「里山は理科の教室」という素朴な表現が新鮮。こういう普段の心こそ大切。「星涼し」の季語も効いている。

藁塚の整列ひとつだけ傾ぐ

田 中 美 佐 子

収穫の後の田園風景である。よく見ると、一つだけ傾いている藁塚がある。対象から目を逸らさなかつたから成つた一句。

胸中に熱きものあり寒牡丹

大 田 勝 子

「胸中に熱きものあり」は言ってしまった弱さがある。しかし、凛とした「寒牡丹」を前にしてこう言わざるを得なかつた。

残菊や心貧しくてはならず

伊 藤 サ ト 江

これまた主観の強い一句。「寒牡丹」の句と同様この季語だから許せるという句。「残菊」をクローズアップして止まない。

金魚掬ふ思はず力入りけり

伊 藤 久 子

真面目なるが故のおかしさが漂う。たかが金魚掬いなのに、力が入ってしまったところを素直に詠んで成功した。「面白い」

本年度は新人の投稿もあつたようで、その点では喜ばしいことであつた。最後に一言。俳句は世界で最も短い詩である。その特徴を最大限生かすには、省略こそが大事。全て説明しないこと。一句に一季語と言うことも覚えておきましょう。誤字も相変わらず多い。投句の前には必ず辞書で確認する習慣を。そして推敲も。皆様の更なるご精進を期待して止みません。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

無人売りふて寝の冬瓜大あくび

南区

中津川久子

無人の家へ風が置き手紙

天竜区

ちばつゆこ

飛び越せる程の水溜り飛行機雲ひとすじ

浜北区

内山春代

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「入選」

水鏡にお揃いのマフラーなびく

中区

鈴木まり子

風紋を崩して五月の風がすべってゆく

星流れる願いごとまだひとつある

托鉢の僧の背に西日付いてゆく

中区

藤本ち江子

旅靴の中に小さな秘密も詰めて片道切符買う

コスモス畑を抜けてきた風に秋が乗ってきた

庭桜ばらばら心の透き間に風すこし

今夜は楽しい夢が見たくて枕カバーは花柄に

昔の歌をうたい月夜を歩く

北区

縣 敏子

心の置き場所がない雨降り

涙が出るほど笑って木が暮れる寂しさ

中区

泉沢英子

姿見の奥を揺らしはじめた秋

思い過ぎだった痛み笑ってしまう

湖岸に投げ出すようアワダチ草咲く

中区

伊藤千代子

寄り掛った人間の話が面白いと枝がそよぐ

月が窓に冬が始まろうとする

母が逝って幾年かそんな歳になる

炎暑届いた絵手紙のかき氷も溶け出しそうな
浜北区 内山 春代

野仏苔むして遠い日の言えなかつた一言

彼岸花蝶々ひらひら石に座す

中区 大軒 妙子

うさんくさい男が鳩集めている秋の陽

介護少し疲れましたと云う秋の風立つ

橋渡ることのできた杖の吾亦紅

浜北区 木俣 史朗

酔うてはだかる月がすすき姥になる

何とも寒い雲だ僕のマフラー貸そう

熊野路は国の古姿かたち那智滝滔々虹を吐く

浜北区 木俣とき子

天体の輪廻秋の木星真上に仰ぐ

春夏秋冬他人ひとには測れぬ坂登る

疏水の旅の行方を秋の雲ゆつくり流れる

西区 柴田 修

桜を愛した妻桜の散る季に逝く

納骨堂にゆく妻の骨今日がほんとの別れ

一番大きな星を妻だとおやすみを言う

中区 鈴木 憲

誰が元日決めたのか少しずらして初詣

つるべ落としという言葉が好きで枯葉舞う

後ろに進む時計はないのか徹夜で呑もう

詩集開く一片の押し花春の夢のなごり
中区 鈴木 好

恋ならば猛暑いとわず出掛け行く

年重ねて書くこと少ない日記帳の余白

浜北区 竹内オリエ

散歩久しく夕焼けの道 子らとの時間

話の行き違い休日の楽しさ奪っていく

風は巡り菜の花畑の蝶のためらい

中区 富田 彌生

紅葉の林をゆっくり行くトロッコで

お茶飲みながらあそこも更地になっていたと

遅れていた紅葉の濡れながら一枚二枚

老いての坂を思う石路が咲き
浜北区 外山喜代子

昭和のトンネル抜け風が乱れる

だんだん畑案山子の影も夕ぐれる

南区 中村友乙

デジャビユかと窓際の女ひと気にかけている

余生など今の世になし人生二毛作

篝火ゆらぎシテの面の百変化

東区 宮本 卓郎

コスモスつむ背で貴女とわかる小さな幸せ

夏を置き忘れた風に最後のひまわり

とんぼ風と綱引きしてる色あせた帽子

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

草千里月が転っている
東区 飯田裕子

音無き音初しぐれの演出

おとぎ嘶つれて蚊帳の螢
北区 鈴木章子

夕ぐれに烏瓜一つともる

ごみ出す日だけの会話マンシヨンの朝寒く
中区 池谷俊枝

やり残しが気になる雨の音
西区 鈴木孝子

ガラス瓶の底に澱んだ孤独きつく栓する

曼珠沙華にあやかりたい心境

胸底の自分史を公園のベンチで紡ぎ始める
南区 大庭拓郎

刈り込みの松葉に潜むかまきり奴冬眠中
中区 鈴木英伸

何だろウ芽もない、葉もないあゝ電信柱か

浜名湖を西に翔る鶉の群れ一列に

月の舟雲を乗せる
中区 倉見藤子

孫の背丈に屈んでじゃんけんぽん
天竜区 ちばつゆこ

風神と遊ぶコスモス煌く

ケセラセラ からっ風も笑った

赤蜻蛉夕焼けの中にとけて消えた

中区

戸田田鶴子

さつと風羅漢達と遊ぶ落し文

血で染まるドレスは赤いバラの花びら

中区

ヒメ巴勢里

陽だまりに去年植えし露のとう一つ見つけ

東区

内藤 雅子

庭屋さんのうしろからおはぐるとんぼ一匹

柿の葉が色づいている描いてみようか

中区

福田美津子

新しい帽子被って新しい秋を歩く

東区

長浜フミ子

水面に映るトンビの輪くるり

遠き日に雛飾りし孫母親となる

浜北区

松本いふ

あと何年つゞくか宮参り燕とぶ

中区

錦織 祥山

湯舟の笑顔もひさしぶりのOB会

帰園バス待つ間サンダルの底焼けてくる

長閑なよい日になりそうへりの音パタパタ

南区

水川 彰

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

初仕事に高く結んだポニーテール
中区 宮司もと

「リハビリ」よと紙風船の行ったり来たり
南区 太田静子

父の墓前には今年も秋の七草入れる

大銀杏黄葉北風に舞う
中区 川上とよ

雲晴れて鶴飛び来る象迷い晴れ
中区 宮地政子

春一番湖渡るロープウエーが軽く揺れ
中区 畔柳晴康

夫婦声桜も散りてジヨギング朝日課
みよつとこえ

森田浩子

犬たちも布団で寝たふり寒い朝
中区

台風一過庭の木犀金絨毯
中区 小池みちよ

今夜も三匹の犬と食事しながら電話待つ

路地裏の演歌に合わせて割れたドブ板
西区 鈴木愛子

声は殺して唄う師走の舞台は定番内蔵助
中区 天野悠子

夫に感謝今日は何の記念日にしようかしら
南区 ダリア

手にある思い出の重さを知る

東区

手塚全代

息子の背に自分を見つける師走

北区

原川泰弘

クリスマスパーティーのグラスは燃える色で

中区

寺澤純

コンパクトの中の赤い唇がおんなです

南区

山崎みち子

変りゆく茜色見つつ佇む

中区

鴫多健

華華華華と明るく揃う彼岸花

中区

富永さか江

あいうえお歌うように午後の日だまり

南区

中津川久子

ちぎれ雲 入道雲を振り切る

中区

西川多恵子

鶴田育久

腹八分、それは俳句にも云えることで、芭蕉の「言いおおせて何かある」という教えは至言です。特に自由律俳句は、字数の制限がないので、や、もすると饒舌になりがちです。全てを言いつけるのではなく、二三分のところは読者の裁量に任せること、それが句想の広がりであり句趣になる訳です。そんな意味合いを込めて今回の選に臨みました。

まず通読して感じたことは、投句作品は総じて平易で、句材も暮らしの中から見つけているものが多く、皆さん愉しんで句作されている様子がかがわれ嬉しく思いました。

予選句として次の十五句を採りました。(丸印二次予選句)

○ 托鉢の僧の背に西日付いてゆく

新しい帽子被って新しい秋を歩く

○ 無人売りふて寝の冬瓜大あくび

年重ねて書くこと少ない日記帳の余白

詩集開く一片の押し花春の夢のなごり

○ 飛び越せる程の水溜まり飛行機雲ひとすじ

赤蜻蛉夕焼けの中にとけて消えた

月が窓に冬が始まろうとする

○ 無人の家へ風が置き手紙

旅靴の中に小さな秘密詰めて片道切符買う

○ 涙が出る程笑って木が暮れる寂しさ

つるべ落としという言葉が好きで枯葉が舞う

犬たちも布団で寝たふり寒い朝

○ ゴミ出す日だけの会話マンシヨンの朝寒く

市民文芸賞の選出は、難渋しましたが、今回は思い切って傾向の異なる次の三作を推すことにしました。

無人売りふて寝の冬瓜大あくび

一見、川柳風に見えますが、俳句の俳の字はおどけ、戯れという意味なので、こうした捉え方も案外俳句の原点なのかも知れません。この句は冬瓜で生きています。図体ばかり大きくても素っ気もない冬瓜、それが無人売り場に置かれ、ふて寝しているのです。それが何とも面白いのです。他の野菜や果物ではインパクトがありません。冬瓜がよろしいのです。

無人の家へ風が置き手紙

風が置き手紙、この無造作に投げ出したような表現が卓抜。それは、自分の心の中をそっと抜けてゆく風のような空しさに似ています。寂しさを言わず客観視しているところ絶妙です。

飛び越せる程の水溜まり飛行機雲ひとすじ

自由律俳句の典型的な作り方で、モチーフも取り立てて新しいものではありません。しかし、飛び越せる程の……この発見が素晴らしいのです。見方をちよつと変えてみる、それだけで実に新鮮なポエジーを生みます。俳句は理屈ではありません。以上三作とも作者の生きた眼(個性的)で捉えたところが、読者の気を惹きつける所以でしょう。

他には、西日が着いてではなく、付くと見たこと、赤い蜻蛉が夕焼けにとけるといった幻想的な発想、木が暮れる寂しさのイメージ、犬たちも、このもて作者のやさしさを感知、ゴミ出す日だけの会話で、社会世相を見事に表現しています。それぞれに現代を体感させる佳句でした。

川
柳

〔市民文芸賞〕

はらわたの苦味も愛でる舌となり

中区

長谷川絹代

閉ざされた心の窓を母は拭き

中区

米田 隆

花まつりレモンの恋を食べ残す

東区

竹山恵一郎

人間の汗を無視する机上論

東区

中村雅俊

ゆつたりの歩幅で刻む終の道

中区

仙石弘子

背信へ慚愧の涙胸叩く

咲き切った後は重たいだけの鉢
寂しさが間違ひ電話引き止める

中区

米田隆

原爆忌黙して繁る樹の挽歌

錆付いたねじが支える老いの腰

ユートピアひっそり探す孤独の背

澄んだ水子らに残して母が逝く

造花にもポリシーはある凜と咲く

かくれんぼ父母偲ぶ里の風

中区

浅井常義

北区

山口英男

どん底の暮らしに耐えた茶碗酒

解れ出す糸を手繰れば母の膝
色あせた夢を残した日記帳

言い負けて林檎を丸くむいている

義理ひとつ果たしてからもうまい酒

育つ芽へ期待の水は絶やさない

ほめられて他人が急に好きになる

賞味期限切れた同士が肩寄せて

中区

小島 保行

ネクタイを無理やり締めて戦場へ

タンポポにはあすの風向きえらべない

北区

島 友造

隣から気楽に借りた味噌醤油

満ち足りた演歌が湯煙にとける

末っ子を嫁がせた夜の差し向かい

浜北区

鈴木 澄子

磨き合う杖は互いの拠り所

その先が読めぬモザイク色の闇

何気ない会話が音頭と暮らし

空白があなたひとりを待っている

南区

鈴木千代見

もみじ葉がひらひら君の手の中に

ほほえみが別れた後でいぶりだす

南区

滝田 玲子

どん底で善意の彩を塗りかえる

勿体無い昭和の癖が抜け切れぬ

愚痴ひとつ笑い飛ばして丸く生き

東区

竹山 恵一郎

一番星家路を急ぐ足をとめ

茶番劇くり返しては風を待つ

白黒をつけない知恵が生きのびる

手のひらに描いた地図にある死角

東区

中村雅俊

手を汚す話になって一人抜け

中区

南裕次郎

ひとつずつハードル越すと見える虹

ウイスキー総理不支持の愚痴で割り

心打つ粹な言葉にある温み

肩書きが取れて賀状に人間味

中区

長谷川絹代

湖西市

石田珠柳

多数派の中に埋る安堵感

遅しきナースの白く細い指

譲れない話となりて阿修羅棲む

発熱をおでこ合わせてはかる祖母

情と知のせめぎ合う恋老の恋

天竜区

市川正子

南区

水川彰

躓いたままの姿勢で生かされる

満月に見惚れて酌みし夫婦酒

止り木の煙に混じる愚痴がある

物質の陰に人情押し込まれ

この病気神様くれた句読点

浜北区

猪原 萱風

一芝居打ったがためのだん詰まり

待ち惚けやんわり癒やす花時計

中区

畔柳 晴康

味噌汁のふやけた豆腐ふて寝する

南区

大庭 拓郎

幼児を伸ばすごほうび褒め言葉

中区

斉藤 三重子

電柱であぶれた蟬が鳴いている

うかうかと暮してまたも年の暮

自分史を胸に綴って読み返す

東区

木村 民江

人生は今その時が全てです

東区

柴田 良治

亡き母の知恵が手を引く八合目

生き上手遊び心を友にして

乱打する脈の嵐にじつと耐え

南区

久保 静子

うらぶれど光る小石はかくし持つ

中区

鈴木 すみ子

ドクターの背を信じて鯉になる

せな

生きるため火の玉となる闘病記

立ち位置を変えて明日の風を聴く

中区

高橋 博

病む妻の口は達者に指示が飛び

南区

中津川 久子

日溜まりの幸せ掬う風の音

落とし蓋おどっています昼の嘘

西区

為永 義郎

東区

長浜 フミ子

忙しい暮らしにエコな老いの知恵

亡母の服十年過ぎて出番あり

三世代揃って膳に着く至福

蝸牛今日はのんびりしようかな

中区

戸田 幸良

東区

堀内 まさ江

予定表自分一人の夢に触れ

月影が今日の出来事丸くする

薫風に窓を閉ざして花粉症

好奇心老いてく脳に喝入れる

南区

中田 俊次

東区

松風 梢

いろいろな涙流して丸くなり

あの世からいまだに届く夢の杖

あすのことわからぬけど徳を積み

頼み事香の向こうに手を合せ

八月が巡りて平和どの辺り

中区

松本錦是

遠ざかる悲劇の影が忍び寄り

中区

馬淵よし子

長生きの策へ粗食を組み入れる

柏手を打って心の荷を下ろし

西区

山崎靖子

梅雨さ中百花繚乱傘がまう

芳香に鼻も心もくすぐられ

南区

赤堀進

下積みの夢輝かす深い読み

新米を食べて挫けるダイエツト

中区

荒木いつか

地下道で我が靴音に追われてる

東区

飯田裕子

箸を置き美味しかったと声掛ける

南区

伊藤信吾

七五三未来につづくみちのうえ

中区

伊藤美雪

コーヒーの香り漂ふ歯医者さん

浜北区

岩城悦子

のっそりと猫の行く手に金魚鉢

南区

太田静子

独学で点字マスター白杖つみの友天竜区

太田初恵

流行に老いも若きも脚線美中区

小池みちよ

銀杏の悪臭知らぬ茶碗むし中区

小笠原靖子

寝そびれて思ひ出ばかり夜は更ける中区

後藤静江

あの時の汗は忘れず生きている東区

小野和

人生は今日これからと古希迎え東区

寒風澤毅

輝いて生きるすべ知る趣味の会中区

金取ミチ子

ポツポツと行きパスポート四冊目中区

塩入しず子

山里に失業案山子職さがし北区

カワヤナギ

大きい星を妻と決めてる夜の祈り西区

柴田修

小鳥来よ想ひ告げたき人のあり中区

倉見藤子

袈裟がけも運試しするくじ売場南区

白井忠宏

宝くじ拝みこんでもまたはずれ

西区

水友

どんぐりの背くらべから抜け出たい

浜北区

竹内オリエ

時代^{とき}を読む老眼鏡の度が合わず

東区

杉山佳子

怒鳴り声さらりと返し場を治め

中区

手塚美誉

先入観持たず構えず自然体

西区

鈴木均

銀座マップ昔を重ね目で辿る

中区

寺田久子

七坂を越えて阿吽が未だ読めず

中区

高橋絃一

精いっぱい深呼吸する我がゴルフ

中区

鴉多健

幸運が無数にあつて今がある

西区

高柳龍夫

日なたほこ素顔のままの日曜日

中区

戸田田鶴子

土用干し意気が溶け合う嫁姑

中区

高山功

庭に用足した隣家の猫の尻

中区

とつか忠道

一晩でメタバオになりし芋の虫 中区

富永さか江

きのこがり枯れ葉がだます秋日和 中区

華世

古井戸に昔の苦勞話する 東区

内藤雅子

火をなだめ風をなだめて機嫌とる 中区

宮地政子

おしゃべりが達者になつた雀の子 中区

仲川昌一

おだてられ何の役でもやらされる 中区

夢 眩

飾つても人には言えぬ事もある 中区

中村禎次

無農薬御馳走様とよとう虫 北区

森上かつ子

簡略語ふえて暮らしも突つ掛かる 中区

中村弘枝

プライドを羞恥の靴に履き替える 中区

山下文子

記憶能話さなければ消えていく 南区

野嶋君代

美味しいもの後に回して狙われる 西区

山田とく子

この暑さ涼しい顔し玉の汗

中区

山本恒子

ノート買い毎日付ける金使い

西区

Y
.
Y

今田久帆

今年は昨年より応募者が二名増え、八一名三九一句の中から市民文芸賞四句を選出させていただきました。

川柳は江戸時代中期、俳諧連歌から起り発展したため、俳句と多くの共通点があります。俳句が季語を必要とし、文語で詠むのに対し、川柳は季語の必要はなく、口語で詠みます。俳句が主に自然を対象とするのに対し、川柳は人間や社会を詠みます。ですから、文語体で表現したり、切れ字を用いたりすると、どうしても俳句的になってしまいます。また日本語の語感として、五音や七音でまとめるとリズムが整い、句の流れも良く、人の心に響く句になります。そのため中八（まん中の七音を八音にすること）にすると、リズムが重くなり、乱れる傾向があります。ちょっと気をつけるだけで句が整い流れも良くなるので、口に出して流れを感じてみて下さい。まずは定型の五七五に納まるように工夫してみましよう。そして自分の思いの余分なものを削り、自分の思いの核になることを五七五の十七文字の中に詠み込むことで、もっと広い世界をもっと深い世界を相手に伝えることができる川柳になっていきます。

今回三九一句の中で、わたしの心を捕えた二四句を予選句として候補に挙げ、熟考した上で四句を市民文芸賞に採らせていただきます。

原爆忌黙して繁る樹の挽歌

言い負けて林檎を丸くむいている
立ち位置を変えて明日の風を聴く

発熱をおでこ合わせてはかる祖母
ほほえみが別れた後でいぶりだす
手を汚す話になって一人抜け

解れ出す糸を手繰れば母の膝
何気ない会話が音頭と暮らして
愚痴ひとつ笑い飛ばして丸く生き

物質の陰に人情押し込まれ
タンポポにはあすの風向きえらべない
待ち惚けやんわり癒やす花時計

病む妻の口は達者に指示が飛び
生きるため火の玉となる闘病記
一芝居打ったがためのどん詰まり

地下道で我が靴音に追われてる
銀杏の悪臭知らぬ茶碗むし
美味しいもの後に回して狙われる

袈裟がけも運試しするくじ売場
無農薬御馳走様とよとう虫

市民文芸賞

◎はらわたの苦味も愛でる舌となり
幼少期は甘いものをおいしいと感じているが、いろいろなものを食べ、苦いもの辛いものにも旨みを感じ食が豊かになる。

◎閉ざされた心の窓を母は拭き
内にもる子が少しでも社会とつながるよう母は労を重ねる。

◎花まつりレモンの恋を食べ残す
青春の甘酸っぱいトキメキもひと時の恋に終わってしまった。

◎人間の汗を無視する机上論
現場の汗を無視して進める机上論は様々な所で問題が生じる。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸』 第57集作品募集要項

一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸」第57集を編集・発行します。

二 発 行

浜松市

三 編 集

財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

四 応募資格

浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

五 募集部門及び応募原稿

部 門	枚数等(一人)	部 門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(一編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(一編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※ 原稿用紙はB4判四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※ ワープロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

六 選 者 七 募集期間

選者の氏名は、平成二十三年七月配布(予定)の「浜松市民文芸」第57集の作品募集要項に記載します。
平成二十三年九月一日(木)から十一月十八日(金)まで。(必着)

八 応募上の注意

- ① 応募作品は、本人の創作で**未発表のもの**に限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。
 - ② 部門ごとに、規定の**応募票(コピー可)**を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所6階文化政策課、市内の公民館・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。
 - ③ 応募原稿の書き方については、募集要項の「応募原稿の書き方」をご覧ください。
 - ④ 応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、80円切手を張って**、作品に添えて出してください。
 - ⑤ 難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。
 - ⑥ 応募原稿は必ず**清書したものを提出**してください。
 - ⑦ 作品掲載にあたって、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。
 - ⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。
 - ⑨ 応募原稿は、返却いたしません。(必要な方は事前にコピーをおとり願います)
- 選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で平成二十四年二月初旬までにお知らせします。
- 市民文芸賞及び入選の作品は、平成二十四年三月発行予定の第57集に掲載いたします。
- 市民文芸賞の方には、平成二十四年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。
- 市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸」第57集を一部贈呈いたします。
- 購入される場合は、一部五〇〇円です。

九 発表

十 表彰

十一 その他

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒四三二一八〇一四 浜松市中区鹿谷町一―二 ☎〇五三一四七一―五二二一

「浜松市民文芸」第57集応募票

(短歌・定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな・新かな》のいずれかに○をつけてください)

部門	題名 (小説・児童文学・評論・随筆・随筆・詩を投稿される方は記入してください)		
	旧かな	新かな	
ふりがな		年齢	歳
氏名			男・女
ふりがな		勤務先または通学先(市外在住の方は必ず記入をしてください)	
発表名 ペンネーム		名称 所在地	
住所	〒 _____		電話番号
文芸館使用欄	受付月日	受付番号	

その地域のどこに文学的文化的の土壤があるのかを言い当てることはかなり難しいことだが、浜松地域にそれを感じるのには、必ずしも師弟のような関係ではなく時代を越えて脈々と繋がる「文人」たちの活躍する姿と作品群ではないだろうか。松嶋十湖にはじまる俳人たちは濱人、瓜人、羽公そして高柳克弘へ受け継がれ、鷹野つぎや藤枝静男がこの地域にもたらした小説という分野は現在の吉田知子、鈴木光司、安東能明の活躍へと繋がっている。吉田知子は「浜松市民文芸」(第十一集)に掲載された「冬」を切っ掛けに文壇に登場した作家であり、その才能を見出したのは藤枝静男であった。当時の選評に藤枝静男は「……(吉田知子氏は)才能という点から云ったら現代の新しい女流作家たちと比較して少しも遜色がない。ことによると彼女等より上等かも知れない。……」とその鋭い眼力から書いている。そして周知の通り吉田知子は「無明長夜」で第六十三回の芥川賞を受賞する。

もし今藤枝静男がこの「浜松市民文芸」(第五十六集)を手にしたらなんと言うだろう。それは藤枝静男でしか答えられない事だから、藤枝静男に聞くしかないのだが。

さて、電子版の書籍を読む機会が増えてきた。初めて電子書籍として認識して読んだのは折口信夫の短編「身毒丸」

だった。四十何年ぶりの再読だった。実に手軽に読めた。ただ指の先にページを繰る感触だけがなかった。

この「浜松市民文芸」(第五十六集)から、浜松文芸館の運営をする浜松市文化振興財団は浜松市文化振興財団ホームページから「浜松市民文芸」が閲覧できるようにする。紙媒体(本)の大きな制約は発行部数であったが、これを機会により多くの方々に浜松の文芸文化が読まれる事を期待したい。(文中敬称略)

齊藤卓 浜松文芸館館長

浜松市民文芸 第56集

平成二十三年三月十九日 発行

発行 浜松市
財浜松市文化振興財団

編集 浜松文芸館

〒四三二一八〇一四

浜松市中区鹿谷町一―一二

☎〇五三―四七一―五二二一

印刷 杉森印刷株式会社

浜松の文化イベントを サクサク・ケンサク!!

はまかるドットネットは、浜松文化の情報拠点。
文化イベントの検索、告知から、一緒に文化を楽しむ仲間まで、
いろんなモノが見つかります。

Hamamatsu 
OK STAGE
Area Map

はまかる .net から
お申込みいただけます！

「はままつ OK ステージ」は、
あなたのために用意されたステージ。
浜松市のまちかどで演奏可能なスポットをご案内しています。
「音楽のまち・はままつ」であなたも演奏してみませんか！



浜松の文化情報インデックス「はまかる.net」

hamacul.net

<http://www.hamacul.net>

✉ info@hamacul.net